

ONLINE ISSN 2188-5451

薰物書の研究



第 四 号

平成 30 年 (2018) 3 月

薰 物 書 研 究 会 編

薫物書研究会会則

- 一、本会は、薫物書研究会（たきもののしよけんきゅうかい）と称する。
 - 一、本会は、現行の図書分類法で香書に分類される和書のうち、薫物の処方と調合法を主題とした薫物書（たきもののしよ）の研究を行うことを目的とする。
 - 一、本会は、右の目的を達するために、左の事業を行う。
 - 1 会誌「薫物書の研究」の発行
 - 2 その他必要と認められる行事
 - 一、本会の会員は、日本の薫物書に関する学術研究を行う者で、本会の趣旨に賛同するものとする。
 - 一、本会の会員のうち、日本の薫物書を主題とした研究業績（投稿時に所属した研究機関以外で発行された査読付き学術研究誌に掲載された学術論文、または博士学位論文）を持つ者は、本会の会誌に研究を発表することができる。
 - 一、本会には、役員として代表一名と監事一名を置く。
 - 一、代表は会の事務局を兼ねるほか、会誌の発行（年一回）等の事業ならびに総会（年一回）の開催を行い、監事は会計を監査する。
 - 一、役員の選出は選挙による。選挙は会員の互選とし、総会において行う。
 - 一、役員の任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 一、本会に入会を希望する者は、住所・氏名・職業・業績一覧を記載して本会事務局へ申し込まなければならない。
- 付 則
- 一、会費は原則として無料とする。ただし、本会からの連絡に費用の発生する会員に対しては、実費の負担を求める場合がある。
 - 一、本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。
 - 一、本会則は、平成二六年四月一日から施行する。

薫物書の研究 第四号（平成 30 年）

目 次

専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻
附・『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引

田中圭子 1-163 頁

.....

A Study of *Takimono* Books Vol.4 (2018)

Content

A Facsimile Edition and a Reprint of *Bampou* and *Kogu-Erabi-you-Totonoe-you* Possessed in Senshu University Library 'Kikutei-Bunko' with the Commentary and Index such as Person's Names and Family Names Recorded in *Bampou* and *Kogu-Erabi-you-Totonoe-you*

Keiko TANAKA pp.1-163.

専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻

附・『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引

田 中 圭 子

解題

序

専修大学図書館菊亭文庫は、公家の今出川（菊亭）家に伝来した文書の内、江戸期を中心とした鎌倉時代以前明治時代以前の資料三四八点から成るコレクションである。内容は、元禄年間以降の歴代当主らによる日記類二二点に始まり、律令や年中行事等に関する記録類九〇一点、和歌等詩歌関連資料八五七点、同家において家職とされた琵琶を始めとする雅楽関係資料五三六点等、多岐に渡ることが報告される（注一）。

同文庫には香関係資料二〇点も収蔵されており、内十九点は、複数の香具を調査して成る薫物に関する内容であることが分かっている。薫物関係資料は京都大学附属図書館菊亭文庫にも収蔵されており、それらの内、薫物の調合法に関する諸説の類纂『薫物合様』や日次の体裁による覚書「江戸下向雑々覚」等の資料によれば、江戸時代前期の菊亭家当主公規（寛永一五（一六三八）—元禄一〇（一六九七））は、寛文年間以前に蒐集した薫物の処方や調合に関する説の類纂を自筆で作成したり、薫物の古書を代々伝える家系に生まれてこれを禁裏に進上したり、延宝年間に薫物を大量に調査して江戸に持

参したりしたことがあったとされる。公規は、薫物の貴重な秘方秘説を所持しただけでなく、頻繁にこれを調査したのであり、その道の上手として朝廷の信任に与った人物であったと評価できた（注二）。

菊亭家には、上記の他にも公規の生きた時代に考案ないし授受されたと伝わる秘方秘説を載録した薫物書が複数伝来する。それらの内、当時として最大規模の類纂と見られるのが、専修大学図書館菊亭文庫所蔵の『万方』（注三）及び『香具撰様調様』（注四）である。後述するが、前者は処方に、後者は調合法に特化した類纂と考えられ、平安時代後期の類纂と伝わる『薫集類抄』等に比肩する点数及び分量の秘方秘説を載録する。両書については、『薫物合様』と一对の書として類纂されたと考えられる京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』の内容分析を行う際に、同書の同類文が複数伝来すること等について指摘したことがあったが、書誌や概要について詳しく考察したことは無かった。

『万方』及び『香具撰様調様』は、一方の書目が「万方（バンボウ、よろつのほう）」と命名されたことにふさわしく、平安時代から江戸時代前期までに珍重された多種多様な薫物の秘方秘説の集成された文献である。我が国の薫物文化の実相と変遷の解明を目指す上で、両書の書誌を明らかにすることは、極めて重要かつ不可欠な手続きであるかと考える。

以下の本稿では、『万方』及び『香具撰様調様』の書誌を考察するとともに、全文の影印及び翻刻を掲載する他、書中に現れる人名及び家名について解説を施す。これにより、香文化領域を始めた日本文化史研究資料としての両書の有用性が発揮されるとともに、薫物を学び調合する人々の必携の書として愛読いただくことが叶えば幸甚である。

一、『万方』

① 書誌

和装袋綴縦小本、一冊。縦十三・六センチ、横一〇・〇センチ。表紙及び裏表紙には薄茶色無地の厚手の紙を使用。本文は全四〇丁の料紙に記載される。表紙中央上部には絵入書き題箋一枚が貼られており、手書により「萬方」と記載される。本書の現状には、巻首題、内題等と見なせる記述は見当たらない。

題箋には、表紙と同じ薄茶色の用紙に同じ色調の顔料による波型又は山型に花卉を重ねたらしき絵柄が描画される。表紙右上には、現蔵先である専修大学図書館における整理番号「菊亭文庫／第2函／第118号」を記した蔵書票一点が貼られる。なお、表紙には右下に「央」の一字を記した貼紙の剥離痕も見られる。後述するが、同じ文字を記した剥離痕は、本書のツレとして伝来した可能性のある『香具撰様調様』表紙の同様の位置にも確認できることから、伝来の過程で整理分類等の必要から貼付された可能性が伺える。剥離痕の由来については調査の現状において不明であり、引き続き調査したい考である。

本文には二種類の料紙が用いられる。一つは薄茶色の顔料による枠界線及び行界線の刷られた二十七丁分の料紙、いま一つは白無地の十三丁分の料紙である。後者は前者を用いて記した本文の最終丁に続く紙面として綴じられる。

本文は、表紙見返し及び行界線入りの料紙及び白紙の料紙に対して墨書及び朱書により記載されており、内容は、薫物の処方一一四点、及び薫物の種類や処方の由来や調合の手順、留意点等を記した説八十九点から成る。また、一部の料紙の頭欄を始めとした余白には、近接する本文の内容に関する薫物方四点及び調合等の説十六点から成る二〇点の墨書による書入も確認できる（表二）。処方を中心とした薫物書としては、管見に、平安時代後期の類纂と伝わる『薫集類抄』上下巻^{（注五）}の内、薫物方一一四点及び説三十六点を載録する上巻、及び薫物方一二八点及び説二二点を載録した徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』全一冊^{（注六）}に比肩する、規模の大きな類纂と見なすことができる。

本書には、「黒方」、「梅花」を始めとした平安時代以来の伝統的な種類の薫物方だけでなく、「若草」や「新枕」といった新作の処方も多数含まれる。処方の時代性も多様であり、平安時代後期の類纂と伝わる『薫集類抄』に載録された処方の同類文や、室町時代以降に著名な合香家の三条家に伝来したとされる秘方秘説の同類文が確認できる他に、江戸時代前期の同家の後裔や当時実在した他家の公卿にゆかりの品と伝わる記述が載録される。管見に、本書の同類文をもっとも頻繁に載録する薫物書は、本書に同じく今出川家に伝来して、現在は京都大学附属図書館菊亭文庫に分置される『薫物秘蔵抄』一卷である。同類文の載録状況に関する詳細は、本解題末尾掲載の【表一】を参照されたい。

これらの秘方秘説を考案ないし所持したとされる人物の生きた時代も古代から近世に渡っており、書中には、「承和」こと平安時代前期の仁明天皇（弘仁元（八一〇）—嘉祥三（八五〇））から、「宗種卿」こと江戸時代前期の公卿難波宗種（慶長一五（一六一〇）—万治二（一六五九））と見られる合香家の呼称が記載される。書中に記載される人名等の詳細及び掲載先については、本稿附載の『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」を参照されたい。

書入を除く書中の記述の配列及び概要を、それらの記載された順に料紙の種類、記載形式、内容及び位置、及び空行の有無により区別して列挙した場合、次のように示すことができる。

表紙 絵入書き題箋「萬方」

表紙見返し（白無地料紙） 薫物方及び説（方1—2、説1）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・①薫衣香（秘法）、②黒方

一丁表・裏（界線刷り料紙） 本書の約物に関する説（説2）及び薫物方及びそれらの調合の説（方3—7、説3—5）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・約物の形状及び色及びそれらの意味について

・薫物銘及び記載順（①〜⑤）…①薫物方秘方（名不知）、②透頂香、③干方、④付干、⑤又干加減

二丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物銘等の一覧（朱書）（説6—7）。

・薫物銘及び記載順（①〜⑱）…①黒方、②又方（黒方）、③又方（黒方）、④又方（黒方）、⑤又方（黒方）、⑥梅花、⑦又方（梅花）、⑧侍従、⑨又方（侍従）、⑩盧橘、⑪又方、⑫千種、⑬仙人、⑭有明、⑮玉椿、⑯若草、⑰白梅

・薫物の種類ごとに見た調合頻度等

三丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物方及び説（方8—27、説8—19）。

銘又は処方への一つ書きは行われない。

・薫物方の銘及び記載順（①〜⑳）…①黒方、②又方（黒方）、③又方（黒方）、④又方（黒方）、⑤又方（黒方）、⑥又方（黒方）、⑦梅花、⑧又方（梅花）、⑨侍従、⑩又方（侍従）、⑪盧橘方、⑫又方（盧橘）、⑬千種、⑭仙人、⑮有明、⑯玉椿、⑰若草、⑱白梅、⑲黒方、⑳黒方

一〇丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物の種類ごとに見た特徴及び取重次

第の諸説（説20—37）。

・薫物方の銘及び記載順（①〜③）…①黒方、②梅花、③侍従（一行空き）

一二丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物方（「善悪ヲ合テ試薫物ノ分」、方28—37）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・薫物方の銘及び記載順（①〜⑨）…①梅花、②黒方、③千種、④新枕、⑤新枕、⑥玉椿、⑦玉簾、⑧時雨、⑨野風、⑩黒方（一行空き）

一五丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物方及び説（方38—49、説38—47）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・薫物方の銘及び記載順（①〜⑫）…①荷葉、②菊花、③黒方、④仙人、⑤黒方、⑥盧橘、⑦蘭、⑧花橘、⑨梅花、⑩盧橘、⑪侍従、⑫梅花（一行空き）

一九丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物の銘（「薫方書物ニ可書覚」及び「右之内常ニ合ハ」云々）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・「薫物書物ニ可書覚」における薫物の銘及び記載順（①〜⑱）…①黒方、②梅花、③白梅、④若草、⑤玉椿、⑥盧橘、⑦荷葉、⑧菊花、⑨仙人、⑩千種、⑪侍従、⑫有明、⑬新枕、⑭蘭、⑮富士、⑯野風、⑰二葉・「右之内常ニ合ハ」における薫物の銘及び記載順（①〜⑫）…①黒方、②梅花、③若草、④玉椿、⑤盧橘、⑥仙人、⑦千種、⑧菊花、⑨荷葉、⑩侍従、⑪新枕、⑫白梅

二〇丁表・裏（界線刷り料紙） 薫物方及び説（方50—72、説48—54）。銘又は処方への一つ書きは行われない。

・薫物方の銘及び記載順（①〜㉑）…①梅花、②十三方（薫衣香）、③梅花（薫衣香）、④加減梅花（薫衣香）、⑤みよし野（又号唐方（薫衣香））、⑥同加減（みよし野（薫衣香））、⑦薫衣香（当方）、⑧又方（薫衣香）（同（当方））、⑨スミヤグラ（薫衣香）、⑩千里薫（薫衣香）、⑪日野

方(薰衣香)、⑫八重一重(薰衣香)、⑬山吹(法皇御方六種内(薰衣香))、
⑭サラシナ(同(法皇御方六種内)(薰衣香))、⑮ウテナ(同(法皇御
方六種内)(薰衣香))、⑯九重(同(法皇御方六種内)(薰衣香))、⑰潤
香(同(法皇御方六種内)(薰衣香))、⑱神路のおく(同(法皇御方六
種内、薰衣香))、⑲梅か枝(薰衣香)、⑳伽羅之油、㉑又方(伽羅之油)
二八丁表(白無地料紙) 銘の頭欄に「一」と一つ書きした上で記載される
薰物方及び説(方73、説55)

・薰物方の銘…奇油香

二八丁裏(白無地料紙)

(白紙)

二九丁表…三八丁裏(白無地料紙) 銘及び処方ごとに頭欄に「一」と一つ
書きした上で列挙される薰物方及び説(方74—101、説56—88)

・薰物方の銘及び記載順(①～②④)…①干方、②又方、③干、④又方(干)、
⑤又方(干)、⑥白檀之干、⑦龍涎香、⑧線香、⑨供養香、⑩匂玉、⑪
同方(匂玉)、⑫又方、⑬伽羅 蠟解様ノ次第、⑭花露、⑮又方(花露)、
⑯兵部卿、⑰塗身香、⑱瞿麦、⑲花橘、⑳をそ桜、㉑薰衣香、㉒板香、
㉓(衣装装束用の無銘の香(薰衣香か))、㉔保志
(数行空き)

三九丁表…四〇丁表(白無地料紙) 処方ごとに冒頭に「一」と一つ書きし
た上で列挙される薰物方及び説(方102—112、説89)

・薰物方の銘及び記載順(①～⑧)…①侍従、②同方(侍従)、③同方(侍
従)、④野風、⑤二葉、⑥侍従、⑦又(侍従、処方三点)、⑧梅花
四〇丁裏(白無地料紙) 薰物方(方113—114)。銘又は処方への一つ書きは
行われない。

・薰物方の銘及び記載順(①～②)…①薰衣香、②又(薰衣香)

裏表紙見返し

裏表紙

以下の本節では、本書の本文の記載された表紙見返しから最終丁までの概
要及び特徴について解説する。

・表紙見返し…一丁裏

本文の記入は表紙見返しから行われており、そこには「薰衣香」方一点及
び「黒方」方一点(以上、方1—2)及び調査の説一点(説1)が記載され
る。続く界線入りの料紙の一丁表の一行目には、二行割の書式により「左ノ
分悪分ハ墨ノ点 善ニハ朱ノ点 合様ノ所モ同(改行)常ニ合分ニハ朱ノ丸
不時ニ合分ニハ花ノ丸」(説2)と記される。その次行から一丁裏の末尾に
かけては、薰物三種類の処方五点(方3—7)、及びそれらの調査に関する
言説(説3—5)が記載される。

本書に載録される薰物方の冒頭に記された銘等の右肩部分には、墨書及び
朱書による庵点(へ)等の約物が散見する。また、こうした文学特有の記号
の他にも、伝統的な文様等を略式的に記したと見られる絵柄が、多くの銘の
前後左右に描画される。これらの記号の大半は、管見に、同時代の菊亭家に
伝来したであろう『薰物秘蔵抄』等にも確認することができる。

「墨ノ点」及び「朱ノ点」は、書中の記号や絵柄の内、墨書及び朱書によ
る庵点を意味する可能性がある。「朱ノ丸」については、朱筆により丸(○)
を頭欄余白に記入された薰物方が確認できることから、これらに該当する可
能性がうかがえる。ただし、「花ノ丸」については、例えば、花卉様の絵柄
を輪郭とした丸型等の絵柄等かと推測するが、そうした絵柄は本書の現状に
見当たらない。

界線の刷られた料紙における冒頭文が、類纂の初期の段階において類纂者
が使用を予定した約物の種類及び意味を記したものであったと仮定した場
合、本書のいわゆる凡例の一種として記載されたと考えられようが、文中に
は、本文の現状において記載の有無を確認できないものも含まれていた。冒
頭文の解釈及び本書における位置づけについては、本書の諸本や逸文を探索
する等して比較分析を試みる等、引き続き慎重に検討したい考えである。

さて、一丁裏までに載録された薫物方は、「薫衣香」方一点、「黒方」方二

点、「透頂香」方一点、「千方」三点、及び銘の明らかなでない処方一点であった。これらの内、「黒方」は本書の冒頭から全体にわたり記載の多い種類であり、「薫衣香」方に該当する種類の薫物方も同様である。「透頂香」は「とうちんこう」と読まれる渡来の品であり、辞書類には医薬品として考案されたと解説される。唐渡りの薫物の処方は、界線刷りの料紙を紙面とした前半部分には載録されず、白無地料紙を紙面とした後半部分に集中的に記載される。また、「千方」は、界線刷りの料紙においては右の冒頭部分にのみしか現れず、一方で、後半以降に使用された白無地料紙には頻繁に記載される。また、これらの記述様式は、界線刷り用紙に記載のある処方のそれと同様に、銘又は処方を行頭から揃えて記述するものとなっている。

本書の現状における「透頂香」及び「千方」の記載状況は、本書の類纂者が企図したであろう構成内容を伺う上で、極めて暗示的な特徴であるかと考えるが、それについては後述する。

・二丁表〜九丁裏

これ以降の八丁分の紙面における記述は、次の二種類に大別することができ。第一に、朱書による薫物の銘及び銘の代名詞「又方」の語、計十七点、第二に、一部の薫物の調合法についての説二点（説6―7）を列挙した一丁分の記述と、「黒方」以下の薫物の処方二十点（方8―27）を列挙した七丁分の記述である。

第一及び第二の記述を比較すると、第二の記述において「又方（黒方）」一点及び「黒方」方二点が超過することを除いて、銘等の表現及び記載順序が一致している（前掲一覧、及び本稿影印及び翻刻参照）。

第一の記述の朱書が、後者の処方の概要をおおむね記したものであったと考えれば、第一の記述と第二の記述とは、単に連続的に載録された記述ではなく、目録と本文という関係に置かれた記述と見なすことも可能であろう。

・一〇丁表〜一二丁裏

薫物「黒方」、「梅花」、「侍従」について、それぞれを使用すべき季節や、芳香の特徴、効能、或いは完成した芳香のあるべき様子について記述した後、それぞれに処方される香具を掲き篩って一つに和合する際の、鉢など容器への投入順序に関する諸説が列挙される。

書中には、その他の伝統的な種類の薫物、例えば「荷葉」や「菊花」等についても季節感や芳香の特徴について併記されるが、右の三種類に比べて記述量は格段に少なく、いわゆる取重次第を併記することも行われない。右の三種類の薫物は、平安時代から我が国の上層社会で使用された伝統的な薫物の中でも特に優れた種類と評価される^{（注七）}。一〇丁表以降の記述様式は、評価の高い伝統的な種類に限って用意されたものであろう。

記述内容を、管見に知り得た他書の言説と比較した場合、言説全体を一括りとした形での同類文は確認できなかった。ただし、一部の言説については、断片的にはあるが、おおむね全体にわたる同類文を見いだすことができた（表五）。

本書は、皇室秘蔵の秘伝書を含む多種多様な資料を源泉として類纂された可能性がある。薫物書の調査研究成果の乏しさに鑑みて、本書の本文の詳細かつ実証的な分析、及びそれに基づく源泉及び成立過程の確定は、現段階では困難である。ただし、本書の類纂者が古今の薫物諸書を渉猟し、それらの言説の蒐集及び考証に取り組んだ人物であることに、疑いの余地は無いものと考ええる。

・一二丁表〜一四丁裏

前文の末尾から空行を挟んで紙面を新たにした一二丁表には、第一行目に「善悪ヲ合テ試薫物ノ分」と記述され、続けて「梅花」方28、(2)「黒方」方29、「千種」方30、「新枕」方31・32、「玉椿」方33、「玉簾」方34、「時雨」方35、「野風」の銘のみ、「黒方」方37から成る、薫物八種類の銘及び九点の処方が列挙される。

薫物の内、「千種」、「玉椿」、「玉簾」、「時雨」、「野風」の五種類を除く三

・一五丁表～一九丁表

種類五箇所の薫物銘の冒頭余白部分には、前述の絵柄及び「上」又は「善」の文字が記載される。また、「玉椿」、「玉簾」、「時雨」及び「黒方」方37の銘の右肩には、前述の朱書による庵点が掛かる。朱書による庵点が本書の冒頭に云う善い処方に対する「朱ノ点」であったとすれば、これらの処方は比較的優れた品として類纂者または依拠資料の筆者に認められたことが考えられる。

これらの処方内、「新枕」方32の銘の頭欄余白には、絵柄一点の他に墨書で「上」と、「黒方」方37の銘の頭欄余白には、絵柄は無く朱書で「善」とのみ記される。これらの二方を除く七点の処方の銘を含む全文は、縦傍線により墨滅される。なお、墨滅された七点の処方内「玉椿」、「玉簾」、「時雨」の三点の銘の右肩には、朱書による庵点が掛けられていた。

冒頭の一行は、「善し悪しを合はせて試す薫物の分」と読める。続く処方群を、いわゆる薫物比べのような取り組みに出陳された品々の処方及び判定の記録として仮定した場合、一行目の末尾に云う「分」とは、「優劣」を意味する「ブ」として読むべきであろう。頭欄余白に墨書で「上」及び朱書で「善」と記載された「新枕」方32及び「黒方」方37の二点が墨滅されないことから、本書の類纂者又は依拠資料の筆者が、九種類八点の薫物方の善し悪しを実際に調査して香りを試す方法により検討した結果、「上」及び「善」としたこれらの処方を良いものとして選んだ可能性が伺える。善悪の内「善」と記した処方は最上の品であり、「上」と記したのはそれに次ぐ品として選ばれた可能性についても、併せて検討すべきであろう。ただし、庵点が本書の冒頭に云う「朱ノ点」であった場合、その有無はここでの評価に必ずしも一致しないことから、庵点の意味及び墨書の筆者又は判者については、他書と同類文の探索及び比較検討を実施する等して、慎重に検討する必要があるかと考える。

一四丁裏の最末行まで記載のあった処方群の続文として、「荷葉」方38から「梅花」方49まで八種類十一點の薫物方、及び調合法十点が載録される。一五丁表の冒頭一行目が空行とされていることから、前文の処方群とは内容を区別して記述された可能性がある。ただし、処方の銘の冒頭余白に各種の絵柄及び「上」等の漢字が記載されること、及び一部の処方は墨滅されることから、前文の処方群とは別に、これらの薫物方についても実際に調査する等して芳香の善し悪しを定める試みが行われ、その結果について、前文における様式に準じて書き記した可能性が考えられる。その場合、これらの冒頭余白における記述の内、「上」及び「中」については、全文の処方群から伺える「上」及び「善」の意味付けに準じて、芳香の程度が「上」及び「中」と称される程度のものであったことを意味して付された可能性についても検討すべきかと考える。

・一九丁裏～二〇丁表

一九丁裏及び二〇丁表から成る見開き両面には、各紙面に「薫方書物二可書覚」、薫物方を載録する書物に書くべき内容の覚、及び「右之内常二合ハ」、右の「薫方書物二可書覚」に記載のある内容に調査するのは、とした上で、前者には十七点、後者には十二点の薫物の銘が列挙される。なお、前者の内「有明」、「富士」、「野風」、「二葉」の四種類は墨滅される他、後者の内「白梅」は、元は「梅花」の次に記載されたものを墨滅して末尾に記載する。各々の銘には「一色」、「二色」等と付記される。「色（いろ）」は、近世以降の薫物書において薫物又はその処方の個数を意味する単位として用いられる。ここでは、書物に記載すべきとした各種薫物の処方の数を、目安として示しているかと考える。

なお、紙面の頭欄等における余白には、処方の善し悪しと「点」に関して次のように記述される。

(1) 此内アシキ分ニハ黒ノ点大方ナル分ニハ青花善分ニハ朱点也薫物ノ書ニ大方ナト善トヲ書ヘキ也(「落葉」方一点略)

(一九丁裏、頭欄余白)

(2) 此内タトヒツネニアワセズトモ自然ニ合分可書也

(一九丁裏、第一行目「薫方書物ニ可書覚」以下の余白)

(3) 此内上々ノ分ニハ朱点ヲカクル此方目六ニモ方ノ所ニモ朱点可掛也

(二〇丁表、第二行目「右之内常ニ合ハ」以下の余白)

(4) 右十七種ヲ二ツニ分テ一年ハザミニ可合也一年ハ江戸ノヲ五種タシナミノヲ四種一年ハ江戸ノヲ五種タシナミノヲ三種可合也ソノウチタシナミノハ上々ノ朱点ノアルヲ可合也

(二〇丁表、最終行「白梅 一」以下の余白)

(1) は「薫方書物ニ可書覚」の頭欄余白に記載されたものであるが、広く「右之内常ニ合ハ」以下の記述に対しても及ぶ内容として記されたとも考えられる。ただし、「大方ナル分」に掛ける点として説かれた「青花」に該当しそうな記号類は、本書の現状に確認することができない。(2) の「自然」とは、「ツネ(常)」に対して予定外に、偶然にといった意味に解すべきであろう。

(3) は(1)に「善分ニハ朱点」とあることの同類文であるが、「上々ノ分ニハ朱点ヲ」掛けること、及び「目六(録)」の銘にも本文中の「方ノ所」にも朱点を掛けることについて記している。(4) は、特に「薫方書物ニ可書覚」に記載のあった十七種の薫物についてであろう、これらを二分して、一年交代で調合するよう説く内容となっている。最初の年には「江戸ノヲ五種タシナミノヲ四種」、次の年には「江戸ノヲ五種タシナミノヲ三種」調合するのであり、その内の「タシナミノ」については「上々」だとして朱点を掛けた処方調合せよと説かれる。

以上の内、(1)の「アシキ分ニハ黒ノ点」云々及び(3)「上々ノ分ニハ朱点ヲカクル」云々とあるところは、本書冒頭に記載された凡例の一種と見られる記述の内容と重複する。ただし、本書において朱書などによる庵点はある

ばら本文中の処方の銘に掛けられたのであって、目録の銘にも掛けるといったことは行われなかったらしい。ここにおいても、凡例に当たる記述に見られた類纂者の企図と本文の現状との間に齟齬の生じていた可能性が伺える。これらの薫物について記された「江戸」及び「タシナミ」云々について、

本書においてはこれ以上詳しく記述されない。ただし、本書の旧蔵先である菊亭家で江戸時代前期に行われたと見られる覚書「江戸下向雑々覚」には、幕府の法会に本院使として参考した今出川公規が、江戸の貴人に対する贈答品、及び私的な用意として持参する為に薫物を調合した事について、薫物の銘及びそれらの完成品を納めた袋の、「アマリ」を含む数等の詳細が記述される。また、江戸へは「タシナミ」として王朝物語作品や勅撰集を抜粋した写本、色紙等を持参する予定であることも記載される。

本書の類纂者又は言説の筆者が、公規のように江戸に下向して彼の地において薫物の贈答等に及んだ可能性も含めて、公私に渡る予定の例年の必要量についての記述であったと解釈できるかもしれない。

・二〇丁裏、二七丁裏

二〇丁裏から二七丁裏には、薫物「梅花」方二点及び「薫衣香」方三点、及び新作薫物に該当する種々の「薫衣香」方十五点及び「伽羅之油」方二点から成る計二十二点の処方(方50―72)及びそれらの調合法を記した八点の説(説48―54)が載録される。

新作薫物として分類した「薫衣香」は、古くは大陸に発祥して奈良時代以前の我が国に伝来した種類であり、薫物の一種と見なすべきところであるが、当該紙面に記載された「薫衣香」方の内十五点には多種多様な銘が新たに付されており、旧来的な「薫衣香」とは一線を画す品である。また、全二十二点の処方には、例えば平安時代の『薫集類抄』に載録される「薫衣香」方には処方されない香具が使用される、以上の特徴から、「薫衣香」方の内十五点については、伝統的な薫物ならぬ新作の処方群と見なして然るべきかと考える。

二十二点の処方には、前後する紙面における記述の様式とは異なり、銘の右肩における庵点や余白への絵柄、文字等の書き入れは行われていない。続文の記載される白無地の料紙においては、処方の銘又は処方の冒頭余白に「一」と記述する、いわゆる一つ書きの形式により起筆されるが、当該紙面の余白においてそうした記述は行われない。また、ここまでの表紙見返しに記載された例を除いて薄茶色の顔料により界線の刷られた料紙に記載されているが、続文は界線の印刷されない白無地の料紙に記載される。

以上の特徴に鑑みて、調査の現時点においては、当該紙面の内容は、前後のそれとは区別された、一連の処方群として記載されたものと見なしておきたい。

・二八丁表
新作薫物「奇油香」方一点及びその調査に関する説一点（方73、説55）

が載録される。本方は、銘の頭欄余白に「一」として起筆される。

これ以後の紙面には全て白無地の料紙が使用される。また、これ以後に載録されたほとんど全ての薫物方は、銘ごとに、又は処方ごとに一つ書きの形式で記載される。本方は続文と同じ銘ごとに一つ書きされる形式で記載される。ただし、本方の直後の裏面は白紙であり、丁を改めて続文が列挙される。

本方と続文とは、記述様式の近似した別々の処方及び処方群と見なすのが穏当であろう。

・二九丁表〜三八丁裏

白無地の料紙におけるこれ以後の紙面には、銘及び処方ごとに頭欄に「一」と一つ書きした上で列挙される薫物方二十八点、及びそれらの調査の説三十三点が記載される。

内容は、室町時代以降に我が国で考案され、或いは流通したと見られる薫物の一種「干（保志）」や「匂玉」を始めとして、平安時代の秘伝書に載録される渡来の薫物「供養香」や、舶来の貴重な香具の名称を銘に冠した「龍涎香」、塗香の一種に新たな銘を付した「兵部卿」等、丸薬状に仕上げるい

わゆる練香や散薬状の「薫衣香」以外の多種多様な種類の処方を中心に集成しているところに特徴が感じられる。

こうした内容に加えて、記述様式においても前後の紙面における記事に対して独自性を伺わせることから、依拠資料において一連の処方群として伝来したものを、記述様式を変更せずに写し取り載録した可能性が考えられる。

・四〇丁裏

白無地の料紙による最終紙面には、薫物「薫衣香」方113・114の二点の処方が記載される。これらの銘及び銘の略称「又」は行頭から二、三字下げて記載されるが、処方は行頭から字下げ無しで記述される。また、白無地の料紙においては処方の記述様式として一つ書きが行われてきたが、これらの二方に対しては行われない。

本書載録の処方及び説の内、処方に対して銘の頭を下げて記されるのは、最終紙面の方113・114、及び表紙見返しに記載された方1のみである。これら三点の処方の種類はいずれも「薫衣香」であり、一つ書きも行われていない。記載位置は巻頭と巻末とで大きく離れるが、記述様式及び種類において共通点の多いもの同士ということになる。

本書の記述内容及び様式において確認できた特徴の中には、本書の構成が現在伝わる状態に至った経緯を伺う上で、注目すべき事柄が存在する。前述の通り、本書の筆跡は外題から本文、頭欄等の書き入れに至るまでおおむね一定していた。類纂は、筆跡の主である特定の人物が一人で行った可能性を検討すべきかと考える。界線刷りと白無地の二種類の料紙が用いられることから、類纂者の当初の構想に比して記述量が大幅に長大なものとなった可能性を伺うことができる。

ここで、界線刷り料紙の二丁表及び裏に朱書された目録らしき記述と、三丁表以降における目録とおおむね対応した処方群及び諸説とは、類纂者が当

初に企図した本文であったと仮定してみよう。その場合、一〇丁表以降の記述は、余った紙面を活用する形で書き加えたものということになる。本文の大部分をそうして大きく二分してみると、界線刷り料紙に継いで綴じられた白無地料紙、及び表紙見返しから一丁表及び裏にかけての記述に、断続的ではあるが一連の繋がりとというものを見いだすことができるのではないだろうか。すなわち、類纂当初には二十点程度の薫物方及びその目録を書写する目的で、界線刷りの料紙二十七葉を用意し、第一丁は遊紙として挿入するため記述を行わず、二丁目から起筆した。処方及び調合の諸説を写し終え、その善し悪しや由緒に係る書き入れを行ったところ、書き入れの種類が多様で煩雑となった。後裔や他家への披見をおもんばかっていることであろうか、類纂者は約物についての覚書を残しておく必要を感じ、遊紙としていた一丁表の冒頭第一行目にその概要を記述したのであろう。一方で、用意した紙面に相当の余りが生じたことから、蒐集していた別の処方等も書き加えて、より大規模な類纂とすることを思い立った。この為、約物についての覚書には、以後の本文について使用する予定であった「花ノ丸」等について記載したが、一部の約物は実際には使用しなかったようである。処方と説を写していったところ、「伽羅之油」の「又方」調合の説54までは何とか紙面に収まったが、最終行は枠外の余白に書き入れることとなった。この段階で、依拠資料からの転写を予定していた処方内、あと数方を残していたのであろう。第一丁の遊紙に戻り、冒頭の覚書に続く一丁表二行目から、それらの書写を行ったと考えられる。

こうして一旦本書の類纂は終えられたが、大規模な薫物書を類纂するという構想への熱意からか、或いは、手元に蒐集した処方と説を集大成して以後の合香の役に立てたい等といった思いからであろう、類纂者は白無地料紙を継ぎ足して加筆に着手した。ただし、ここでも用意した紙面に不足が生じた為、連続する「薫衣香」方の内最後の一点を書き残した。裏表紙見返しには料紙を貼っていない。見返しへ記入すると裏表紙に墨が染み出すことを懸念

し、続文は別の紙面へ記入するのが良いと考えたのであろうか、続文は料紙の貼られた表紙見返しへ書き継ぐこととした。これが「薫衣香」方1であったかと考える。

なお、表紙見返しに記載されたもう一点の「黒方」方2は「薫衣香」方1とは字配り及び銘の字下げの有無等の記述様式に異なる点が見られる。方2には銘の右上に花卉様の柄を曲線的に描いた絵柄が付されるとともに、朱書及び墨書によるミセケチ及び書き入れが多々行われることから、方1と同じ依拠資料に連続的に記載された処方とは考え難く、むしろ、記述様式においては類纂当初に企図された処方群の記述様式に近似する。また、類纂当初に企図された処方群の内、同じ絵柄を銘の上部に記載された「又方（黒方）」方11とは、この方の半分の目方、いわゆる半臍に相当する内容となっている。以上の特徴から、表紙見返しに記載された「黒方」方2は、書中に明記しなかった方11の半臍とその目方に関する検討結果を書き記したものであり、「薫衣香」方1とは別の段階において書中に書き入れられたものと考えておきたい。

本書は処方一一四点、調合等に関する説八十九点、及びそれらの一部に関する留意点等を余白に記した書き入れ二十点（内、処方四点、説十六点）を載録する、江戸時代として最大規模の類纂である。載録された処方の載録順序には、伝統的な薫物書に見られたような規則性は認められず、記述様式は多様であり、一定の方針に基づく類纂とは考え難いことから、上記のような試行錯誤を経て現在の内容に至ったものと推測された。

調査の現状において、本書の写本は確認できていないことから、本書は、類纂者が自身の蒐集した膨大な薫物方を、比較的長期に渡り収録して、手元において秘蔵した零本であった可能性が考えられる。内容は、当初の構想に依らずに自在に変更を繰り返して規模を拡大していったものと推定された。膨大な書き入れからは、載録方を実際に調合する等して実践的に善し悪しを判定し、或いは、個々の香具の目方の増減を工夫する等した、類纂者であり

筆者である人物による試行錯誤の様子を如実に伺うことができるであろうし、この人物が合香家として相当な素養を備えており、合香活動にかなり熱心に取り組んでいたことをうかがわせるものと評価できよう。

② 書目

表紙の絵入書き題箋に直書きされた「萬方」は、本書の書目として確認できる唯一の題である。前述の通り、題箋の筆跡は本文及び書入れ等のそれに近似することから、本書の類纂者であり筆者である人物により記述された可能性を検討すべきである。

「萬方」という書目は、本来的にはどのように読むべきものとして名付けられたのであろう。漢語「萬方」は和音で「バンポウ」と読まれる。「方」の意味の多様性から様々な語彙が生じており、万国及び各地方の意味の他に、多種多様なことを表す語として、又、あらゆる方法を用い尽くしたことを意味する語としても用いられた^(注八)。

江戸時代の和書の内、一部の医薬書には、「万方会要」、「万方雜記」等の書目により伝わるものが散見する。ここでの「万方」は右の語彙の内多種多様なこと、及び「方」のいわゆる医薬方の意を重ねて用い、多種多様な医薬方の意味に用いたものであるかと考える。漢籍の香書及び和書の薫物書において、「方」の語は医薬方の場合に同じく処方の意味に用いるのが一般的である。

前項において、本書は江戸時代における最大規模の薫物の類纂として評価できた。書目「萬方」を「バンポウ」と読む漢語と見なした場合、同じ語を書目に冠した医薬書の場合と同様に、多種多様な薫物の処方の類纂を意味して付けられた可能性が考えられる。

一方で、これを「よろづ(づ)のほう」と訓読みした場合、書目の由来はどのように考えられるであろうか。「よろづ」は漢語「万」の和訓であり数多いことを意味する語として古来使用された。例えば、平安時代の勅撰和歌

集である『古今和歌集』仮名序の冒頭に云う「やまとうたは、人の心を種として、万(よろづ)の言の葉とぞなれりける」^(注九)との一節は、最も著名な用例の一つとして想起される。また、平安時代の物語作品『源氏物語』匂部卿宮巻では、薫物に関する表現の一部として、「よろづ」の語が次のように用いられる。

かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく思して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前裁にも、春は梅の花園をながめたまひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にもをさをさ御心移したまはず、老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好ましくおはしける。かかるほどに、すこしなよびやはらぎて、すいたる方にひかれたまへりと世の人は思ひきこえたり。昔の源氏は、すべて、かく立ててそのことと様変りしみたまへる方ぞなかりかし。^(注一〇)

物語の主人公光源氏の末子として養育された、後に薫と呼ばれる男君の身体には、生まれながらにしてこの世のものとも思われない優れた香りが備わっていた。右の一節によれば、この男君の甥にあたる兵部卿宮こと匂宮は、この男君の香りに何事にも増して競争心を抱き、香りのこととなると、特に力を入れて「よろづのすぐれたるうつし」、当時知られたありとあらゆる優れた薫物の方を写し集めて、朝夕の習慣として調合して使用するのである。香りに関する特別な思い入れは御前の前裁にも及んでおり、春は梅の花園を眺めては思いにふけり、秋は、世間の人が愛でる女郎花や、古歌に小牡鹿の妻とも詠われる萩の露にもほとんど御心をお移しにならず、老を忘れて咲き続ける菊や、衰えゆく藤袴、香りがさほど良いわけでもない吾亦紅などは、

大層興ざめな霜枯れの頃おいまでお見捨てにならないといった風にわざとらしく感じられるご様子で、香りを愛でる思いを表に出してご自分のお好きになさっていらつしやった。このようにお暮らしていらいつしやるから、匂宮は少し軟弱で柔和なご様子で、風流事に引き付けられていらつしやると世間の人はお思い申し上げているのであった。昔いらした源氏の君は、万事につけて、このように取り分けあることに執着して、人並み外れたご様子になるまで耽溺なさるようなご趣味はお持ちではいらつしやなかった、と云う。

匂宮の香りに対する執着心や、珍奇と言える程に従来とは異なる価値を追求する姿勢は、この男宮が生まれながらにして持つ若々しい気性と、薫という男君への対抗心に基づくものであろうし、薫の発するこの世には無い香りを再現したい、或いは、薫の体香を含む従来この世に存在して来た全ての香りに勝る新しみを創出したい、という思いからでもあったと解釈できるかもしれない。

物語が世に出た当時の上層社会において、こうした異端的な意欲と姿勢を形にすることは、物語の語り手が記したように、当時の良識に反する行為であったと考えられるが、時代が下り室町時代になると、匂宮のように新たな香りの創出に取り組む人々が現れ始めたようである。当時の類纂と伝わる薫物書には、平安時代以降の上層社会で継承されてきた伝統的な薫物とは異なる銘と香具による、新たな種類の薫物方が載録される。いわゆる新作薫物である。

管見に、新作の内最も古い来歴を伴うものは、南北朝期以降の合香家として著名な公家の三条家の当主後白川入道右府公冬により考案されたと伝わる「若草」及び「玉椿」である。「若草」は伝統的な種類の薫物である「梅花」を基に考案されたと伝わる種類であること等から、『源氏物語』で若草と呼ばれ「梅花」の調査に本領を発揮したことのある紫の上の人物像等を参考に考案された可能性が考えられる。他家において考案、命名されたと見ら

れる新作薫物にも、この物語の影響をうかがわせるものが散見する。例えば、薫物書に載録される処方の中には、「兵部卿」と命名されて普及したと見られる品が含まれる。薫物諸書の処方によれば、「兵部卿」は動物性の油脂を香具と和合する等した後に出された軟膏状の芳香剤であり、顔を始めとした身体に直接塗って用いられたと云う。大陸から我が国に渡来した「塗香」の処方をもとに、我が国で考案、命名された可能性が考えられる。銘と処方の内容から、「兵部卿」は、『源氏物語』の男主人公の一人である薫の、いわゆる体身香に対抗心を燃やして日々薫物を身に着けたという、「兵部卿宮」こと匂宮に重ねて命名されたと考えて然るべきであろう。

書目「万方」は、本書が多種多様な薫物及び新作薫物の百点を超える処方を載録することに由来して命名された考えられることから、「バンポウ」と読むのが穏当である。一方で、本書の規模から推測される類纂者による薫物方蒐集に対する熱意と合香活動の活発さは、『源氏物語』匂兵部卿宮巻において匂宮が「よろづのすぐれたるうつし」を蒐集、調査して使用したとされることにも通じている（注一）。

今後の研究では、本書の書目が、この物語の表現に引きつけて「よろづのほう」と和訓されるものとして命名された可能性についても、引き続き検討したい考えである。

③ 依拠資料

本書に載録される薫物の処方及び調合法を記した説について、書中に依拠資料の固有名称又は来歴の明記される例は見当たらない。また、稿者の調査で知り得た他書における載録方と比較した場合、複数の処方について、本書に同じく菊亭家に伝来した典籍を始めとする複数の薫物諸書の現状において、同類文を確認することができる他、特定の説を繰り返し記載する場合も見られる（表二）。これらの諸書の書写年及び書写者については、ほとんどの場合書中に明記されていないが、記述内容からおおよその先後関係を推定

することは可能である。

本書の載録方の中には、管見に、菊亭家伝来の薫物書にしか同類文の確認できないものも含まれる。また、菊亭家旧蔵の薫物書の内、比較的規模の大きな類纂の筆跡を比較した場合、おおむね近似した筆跡により記述されたものであることが伺える。本書及び『香具撰様調様』の筆跡については、後掲の翻刻及び【表三】【表四】を参照されたい。

本書の類纂は多様な文献を参照して行われた可能性があるが、薫物の調査法や特徴を記した諸説の中には、平安時代以降に類纂された薫物諸書だけでなく、物語及びその古注釈書を含めた多様な文献の記述を、断片的に抜き出した上で繋ぎ合わせたと見られるものも含まれる。例えば、薫物「黒方」の季節感や処方の特徴についての言説を他書のそれと比較した場合、【表五】に示したように、文章レベル又は単語レベルでの断片的な同類文を見いだすことができた。これらの同類文は、薫物諸書の諸説を始めとして、『源氏物語』における薫物に関する文脈の中で記されたものである。

以上の調査結果から、本書は菊亭家において類纂されたものであり、同家において蒐集された他の複数の薫物諸書とは、同時代に同一の人物により類纂ないし書写されたという、成立上極めて密接な影響関係にある可能性が考えられる。ただし、諸書の正確な先後関係が不明であることから、依拠資料の特定は、残念ながら現時点では困難であり、十分な資料収集及び各資料の書誌の分析を経て慎重に実施する必要がある。また、処方を含む記述内容を他書の言説と比較検討する為の準備の一環として、註釈資料を含む古典文学作品における薫物に関する言説が、薫物諸書の言説にどのように取り入れられているのかという問題についても、詳細に調査研究することが肝要であるかと考える。

④ 類纂者・筆者

本書の外題「萬方」の用字の内「萬」については本文に用例が無く、同一

漢字の筆跡を比較することができなかったが、前述の通り、本文における筆跡を本書の本文及び頭欄等余白の書入から抽出して比較した場合、おおむね類似したものと印象を得た(表三)。なお、本書の筆跡を、同じ菊亭(今出川)家に伝来して同類文を比較的多く載録する京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』及び『薫物合様』、及び専修大学図書館菊亭文庫所蔵『香具撰様調様』のそれらと比較した場合にも、おおむね類似したものと印象を受ける。これらの筆跡については、今後の研究において、菊亭家旧蔵の薫物関係資料を用いた総合的な対照表の作成に取り組みたい考えである。

『薫物秘蔵抄』と『薫物合様』は、成立上いわゆるツレの関係にあり、江戸時代の菊亭家当主であった菊亭(今出川)公規(寛永一五(一六三八)―元禄一〇(一六九七))が、上下二巻の典籍として、寛文六(一六六六)年ごろに自筆で類纂した可能性がある。一方で、『萬方』と『香具撰様調様』とを比較すると、筆跡に加えて装訂も近似している。現蔵先の専修大学図書館において、両書は前後する整理番号を付与されていることから、文庫内の他書よりも比較的近い関係にある書籍同士として伝来していたと考えられる。また、後述するが、後者の書中継ぎ足された白無地料紙の紙面には、江戸時代前期の公卿転法輪三条公富(元和六(一六二〇)―延宝五(一六七七))が、晩年の「延宝四年季夏下旬」、延宝四(一六七六)年六月下旬に何者かの所望により「相伝」したとされる薫物方五点が、書中において三条家の説を区別する意味で行われた朱筆により記載される。転法輪三条家は南北朝期に遡る合香の名家として知られる。伝授の相手は明記されないが、合香の道における同好の士であり、公富と浅からず交流した人物であったことは間違いない無かるう。

延宝三(一六七五)年、菊亭家当主の公規は本院使として江戸に下向する際の準備の一環として、使節の長に当たる勅使を拝命した公富の発案により、多種多様かつ大量の薫物を調査したと伝わる。公規は、手元に蒐集された薫物の秘方秘説を自筆で類纂したり、手づから薫物を調査したりしたとされる

人物である。寛文年間には生家の徳大寺家に古くから伝来したと見られる古書を始めたとした薫物書を禁裏の御文庫に進上して、後水尾法皇及び後西院から宸筆の薫物書を下賜されるという栄誉に浴したこともあった。公富の世評には及ばなかったであろうが、公規もまた、当代を代表する合香家の一人として、禁裏を頂点とする上層社会から信望を寄せられた人物であったと考えられる。

筆跡及び装訂の類似する『万方』と『香具撰様調様』は、ツレの関係にあると考えてしかるべきである。延宝四年の薫物方相伝が確かに行われたとすれば、それを載録する『香具撰様調様』は同年以降に類纂された可能性があり、『万方』の類纂もまた遠からざる時期に行われたと考えるのが穏当であろう。

また、前に述べた通り、『万方』載録方を考案ないし所持した人物として書中に名前の見える人物の内、時代の最も新しい人物は、江戸時代前期の公卿難波宗種（慶長一五（一六一〇）―万治二（一六五九））である。このことから、本書の類纂については、宗種の生きた時代を下限として行われた可能性を検討すべきかと考える。

以上の本書の特徴及び稿者による調査の現状に鑑みて、両書の筆者であり類纂者である人物は、現時点では菊亭公規と見なしておきたい。

二、『香具撰様調様』

① 書誌

和装袋綴小本、一冊。縦十三・八センチ、横一〇・三センチ。表紙及び裏表紙には薄茶色無地の厚手の紙を使用。本文は全四〇丁の料紙及び三丁分の挿紙に記載される。表紙中央上部には題箋一枚の剥離痕あり。本書の現状には巻首題、内題等と見なせる記述は見当たらないが、現蔵先の専修大学図書館菊亭文庫には『香具撰様調様』の書目により収蔵される。

白無地料紙による一丁に続いて綴じられる界線刷り料紙による二丁表の第一行目には、一字分の字下げにより墨書「香具撰様（一字空き）調様」と記載される。以降の紙面には香具ごとの特徴及び調整法等の言説が連続的に載録されること、また、以降の本文では、内容が変わるごとに一字下げ等の様式により概要を記した一行が置かれており、これらは項目名と判断される。二丁表第一行目の「香具撰様 調様」も、以降の記述の項目名として立てられたものと考えてしかるべきである。現蔵先における本書の書目は、題箋の剥離により原表紙に記されたであろう本来の書目が不明であることから、本書の伝来の過程において、冒頭第一行の記述を参考に付されたものかと考える。なお、題箋痕の縦の長さは、ツレと見られる『万方』のそれに比して一センチ程度長いことから、書目についても比較的文字数の多いものであった可能性が伺える。

表紙の右下には墨書された文字の一部を残す貼紙の剥離痕も見られる。本書のツレとして類纂されて伝来した可能性のある『万方』の表紙にも、これと同様の剥離痕が残存する。『万方』の剥離痕には「央」の一字が確認できる。剥離痕の由来については調査の現状において不明であり、引き続き調査したい考えである。

本文には、『万方』の場合に同じ種類の料紙が用いられる。一つは墨による枠界線及び行界線の刷られた三十九丁分の料紙、いま一つは白無地の五丁分の料紙である。後者の内一丁分の料紙は書中の冒頭に第一丁目として綴じられたもので、一丁裏の末尾に墨と約物の種類及び意味付けに関する内容と見られる言説が、次のように記載される。

花ノ点 朱ノ丸 花ノ丸

清 中 三西 当家所持 朱ニテカキタルハ三条ノ説

朱ノ点

『万方』冒頭にも約物に関すると思われる同様の表現を用いた記述が行われており、同書の記述様式に関する凡例として理解できた。同書の現状に照らした解釈を参考にした場合、右の「清」、「中」、「三西」は特定の家名の略称であり、本書に載録されるいずれかの説の源泉と考えられる。「当家所持」とは類纂者又は筆者の家に所持する説を云うのであり、「三条ノ説」とは公家の三条家に由来する薫物調査の説を意味して記されたのであろう。

「清」に対する傍書「花ノ点」、「中」に対する傍書「朱ノ点」、「三西」に対する傍書「朱ノ丸」、及び「当家所持」に対する傍書「花ノ丸」は、いずれも特定の約物の色及び形状を意味するようである。これらの内、「花ノ点」及び「花ノ丸」に該当しそうな形状の約物は、本書の現状において見当たらず、『万方』においても同様であった。

一方で、「朱ノ点」は朱書による庵点、「朱ノ丸」は朱書による丸型と考えられ、これに該当する色及び形状による約物も書中に確認することができる。これらの内、「朱ノ点」を付したとされる「中」の説は、朱書による庵点の付された説¹⁰⁶「中院説」に該当する可能性がある。また、本書において朱書による丸型を付された諸説には、「三条家二ハ」云々と起筆される説⁸、及び項目名を「三西薫物合様物語 口伝」として列挙される説¹⁰⁷から¹²²上までの記述が確認できる。後者の十五点の説の内、冒頭から数えて十点の説は、管見に、同じ専修大学図書館菊亭文庫に分置される薫物関係資料の内「三条西殿物語たき物合やうの事」（請求記号：菊亭文庫第2函198）の書目で伝わる資料に記載の諸説と一致することが分かっている。

「朱ニテカキタルハ三条ノ説」とある中の「三条」については、書中に朱書された説の頭欄余白及び文中に「三条公富公相伝」等と記載されることから、具体的には、江戸時代前期の公卿転法輪三条公富（元和六（一六二〇）—延宝五（一六七七））及び同家に比定する。

以上の比較考察結果により、一丁裏の末尾に記載された凡例と見られる記述の内、「中」は「中院」こと公家の中院家を、「三西」は公家の「三条西殿」

こと三条西家を、「三条」とは転法輪三条家を意味する略称として考えておきたい。「清」及び「当家」については不明であるが、本書の類纂者兼筆者が前述の通り菊亭（今出川）公規であったと仮定した場合、「当家」は菊亭家に比定する。前述の通り、公規は「三条」と略称された公富とともに朝使を拝命して江戸に下向したことがあり、江戸の諸侯への贈答品等とする目的からであろう、多種多様な薫物を大量に調査したことがあったが、その際に公規の合香を支えた人物に、清閑寺熙房（寛永十（一六三三）—貞享二（一六八六））があった。調査の現状において、「清」についてはこの熙房及び同家を意味する可能性を検討すべきかと考える。

さて、白無地料紙を綴じた一丁以降には、界線刷りの料紙が最終丁まで綴じられており、いずれの紙面にも記入が見られる。後者の残り四丁分の料紙は、一四丁裏と一五丁表の間に二丁分が、二九丁裏と三〇丁表の間に二丁分が挿入されて伝来しており、それぞれに、前後の綴じ面における本文に関連及び継続すると見られる諸説が記載される。

以上の特徴から、本書の第一丁に綴じられた白無地料紙はいわゆる遊紙として、続く界線刷り料紙は本文を記入する為に使用されたと考えられる。挿紙として書中に伝わる四丁分の料紙は、本文用の紙面の不足を補う目的から用意されたものであろう。つまり、本書はあらかじめ冊子体に綴じられた紙面に記入を加える形で類纂されたものであるかと考える。この点については後節において詳しく解説する。

本文は、白無地料紙の一丁裏末尾以降に墨書、朱書及び青書により記載される。内容は、薫物の方七点、及び薫物調査の準備段階における留意事項から調査の手順、合香に使用する香具の種類及び調整方法及び道具の名称及び概要から成る説一七四点から成る。また、一部の料紙の界線の外周における余白には、近接する本文の内容に関する補足事項を墨書、朱書及び青書により記した四十三点の書入も確認できる（表二）。

『香具撰様調様』は、方ならぬ説を主体とする薫物書として理解できよう。

平安時代の類纂と伝わる『薫集類抄』下巻には、合香や香具の諸説一七四点が載録された、我が国に現存する最古かつ最大規模の薫物書の一つである。本書は『薫集類抄』に比肩する点数の諸説を記載した大規模な類纂であり、稿者による現時点までの調査結果に照らした場合、江戸時代後期までの類纂としては最多の説を載録したものと評価できる。

本書に伝わる諸説について、これらを考案ないし所持したと伝わる人名及び家名を伴う場合とそうでない場合とで二分した場合、後者の説が多数確認することができる。

本書に載録された多数の説が元の所有者や依拠資料に関する記述を伴わずに記載される一方で、いわゆる合香家の家系から発したとされる説、及び古代から近世に実在した天皇等の高貴な人物に合香家にゆかりの品と伝わる説については、元の所有者の呼称を明記したり、説の書写に使用する墨の色により明示したりする場合が散見する。呼称を明記された合香家の詳細は、本稿附載の『『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引』を参照されたい。

『香具撰様調様』に記載のある著名な合香家の年代は、「承和」こと平安時代前期の仁明天皇（弘仁元（八一〇）—嘉祥三（八五〇））から、前述の転法輪三条公富まで幅広い。前者については『万方』にもゆかりの品と伝わる処方が載録されていた。後者は処方等について『万方』に記載の無い人物であるが、公富の祖であり室町時代後期から安土桃山時代に活躍した公卿で合香家としても著名な転法輪三条実香（文明元（一四六九）—弘治四（一五五八））の処方又は調合の説と伝わるものは、『万方』に多数載録される。

記述内容の内、約物及び墨色の意味を記した凡例の役割を持つ記述、及び項目名と見られる書式による記述を中心に列挙すると、本書の構成は凡そ次のように示すことができる。なお、余白における書入を除く書中の記述の配列及び概要については別にまとめており（表二）、そちらも併せて参照されたい。

表紙 題箋なし、剥離痕あり。

表紙見返し（白無地料紙）

一丁表・裏（白無地料紙） 裏の末尾に本書における約物の形状及び色及び特定の合香家名との関わりについての説（通番なし）あり。

二丁表・一行目く六丁表・二行目（界線刷り料紙） 香具の説1—12。

・項目名「香具撰様 調様」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①蜜（青書）、②ハチ蜜（青書）

（三行空き）

③具（＝香具）（青書）、④灰（墨書）、⑤貝（＝甲香）（墨書）、⑥蕪香油（青書）

（二行空き）

⑦沈（墨書）、⑧三条家ニハ沈四両合ナラハ、云々（墨書）、⑨薫（＝薫陸）（墨書）、⑩甘松（墨書）、⑪丁子（墨書）、⑫麝（＝麝香）（墨書）

六丁表・三行目く挿紙二第三面・七行目（界線刷り料紙、白無地料紙） 香具及び調合法の説13—60

・項目名「書ノ内故實書拔^{古法}」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①沈（墨書）、②丁子（墨書）、③香附子（墨書）、

④麝香（墨書）、⑤白檀（墨書）、⑥薫陸（墨書）、⑦甘松（墨書）、⑧熟

麝金（墨書）、⑨黄麝金（墨書）、⑩青麝金（墨書）、⑪占唐（墨書）、⑫

青木香（墨書）、⑬藿香（墨書）、⑭蕪香油（墨書）、⑮桂（＝桂心）（墨

書）、⑯車前子（墨書）、⑰貝（＝甲香）（墨書）、⑱沈（墨書）、⑲丁子

（墨色）、⑳白旦（＝白檀）（墨書）、㉑薫陸（墨書）、㉒麝香（墨書）、

㉓甘松（墨書）、㉔藿香（墨書）、㉕黄麝金（墨書）、㉖桂心（墨書）、㉗

青木香（墨書）、㉘安息香（墨書）、㉙蕪合油（＝蕪香油）（墨書）、㉚澤

写（墨書）、㉛フルヒ（＝篩）（墨書）、㉜沈（墨書）、㉝イマダアハセヌ

サキニハ香ドモヨクベチベチニスベシ、云々（墨書）、㉞蜜（墨書）、㉟

貝香（Ⅱ甲香）（朱書）、³⁶沈（朱書）、³⁷麝香（朱書）、³⁸丁子（朱書）、³⁹甘松（朱書）、⁴⁰宇金（Ⅱ麝金）（朱書）、⁴¹白旦（Ⅱ白檀）（朱書）、⁴²霍香（Ⅱ藿香）（朱書）、⁴³薰（Ⅱ薰陸）（朱書）、⁴⁴木香・澤写（朱書）、⁴⁵返腦（Ⅱ生腦）（朱書）、⁴⁶色付ノ墨（朱書）、⁴⁷塩（朱書）、⁴⁸蜜（朱書）

※⁴⁶の文中に墨滅された項目名「秤懸様」あり。

挿紙一第三面・一行目〜一五丁表・五行目（白無地料紙、界線刷り料紙）

薫物調合の説 61―72

・項目名「薫物雑々口傳」（朱書）。

・諸説の主題（墨色）…①先焼物ハ香具ヲソロヘタルガヨキ也、云々（朱書）、②薫物ハ沈麝丁ノ香ヲセントス、云々（朱書）、③薫物はホシガコンボン也、云々（朱書）、④香具調トキアシキカノ、云々（朱書）、⑤香具コシラヘテ後、云々（朱書）、⑥沈丁貝白薫麝甘蜜墨イヅレモ善ヲ吟味スルトキ、云々（朱書）、⑦イカラキ匂ハ丁子ノ匂也、云々（朱書）、⑧貝丁麝ハ少シヒカエタルガヨキ也（朱書）、⑨麝香ヲカキ合ノトキ、云々（朱書）、⑩薫物ノ道具ニハ、云々（朱書）、⑪ヤゲンノアトラシキハ、云々（朱書）、⑫薫物ヲ入置物ハ、云々（朱書）

一五丁表・一行目〜一六丁裏・一行目（界線刷り料紙） 香具秤の説 61―

72

・項目名「秤懸様」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①上ノ前ノ目（星）四ツゝアル所ニテ大方カクル也、云々（墨書）、②秤ノ目ヨクシリテカクヘシ、云々（墨書）、③又一説六朱ヲ一分トス、云々（墨書）、④ハカリノ緒目、云々（墨書）、⑤秤師ノ秤ノ目ノ事（墨書）、⑥料目ノ事（朱書）

一〇丁七表・一行目〜二丁裏・二行目（界線刷り料紙） 香具取重の説 80

― 82

・項目名「取重様」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①先屏風ヲタテマハシ但アカリ障子ヲタテモヨシ、云々（墨書）、②墨ハカウシツケノ圖也朱ハキサミマゼ様ノ図也、云々（墨書）、③此説ガヨキ也（墨書）

二二丁裏・三行目〜三丁裏・六行目（界線刷り料紙） 香具取重の説 83

― 86

・項目名「書ノ内故實書拔^{古法}」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①アカキ所ノアタリキヨカラ^{古法}所ニテアハスヘシ、云々（墨書）、②先手ヲヨク洗テアカキ所ニテ合也、云々（朱書）、③或説云沈ヲキテ雉ノ羽ニテ格子ノコトクコレヲワカツ、云々（四行目「ニヲヒヨキニ」云々に続く）（墨書）、④三条ノ説ニ花橘ナドニ返腦入ハ、云々（朱書）

二四丁表・一行目〜二六丁裏・四行目（界線刷り料紙） 香具取重の説 87

― 89

・項目名「合ツキノ様」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①カキ合テ又ノ日カナウスニテ蜜合スル也、云々（墨書）、②右蜜合ノ時ノ道具墨塩、云々（墨書）、③干ハカナウスニテカサネル也、云々（墨書）

二六丁裏・五行目〜二九丁表・五行目（界線刷り料紙） 香具取重の説 90

― 98

・項目名「書ノ内故實又キ書^{古法}」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①アマツラノカタマリタルハシタミニクシ、云々（墨書）、②又一説ニ蜜ノ香ヲトルヘタメニハ、云々（墨書）、③又一説アマツラ合セコメテ沈二分バカリウヘニアハスベシ、云々（墨書）、④又一説両目ノ外ニ春ハ丁子ノ粉一朱、云々（墨書）、⑤ツク数ハ四両合ハ三千キネ、云々（墨書）、⑥ウヅム事 春ハ五日、云々（墨書）、⑦茶碗ニ薫物ノ分科ヲヨクミテヨキホド蜜を入テ、云々（朱書）、⑧勅云薫物アシキ匂ナラバ薫陸ノ粉ヲ蜜ニ入マゼテ、云々（墨書）、⑨或説云冬

ノ薫物ハ合トキシルケレトモホトフレバカタマルユヘニ、云々（墨書）
二九丁裏・一行目〳挿紙二第一面・三行目（界線刷り料紙、白無地料紙）
薫物方1、度量衡の説99—100

・薫物銘及び由緒「有明伏見殿ヨリ相伝 薫衣香也」（墨書）。第二行目以降に墨書による処方一点を載録。

・処方の銘及び諸説の主題（墨色）…①有明（墨書、朱書）、②四匁一兩ノ時ハ半朱ハ一分二リン五毛、云々（墨書）、③四匁三分一兩ノ時ハ半朱ハ一分三リン五毛、云々（墨書）

挿紙二第二面・一行目〳八行目（白無地料紙） 度量衡の説101—102

・項目名「書ノ内故實又キ書古法」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①四匁四分一兩之時ハ一分ハ一匁一分、云々（墨書）、②五匁一兩之時ハ一分ハ一匁二分五リン、云々（墨書）

挿紙二第三面・一行目〳一四行目（白無地料紙） 薫物を焚く道具についての説103

・説の主題（墨色）…或説云薫物故實云常ノ焼物ノタイニテハナク、云々（朱書）。

挿紙二第四面・一行目〳一二行目（白無地料紙） 薫物方2—6、書写者

識語

・項目名（墨色）…方（闕字）三条公富公相傳ノ方也（朱書）

・処方の銘（墨色）…①黒方（朱書）、②梅花（朱書）、③若草（朱書）、

④花橘（朱書）、⑤仙人（朱書）。

・識語（墨色）…右五種家方不殘依御所望遣相傳者也（改行）于時延宝四年季夏下旬（闕字）公富（朱書）

三〇丁表・一行目〳三〇丁裏・三行目（界線刷り料紙） 合香の諸事に関する説104—106

・項目名「雑々口傳」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①ニヨイハ沈麝丁也、云々（墨書）、②薫物ノ方ヨミテ善悪ヲシル事、云々（墨書）、③中院説ハヲナジ方ヲ、云々（墨書）

三〇丁裏・四行目〳三六丁表・四行目（界線刷り料紙） 合香の諸事に関する説107—122

・項目名「三西薫物合様物語口傳」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①沈コシラヘヤウノ事、云々（墨書）、②カイ香コシラヘ様ノ事、（墨書）、③サウシテタキ物ハイツレノ方ニテモ沈丁麝ノ三ツカン用ニテ候、云々（墨書）、④タキ物調合ノトキノソレノ方ノリヤウメホドマヅ貝香ヲカケ分、云々（墨書）、⑤サカウハヨクケヲエリステ候トキニ、云々（墨書）、⑥サカウハ少ヒカヘヲキ候てヨク候、云々（墨書）、⑦サカウスリ候時、云々（墨書）、⑧サテタキ物合候て以後、云々（墨書）、⑨調合ノ時後ニクワヘ候香具、云々（墨書）、⑩蜜ハコクミツ、云々（墨書）、⑪サウジテタキ物ハ沈ノスキタルハヨロシク候、云々（墨書）、⑫タキ物はソレソレノニホヒモテ出候物ニテ、云々（墨書）、⑬調合ノ事本方ノ事ハマツ大躰ノ事ニ候、云々（墨書）、⑭タキ物合候て、云々（墨書）、⑮スミモヤキカヘシ候て、云々（墨書）、⑯惣而タキ物トイフ事ハ、云々（墨書）

三六丁表・五行目〳三七丁表・六行目（含・挿紙三第一面）（界線刷り、白無地料紙） 調合の諸段階、度量衡、香具調整に関する諸説123—129

・項目名「建久之説雑々」（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①沈丁ヒロケテ四方ニワカツ、云々（墨書）、②アハセフルヒ二度ソノゝチ、云々（墨書、白無地料紙）、③梅花ハアハスル次第黒方ニヲナシ、云々（墨書）、④六朱ヲ一分トス、云々（墨書）、⑤ウツム事 春五日加一日、云々（墨書）、⑥貝ハ蜜ユビノウラニテ面ニ二度ウラニ二度ヌル、云々（墨書）、⑦アマツラセンスル時、云々（末尾に「薫物ノ歌 春秋ノニヨイヲトムル花ノ香ヲツタフル袖ヨ物ヲスレ

スナニ（墨書）

三七丁裏・一行目〳四行目（界線刷り料紙） 香具の説 130―131

・項目名なし。

・諸説の主題（墨色）…①塩ハ、云々（墨書）、②墨ハ、云々（墨書）

三八丁表・一行目〳四〇丁裏・五行目（界線刷り料紙） 薫物の調査、保管、使用に用いる道具の銘、形状、及び用法に関する説 132―174

・項目名「薫之道具」同仕様寸法用（墨書）。

・諸説の主題（墨色）…①サジ（墨書、青書）、②桜ノサジ（青書）、③銀ノサジ（墨書、青書）、④小笏（墨書、青書）、⑤金臼（墨書、青書）、

⑥キネ（墨書、青書）、⑦竹ノ箸（墨書、青書）、⑧重時シク紙（墨書、青書）、⑨貝香アブル紙竹、云々（墨書）、⑩薫物道具 出来シテアル分

ニハ点ヲカクル也（墨書）、⑪薫物ノ箱（墨書）、⑫銀ノサシ（墨書）、⑬銀ノ大サシ（墨書）、⑭小笏（墨書）、⑮雉羽（墨書）、⑯竹ノヘラ（墨書）、⑰竹ノ箸（墨書）、⑱桜ノ箸（墨書）、⑲桜ノキネ（墨書）、⑳カナ

ギネ（墨書）、㉑カナウス（墨書）、㉒香具バカリ（墨書）、㉓ウスギ烏子（墨書）、㉔中高（墨書）、㉕大高（墨書）、㉖美作カミ（墨書）、㉗剪刀（墨書）、㉘薬盤薬刀（墨書）、㉙中薬研（墨書）、㉚大薬研（墨書）、

㉛麝香（墨書）、㉜麝香スリ茶碗（墨書）、㉝カサヌルトキノフルヒ（墨書）、㉞フルヒハ沈、云々（墨書）、㉟沈ノ粉フルヒ（一つ書きなし）（墨書）、㊱貝蜜ノウス物ナヘ（墨書）、㊲ウス物ナヘ（墨書）、㊳エ付ノ小

カタクチ（墨書）、㊴ウガイ茶碗ノ、云々（墨書）、㊵小茶碗（墨書）、㊶鉢（墨書）、㊷ボンボン（墨書）、㊸貝香ノアフリコ（墨書）、㊹匂玉

干ナドノフカキ茶、云々（墨書）

四一丁表・一行目〳六行目（白無地料紙、裏表紙見返し） 薫物方7及び和歌一首

・薫物の由緒及び銘「法皇勅作 神路のおく」（墨書、墨滅）。

以下の本節では、本書の二丁裏から裏表紙見返しまでの紙面に行われた記述内容の概要及び特徴について解説する。

・一丁裏・末尾

前述の通り、一丁裏の末尾に記載された凡例と見られる記述の内、「中」は「中院」こと公家の中院家を、「三西」は公家の「三条西殿」こと三条西家を、「三条」とは転法輪三条家を意味する略称と考えられた。「清」及び「当家」については不明であるが、本書の類纂者兼筆者が前述の通り菊亭（今出川）公規であったと仮定した場合、「当家」は菊亭家に比定する。公規は「三条」と略称された公富とともに朝使を拝命して江戸に下向する準備として、多種多様な薫物を大量に調査したことがあり、その際に公規の合香を下支えた人物に清閑寺熙房（寛永十（一六三三）―貞享二（一六八六））があった。「清」についてはこの熙房の家を意味する可能性を検討すべきかと考える。

・二丁表・一行目〳六丁表・二行目

一行目には冒頭に一文字分程度の空字を置いて「香具撰様 調様」と記述され、二行目以降に蜜以下の香具の調整法及び特徴についての諸説が列挙される。二行目以降の内容から、一行目の「香具撰様 調様」はこれらの説の総称であり項目名と見なせる。

項目名は本書の現蔵先において登録される書名「香具撰様調様」と同じである。本書の表紙題箋が剥離して書目が不明になって以降に、本書冒頭の項目名を巻首題と見なして書目に代用したものであろう。本書にはこの項目名に該当しない内容の記述も含まれることから、本来的な書目とは異なる可能性が伺える。

本項が、説1から別の項目名と思しき記述の直前に記載された説12までと見なした場合、諸説の内説1、2、3、6の四点は青書により、その他の諸説は墨書により記述される。説1、2、3、7、9、10、11、12の八点の

冒頭右肩部分には青書による庵点が付され、説6には冒頭余白に青書による丸印が、説8には冒頭右肩部分に朱書による丸印が付される。

本書の筆写は墨色について依拠資料の由緒により使い分けていたらしく、本書冒頭の記述には、朱書によるものが「三条ノ説」であると記されていたが、青書によるものの定義については明記されていない。また、約物についても、朱書による丸印に相当する「朱ノ丸」は「三西」の説と記されており、後述するが、「三西」は公家の三条西家に比定することから、本項の説8は三条西家の説として伝来した可能性がある。ただし、青書による庵点の意味するところは明記されない。

本書における青書による記述や庵点の意味については、他書の本文との比較により引き続き検討したい考えである。

・六丁表・三行目〳挿紙一第二面・七行目

項目名「書ノ内故實書抜^{古法}」。沈以下の香具の調整法及び特徴についての諸説を集成。項目名を記した行には冒頭に空欄が無く、本書冒頭の項目名「香具撰様 調様」とは記述様式が異なる。ただし、これ以降の「〴様」の表現による項目名には、本項と同様に冒頭に空欄を置かない場合も散見する。「書ノ内故實書抜 古法」の項は香具に関する諸説であるから、本書冒頭の項目とは内容が重複しており、その続文として記載されたのであろう。特定の秘伝書に記載された諸説を「故實」「古法」と称して前文までと区別し、抜き出したものと考えられる。

なお、文中には項目名の書式による「秤懸様」の語句が墨減されて残る他、同じ語句が後文に項目名として再掲される。

・挿紙一第三面・一行目〳一五丁表・五行目

項目名「薫物雑々口傳」（朱書）。香具の品質の善し悪しを揃えて調合すべきことに始まり、薫物の基盤的な香具の種類や特徴等、薫物調合に関する様々な留意点に関する言説を集成する。

・一五丁表・一行目〳一六丁裏・一行目

項目名「秤懸様」（墨書）。香具の料目を計量する為に用いた秤の目の位置、意味及び使用方法に関する言説を集成。項目名の行には冒頭に空欄が無く、本書冒頭の項目名「香具撰様 調様」とは記述様式が異なる。ただし、十六丁表・一行目には墨減された「秤懸様」の文言が記載されており、そこでは冒頭に二文字分の空欄が置かれていた。

・一〇丁七表・一行目〳二丁裏・二行目（界線刷り料紙）

項目名「取重様」（墨書）。種類ごとに搗き篩った香具を和合する手順やその為に用いた道具類の種類、使用方法等に関する言説を、一部手順及び道具を図示した描画数点とともに集成。行の冒頭には一文字分程度の空欄が置かれており、本書冒頭の項目名「香具撰様 調様」とは記述様式を同じくする。

・二丁裏・三行目〳三丁裏・六行目

項目名「書ノ内故實書抜^{古法}」（墨書）。種類ごとに搗き篩った香具を和合する手順やその為に用いた道具類の種類、使用方法等に関する言説を、一部手順を図示した描画一点とともに集成。六丁表・三行目〳挿紙一第二面・七行目における記述に対する同じ文言による項目名の場合に同じく、項目名の行には冒頭に空欄が無く、本書冒頭の項目名「香具撰様 調様」等とは記述様式が異なる。本項の内容は直前の項目に同じく香具取重に関する諸説であり、前項の続文として記載されたのであろう。ただし、特定の秘伝書に記載された諸説を「故實」「古法」と称して前文までと区別し、抜き出したものと考えられる。

・二四丁表・一行目〳二六丁裏・四行目

項目名「合ツキノ様」（墨書）。第二行目以降には、種類ごとに搗き篩った香具を和合した上で再び搗く手順や回数を目安、搗く際に投入する薬種、搗く為の道具類の種類、使用方法等に関する言説を、一部手順を図示した描画一点とともに集成。行の冒頭には一文字分程度の空欄が置かれており、本書冒頭の項目名「香具撰様 調様」とは記述様式同じくする。

項目名「書ノ内故實ヌキ書」^{古法}（墨書）。第二行目以降には、前項に同じく、種類ごとに搗き篩った香具を和合した上で再び搗く手順や回数を目安、搗く際に投入する薬種、搗く為の道具類の種類、使用方法等に関する言説を集成。前項には無かった和香を埋める日数についての説も掲載。項目名の行にはこれ以前に記載された同じ文言による項目名の行に同じく冒頭に空欄が無く、本書冒頭の項目名「合ツキノ様」等とは記述様式が異なる。前項の続文として記載されたが、特定の秘伝書に記載された諸説を「故實」「古法」と称して前文までと区別し、抜き出したものと考えられる。

薰物銘及び由緒「有明」^{伏見殿ヨリ相伝} 薰衣香也」（墨書）。第二行目以降に墨書による処方一点を載録。各香具の分量に続けて朱書による別分量の処方を加筆。墨書による処方の目方は薰物方に古来使用されてきた両・分・朱の度量衡により記述されるが、朱書による処方については両・分・厘の度量衡により記述される。処方の末尾には墨書及び朱書による二種類の処方の目方の合計についても記載される。本方の続文には、右の二種類の度量衡に関する言説二点が項目名を置かずに記載される。度量衡は、右の処方の調合の参考として載録された可能性がある。なお、専修大学図書菊亭文庫所蔵の薰物資料「伏見殿有明」一葉（請求記号・菊亭文庫第2函第179号）には「有明」方1の同類文が記載されて伝来する。

項目名「書ノ内故實ヌキ書」^{古法}（墨書）。第二行目以降には、前文に引き続き、両・分・朱と両・分・厘の二種類の度量衡を比較した言説二点が記載される。度量衡は、前文として記載された「有明」方1を始めとした両・分・厘の度量衡により記載される処方を調合する際の参考として載録されたと考えられる。

説の主題（墨色）…或説云薰物故實云常ノ焼物ノタイニテハナク、云々（朱書）。直前に記載された料目に関する諸説とは、内容上の繋がりや動作上の連続性が認められない。朱書により書き写されることから、本書冒頭の記述による限り、三条家の説として記載されたと考えられる。続く紙面には同じ朱書で三条公富相伝の薰物方2―6の五点が載録される。以上の特徴から、本説は、五点の処方に関連する説、例えば、これらの薰物方に近接して伝来した可能性を検討すべきかと考える。

「三条公富公」が延宝四年六月下旬に某人物の「御所望」により「相伝」したと云う処方群。末尾の識語の内容が正しければ、「三条公富公」は江戸時代前期の公卿転法輪三条公富（元和六（一六二〇）―延宝五（一六七七））に比定する。前述の通り、転法輪家は著名な合香家であり、公富自身も当時の朝廷を代表する合香家として禁裏や公卿らの信望を得た人物と考えられる。本書の記述が正しければ、これらの処方の「相伝」は、合香家公富の晩年の動静を伝える資料として注目される。

本書には、本処方群の他にも公富ゆかりの言説と伝わる記述が複数記載される。一方で、本書のいわゆるツレとして類纂されて伝来したと見られる『万方』には、転法輪三条家の歴代当主にゆかりの品とされる薰物方が複数載録される一方で、公富ゆかりの品と明記された処方等は確認できない。また、本書は調合法等の説を中心とした類纂であり、処方については本処方群を含む八点のみが記載されるが、『万方』は処方中心の類纂であり、その数は一四点と本書に比べて圧倒的に多い。本書に記載のあった処方の内、方2から6の処方群がなぜ『万方』ではなく本書に載録されたのかという問題については、本書の成立過程を検討する上で重要と考えられることから、引き続き調査研究したい考えである。

・三〇丁裏・一行目～三〇丁裏・三行目

項目名「雑々口傳」（墨書）。薫物の主要な香具の特性や相互関係、取重の順序に関する説等、多様な内容の三点の説を一つの項目に集成。説¹⁰⁶として「中院説」を載録。説の冒頭には朱書による庵点が記載される。前述の通り、本書冒頭の記述において、「朱ノ点」は「中」に付く旨記述される。説¹⁰⁶「中院説」の朱書による庵点が「朱ノ点」に相当するとすれば、「中」は「中院」の略称であり、本書冒頭の記述に云う「三条」等と並んで合香家の公家の家名であった可能性がある。公家の中院家にゆかりの言説と伝わる薫物の説は、「後十輪院写書」等と呼ばれる中院通村の筆写による薫物秘伝書に載録されて近世の皇室に伝来した可能性がある。伝写本は管見に探索中であり、管見に、東山御文庫所蔵「後水尾天皇薫物御覚書」^{（注二）}に逸文を確認している。「中院説」と「後十輪院写書」の関連性の有無及び各書の詳細については、今後の調査の中で明らかにしたい考えである。

・三〇丁裏・四行目～三六丁表・四行目

項目名「三西薫物合様物語」^{口傳}（墨書）。前述の通り、これらの十五点の説にはいずれも冒頭の余白等に朱書による丸印が記載される。本書冒頭の記述において、「朱ノ丸」は「三西」の説と定義されていた。十五点の説の内、上から数えて十点の説は、本書と同じ専修大学図書館菊亭文庫に分置される薫物関係資料の内「三条西殿物語たき物合やうの事」（請求記号・菊亭文庫第2函198）に記載の諸説と一致することが分かっている。以上の事から、「三西」は公家の「三条西殿」こと三条西家を意味する略称と考えられる。なお、説¹¹⁴の頭欄余白に記載された書入⁴²にも「朱ノ丸」に該当する朱書による丸印が併記されることから、本書入もまた三条西家由来の説として認識された可能性がある。

・三六丁表・五行目～三七丁表・六行目（含・挿紙三第一面）

項目名「建久之説」^{雑々}（墨書）。名古屋市蓬左文庫所蔵『焼物調合法』載録の薫物調合に関する諸説及び和歌「はるあきのにほひをとむる花のかをつ

たふるそてよ物わすれすな」一首の同類文が集成される。前者の『焼物調合法』には「建久四年正月廿日」付け書写者識語が記載される。本書の項目名「建久之説」^{雑々}はこの日付に由来する可能性が高いと考えられる。ただし、本書の本文の表記及び表現を前者のそれらと比較した場合、内容や概要は一致するが表現及び表記は大幅に異なり、一部の説については名古屋市蓬左文庫所蔵の一本に同類文を確認することができない。また、『焼物調合法』載録記事の内薫物「梅花」方二点（同書における通番方4・5）は、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』末尾にも載録されており、項目名は「建久之説」と記載される。本書と『薫物秘藏抄』とは同じ菊亭家に伝来したことから、『焼物調合法』が何らかの形で同家に伝来した可能性は検討を要する。

・三七丁裏・一行目～四行目

項目名なし。前文の依拠資料と見られる『焼物調合法』にはこれら二説の同類文は確認できない。各説の主題である「塩」及び「墨」の文字は以降の本文よりも大きく太く表記される。また、説¹³⁰と続文の説¹³¹との間には一行分の、説¹³¹と続文との間には二行分の空が生じている。以上の特徴から、「塩」及び「墨」は前文の続きとして記載された本文ではなく、項目名は立てられていないが、項目名を兼ねて本文とは異なる書式で記述されたと考えられる。

なお、空行の存在は、これらの項目名が、依拠資料における記述分量等を目安として、本文を記述する段階とは別に本紙にあらかじめ配置され、その後本文が書き入れられた可能性を伺わせる。このことは、一四丁裏一行目において項目名の書式による「秤懸様」の語が墨減されて後の紙面に再掲されていること、また、一六丁裏や三八丁表以降の紙面に空行の散見することからも伺える。

・三八丁表・一行目～四〇丁裏・五行目

項目名「薫之道具」<sup>同仕様
用様 寸法</sup>（墨書）。三九丁表に四行目には行頭に空字を

置かず「薫物道具」出来シテアル分ニハ点ヲカクル也」（左記⑩）とあり、続文としてこれ

以前の諸説との重複を含む諸説（説141—174…左記⑪—④④）が記載される。

また、説132（左記①）から説140（左記⑨）までは説ごとに一行から二行が用いられ、前文の説130及び131と同様に記述の無い空行も挟まれるのに対して、説141（左記⑪）以降はほとんどの行を二段組みで構成して一行ごとに二説が配置されており、空行は項目の末尾に一行生じている。

本項の書式は一段組みによる説132—140（左記①—⑨）と二段組みを中心とした説141—説174（左記⑩）に二分される。前者と後者とは重複する説が見られること、また、後者の冒頭に位置する箇所「薫物道具」出来シテアル分ニハ点ヲカクル也」（左記⑩）という内容を集約した記述も行われることから、前者と後者はそれぞれ別の依拠資料から抜き出された可能性がある。前者に空行の挟まれる理由については、本項の前文等の場合と同様に、これらの項目名が、依拠資料における記述分量等を目安として、本文を記述する段階とは別に本紙にあらかじめ配置され、その後本文が書き入れられた可能性を検討すべきかと考える。あらかじめ用意した行の範囲に対して、依拠資料から実際に写し取られた記述量が少なかったことから、空行が生じたかと考える。

・四二丁表・一行目〜六行目

薫物の由緒及び銘「法皇勅作 神路のおく」（墨書、墨滅）。その他の記述として、処方の末尾に『千載和歌集』巻第二十神祇歌に第一二七六番として採録される円位法師こと西行の和歌「ふかくいりて神ちの奥をたつぬれば（改行）又うへもなき峯の松風」一首（墨書、墨滅）が記載される。

『万方』は「法皇御方六種ノ内」の一種として本方及び和歌の同類文を載録する（『万方』方69）。西行歌には薫物の銘と同じ語が含まれることから、銘の由来として併記されたものと考えられる。管見に処方の同類文は他書に確認できないこと、両書における処方の内容及び和歌の漢字仮名交じり表記には小異が見られることから、本書と『万方』とは同じ資料を源泉としながら、表記については依拠資料のそれを適宜編集していた可能性が考えられる。

本書は処方七点、調合等に関する説一七四点、及びそれらの一部に関する留意点や補足事項を余白に記した書き入れ四十三点（内、処方一点、説四十二点）を載録する、説を主体とした類纂としては最大規模の秘伝書である。書中に点在する空行及び各項目名の記入状況から、本書の類纂は当初予定として項目名及びそれらの順序をおおむね決定し、依拠資料から集成した処方や説の分量から推定される必要行数を念頭に置いて、紙面である界線刷り料紙の所定の位置に項目名を記入した上で、本文を書き入れていった可能性が考えられた。予定した行数を超過する分量の本文を記載する必要性が生じた場合は、余白に書き入れとして記入したり、適宜白無地料紙を補足、挿入して超過分の記入に充てたりしたのであろう。反対に、用意した本文が当初予測よりも少なかった場合は空行が生じたものと考えられる。

本書のツレと見られる『万方』についても、内容構成に関する当初の計画が存在したようであった。ただし、同書は類纂の過程においてこの計画の変更を柔軟に繰り返し返して規模を拡大していったものと推定された。また、同書の余白に残る書き入れは、本文として載録された薫物方を実際に調合する等して実践的に善し悪しを判定したり、個々の香具の目方の増減を工夫する等した結果を記したものと考えられた。本書の場合のように、当初計画にのっとり配置した項目ごとの紙面の不足を補足する目的から余白や白無地料紙を活用するということは、余白への書き入れの生じた経緯がやや異なるが、いずれにしても、本文の内容を補うという点では一致していた。本書と『万方』の校本作成を将来的に計画する際には、余白への書き入れを本文化する方向で全文の再読を行う必要があるかと考える。

本書の写本は管見に確認できていない。『万方』の場合に同じく、本書は、類纂者が自身の蒐集した膨大な薫物方を、比較的長期に渡り収録して、手元において秘蔵した零本であった可能性とともに、類纂者が合香家として合香全般に関する相当な知識と技能を備えており、合香活動にかなり熱心に取り組んでいた可能性をうかがわせる資料として評価できよう。

② 書目

前述の通り、本書の表紙中央上部に貼付された題箋一枚は剥離して伝わらず、本書の現状に巻首題、内題等と見なせる記述も見当たらない。また、本書の内容が薫物調合の各段階から道具類に関する諸説にまで及んでいることに対して、『香具撰様調様』と云う現在の書目は薫物の材料である香具の種類や品質、和合に備えた調整法等の概要としては見なせるが、本書に類纂されるその他の説、例えば薫物の道具類に関する説や、調合法ならぬ処方といった記述の概要としては当たらない。書目『万方』が同書内容及び規模を端的に象徴する語であると考えられるのに対して、『香具撰様調様』はいかにも不足という印象を与えるのである。

現蔵先における書目『香具撰様調様』は、本書の伝来の過程において表紙題箋の剥離が生じて以降の時期に、本書の冒頭に類纂された諸説に対する項目名として記載された語句が、巻首題に準じるものと見なされ、仮の書目として採用されたことに由来するのであろう。

なお、題箋痕の縦の長さは、本書のツレと見られる『万方』のそれに比して一センチ程度長くなっている。剥離した題箋に直書きされたであろう本来の書目は、『万方』に比べて文字数のやや多いものであった可能性が伺える。

今後の調査研究では、今出川家旧蔵の薫物資料や同家の日次等記録類を閲覧する等して、本書の類纂当初に付けられたはずの本来的な書目を究明したい考えである。

③ 依拠資料

本書に載録される薫物の処方及び調合法を記した説の一部には、書中に依拠資料の固有名称又は来歴が併記される。また、本書の載録記事を稿者の調査で知り得た他書に載録される処方及び説と比較した場合、平安時代以降に類纂されて伝来したとされるに複数の薫物諸書に同類文を確認することが

できた。それらの一部は本書と同じ菊亭家に伝来した諸書である。また、本書において特定の説を繰り返し記載する場合も見られた(表二)。これらの諸書の書写年及び書写者については、ほとんどの場合書中に明記されていないが、記述内容からおおよその先後関係を推定することは可能である。

前述の通り、本書の載録方の中には、管見に、菊亭家伝来の薫物書にしか同類文の確認できないものも含まれる。また、菊亭家旧蔵の諸書の内、比較的規模の大きな類纂の筆跡を比較した場合(表四)、おおむね近似した筆跡により記述されたものであることが伺えた。

以下の本項では、本書において固有名称又は来歴の記載された依拠資料の概要、及び各資料に由来するとされる処方及び説の特徴について、書中における掲出順に解説する。

・「三条公富公相伝ノ方」及び「三条公富公相伝ノ分」

前者は転法輪三条公富が何者かに対して晩年の延宝四(一六七六)年六月に筆者に「相伝」したとされる薫物方を云う。識語には公富家の「家方」とも伝わる。一部の処方は『万方』に同類文が載録されるが、同書においては公富家との関わりについて記載されない。『万方』の同類文は、本書とは異なる依拠資料から書き写された可能性も含めて、来歴について調査検証すべきかと考える。

『万方』と本書とはツレ同士の関係にあり、遠からざる時期に同じ人物により類纂または書写されて菊亭家に収蔵され、以後同家において伝来したと考えられる。「三条公富公相伝ノ方」と伝わる処方群は、『万方』類纂の時期には類纂者の手許に入手されておらず、すなわち、『万方』は本書に先行して類纂が完了されて、これ以降、本書の類纂時またはそれ以前に、類纂者が入手したものである可能性を検討すべきであろう。

さて、後者は転法輪三条公富が何者かに対して「相伝」したとされる薫物調合の諸説を云う。本文に朱書により記載された諸説の一部に対して、冒頭の余白に「三条公富公相伝ノ分」と記述される。『香具撰様調様』冒頭には

「朱デカキタルハ三条ノ説」と記述されていた。朱書により三条家ゆかりの説であることを明示するとともに、説の源泉についてより詳細な記述を頭欄余白に残したのである。「相伝」の年次等詳細は併記されない。前述の「三条公富公相伝ノ方」なる処方群の末尾には、延宝四年六月に公富が「家方」を何者かに「相伝」した旨が記載されていた。同じ人物にゆかりの品と伝わる諸説についても、処方群の相伝から遠からず伝授され、本書の類纂者の知るところとなったのかもしれない。

以上の処方及び説を載録する本書の類纂者は今出川（菊亭）公規であった場合、公富から公規に直接伝授された可能性についても、併せて検討すべきかと考える。

・「三西薫物合物語 口伝」

本書の巻頭部分には、「三西」の略称による合香家に由来した薫物諸説が「朱ノ丸」により他家の説に対して識別される旨が記述される。本文において「朱ノ丸」を併記される説の大半は、「三西薫物合物語 口伝」と題された説¹⁰⁷から説¹²²である。同じ専修大学図書館菊亭文庫には「三条西殿物語 たき物合やうの事 口伝」の標題により合香の諸説を記述した紙片二葉も収蔵されており、それらの諸説の同類文が前述の「三西薫物合物語 口伝」に含まれる（表二）。以上の本書の現状及び調査結果から、「三西」は「三条西殿」、公家の三条西家の略称と考えられる。

江戸時代前期に類纂されて尾張徳川家の蓬左文庫に伝来したと見られる徳川林政史研究所蔵『薫物之方』には、「西三条殿方」と伝わる新作薫物「ねみたれかみ（寝乱髪）」方一点が記載される。遅くとも江戸時代前期の公家社会において、三条西家は独自の合香の秘方秘説を伝え持つ合香家として知られていた可能性がある（『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引¹⁵⁰頁）。

三条西家の薫物文化については、先行研究に戦国時代の当主である実隆と公武との薫物贈答について報告がある（注三）。稿者は公家の漢文日記の記述

や薫物書の伝承に基づき断片的に考察したことがあった（注四）。今後の調査研究では、同家の薫物の源泉及び時代横断的な変遷の解明に向けて、引き続き努力したい考えである。

・「建久之説」

『香具撰様調様』三六丁以降には項目名「建久之説^{雑々}」として名古屋市蓬左文庫等に伝来する薫物書『焼物調合法』^{注五} 載録の薫物調合に関する諸説及び和歌「はるあきのにはひをとむる花のかをつたふるそてよ物わすれすな」一首の同類文が集成される（表二）。

『焼物調合法』には「建久四年正月廿日」付け書写者識語が記載される。本書の項目名「建久之説^{雑々}」はこの日付に由来する可能性が高いと考えられる。ただし、本書の本文の表記及び表現を前者のそれらと比較した場合、内容や概要は一致するが表現及び表記は大幅に異なり、一部の説については名古屋市蓬左文庫所蔵の一本に同類文を確認することができない。また、『焼物調合法』載録記事の内薫物「梅花」方二点（同書における通番号4・5）は、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』末尾にも載録されており、項目名は「建久之説」と記載される。本書と『薫物秘蔵抄』とは同じ菊亭家に伝来したことから、『焼物調合法』が何らかの形で同家に伝来した可能性は検討を要する。

以上の調査及び考察結果から、本書は『万方』とともに菊亭家において類纂されたものであり、同家において蒐集された他の複数の薫物諸書とは、同時代に同一の人物により類纂ないし書写されたという、成立上極めて密接な影響関係にある可能性が考えられる。なお、本書における他書の同類文の中には、平安時代に類纂されたと伝わる秘伝書の載録記事も含まれる。

江戸時代前期の菊亭家当主公規の日記によると、当時公規の手許には薫物の「古書」とされる貴重な秘伝書二点が伝来しており、当時の当主である公規から禁裏に対して貸し出された後に、それらの宸筆による写本が禁裏から

公規に下賜されるというやり取りのあったことが記録されている。これらの「古書」が同類文を載録する諸書の内、例えば『薫集類抄』や『焼物調合法』等の比較的古い時代の類纂の写本に該当するか否かを確定するには、引き続き資料調査と本文の比較分析を実施する必要がある。調査の現状においては、菊亭家において蒐集された比較的新しい時代の諸書により間接的に写し取られたと見なすのが穏当であろう。

依拠資料の全面的な特定は、『万方』に同じく残念ながら現時点では困難であるが、一部の依拠資料については伝本との比較検討により特定することができた。今後の調査研究では、依拠資料の全容解明に向けて、資料収集及び各資料の書誌の分析を経て慎重に実施したい考えである。

④ 類纂者・筆者

前述の通り、本書の筆跡を、同じ菊亭家に伝来して同類文を比較的多く載録する京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』及び『薫物合様』及び専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』のそれらと比較したところ、おおむね類似したものであることを確認している。

『薫物秘蔵抄』と『薫物合様』は、成立上いわゆるツレの関係にあり、江戸時代の菊亭家当主であった菊亭（今出川）公規（寛永一五（一六三八）—元禄一〇（一六九七））が、上下二巻の典籍として、寛文六（一六六六）年ごろに自筆で類纂した可能性がある。一方で、本書と『万方』とを比較すると、筆跡に加えて装訂も近似している。現蔵先の専修大学図書館において、両書は前後する整理番号を付与されていることから、文庫内の他書よりも比較的近い関係にある書籍同士として伝来していたと考えられる。また、本書に継ぎ足された白無地料紙の紙面には、江戸時代前期の公卿転法輪三条公富（元和六（一六二〇）—延宝五（一六七七））が、晩年の「延宝四年季夏下旬」、延宝四（一六七六）年六月下旬に何者かの所望により「相伝」したとされる薫物方五点が、書中において三条家の説を区別する意味で行われた朱

筆により記載される。転法輪三条家は南北朝期に遡る合香の名家として知られる。伝授の相手は明記されないが、合香の道における同好の士であり、公富と浅からず交流した人物であったことは間違い無さろう。

延宝三（一六七五）年、菊亭家当主の公規は本院使として江戸に下向する際の準備の一環として、使節の長に当たる勅使を拝命した公富の発案により、多種多様かつ大量の薫物を調査したと伝わる。公規は、手元に蒐集された薫物の秘方秘説を自筆で類纂したり、手づから薫物を調査したりしたとされる人物である。寛文年間には生家の徳大寺家に古くから伝来したと見られる古書を始めとした薫物書を禁裏の御文庫に進上して、後水尾法皇及び後西院から宸筆の薫物書を下賜されるという栄誉に浴したこともあった。公富の世評には及ばなかったであろうが、公規もまた、当代を代表する合香家の一人として、禁裏を頂点とする上層社会から信望を寄せられた人物であったと考えられる。

前述の通り、筆跡及び装訂の類似する本書と『万方』とは、ツレの関係にあると考えてしかるべきである。延宝四年の薫物方相伝が確かに行われたとすれば、それを載録する『香具撰様調様』は同年以降に類纂された可能性があり、ツレと思しき『万方』の類纂もまた遠からざる時期に行われたと考えるのが穏当である。

以上の本書の特徴及び稿者による調査の現状に鑑みて、両書の筆者であり類纂者である人物は、現時点では菊亭公規と見なしておきたい。

結

専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』一冊及び『香具撰様調様』一冊は、江戸時代前期の延宝四年以降、万治二年から遠からざる時期に、公家の菊亭家において類纂された薫物秘伝書であり、前者は薫物の処方に、後者は薫物の調合法に特化した一對の書として構想され、類纂された可能性がある。江戸時代の薫物書としては最大規模の類纂であり、内容は、平安時代から江戸

時代までの薫物の〈歴史〉を凝集させた、博覧強記なものとして評価できた。類纂者及び筆者は、両書の筆跡及び内容から、江戸時代前期の同家の当主で合香家としても活躍したことの知られる今出川（菊亭）公規の可能性が考えられた。

書目について、『万方』は類纂当時に公規自身が表紙題箋に直書した可能性があり、『香具撰様調様』は、同書の表紙に貼付していた題箋が剥離して以降に、同書の冒頭に記載された項目名に依拠して仮に付されたものと考えられた。類纂当時からの本来的な書目については不明であり、今後の調査研究において究明したい考えである。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』一卷及び『薫物合様』一卷は、公規が寛文六年ごろに類纂したと見られる薫物秘伝書である。『万方』及び『香具撰様調様』には、両書を始めたとした薫物諸書の同類文を多数確認することができた。同類文の中には、平安時代や鎌倉時代に類纂、書写されたと伝わる秘伝書の写本に伝わる処方や説も含まれる他、公規と同時代に公卿として活躍し、合香家としての史実、伝承の伝わる人物にゆかりの品とされる処方や説も存在した。ただし、両書の全ての載録方及び説の依拠資料を特定するには、菊亭文庫に伝来する薫物関係資料の全面的な調査を始めとして、同類文の載録先である薫物諸書の書誌の解明が肝要であり、引き続き調査研究に取り組む所存である。

注

- 一 専修大学図書館編『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』（平成七年）、専修大学図書館ホームページ「コレクション紹介」菊亭（きくてい）文庫概要
(<https://www.senshu-u.ac.jp/library/collection/>) 平成二十九年十二月廿日最終閲覧）参照。
- 二 拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』」附・「薫物秘蔵抄」人名家名等解説」（『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十七年四月）及び拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『江戸下向雑々覚』翻刻と脚注・附・「江戸下向雑々覚」人名家名等解説及び索引」（『薫物書の研究』第三号、薫物書研究会、平成二十八年十月）参照。
- 三 萬方、一冊、写本、第2函118、マイクロ連番164

- 四 香具撰様調様、一冊、第2函119、マイクロ連番165
- 五 拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』（三弥井書店、平成二十四年）参照。
- 六 薫物之方、一帖、折本、請求記号…三六―七。書誌及び本文は拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』翻刻」（『薫物書の研究』創刊号、薫物書研究会、平成二十六年四月）参照。
- 七 「四条宮」こと円融天皇太皇太后宮藤原遵子ゆかりの品と伝わる薫物「黒方」方に付随する説の末尾には、梅花、侍従、黒方の三種の薫物について、次のように記述される。
侍従梅花をかしょう香りたれども、薫物ともおほえず。少しなりとも黒方を用ゐるべきなり。（注五拙著所掲載『薫集類抄』上巻、説19）
- 八 「萬方」語集の概要は「漢典」(<http://www.zdic.net/sousuo/>)による。
- 九 新編日本古典文学全集十一『古今和歌集』十七頁、小沢正夫、松田成穂校注・訳、小学館、平成六年
- 一〇 新編日本古典文学全集二十四『源氏物語』五、二十七―二十八頁、阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注・訳、小学館、平成九年
- 一一 以上の書目に関する小考は拙稿「新作薫物「富士」の香具「生脳」について―東山御文庫伝来の薫物書の記述を中心に―」（『香料』第二七六号、日本香料協会、平成二十九年十二月）による。
- 一二 後水尾天皇薫物調合御覚書、一冊、東山御文庫所蔵、請求記号…113―4―2―20
- 一三 本間洋子『中世後期の香文化―香道の黎明』、思文閣出版、平成二十六年
- 一四 注二所掲の拙稿における解題及び附載の人名家名等解説及び索引参照。
- 一五 諸本は名古屋蓬左文庫及び陽明文庫に収蔵される。書誌及びテキストは注五所掲の拙著に収録しており参照されたい。

付記

本稿の執筆に際しましては、専修大学図書館より貴重書の複写及び影印翻刻掲載のお許しを賜りましたことを始めとして、関連する資料の所蔵先であられる施設及び団体からも御高配を賜りました。また、所属する学会及び研究会におきましては、参加者の皆様方より『万方』及び『香具撰様調様』の内容及び関連資料についての貴重な御教示とご鞭撻の数々を頂戴して参りました。改めまして、心より御礼申し上げます。

ご多忙の折にも関わらず、拙稿の査読及び英文題目の校閲をお引き下さいました二名の先生方からは、貴重なお教えと厳しいご指摘、暖かいご助言の数々を賜りました。御学恩に対しまして、深甚なる謝意を表します。

【表一】『万方』載録記事の概要、他書の同類文、本文及び約物の色

「書中と他書の同類文」列における諸書の略号及び内容から推定される類纂又は書写年代の上限（零本については所蔵先を併記）

【薰集】薰集類抄（平安時代後期）、【香秘】香秘書（南北朝期）、【焼物】焼物調合法（鎌倉時代前期）、【原】原中最秘抄（南北朝期）、【薰・書陵】薰物方（南北朝期、南北朝期、【故書】薰物故書（南北朝期）、【黒秘】薰物黒方秘方（室町時代後期）、【上1】無題薰物書二冊の内の第一（室町時代後期、上田流和風堂所蔵）、【上2】無題薰物書二冊の内の第二（室町時代後期、上田流和風堂所蔵）、【秘方】薰物調合法秘方（江戸時代、東山御文庫、【薰・京菊】薰物方（安土桃山時代、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵）、【薰ノ】薰物ノコト（不明、高松宮本、【薰方】薰方之書（後西院宸翰、宮内庁書陵部）、【薰上】薰物秘蔵抄（江戸時代前期、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵）、【香具】香具撰様調様（江戸時代前期、専修大学図書館菊亭文庫所蔵）、【万】万方（江戸時代前期、専修大学図書館菊亭文庫所蔵）、【薰・乾々】薰物之方（江戸時代、杏雨書屋所蔵）

書名	提出順	方・説述書	録・項目名・記載場所	由縁・概要等	書中と他書の同類文	本文の色	点の色等
万方	1	方1	黒衣香	焼法トアリ	黒		
万方	2	説1	方1の調合法	右綴束シテ調合知寒但加木香苗 山タハナノ...	黒		
万方	3	方2	黒方		【上2】方33	黒	黒の絵記号
万方	4	説2	方2の調合法	右左ノ方墨分ハ墨ノ点 墨ニハ朱ノ点...	黒		
万方	5	方3	黒物方	焼方トアリ名不知	【上1】方19【梅花】【上2】方19【梅花か】	黒	
万方	6	方4	遠道香			黒	
万方	7	説3	方4の調合法	右甘草ヲニ割テ割テ煎メカスヲ焼テ汁ヲ...	黒		
万方	8	説4	方5の調合法	白日香葉ニ人テロヲヨクノリヲクノハトチタク也	黒		
万方	9	方5	干方			黒	
万方	10	説5	方5の香具に関する説、調合法	又ハアマキ包ニテヲシニガミノアルガヨキ也...		黒	
万方	11	方6	州干（干方）	或説	【万】76△保志方101△	黒	
万方	12	方7	又干（干方）	方6の「加減」		黒	
万方	13	説6	不乾ニ合分	方味ニ合分 右性従 盧橘 白梅 玉梅散有御歌...	黒		
万方	14	説7	ツモノノ分ハ第二合分	ツモノノ分ハ第二合分 黒方ニ色 梅花 香葉...	黒		
万方	15	説8	方8の調合法	焼中極緑也 動作 三千五百千ネ 煎ハニ条ヲ...		黒	
万方	16	方8	黒方			黒	朱の点・朱の絵記号
万方	17	方9	又方（黒方）	動作	【黒】方39△【黒上】方109【上1】方23△【上2】方37	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	18	方10	又方（黒方）	秘 動作并三家（三条家方）	【上1】方9△【焼方】方11△【黒上】方24△113△	黒	
万方	19	説9	方11の調合法	三家焼方、此方カロキ包ニスレハ十二間一分...		黒	
万方	20	方11	又方（黒方）	三家焼方	【黒】方54【黒・京菊】方4【上1】方21△【上2】方31【黒・乾々】方6【上1】方23【上2】方23.30.38	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	21	方12	又方（黒方）	正観町説 動作	【万】方2【黒上】方107	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	22	方13	又方（黒方）	求様	【黒上】方40	黒	朱の点
万方	23	説10	方14の調合法	実香方也、三千千ネ	【黒上】説31△	黒	
万方	24	方14	梅花	実香方也	【薫集】黒方方70△【香秘】方方方27△【故書】黒方方3△29△梅花方48【黒・香秘】黒方方25△【黒上】方8、117	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	25	説11	方14の調合法	実香方也、但1分ヨシ、又黒ト白ト合テ重ル也...		黒	
万方	26	方15	又方（梅花）	実香方也也	【万】方28.48	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	27	説12	方16の調合法	堀河右大臣、二条関白、治暦四年四月六日、動作...		黒	
万方	28	方16	侍従	堀河右大臣、二条関白、治暦四年四月六日、動作		黒	朱の点・朱の絵記号
万方	29	方17	又方（侍従）			黒	朱の点・朱の絵記号
万方	30	方18	盧橘		【上1】方13【黒上】方78	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	31	説13	方18の香具に関する説、調合法	殊ハ香具屋ニテチリノナキ様ニコクコサシテ...	【万】盧橘方47△【香具】方5△	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	32	方19	又方（盧橘）	三条流	【万】説37【万】説20△	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	33	方20	千種	動作、三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也	【黒上】説84	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	34	方21	仙人	三象流、三光院説云菊花花（マメ）ヨリ出タル也...	【故書】梅花方75△【香具】方6【上1】梅花方16△【黒上】梅花方71△【黒・乾々】菊花方25	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	35	方22	有明	妙善院説、常徳院御歌巻前、合出給云々	【黒上】方84	黒	朱の点
万方	36	説14	方23の香具に関する説	動作、此方黒方同、込ノキザミハ黒方ノトク...	【黒上】説37【万】説20△	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	37	方23	玉椿	動作、此方黒方同		黒	朱の点・朱の絵記号
万方	38	説15	方24の調合法	求様方、三千千ネ	【焼方】方15【黒上】方89	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	39	方24	菖草	求様方	【黒方】方5△【焼方】方23【黒上】方38.方132△	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	40	説16	方25の香具に関する説、調合法	動作、実香等方、梅干ノ案ノ中ヲ水ニツケテ...	【黒上】説4	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	41	方25	白梅	動作、実香等方、或梅花トモ云（香入4）	【上1】方10△【黒・実香】方5△【黒上】方11△【上1】方25【上2】方25△【万】書入4△	黒	朱の点・朱の絵記号
万方	42	説17	方26の調合法	動作、次第、次、丁、甲、白、黒、碧		黒	
万方	43	方26	黒方	動作	【薫集】方62△【黒上】方108【上2】方59	黒	黒の絵記号
万方	44	説18	方27の調合法	正観町説、動作、三千九百千ネ		黒	
万方	45	方27	黒方	正観町説、動作	【万】方12【黒上】方107	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	46	説19	方27の香具に関する説、調合法	煎ハ五香ト墨一分ハ煎テ朱ヨクメザテ...		黒	
万方	47	説20	黒方一般の調合法	或説ニ黒方ハ込ノキザミヨカナルヨシ...	【黒上】説37△【万】説14△	黒	朱の点
万方	48	説21	黒方一般の香具に関する説	富士ノ方ハ（中略）其調分合ナラハ来カロク入也		黒	
万方	49	説22	取重ノ次第色々	黒方の取重次第、承和焼方		黒	
万方	50	説23	取重ノ次第色々	黒方の取重次第、同（黒方）古法		黒	
万方	51	説24	取重ノ次第色々	黒方の取重次第、黒家焼説	【黒上】説11△【万】説43△.44△	黒	
万方	52	説25	取重ノ次第色々	黒方の取重次第、動作		黒	
万方	53	説26	取重ノ補説	（動作？）右次二間ヲニツニケワケテ...		黒	
万方	54	説27	取重ノ次第色々	同（黒方）古法		黒	
万方	55	説28	取重ノ次第色々	同（黒方）動作		黒	
万方	56	説29	取重ノ補説（調合法）	（動作？）次ノ方次ニテ黒方合スルニ...		黒	
万方	57	説30	梅花一般の調合法	白梅ノ花ノベラカガボシニシテ粉ニシテ...		黒	朱の点
万方	58	説31	取重ノ次第色々	（梅花）古法		黒	
万方	59	説32	取重ノ次第色々	（梅花）承和焼方		黒	
万方	60	説33	取重ノ次第色々	（梅花）実香		黒	
万方	61	説34	取重ノ補説（調合法）	（実香？）或説云次丁アハセナワケテ...		黒	
万方	62	説35	侍従一般の調合法	或説ニ香スゴシタルハナカクワロシ...	【黒上】説22△	黒	
万方	63	説36	取重ノ次第色々	（侍従・実方）		黒	
万方	64	説37	和合次第	（侍従・求和次第）		黒	
万方	65	方28	梅花	実香方	【万】方15.49	黒	黒の絵記号
万方	66	方29	黒方	正観町説ニ御方中		黒	
万方	67	方30	千種	中（品質か由縁か不明）		黒	黒の絵記号
万方	68	方31	新枝	三象	【黒】小書方31【黒上】黒方方19△.新枝方81△.千種方83△【黒・乾々】黒方方2【黒秘】黒方方1△【上1】黒方方1△【上2】黒方方1△	黒	
万方	69	方32	新枝	中（品質か由縁か不明）		黒	黒の絵記号
万方	70	方33	玉椿	中（中略方）	【焼方】方7【黒上】方131	黒	朱の点
万方	71	方34	玉簫		【黒上】方141△	黒	朱の点
万方	72	方35	時雨		【黒上】方142△	黒・朱	朱の点
万方	73	方36	野風	中（品質か由縁か不明）、新（焼方の記載なし）	（【黒上】方95等に同じであつたか）	黒	
万方	74	方37	黒方	今案	【黒上】方42【黒秘】方6	黒・朱	朱の点・朱の絵記号
万方	75	説38	方38及び寄置の特徴に関する説	動作、ハスノカニタリ、更シヤウレン黒...		黒	
万方	76	方38	荷葉	動作	【香秘】方16.18【黒上】方45	黒	
万方	77	説39	方39の香具に関する説、調合法	動作、冬菊ノシヘヲリカガホシ無別義半朱散、千ギネ		黒	
万方	78	方39	菊花	動作、右装束申入之香細、動重口伝之義...	【黒上】方65.方67.方68	黒	黒の絵記号
万方	79	説40	方39の調合法	動作、右装束申入之香細、動重口伝之義...	【黒上】説27△【香具】書入29△	黒	
万方	80	説41	方40の（取重）次第	実香方、次第江黒白丁次、次第合次第（方3）		黒	
万方	81	方40	黒方	実香方、句様焼也	【上1】方15△【黒上】方18.30	黒	黒の絵記号
万方	82	説42	方41の（取重）次第	三条流、次第書付ノコトシ		黒	
万方	83	方41	仙人	三象流	【黒】方125【焼方】方43.52【黒上】説86	黒	黒の絵記号
万方	84	説43	方42の（取重）次第	動作、次第白良丁丁置湯、丸（○）ハ黒家ノ...	【黒上】説11△.14△.15△【万】24△.44△	黒	
万方	85	方42	黒方	動作、丸（○）ハ黒家ノ焼説也（焼柄ト大方同）	【黒上】方29.37△	黒	黒の絵記号
万方	86	説44	方42の調合法	動作、右一ノ両ニニ焼合ニ分ニカケラレテ...	【黒上】説14△.15【万】43△	黒	
万方	87	方43	盧橘	動作	【黒上】方78.133△	黒	黒の絵記号
万方	88	説45	方44の（取重）次第	動 相関、次第方ニカクトシ		黒	
万方	89	方44	麝	動 相関	【黒上】方91	黒	
万方	90	方45	花椿（盧橘）		【黒・京菊】方14【焼方】方9	黒	
万方	91	説46	方45の香具に関する説	但麝ノ朱カロシテ種合油ノ朱モ入	【黒上】方80	黒	

万方	92	方46	梅花		【蕉・京菊】方2【秘方】挿紙A方10【重上】方5	墨	墨の総記号
万方	93	方47	唐橋	三条	【万】侍従方19△【香具】方5△	墨	墨の総記号
万方	94	方48	侍従	三条		墨	墨の総記号
万方	95	説47	方48の讀合法	三条; 蕉ニマセテ入、カロク星半分出ルホド...		墨	
万方	96	方49	梅花	実香方	【万】方15.28	墨	墨の総記号
万方	97	説48	方50の讀合法	上手之家方; 蕉物合スル前ニ合ヲクホ...		墨	
万方	98	方50	梅花	上手之家方	【條物】方5【香梅】方9【商】方6△【重上】方14△	墨	墨の総記号
万方	99	説49	方51の讀合法	麝二分ヲニツニ分テ甘一分ノ中ヘ三朱マゼ...		墨	
万方	100	方51	同(梅花)		【万】方112【上】方9【重上】方4.116【墨梅】方7.20	墨	墨の総記号
万方	101	方52	熏衣香; 十三方(十三万?)		【蕉方】間紅方19△【蕉】間紅方99△【衆】手枕方6△、匂袋方13、間紅方78、【万】熏衣方88	墨	
万方	102	方53	梅花(匂袋?)		【重上】紙背方148	墨	
万方	103	方54	加減梅花			墨	
万方	104	方55	みよし野	又号唐方(匂袋か一書入14.15)	【重上】熏衣香方(唐方)148	墨・朱	
万方	105	説50	方55の讀合法	排草ハシヤウチウヲフキテツボニ...	【万】説52△、書入18△	墨	
万方	106	説51	方56の讀合法	壹ニ入来夏トリ出シ後ニ入時竜ニ朱麝三朱也...		墨	
万方	107	方56	同(みよし野); 加減			墨	
万方	108	方57	熏衣香	当家		墨	
万方	109	方58	同(熏衣香)	又方	【蕉】方100	墨	
万方	110	方59	同(熏衣香)	又方		墨	
万方	111	方60	スミヤグラ(調橋)			墨	
万方	112	方61	千里墨			墨	
万方	113	説52	方62の香具に関する説	日野方; 排草ハシヤウチウヲフキテツボニ...	【万】説50△、書入18△	墨	
万方	114	方62	(匂袋か)	日野方	【重上】熏衣香方146	墨	
万方	115	方63	八重一重(匂袋か)		【重上】紙背方147	墨	
万方	116	方64	山吹(匂袋か)	法皇御方六種ノ内	【蕉方】方18	墨	
万方	117	方65	サラシナ(更紗; 匂袋か)	同(法皇御方六種ノ内); 一斎(麝)ニテ後ニツ有	【蕉方】方21△	墨	
万方	118	方66	ウテナ(墨; 匂袋か)	同(法皇御方六種ノ内)	【蕉】方22△	墨	
万方	119	方67	九重(匂袋か)	同(法皇御方六種ノ内)	【衆】八重一重方11【蕉】八重一重方110	墨	
万方	120	方68	熏香(酒紅ノ間香; 匂袋か)	同(法皇御方六種ノ内)	【万】熏衣香(十三万)方52△【衆】等緯方4△、手枕方6△【蕉方】間紅(十三万)方19△【蕉】熏衣香方99、等の緯方109△	墨	
万方	121	方69	神路のおく(匂袋か)	同(法皇御方六種ノ内); ふかひいて神路の...	【香具】方7	墨	
万方	122	方70	梅か枝(匂袋か)			墨	
万方	123	方71	伽羅之油			墨	
万方	124	説53	方71の讀合法	右香具ナルホドミチシノコトニサハラヌホドシテ...		墨	
万方	125	方72	又方(伽羅之油)			墨	
万方	126	説54	方72の讀合法	右唐橋、余津瀬ヨクニネリ合テ火ノケヲノケテ...		墨	
万方	127	方73	香香油			墨	
万方	128	説55	方73の讀合法	右唐橋ヲ火ヲノケテ麻油ヲ入香具ヲ...		墨	
万方	129	説56	方74の取重次第、讀合法	御室; 丁白甘麝四色ヲ粉ニシテ蜜ニテキ...		墨	
万方	130	方74	千方	御室		墨	墨の総記号
万方	131	説57	方74の香具に関する説	御室; アトノカルキガヨシニカワサキハワルシ...		墨	
万方	132	説58	方75の讀合法	日野唯心; 白麝能砂合テ蜜ニテキ流テ...		墨	
万方	133	方75	千方	日野唯心		墨	墨の総記号
万方	134	説59	方76の讀合法	醍醐; 香具アラキ	【万】説60、62	墨	
万方	135	方76	千(千方)	醍醐	【秘方】方19【万】方6△、保毛(千)方101△	墨	墨の総記号
万方	136	説60	方77の讀合法	香具アラキ	【万】説59、62	墨	
万方	137	方77	又方(千方)			墨	墨の総記号
万方	138	方78	又方(千方)	実香公		墨	
万方	139	説61	方78の讀合法	実香公; 涼ウスヒラクノヨキリニテ引リテ...		墨	
万方	140	説62	方79の讀合法	照高院宮之方; 香具アラキ	【万】説59、60	墨	
万方	141	方79	白檀之千(千方)	照高院宮之方		墨	
万方	142	説63	方79の讀合法	照高院宮之方; 成増蜜ニテ讀合如常		墨	
万方	143	説64	方80の讀合法	香具コマカニ	【万】方81、82	墨	
万方	144	方80	龍涎香			墨	
万方	145	説65	方80の讀合法	右龍涎ヱフヲ以テ煉リテ推麝ニ入テラス...		墨	
万方	146	方81	春日野	同(方80「香具コマカニ」に同じとの意か)	【万】説64、方82	墨	
万方	147	方82	練香	同(香具コマカニ)	【万】説64、方81	墨	
万方	148	説66	方82の香具に関する説	麝1朱; 仏ニ供養スルニハ麝ヲノゾキテ入レズ...	【万】説69△	墨	
万方	149	説67	方82の香具に関する説	乳香1朱; 右、白菰ヲ粉ニシテコホリテ...		墨	
万方	150	説68	方82の讀合法	右粉ニシテコホリテ合入麝ニテコホリテ...		墨	
万方	151	説69	方83の讀合法	コマカニツキフルイ蜜ニテアハセテツクト五百...	【万】説66△	墨	
万方	152	方83	棋養香			墨	
万方	153	説70	方84の讀合法	法皇; 勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘、寒中ニ可合也		墨	
万方	154	方84	包玉	法皇; 勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘	【蕉ノ】アンヘラ方18△	墨	
万方	155	方85	同(包玉)	同(法皇; 勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘)	【万】方87△	墨	
万方	156	説71	方85の讀合法	同(法皇; 勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘)...		墨	
万方	157	説72	方85の香具に関する説、讀合法	同(法皇; 勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘)...		墨	
万方	158	方86	又方(包玉)		【万】方88△【蕉方】アンヘラ方16△【蕉ノ】アンヘラ方16△、南蛮あんへら方17△	墨	
万方	159	説73	方86の讀合法	右ノネリ物三色ヲアカシネノ麝ニ入能加減ニ...		墨	
万方	160	説74	方86の讀合法	右ノ方ノ乳香二分ニ朱ベゼウエー一分一朱...		墨	
万方	161	方87	又別紙ニ口伝トテ有(包玉)		【万】方85△	墨	
万方	162	説75	方87の讀合法	醍醐様ノ次第; 一唐橋、ニベゼウエ、ミソカウユ		墨	
万方	163	方88	(包玉)		【万】方86△【蕉方】アンヘラ方16△【蕉ノ】アンヘラ方16△、南蛮あんへら方17△	墨	
万方	164	説76	方89の讀合法	来(ママ)丸ノ黒キ所ヲトリ赤金ナベニ入テ...		墨	
万方	165	方89	花露			墨	
万方	166	説77	方89の讀合法	以上六味ヲ来丸油ニ三日ツケ其後ヨシホリ...		墨	
万方	167	説78	方89の讀合法	今案ニ云合ル時分ハ四五月ノ比ヨシ...		墨	
万方	168	方90	又方(花露)			墨	
万方	169	説79	方90の讀合法	重丸ノカフウヘノカフヲモトリ中ノ...		墨	
万方	170	説80	方90の讀合法	今案云重丸ハ中ノウスキカフモヨクトリ...		墨	
万方	171	説81	方90の讀合法	又今案云ムシシテボラスニ右ノ香具...		墨	
万方	172	説82	方91の讀合法	重丸ニテモ唐橋ト等分ニテモ...		墨	
万方	173	方91	兵部卿			墨	
万方	174	説83	方92の讀合法	香具ナルホドコマカニシテ重丸ニテ入テル...		墨	
万方	175	方92	摩身香			墨	
万方	176	方93	摩妻			墨	
万方	177	方94	花橋			墨	
万方	178	方95	姥そ様(源様)			墨	
万方	179	説84	方95の香具(反照)に関する説	梅花ヒラーツホトラミツ四ツツクダキテ		墨	
万方	180	方96	熏衣香	衣服装束ナドヘ入カロキ熏衣香		墨	
万方	181	説85	方96の香具に関する説、讀合法	右様中ニ入ナラハ源照ヲミキテ麝麝ノ皮ニ朱...		墨	
万方	182	方97	熏衣香; 方95の七割分	右七割ニシテ已上		墨	

万方	183	方98	板香			星	
万方	184	説86	方98の調合法	右何毛粉ニス葛ノリニテヨクネリ合セ紙ニヒキ...		星	
万方	185	説87	方99の調合法、概要	一毎年冬之衣服装束ニハ袋ヲ四五六月之比...		星	
万方	186	方99	(薰衣香力)	一袋合		星	
万方	187	説88	方99の調合法、概要	右一袋合也八袋分八調可合也		星	
万方	188	方100	(薰衣香力)、方98の八調分			星	
万方	189	方101	候志(干)	三条流	【万】千方6△、千方76△	星	
万方	190	方102	侍従			星	
万方	191	方103	同方(侍従)		【薫上】侍従方80	星	
万方	192	説89	方103の調合法	是ハ旧(節)中へ磨少フルヒカクル		星	
万方	193	方104	同方(侍従)		【万】方108.109【薫集】方50【た】方18△【薫・京菊】方12【薫上】方49△、方122	星	
万方	194	方105	野風		【薫】新枕方49△【薫・京菊】新枕方8△【薫上】新枕方82△、野風方135【黒秘】野風方11△【上1】野風方10△【上2】野風方10△	星	星の絵記号
万方	195	方106	二葉		【薫上】方139	星	
万方	196	方107	侍従		【た】方20【薫上】方57	星	星の絵記号
万方	197	方108	又(侍従)		【万】方104.109【薫集】方50【た】方18△【薫・京菊】方12【薫上】方49△、方122	星	
万方	198	方109	(侍従)		【万】方109.118【薫集】方50【た】方18△【薫・京菊】方12【薫上】方49△、方122	星	
万方	199	方110	(侍従)		【た】方19【薫上】方56.61△	星	
万方	200	方111	(侍従)	(貝香以下は省筆したか)		星	
万方	201	方112	梅花	御調合ノ	【万】方51【た】方9【薫上】方4.116【黒秘】方7.20	星	
万方	202	方113	熏衣香			星	
万方	203	方114	又(熏衣香)			星	
万方	204	説90/書入1	方8頭欄	何方も黒方ハ唇相一合後ニ掛分テ両度ニ入之...	【万】書入5△、13△	星	
万方	205	説91/書入2	方16頭欄	堀川右大臣、二条関白、治暦四年四月六日...		星	
万方	206	説92/書入3	方23頭欄	室二場入事有ベカラズツヨクカタキ時塩ヲ入也...		星	
万方	207	説93/書入4	方25頭欄	或梅花トモ云	【万】方25△	星	
万方	208	説94/書入5	方26頭欄	(沈香は)二度ニ入	【万】書入1△、13△	星	
万方	209	説95/書入6	説20頭欄	沈ノキサミハ鬼モチノフルニスケルホドナト...	【万】書入8△	星	
万方	210	説96/書入7	説24-26頭欄	仙人玉椿モ沈キサミ黒方ニ同香具モ...		星	
万方	211	説97/書入8	説30-37頭欄	沈ノキサミ黒モチノフルヒニスケルト竹ノ籠ノ...	【万】書入6△	星	
万方	212	説98/書入9	方38頭欄	(荷葉)、取重古法ノ次第ハ...		星	
万方	213	説99/書入10	方42頭欄	勅作、此方ノ口伝ハ香ハ丁子増也...	【薫上】説14△【香具】説83△、93△	星	
万方	214	説100/書入11	19丁裏頭欄	此内アシキ分ニハ黒ノ点大方ナル分ニハ...		星	
万方	215	方115/書入12	落葉、19丁裏-20丁表頭欄			星	
万方	216	説101/書入13	説48-方50頭欄	次第ノコトクニ合テ後甲甘ノ中へ合...	【万】書入1△、5△	星	
万方	217	説102/書入14	方55頭欄	イヅレノ匂袋合ルモスナキ香ハ...		星	
万方	218	説103/書入15	説50頭欄	袋ニ入時竜1分磨1分2未入加也ヨククテヲハル也		星	
万方	219	方116/書入16	有明、説51-方56-57頭欄	伏見殿相伝	【香具】方1	星	
万方	220	説104/書入17	方59-61頭欄	又右之朱書者合メ三処ハ分五厘也...	【香具】書入41△	星	
万方	221	方117/書入18	匂袋、説52-方62.63頭欄	宗種卿匂袋ノ方、排草ハシヤウチウヲフキテ...	【万】説50△、52△	星	
万方	222	方118/書入19	匂袋、方63-65頭欄			星	
万方	223	説105/書入20	説56-58、方74頭欄	千ハ寒水ニテシヤセンジ一両ヲ茶碗ニ入...		星	

万方	記述 全223	内・本文説89	本文方114	書入説16	書入方4	計
	同類文掲載先	同類文数(重複あり。同一書中の同類文は除く※)				
	【薫集】		5			5
	【香秘】		3			3
	【焼物】		1			1
	【原】		1			1
	【薫・書陵】		1			1
	【故書】		2			2
	【黒秘】		5			5
	【上1】		6			6
	【上2】		8			8
	【秘方】		8			8
	【薫・京菊】		8			8
	【薫】		10			10
	【衆】		3			3
	【た】		13			13
	【薫ノ】		3			3
	【薫方】		7			7
	【薫上】	10	45	1		56
	【香具】	1	4	2	1	8
	【万】	13	24	6	1	44
	【薫・乾々】		3			3

※ 記述全 223 点中 98 点に対して同類方を確認。他書の同類文数は計 195 点。

【表二】『香具撰様調様』 載録記事の概要、他書の同類文、本文及び約物の色

「書中と他書の同類文」列における諸書の略号及び内容から推定される類纂又は書写年代の上限（零本については所蔵先を併記）

【香秘】香秘書（南北朝期）、【焼物】焼物調合法（鎌倉時代前期）、【薫・書陵】薫物方（南北朝期、宮内庁書陵部所蔵）、【故書】薫物故書（南北朝期、
 【黒秘】薫物黒方秘方（室町時代後期）、【上2】無題薫物書二冊の内の第二（室町時代後期、上田流和風堂所蔵）、【秘方】薫物調合法（江戸時代、東山御文庫）、
 【三西】三西薫物合様物語（江戸時代、専修大学図書館菊亭文庫所蔵）、【薫合】薫物合様（江戸時代前期、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵）、
 【薫上】薫物秘蔵抄（江戸時代前期、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵）、【香具】香具撰様調様（江戸時代前期、専修大学図書館菊亭文庫所蔵）、
 【薫下】方方（江戸時代前期、専修大学図書館菊亭文庫所蔵）、【薫・乾々】薫物之方（江戸時代、杏雨書屋所蔵）

書名	掲出順	方・説通番	銘・項目名・記載場所	由緒、概要等	書中と他書の同類文	本文の色	点の色等
香具撰様調様	1	説1	香具撰様 調様	一蜜者 古へハ黒蜜ナレトモハシヤウジンナキ...		青	青の点
香具撰様調様	2	説2	香具撰様 調様	又ハチ蜜ノ上ニチモ木蜜ハ白クタマリテ...		青	青の点
香具撰様調様	3	説3	香具撰様 調様	一具香者 古キホトヨシコシラヘテ粉ニシテ...	【香具】説140△	青	
香具撰様調様	4	説4	香具撰様 調様	先灰ヲツカミホド入テ具ノ多クハニツカミモ入也...		墨	
香具撰様調様	5	説5	香具撰様 調様	貝千通ノライミツホド水ニテ古酒ノ色ホトニ...		墨	
香具撰様調様	6	説6	香具撰様 調様	蒜香油クサケツアルハ茶碗ノ中ニテモ入...		青	青の丸
香具撰様調様	7	説7	香具撰様 調様	沈ハヒキミヲリタル匂ノキノフンクサクナキ...		墨	青の点
香具撰様調様	8	説8	香具撰様 調様	三条家ニハ沈四両合ナラハ一両ニ分...		墨	朱の丸
香具撰様調様	9	説9	香具撰様 調様	薫ハスクノカヨキ也カナウスニテツク斗也	【香具】説55△	墨	青の点
香具撰様調様	10	説10	香具撰様 調様	甘松水ニテアラヒセウチヲフキケカホシニシテ...	【薫合】説31△	墨	青の点
香具撰様調様	11	説11	香具撰様 調様	丁子ハ花トマリノ花ノゾフトリ粉ニス	【香具】説50△	墨	青の点
香具撰様調様	12	説12	香具撰様 調様	麝ハキテミシハラクサクナキノゾカミテ...		墨	青の点
香具撰様調様	13	説13	書ノ内故実書抜 古法	一次ハ紫色ニテ水ニシツムヲ為善...	【薫合】説13	墨	
香具撰様調様	14	説14	書ノ内故実書抜 古法	一丁子ハ大キニテハフサアリテツメニサスニ...	【薫合】説41	墨	
香具撰様調様	15	説15	書ノ内故実書抜 古法	一香附子ハウサノナナリツツメノサネナドノヤウ也...	【薫合】説55	墨	
香具撰様調様	16	説16	書ノ内故実書抜 古法	一麝香ハイツハレハ物多クテマコナル物...	【秘方】説19△【薫合】説42	墨	
香具撰様調様	17	説17	書ノ内故実書抜 古法	一白檀ハ黄色ニテアカマハヨシ檀木ノヤウニテ...	【薫合】説43	墨、青	
香具撰様調様	18	説18	書ノ内故実書抜 古法	一黒陸ハ大形コハクニテロスキトアリテ...	【薫合】説44【香具】説55△	墨	
香具撰様調様	19	説19	書ノ内故実書抜 古法	一甘松ハ根ニ似タリ無別極...	【薫合】説54	墨	
香具撰様調様	20	説20	書ノ内故実書抜 古法	一熟習金ハ紫ノクタルヤウニテカウハシ	【薫合】説48	墨	
香具撰様調様	21	説21	書ノ内故実書抜 古法	一貴習金ハマロタチテクロノミノ色也...	【薫合】説49	墨	
香具撰様調様	22	説22	書ノ内故実書抜 古法	一青習金ハバジミノホシタルサマリ...	【薫合】説50 【秘方】説1【薫上】説30△ 【薫合】説33△	墨	
香具撰様調様	23	説23	書ノ内故実書抜 古法	一占唐ハ今ハナシ代澤ヲ用也秘...	【薫合】説46	墨	
香具撰様調様	24	説24	書ノ内故実書抜 古法	一青木香ハスコン白シニテ大キナルヨシ	【薫合】説52	墨	
香具撰様調様	25	説25	書ノ内故実書抜 古法	一藿香ハ葉クサ用フルクテ大キナルクハ悪也	【薫合】説53	墨	
香具撰様調様	26	説26	書ノ内故実書抜 古法	一疎合油ハアリカキ物ナリ紫ニシテアカ色也...	【薫合】説52	墨	
香具撰様調様	27	説27	書ノ内故実書抜 古法	一桂ハウハカワヨクコソケテ中ヲ粉ニスル也	【薫合】説35△【香具】38△	墨	
香具撰様調様	28	説28	書ノ内故実書抜 古法	一車前子ハヲホバコノ実ナリ黒ゴマノヤウニテ...	【薫合】説58	墨	
香具撰様調様	29	説29	書ノ内故実書抜 古法	一貝ヲノノ香ヲウクトノヘル者也	【薫合】説26	墨	
香具撰様調様	30	説30	書ノ内故実書抜 古法	一次ハコマカニサミテモチノフルヒニテフル也...	【薫合】説27	墨	
香具撰様調様	31	説31	書ノ内故実書抜 古法	一丁子ハキサミツコニシテセイウノフルニテ...	【薫合】説28	墨	
香具撰様調様	32	説32	書ノ内故実書抜 古法	一白且ハキサミツコニスヘシルヒセイカナル...	【薫合】説29△	墨	
香具撰様調様	33	説33	書ノ内故実書抜 古法	一黒陸ハ粉ニシテセイウノフルイニテフル...	【薫上】説9【薫合】30 【黒秘】説4.20【薫上】説2△.3△【薫合】説31	墨	
香具撰様調様	34	説34	書ノ内故実書抜 古法	一麝香ハ毛ト皮トヨクノケテ麝香スリニテ...	【薫合】説32	墨	
香具撰様調様	35	説35	書ノ内故実書抜 古法	一甘松ハ一夜酒ニヒタシテソノチ又ノ日ニ...	【薫上】説33【薫合】説34 【薫合】説35【香具】27△	墨	
香具撰様調様	36	説36	書ノ内故実書抜 古法	一藿香ハ甘松ニ同一夜酒ニツケテ布ニツミテ...	【薫合】説36	墨	
香具撰様調様	37	説37	書ノ内故実書抜 古法	一貴習金ハウハ皮ヲソグテサミツ粉ニスベシ	【薫合】説33△【薫合】説37△	墨	
香具撰様調様	38	説38	書ノ内故実書抜 古法	一桂心ハウヘナル皮ヲヨクケツリスレト中ヲ粉ニスヘシ	【薫合】説33△【薫合】説37△	墨	
香具撰様調様	39	説39	書ノ内故実書抜 古法	一青木香ハコレモウヘヨクソグステ其後粉ニスヘシ	【薫合】説36	墨	
香具撰様調様	40	説40	書ノ内故実書抜 古法	一安息香ハヨクスリアマツランマセテ能スリ合...	【黒秘】説6△【薫合】説37	墨	
香具撰様調様	41	説41	書ノ内故実書抜 古法	一疎合油ハ花機ニ入一誦合スルホト甘葛ヲ...	【薫合】説39△	墨	
香具撰様調様	42	説42	書ノ内故実書抜 古法	一澤写ハウヘヨクソグチ中ヲサミツニス...	【香具】説56△	墨	
香具撰様調様	43	説43	書ノ内故実書抜 古法	一フルヒハムラナクウスキ機ヲアルヘシ...	【故書】説3△	墨	
香具撰様調様	44	説44	書ノ内故実書抜 古法	一次ナドツクアルトホシバカリツキタク...		墨	
香具撰様調様	45	説45	書ノ内故実書抜 古法	一イマダアハセヌサキニハ香ドモヨクベチクニス...	【薫合】説11△.30△	墨	
香具撰様調様	46	説46	書ノ内故実書抜 古法	一蜜ハ黒蜜ヨシ先キヌミテモヒセグニシタテ...	【香具】説65△	朱	
香具撰様調様	47	説47	書ノ内故実書抜 古法	貝香ハスキタルホトニウスクテ大ビラナルガヨキ也...	【香具】説65△	朱	
香具撰様調様	48	説48	書ノ内故実書抜 古法	一次ハカワリタル香ノナキ（カヨキ也）...		朱	
香具撰様調様	49	説49	書ノ内故実書抜 古法	一麝香ハヨキ麝メナリ大方ハ頭カヨキ也...	【香具】説11△	朱	
香具撰様調様	50	説50	書ノ内故実書抜 古法	一丁子ハフクロ丁子アシシリノフクレタル...	【薫上】33△【薫合】34△ 【香具】37△	朱	
香具撰様調様	51	説51	書ノ内故実書抜 古法	一甘松ハアラシキ匂香ニテカヨキ也...		朱	
香具撰様調様	52	説52	書ノ内故実書抜 古法	一宇金ハウハカハコソグチキリニシテ粉ニス...		朱	
香具撰様調様	53	説53	書ノ内故実書抜 古法	一白且ハ大キナル木ヲアリテ中ノ貴ナル...		朱	
香具撰様調様	54	説54	書ノ内故実書抜 古法	一藿香ハ布袋ニ入水ニスキトスムホトニヨク...	【薫合】説44【香具】説18△	朱	
香具撰様調様	55	説55	書ノ内故実書抜 古法	一黒ハスキタルコハクノヤウナルカヨキ也...	【香具】説42△	朱	
香具撰様調様	56	説56	書ノ内故実書抜 古法	一木香澤写ハウハカワコソグチキリニシテ...		朱	
香具撰様調様	57	説57	書ノ内故実書抜 古法	一返飯ハ香具屋ヨリサシマ用テハ悪也...	【香具】説131△.書入16△	朱	
香具撰様調様	58	説58	書ノ内故実書抜 古法	一色付ノ墨ハナベ墨ヨシナベカマナノソコニアル...	【薫・乾々】説3△	朱	
香具撰様調様	59	説59	書ノ内故実書抜 古法	一塩ハ白キナマジホヨキ也クサケノソナナク用...		朱	
香具撰様調様	60	説60	書ノ内故実書抜 古法	一蜜ハ香具屋ノ太方サトウ蜜也アシハチ蜜ヨキ也...		朱	
香具撰様調様	61	説61	薫物雑々口伝	一先焼物ハ香具屋ノシロタルガヨキ也...		朱	
香具撰様調様	62	説62	薫物雑々口伝	一薫物ハ沈麝丁ノ香ヲセントス 方ハ沈ノ...		朱	
香具撰様調様	63	説63	薫物雑々口伝	一薫物ハホシゴンボン也ホシヨリシタタル者也		朱	
香具撰様調様	64	説64	薫物雑々口伝	一香具調キアシキナノ少モセヌヤウニキヤム...		朱	
香具撰様調様	65	説65	薫物雑々口伝	一香具コシラヘテ後香具ドモ香ノカワヌヤウ...		朱	
香具撰様調様	66	説66	薫物雑々口伝	一沈丁貝白蜜露甘蜜墨イブレモ香ヲ吟味スル...	【香具】説48△	朱	
香具撰様調様	67	説67	薫物雑々口伝	一イカラキ匂ハ丁子ノ匂也（カキ合ノキ）...		朱	
香具撰様調様	68	説68	薫物雑々口伝	一貝丁麝ハ少シヒカヘタルガヨキ也...		朱	
香具撰様調様	69	説69	薫物雑々口伝	一麝香カキ合ノキフルハ免毛ノマユハヨキ也		朱	
香具撰様調様	70	説70	薫物雑々口伝	一薫物ノ道具ニハ梅檀ノ木又ハ竹ナドヨキ也		朱	
香具撰様調様	71	説71	薫物雑々口伝	一ヤゲンノアタラシキハコスヲタビクツヨク...		朱	
香具撰様調様	72	説72	薫物雑々口伝	一薫物ヲ入置物ハヌリノガヨキ也	【香具】説120△	朱	
香具撰様調様	73	説73	秤懸様	上ノ前ノ目（量）四ツノアル所ニテ大方カク也...	【香具】説80△	墨	
香具撰様調様	74	説74	秤懸様	一秤ノ目ヨクシリテカクヘシタノ目ハ中ノ權...		墨	
香具撰様調様	75	説75	秤懸様	又一説六朱ヲ一分トス四分ヲ一画トス...	【薫集】説19△【焼物】説12△ 【故書】説1△.36△【黒秘】説9△【香具】説126△	墨	
香具撰様調様	76	説76	秤懸様	ハカリノ權目ノナカナカサセウルハシク...		墨	
香具撰様調様	77	説77	秤懸様	秤師ノ秤ノ目ノ事 一上目 五拾匁ダメ有...	【薫合】説22△	墨	
香具撰様調様	78	説78	秤懸様	一料目ノ事 方ノ両目ノ下フキナドニ大小カキテ...		朱	
香具撰様調様	79	説79	秤懸様	又大一画 小一画ナドアルハ		朱	
香具撰様調様	80	説80	取重様	先屏風ヲタマハシ但アリ障子ヲタメトモシ...	【香具】説73△	墨	青の点
香具撰様調様	81	説81	取重様	蜜ハカウツツケ様ノ図也朱ハキサミサ様ノ図也...		墨	青の点
香具撰様調様	82	説82	取重様	ノトクンタルカヨシ（此説ガヨキ也先秘ヲ...		墨	
香具撰様調様	83	説83	書ノ内故実書抜 古法	一アカキノ所ノアタリキヨラン所ニテアハセシ...	【薫上】説14△【薫合】説10△ 【方】書入10△	墨	
香具撰様調様	84	説84	書ノ内故実書抜 古法	先手ヲヨク洗テアカキノ所ニテ合也先ウスヤウ...	【薫合】説10△	朱	
香具撰様調様	85	説85	書ノ内故実書抜 古法	或説云沈ヲシキ檀ノ羽ニテ櫛子ノトクコレヲ...		朱	
香具撰様調様	86	説86	書ノ内故実書抜 古法	三条ノ説ニ花機ナド返飯入ハ蜜合トキ麝半分...	【香秘】説23△【故書】説23△ 【薫合】説12△【香具】説94△	墨	
香具撰様調様	87	説87	合ツキノ様	カキ合テ又ノ目カナウスニテ蜜合スル也...		墨	
香具撰様調様	88	説88	合ツキノ様	右蜜合ノ時ノ道具墨壇ノ様ノ小サジキネ...	【香具】説133△	墨	青の点
香具撰様調様	89	説89	合ツキノ様	干（＝干）ハカナウスニテサナル也...		墨	青の点

香具撰様調様	90	説90	書ノ内故実又キ書 古法	一アマツラノカタマリタルハシタニクシ...	【重合】説11△【香具】説46△, 91△	墨	
香具撰様調様	91	説91	書ノ内故実又キ書 古法	又一説二書ノ香ヲトルヘタメニ両目ノ外ニ...	【重合】説11△【香具】説46△, 90△	墨	
香具撰様調様	92	説92	書ノ内故実又キ書 古法	又一説アマツラ合セコモテ洗ニ二分バカリ...	【故書】説19△	墨	
香具撰様調様	93	説93	書ノ内故実又キ書 古法	又一説両目ノ外ニ香ハ丁子ノ粉一朱...	【重上】説14△【香具】説83△, 書入34△【万】書入10△	墨	
香具撰様調様	94	説94	書ノ内故実又キ書 古法	一ツク数ハ四面合ハ三千キネ二両合ハ...	【香秘】説23△【故書】説23△【重・香秘】説15△【重合】説12△【香具】説87△	墨	
香具撰様調様	95	説95	書ノ内故実又キ書 古法	一ウツム事 春ハ五日 夏ハ三日 秋ハ七日...	【香秘】説24△【故書】説29△【重合】説15	墨	
香具撰様調様	96	説96	書ノ内故実又キ書 古法	茶碗ニ重物ノ分科ヲヨクミテヨキホド蜜ヲ入テ...		朱	
香具撰様調様	97	説97	書ノ内故実又キ書 古法	勅云重物アシキ匂ナラハ重陸ノ粉ヲ蜜ニ入...		墨	
香具撰様調様	98	説98	書ノ内故実又キ書 古法	或説云冬ノ重物ハ合トキシルケレトモホトフレバ...	【香秘】説19△【重・香秘】説15△	墨	
香具撰様調様	99	方1	有明・重衣香也	伏見殿ヨリ相伝	【万】方116	墨・朱	
香具撰様調様	100	説99	(方1処方の度量衡)	一四角一両ノ時ハ半朱ハ一分三リン五毛...		墨	
香具撰様調様	101	説100	(方2処方の度量衡)	一四角三分一両ノ時ハ半朱ハ一分三リン五毛...		墨	
香具撰様調様	102	説101	料目之事	一 四角四分一両ノ時ハ 一分ハ一角一分...		墨	
香具撰様調様	103	説102	料目之事	一 五角一両ノ時ハ一角一分ハ五分五リン...		墨	
香具撰様調様	104	説103	(重物の匂いを移す道具)	或説云焼重物古案云重物ノタイニテハ...	【故書】説35	朱	
香具撰様調様	105	方2	黒方	方 三条公富公相伝ノ方也・右五種家方...		朱	
香具撰様調様	106	方3	梅花	方 三条公富公相伝ノ方也・右五種家方...		朱	
香具撰様調様	107	方4	若草	方 三条公富公相伝ノ方也・右五種家方...		朱	
香具撰様調様	108	方5	花橘(盧橘)	方 三条公富公相伝ノ方也・右五種家方...	【万】待従方19△, 盧橘方47△	朱	
香具撰様調様	109	方6	仙人	方 三条公富公相伝ノ方也・右五種家方...	【万】仙人方21	朱	
香具撰様調様	110	説104	雑々口伝	一ニヲハハ沈磨丁也貝ハ能香具ヲヒツニス...	【黒秘】説1△	墨	青の点
香具撰様調様	111	説105	雑々口伝	一重物ノ方ヲミテ善業ヲル事 丁子ハ...		墨	青の点
香具撰様調様	112	説106	雑々口伝	一中院説ハナナジ方ヲアイクハセテ...		墨	朱の点
香具撰様調様	113	説107	三西重物合様物語 口伝	一汝コシラヘヤウノ事 外ヘバー重ノウチ...	【三西】説1	墨	朱の丸
香具撰様調様	114	説108	三西重物合様物語 口伝	一カイ香コシラヘ様ノ事 イクタビモアライ...	【三西】説2	墨	朱の丸
香具撰様調様	115	説109	三西重物合様物語 口伝	一サウテンタキ物ハイツレノ方ニテモ洗丁磨...	【三西】説3	墨	朱の丸
香具撰様調様	116	説110	三西重物合様物語 口伝	一タキ物諸合ハトキソレノ方ナリヤメホド...	【三西】説4	墨	朱の丸
香具撰様調様	117	説111	三西重物合様物語 口伝	一サカウハヨクケラリスチスリ候トキニ重陸ヲ...	【三西】説5	墨	朱の丸
香具撰様調様	118	説112	三西重物合様物語 口伝	一サカウハ少ヒカヘヲキ候てヨク候モシサカウノ...	【三西】説6	墨	朱の丸
香具撰様調様	119	説113	三西重物合様物語 口伝	一サカウスリ候時クノロクニモ香具モニモ入...	【三西】説7	墨	朱の丸
香具撰様調様	120	説114	三西重物合様物語 口伝	一サテタキ物合候て以後モシナニテモ...	【三西】説8	墨	朱の丸
香具撰様調様	121	説115	三西重物合様物語 口伝	一諸合ノ時後ニクハ候香具ホドニホヒヤク...	【三西】説9	墨	朱の丸
香具撰様調様	122	説116	三西重物合様物語 口伝	一重ハコクミツロシク候	【三西】説10	墨	朱の丸
香具撰様調様	123	説117	三西重物合様物語 口伝	一サウジツタキ物ハ洗ノスキタルハヨロシク候...	【三西】説11	墨	朱の丸
香具撰様調様	124	説118	三西重物合様物語 口伝	一タキ物ハソレシニホヒモテ出候物ニ候...		墨	朱の丸
香具撰様調様	125	説119	三西重物合様物語 口伝	一諸合ノ事本方ノ事ハマツ太鼓ノ事ニ候...		墨	朱の丸
香具撰様調様	126	説120	三西重物合様物語 口伝	一タキ物合候て入ヲキ候物ハスリ物第一ヨロシク候	【香具】説72△	墨	朱の丸
香具撰様調様	127	説121	三西重物合様物語 口伝	一スミヤキカハシ候て入候てヨク候		墨	朱の丸
香具撰様調様	128	説122	三西重物合様物語 口伝	一惣而タキ物トフ事ハ天然ノ物ノニホノ外ニ...		墨	朱の丸
香具撰様調様	129	説123	建久之説 雑々	一汝ヒロケテ四方ニワカツ基ニムラナク...	【焼物】説1△	墨	
香具撰様調様	130	説124	建久之説 雑々	一アセフルヒニ度ソノナー一夜ヲヘテ...	【故書】説15△	墨	
香具撰様調様	131	説125	建久之説 雑々	一梅花ハアハス次第黒方ニヲナシ...	【焼物】説2△, 8△【故書】説43△	墨	
香具撰様調様	132	説126	建久之説 雑々	一六朱ヲ一分ス四分ヲ一両トス四十八両ヲ...	【重集】説19△【焼物】説12△【故書】説1△, 36△【黒秘】説9△【香具】説75△	墨	
香具撰様調様	133	説127	建久之説 雑々	一ウツム事 春五日加一日 夏六日 秋五日 冬十日	【焼物】説13△	墨	
香具撰様調様	134	説128	建久之説 雑々	一貝ハ蟹コビノウラニテ面ニ二度ウラニ一度ヌル...	【焼物】説6△	墨	
香具撰様調様	135	説129	建久之説 雑々	一アマツラセンス時ヒサゲナナノアヒタニ...	【焼物】説7△, 方17続文和歌	墨	
香具撰様調様	136	説130	建久之説 雑々	一塩ハウサケノナキルケノナカリキノ...	※	墨	
香具撰様調様	137	説131	建久之説 雑々	一重ハソレツノ事也ナベ量ヤキカシテ用	【香具】説58△, 書入16△	墨	
香具撰様調様	138	説132	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一サジ(木ハ桜也 香具スクウ也 寸法ハ)	【香具】説133△, 142△	墨・青	青の点
香具撰様調様	139	説133	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一桜ノサジ(木ハ是ハアトサキニサジアリ...	【香具】説88△, 132△, 142△	青	青の点
香具撰様調様	140	説134	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一桜ノサジ(香具スクウ也)	【香具】説143△, 144△	墨・青	青の点
香具撰様調様	141	説135	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一小筥(木ハチヤント云木也 スシホウハ)	【香具】説145△	墨・青	青の点
香具撰様調様	142	説136	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一食臼(食ツキノ時用 重三用 ニツ)	【香具】説152△	墨・青	青の点
香具撰様調様	143	説137	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一キネ(木ハ桜 ニツ 寸法ハ)	【香具】説150△	墨・青	青の点
香具撰様調様	144	説138	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一竹ノ箸(無別當)	【香具】説148△	墨・青	青の点
香具撰様調様	145	説139	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一重時シク紙(ハトリノ子ノ少ツキニフノリヲ...		墨・青	青の点
香具撰様調様	146	説140	黒之道具(同仕様 用様 寸法)	一貝香アブル紙竹ノアブリコナラハ善業カミニ枚...	【香具】説3△	墨	青の点
香具撰様調様	147	説141	黒物道具	一重物ノ箱(フルヒナニカ也)		墨	
香具撰様調様	148	説142	黒物道具	一桜ノサジ(四ツ 内二ツ蜜合ノ時スミスウイ)	【香具】説132△, 133△	墨	
香具撰様調様	149	説143	黒物道具	一桜ノサジ(小ツ中ニツ)	【香具】説134△, 144△	墨	
香具撰様調様	150	説144	黒物道具	一桜ノ大サシ(一ツ重カスウイ也)	【香具】説134△, 143△	墨	
香具撰様調様	151	説145	黒物道具	一小筥(ニツ 木ハチヤンノ木也カキ合ノ時用)	【香具】説135△	墨	
香具撰様調様	152	説146	黒物道具	一雑羽(二十)		墨	
香具撰様調様	153	説147	黒物道具	一竹ノヘラ(ニツ)		墨	
香具撰様調様	154	説148	黒物道具	一竹ノ箸(三ツ)	【香具】説138△	墨	
香具撰様調様	155	説149	黒物道具	一桜ノ箸(三ツ)		墨	
香具撰様調様	156	説150	黒物道具	一桜ノキネ(ニツ)	【香具】説137△	墨	
香具撰様調様	157	説151	黒物道具	一カナギネ(一ツ)		墨	
香具撰様調様	158	説152	黒物道具	一カナウス(ニツ)	【香具】説136△	墨	
香具撰様調様	159	説153	黒物道具	一香具ハカリ(ニツ)		墨	
香具撰様調様	160	説154	黒物道具	一(ウスキ)鳥子(三十枚 フノリ裏表ニヒキテ)		墨	
香具撰様調様	161	説155	黒物道具	一中高(十六枚裏表ニフノリヒキテ)		墨	
香具撰様調様	162	説156	黒物道具	一犬高(六枚 表裏ニフノリヒキテ)		墨	
香具撰様調様	163	説157	黒物道具	一美作カミ(素ツミ貝香ノ時イロロ)		墨	
香具撰様調様	164	説158	黒物道具	一翫刀(ニツ)		墨	
香具撰様調様	165	説159	黒物道具	一重業簾刀(六ツツ)		墨	
香具撰様調様	166	説160	黒物道具	一中薬研(ニツ)		墨	
香具撰様調様	167	説161	黒物道具	一犬薬研(ニツ)		墨	
香具撰様調様	168	説162	黒物道具	一磨香(五ツ スイセウ又ハ石)		墨	
香具撰様調様	169	説163	黒物道具	一磨香スリ茶碗(五ツ 内ニツ雑々重陸スリ)		墨	
香具撰様調様	170	説164	黒物道具	一カサヌルキノフルヒ(ニツ アラキココマカト)		墨	
香具撰様調様	171	説165	黒物道具	一フルヒハ泳(アラシ)鹿(ヨマカ)丁(少アラシ)...		墨	
香具撰様調様	172	説166	黒物道具	一貝蜜ノウス物ナヘ(カラ金大小ニツ)		墨	
香具撰様調様	173	説167	黒物道具	一ウス物ナヘ(カタク 一ツ)		墨	
香具撰様調様	174	説168	黒物道具	一エツノ小カタクチ(一ツ)		墨	
香具撰様調様	175	説169	黒物道具	一ウガイ茶碗ノ大サナル蜜ネリ茶碗(ニツ)		墨	
香具撰様調様	176	説170	黒物道具	一小茶碗(四ツ)		墨	
香具撰様調様	177	説171	黒物道具	一鉢(大ニツ中ニツ)		墨	
香具撰様調様	178	説172	黒物道具	一ポンポン(袋ノ毛 ニツ 毛ノヌケヌヤウニ...		墨	
香具撰様調様	179	説173	黒物道具	一貝香ノアフリコ(七ツ 赤金ノアミニテ)		墨	
香具撰様調様	180	説174	黒物道具	一句玉チナドノカキ茶ニツ 煎桜ノ小キ茶ニツ		墨	
香具撰様調様	181	方7	神路のおく	法皇動作・ふかひいて神らの奥をたづぬれば...	【万】方69	墨	

香具撰様調様	182	説175／書入1	説3頭欄	三()先二三反アラビテノチニ水ニ反ト...		黒	朱の丸
香具撰様調様	183	説176／書入2	説23以降頭欄	或説二占唐代ハ楠木ノ枯タル木ヲワリテキサミ用也	【上2】説12△【香具】書入34△	黒	
香具撰様調様	184	書入3	説30頭欄	調様	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	黒	
香具撰様調様	185	説177／書入4	説44以降頭欄	作甘葛ノ事四説一説ハツタノ葉ヲセンジテネル...		黒	
香具撰様調様	186	書入5	説47頭欄	三条公富公相伝ノ分	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	朱	
香具撰様調様	187	説178／書入6	説47頭欄	又一説如此水ニテ煎テノチセンジ又蜜ヲ...		朱	
香具撰様調様	188	説179／書入7	説47頭欄等	水ニテ煎時貝ニ両ニ付灰ヲ一兩ホド...		黒	
香具撰様調様	189	説180／書入8	説47頭欄	一薫物ハ第一射香ノ指様第一也...	【三西】説3	朱	
香具撰様調様	190	説181／書入9	説47頭欄	貝六十丸ホドナラバ薫ノ粉一兩半ホドモヨシ...		黒	
香具撰様調様	191	説182／書入10	説47頭欄	貝ハコシラヘテタナルホドヨシニ三年モ...		朱	
香具撰様調様	192	説183／書入11	説47脚欄	赤ハカラキアマキモミソクサクモニカウクサクモ...		黒	
香具撰様調様	193	説184／書入12	説48頭欄	冰●●●ミルニ焼亡ダギニナリタルスカリノ...		朱	
香具撰様調様	194	説185／書入13	説48頭欄等	アマリアマキ包モアシトチシツカリトシタルガヨキ也...		黒	
香具撰様調様	195	説186／書入14	説48頭欄	ヌアマキ沈ハアリシトホト●(ヨリ)スカリナドニ...		黒	
香具撰様調様	196	説187／書入15	説49頭欄	毛トカワトラヨクヨリステスルベシ	【薫上】説9△【薫合】説30△	朱	
香具撰様調様	197	説188／書入16	説58頭欄	薫ハ蜜ノザノ粉ノ酒中ヲコソゲ()也...	【香具】説58△、131△	朱	
香具撰様調様	198	説189／書入17	説60頭欄	練タル蜜モ越年テモソコナズバ用テ不苦		朱	
香具撰様調様	199	説190／書入18	説60脚欄	又沈ハウツカリトシタルタキタキヲフリノ...		朱	
香具撰様調様	200	説191／書入19	説60頭欄	アハノ皆ニナルマデ()		朱	
香具撰様調様	201	書入20	説61頭欄	三条公富公相伝	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	朱	
香具撰様調様	202	説192／書入21	説67頭欄	香具トモ粉ニシテ蜜ニ合テ一色ツト		朱	
香具撰様調様	203	説193／書入22	説67頭欄	其香ヲタキテヨクキムテキニシリテタキテ...		朱	
香具撰様調様	204	書入23	説78頭欄	三条公富公相伝ノ分	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	朱	
香具撰様調様	205	説194／書入24	説80頭欄	夏アハスルハアツキニヨリ腫子ヲタテズニ...		黒	
香具撰様調様	206	説195／書入25	説80頭欄	此二説者トモニ色ニアハセマゼタルガ...		黒	青の点
香具撰様調様	207	説196／書入26	説80頭欄	菊花取重ノ事 動作 沈三分 薫皆 貝皆...	【薫上】説27△【万方】説40△	黒	墨の絵記号
香具撰様調様	208	説197／書入27	説80頭欄	三条家ノ流ニハ麝香一席半分合テマセテ...		黒	
香具撰様調様	209	説198／書入28	説80・81頭欄	云両四両ニ両合知此(図)薫ハカウシ奈ハ...		黒	図に青の点
香具撰様調様	210	説199／書入29	説81頭欄	三両合●(ヨリ)下同上(図)		黒	図に青の点
香具撰様調様	211	説200／書入30	説81・82・83頭欄等	中説云沈トヨノ粉ハカリナニテ沈トマジラネト...		青	
香具撰様調様	212	書入31	説84頭欄	三条公富公相伝ノ分	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	朱	
香具撰様調様	213	説201／書入32	説84頭欄	今案ノ説(絵号)赤沈ヲ半分分テヒロゲ...		黒	墨の絵記号
香具撰様調様	214	説202／書入33	説84・85・86頭欄	(絵記号)又一説先沈ハアセズシテ...		黒	墨の絵記号
香具撰様調様	215	説203／書入34	説87頭欄	雄ノ薫物ニ口伝ノ事 練様ニ云薫ハ粉合ノトキ...	【上2】説12△【薫上】説14△【香具】説83△、93△、書入△△【万】書入10△	朱	
香具撰様調様	216	説204／書入35	説87・88頭欄等	又沈トハ二色ヨク合テノチ...		朱	朱の点
香具撰様調様	217	書入36	説89頭欄	(図)		黒	
香具撰様調様	218	説205／書入37	説90頭欄	香夏ハ色付サジニミスキイ半秋冬ハスキイ...		黒	
香具撰様調様	219	説206／書入38	説90—94頭欄等	蜜ハネリテアヒダノアルハソノマト入テ...		青	
香具撰様調様	220	説207／書入39	説94・95頭欄	蜜ハ少入スギテシキホドナルガヨシ...		青	
香具撰様調様	221	書入40	説96頭欄	三条公富公相伝ノ分	(本文の表題として頭欄余白に記入の文言)	朱	
香具撰様調様	222	説208／書入41	方1頭欄	コレハ一兩ハ四匁 一分ハ一匁...	【万】書入17△	黒	
香具撰様調様	223	説209／書入42	説114頭欄	ナニトモトモニニホニニ出候時大方ハ...		黒	朱の丸
香具撰様調様	224	説210／書入43	説155・156頭欄等	此道具トモ篇ニ入テヨサソナルモノハ篇ヲスル事		黒	



※ 鎌合時代以前の書写と伝わる秘伝書に、薫物一般の具材として塩を入れる説は確認できない。「建久之説」の依拠資料は建久年間の書写者識語の記載される『焼物調合法』等の秘伝書と見られるが、直接参照されたのは、それ以降の時代の説を加増された比較的新しい時代の諸本であったか。

香具撰様調様	記述 全224※1	内・本文説174	本文方7	書入説36	書入方0	計
	同類文掲載先	同類文数(重複あり。同一書中の同類文は除く※2)				
	【香秘】	4	0	0		4
	【焼物】	7	0	0		7
	【薫・書陵】	2	0	0		2
	【故書】	10	0	0		10
	【黒秘】	5	0	0		5
	【上2】	0	0	2		2
	【秘方】	2	0	0		2
	【三西】	11	0	1		12
	【薫合】	40	0	1		41
	【薫上】	7	0	3		10
	【香具】	52	0	3		55
	【万】	2	4	3		9
	【薫・乾々】	1	0	0		1

※1 記述全224点中、書入に説又は方に該当しない記述7点が含まれる。

※2 記述全224点中108点に対して同類方を確認。他書の同類文数は計160点。

【表三】『万方』外題及び本文及び頭書等書入における筆跡対照表
以下、諸書の現状における外題・本文・頭書等に字・語の用例の無い場合は、表中の当該欄に斜線を付した。

字・語	外題	本文		頭書等書入
萬		 (19 丁裏)  (表紙裏)		 (29 丁表)  (1 丁裏)
方				

【表四】『香具撰様調様』及び『万方』本文及び頭書書入における筆跡対照表

侍従	梅花	黒方	薫物	香具	字・語	
					本文	香具撰様調様
 (24 丁裏)	 (7 丁裏)	 (27 丁表)	 (25 丁裏)	 (1 丁表)	本文	香具撰様調様
	 (24 丁裏)	 (挿紙 2)	 (26 丁表)	 (21 丁表)	頭書等書入	
	 (11 丁表)	 (12 丁表)	 (1 丁表)	 (27 丁表)	本文	
	 (11 丁裏)	 (10 丁裏)	 (19 丁裏)	 (11 丁表)	頭書等書入	

【表五】『万方』に記載された薫物「黒方」についての言説における他書の同類文（参考）

通番		薫物書の同類文	菊亭文庫所蔵薫物書の同類文	【参考】源氏物語の類型表現
1	四季通用也祝言之時用也	四季通用祝言之時用之（薫物・黒方秘方、宮内庁書陵部）	四季通用祝言之時も用之（薫物秘蔵抄、黒方方110）	
2	丁薫ツカサトル也			
3	総持松露冬生工コホホシキツカサトルカサトル也	冬運來時深雪草白不被封寒（薫集類抄、国立国会図書館蔵） ふゆさへこほろしきふかくそのかほし山あひ冬に封せられす心にくしつかなるにほひことなり（中略）うつこころにいてしつかなるにほひの事也（焼物調合法、蓬左文庫） 急やう松露（たきものゝほう、高松宮本） 黒方は冬さへくそへたるにかふかくあたまがなるゆへ（薫物方、宮内庁書陵部）	冬さへこほろしきふかくそのかほし山あひ（薫物方、黒方） 冬生工コホホシキツカサトルカサトル也（薫物秘蔵抄、説5）	
4	薫物ノ中ニ一殊ニ本薫ノ方也何ノ包共知シテ如ク然王膳王膳ニ生シコホホシ自金ノ古ハ膳直名ニ付タリ何ノ中物ノ包ナシハ本薫ノ方也カサトル能ク分理スベシ薫方ト云心何共知シ又心也私云五ノ字ノ心ニ子心傳ヘシ薫方ニハ薫ノ字ヲ銘ニカハスガノ字ヲ出ヘシ是故築也	侍從梅花をかいう香ひれども薫物ともおほえす少しなりとも黒方を用ゐるべきなり（薫集類抄、四条宮黒方説19） あるかいほく侍從梅花をかいくかほりれどもたきものともおほえす少しなりとも黒方をもちいべき也（焼物調合法、蓬左文庫） 黒方 薫物ノ中ニ一殊ニ本薫ノ方也何ノ包共知シテ如ク然王膳王膳ニ生シコホホシ自金ノ古ハ膳直名ニ付タリ何ノ中物ノ包ナシハ本薫ノ方也カサトル能ク分理スベシ薫方ト云心ハ何トぞ知シ又心也私云五ノ字ノ心ニ子心傳ヘシ歟後十輔院写書（後水尾天皇薫物調合御覽書、東山御文庫） 黒方ニハ薫ノ字ヲカハス銘ニカハス方ノ字書ヲ云ヘシ此故築也云々 同写書（後水尾天皇薫物調合御覽書、東山御文庫）		
5	或説ニ黒方ハ逆ノ生ザシコホホシコホホシ生カサトルヨシモカサトル王膳王膳ニ生シタルガカサトル生也薫方ハコホホシカサトルカサトルカサトルカサトルヘシ	ふゆさへこほろしきふかくそのかほりあり冬に封せられす心にくしつかなるにほひことなり（中略）うつこころにいてしつかなるにほひの事也（焼物調合法、蓬左文庫）	・ふるひはこまかななるもあきき物によりてなるかたあるへきにや梅花はあらく薫かなはこまかななるゆへそのゆへは梅花ははなやかにいまめかしうはやきしらひてあはすへきものなればはるひもすこしあらかるへし薫方はものふかくおたやかなるべしとみゆればはるひこまかななるきにやこと方どもこれになぞらへてはからひわかつへしたしおほうほこまかなるをさきと侍へし（薫物故事、諸事説3）	・ふるひはこまかななるもあきき物によりてなるかたあるへきにや梅花はあらく薫かなはこまかななるゆへそのゆへは梅花ははなやかにいまめかしうはやきしらひてあはすへきものなればはるひもすこしあらかるへし薫方はものふかくおたやかなるべしとみゆればはるひこまかななるきにやこと方どもこれになぞらへてはからひわかつへしたしおほうほこまかなるをさきと侍へし（薫物故事、諸事説3）
6	富士ノ方ハ黒方ニ生隠（通隠也）入タル者也ニ而ニ分合ナラハハ朱（ワロク）入也	富士は雪の黒方に生隠を加へたる物也とて陽光院ノ仰有シ 同写書（後水尾天皇薫物調合御覽書、東山御文庫）	一 ちんのきさみほとくまほまこまかなる上（薫物方、黒方説） 勅筆巻物：一ちんのきさみほとくまほまこまかなる上（薫物秘蔵抄、説10） ―― 逆まきまきやうか加黒方説ノヒキウツ不蓋（薫物秘蔵抄、説37） 勅方：此方黒方ト同：逆ノまきまハ黒方ノコトカ説ノヒキウツ不蓋（万方、説14） 黒方者 一逆 二員 三薫 四白 五丁 六壽 或説ニ黒方ハ蓋蓋すきたるかうはし（薫物合様、菊亭文庫） 生隠ト云王返隠ノ事也（香具撰持調様、菊亭文庫、説57）	

凡例

・影印

- 一、専修大学図書館菊亭文庫所蔵「萬方」(よろつのほう)(ヨロヅノホウ)、菊亭文庫第二函第一一八号、写本、和装袋綴、大本、一冊)及び「香具撰様調様」(かうくえらひやうととのへやう(コウグエラビヨウトトノエヨウ)、菊亭文庫第二函第一一九号、写本、和装袋綴、大本、一冊)の全文を影印した。

- 一、右の書誌は『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』(平成七年)による。ただし、書目の読みは本稿「解題」による。

- 一、影印は紙面を上下二段に分割した内の上段に配した。
- 一、影印には、専修大学図書館により提供されたカラー写真を用いた。

・翻刻

- 一、専修大学図書館菊亭文庫所蔵「萬方」(よろつのほう)(ヨロヅノホウ)、菊亭文庫第二函第一一八号、写本、和装袋綴、大本、一冊)及び「香具撰様調様」(かうくえら

ひやうととのへやう(コウグエラビヨウトトノエヨウ)、菊亭文庫第二函第一一九号、写本、和装袋綴、大本、一冊)の全文を翻刻した。

- 一、右の書誌は『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』(平成七年)による。ただし、書目の読みは本稿「解題」による。

- 一、翻刻は紙面を上下二段に分割した内の下段に配した。
- 一、本文の字配り、行配りは底本のままとした。
- 一、本文の文字の大きさ及び配置については、可能な限り底本のまま翻刻した。

- 一、表紙、裏表紙を含む各紙面の翻刻末尾には、次の要領でその位置を示した。

(例) 表紙 Ⅱ 「(表紙)

本文第一丁の表 Ⅱ 「(一丁表)

- 一、底本の古体・異体・略体字は適宜正字体ないし通字体に改めた。

- 一、底本の「ふ」は「ヨリ」に改めた。

- 一、底本の変体仮名は、すべて通行の書体に改めた。

- 一、仮名遣いの「ん」「む」の表記は底本のままとした。

- 一、反復記号「ゝ」「く」は底本のままとした。

- 一、墨減による難読箇所は一文字ごとに「●」と表記した。

一、底本の記号の内、点及び丸はそれぞれが記載される箇所
所に次のように記した。

・朱筆による丸 〓 「朱ノ丸」

・墨筆による丸 〓 「墨ノ丸」

・主筆による点 〓 「朱ノ点」

・青筆による点 〓 「青ノ点」

・墨筆による点 〓 「墨ノ点」

一、丸に格子の図は「図」と、点及び丸を除く記号は「絵
記号」と称し、それぞれが記載される箇所に「図」及び
「絵記号」と記した。

一、翻刻中の文字の読みやすさに配慮する目的から、各種
の線（取り消し線、傍線、曲線）は翻刻中に描画しな
かった。



(専修大学図書館菊亭文庫蔵書票) (貼紙片に墨書「央」)

萬方 (絵入書き題簽)

「 (表紙)

薰衣香秘法トアリ

藿五分 甘三分 白_二分_一 丁三分 麝少
右細末シテ調合セテ常但加木香吉山タチハナノ若ミトリヲカ
ケボシニベ三分加香ヲ久敷ウシナワサル也可秘也
藿香三分ナラバ麝香ハ二朱ホド入ヘシ

黒方
沈二両二分 丁二分 三朱
白二分 二朱
貝一分 二朱
麝一分 或三朱
藿香三分ナラバ麝香ハ二朱ホド入ヘシ

左
右ノ方悪ハ墨ノ点 善ニハ朱ノ点 合様ノ所モ同
常ニ合分ニハ朱ノ丸 不時ニ合分ニハ花ノ丸
薰物方秘方トアリ名不知

沈一両 白半両 龍脑一朱 貝半兩 丁半両 薰少

透頂香

龍腦一朱 麝香一朱 阿仙藥三分 百草茶一包
右甘草ヲ二分刻テヨク煎ベカスヲ捨テ汁ヲネハクトナル
程練テ丸スイカニモカタクアワスル也少モユルスレバ悪シ

薰衣香秘法トアリ

方 1
説 1

藿五分 甘三分 白_二分_一 丁三分 麝少
右細末シテ調合セテ常但加木香吉山タチハナノ若ミトリヲカ
ケボシニベ三分加香ヲ久敷ウシナワサル也可秘也
藿香三分ナラバ麝香ハ二朱ホド入ヘシ

方 2

(繪寫)
黒方
沈二両二分 丁二分 三朱
白二分 二朱
貝一分 二朱
麝一分 或三朱
本方一両二分也
本方二分也

説 2

左
右ノ方悪分ハ墨ノ点 善ニハ朱ノ点 合様ノ所モ同
常ニ合分ニハ朱ノ丸 不時ニ合分ニハ花ノ丸
薰物方秘方トアリ名不知

方 3

沈一両 白半両 生腦一朱 甘一朱 貝半兩 丁半両 薰少

方 4

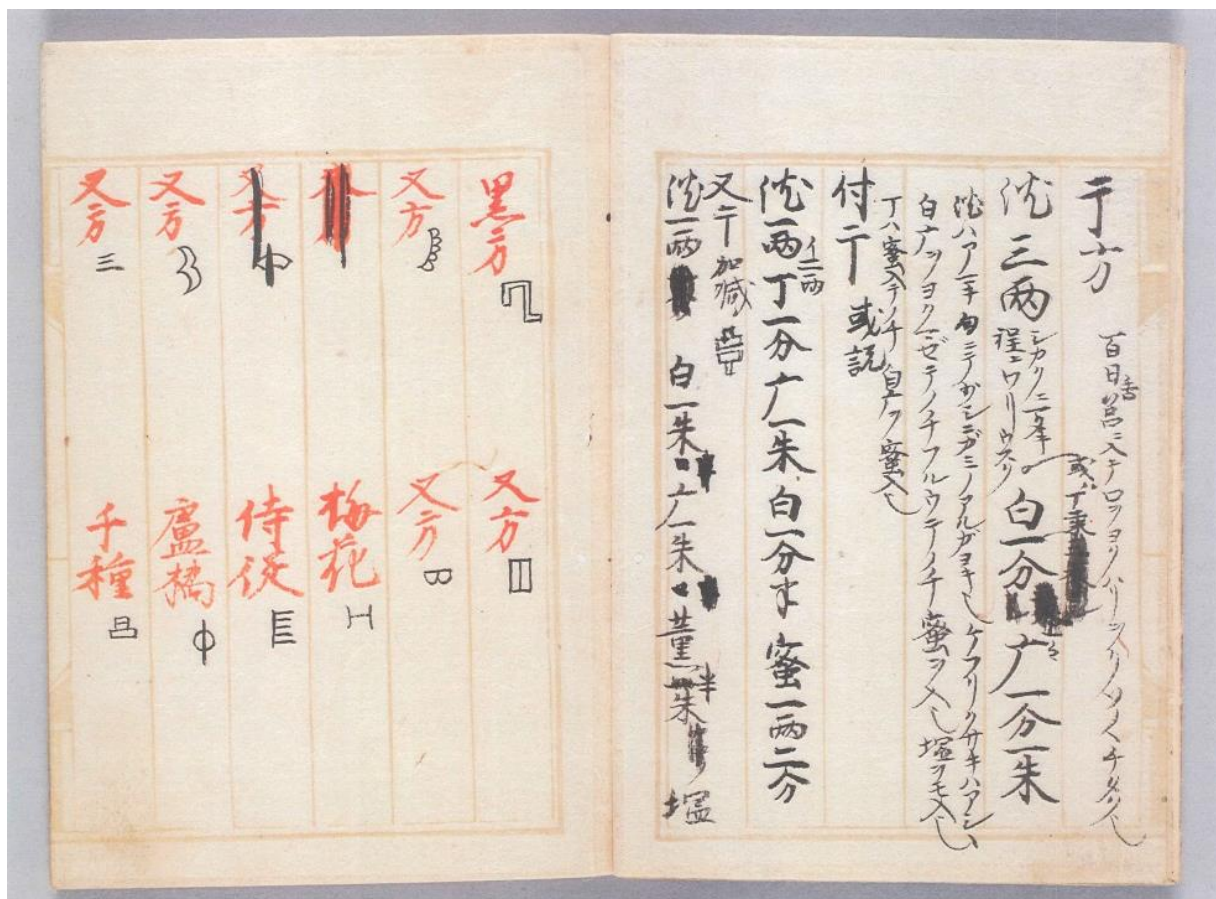
透頂香
龍腦_{ヨクスル} 一朱 麝香_{ヨクスル} 一朱 阿仙藥_{ヨクスル} 三分 百草_{茶一包}

説 3

右甘草ヲ二分刻テヨク煎ベカスヲ捨テ汁ヲネハクトナル
程練テ丸スイカニモカタクアワスル也少モユルスレバ悪シ

「(見返し)」

「(二丁才)」



説4

于方 百日^香 筥二入テロヲヨクハリヲクソノチタク也

或ハ丁ニ朱三朱ヨシ

方5

沈三兩^{シカクニ一タキ} 白一分^{三朱上々} 麝一分二朱^{程ニワリウス}

説5

沈ハアマキ匂ニテ少シニガミノアルガヨキ也ケフリクサキハアシ、
白麝ヲヨクマゼテノチフルウテノチ蜜ヲ入也塩ヲモ入也
丁ハ蜜入テノチ白麝ヲ蜜入也
付テ 或説

方6

沈一兩^{イニ兩} 丁一分 麝一朱 白一分半 蜜一兩二分

又于加減^(繪記号)

方7

沈一兩二朱 白一朱々^半 麝一朱々^半 薰一朱^{加塩ヲ} 塩

「(二丁ウ)

黒方^ㄥ

又方^ㄥ

又方^(繪記号)

又方^ㄥ

又方^ㄥ

又方^(繪記号)

梅花^ㄥ

梅花^ㄥ

梅花^(繪記号)

侍従^ㄥ

侍従^ㄥ

侍従^(繪記号)

盧橘^ㄥ

盧橘^ㄥ

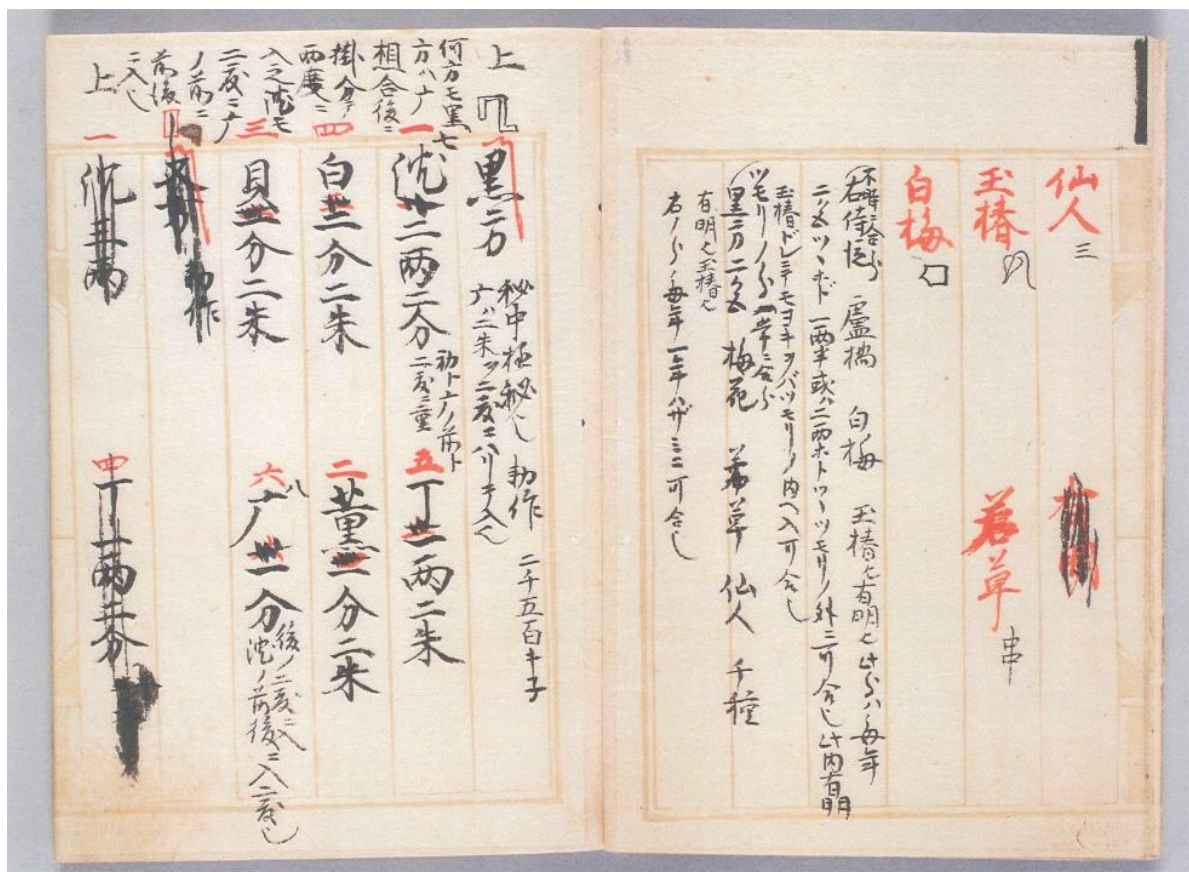
盧橘^(繪記号)

千種^ㄥ

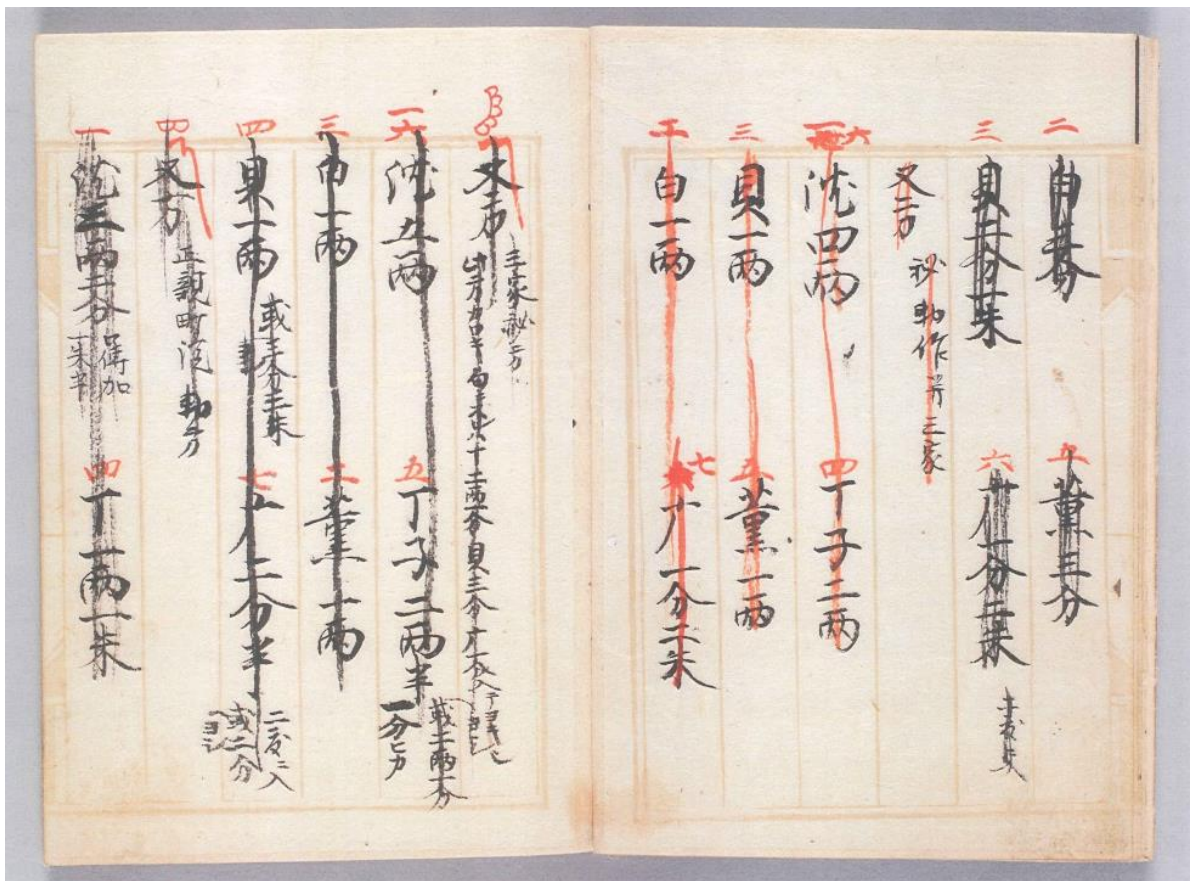
千種^ㄥ

千種^(繪記号)

「(二丁オ)



<p>仙人 (繪記号)</p> <p>有明 (繪記号)</p>	<p>玉椿 (繪記号)</p> <p>若草 (繪記号)</p>	<p>白梅 (繪記号)</p>	<p>不時ニ合分</p> <p>右侍從 盧橘 白梅 玉椿歟有明歟此分ハ毎年</p>	<p>二色ツヽホド 一両半或ハ二両ホトツヽツモリノ外ニ可合也此内有明</p>	<p>玉椿ドレニテモヨキヲバツモリノ内へ入可合也</p>	<p>ツモリノ分ハ常ニ合分</p>	<p>黒方二色 梅花 若草 仙人 千種</p>	<p>有明歟玉椿歟</p>	<p>右ノ分毎年一年ハザミニ可合也</p>	<p>説 8</p> <p>上 (繪記号) 黒方 (朱ノ点)</p> <p>秘中極秘也 勅作 二千五百キネ</p> <p>磨ハ二朱ヲ二度ニハリテ入也</p> <p>一 沈一二両二分 初ト磨ノ前ト 二度ニ重</p> <p>五 丁五一両二朱</p>	<p>方 8</p> <p>四 白三二分二朱</p> <p>二 薰四一分二朱</p> <p>三 貝二一分二朱</p> <p>六 麝六一分 後ノ二度ニ入 沈ノ前後ニ入二度也</p>	<p>方 9</p> <p>上 (繪記号) 又方 勅作</p> <p>一 沈三両</p> <p>四 丁一両二分</p>	<p>「(三丁才)」</p>
---------------------------------	---------------------------------	-----------------	---	--	------------------------------	-------------------	-------------------------	---------------	-----------------------	--	---	---	----------------



方 10

二 白三分

三 貝二分一朱

又方 秘勅作并三家

五 薰三分

六 麝一分二朱 二度二入

七六 沈四兩

四 丁子二兩

三 貝一兩

五 薰一兩

二 白一兩

六七 麝一分二朱

說 9

(繪寫) 又方 三家秘方
此方カロキ匂ニスレハ十二兩一分貝三分麝一分入テヨキ也

方 11

一六 沈五兩

五 丁子二兩半 或二兩一分ヒカ

三 白一兩

二 薰一兩

四 貝一兩 或二分二朱

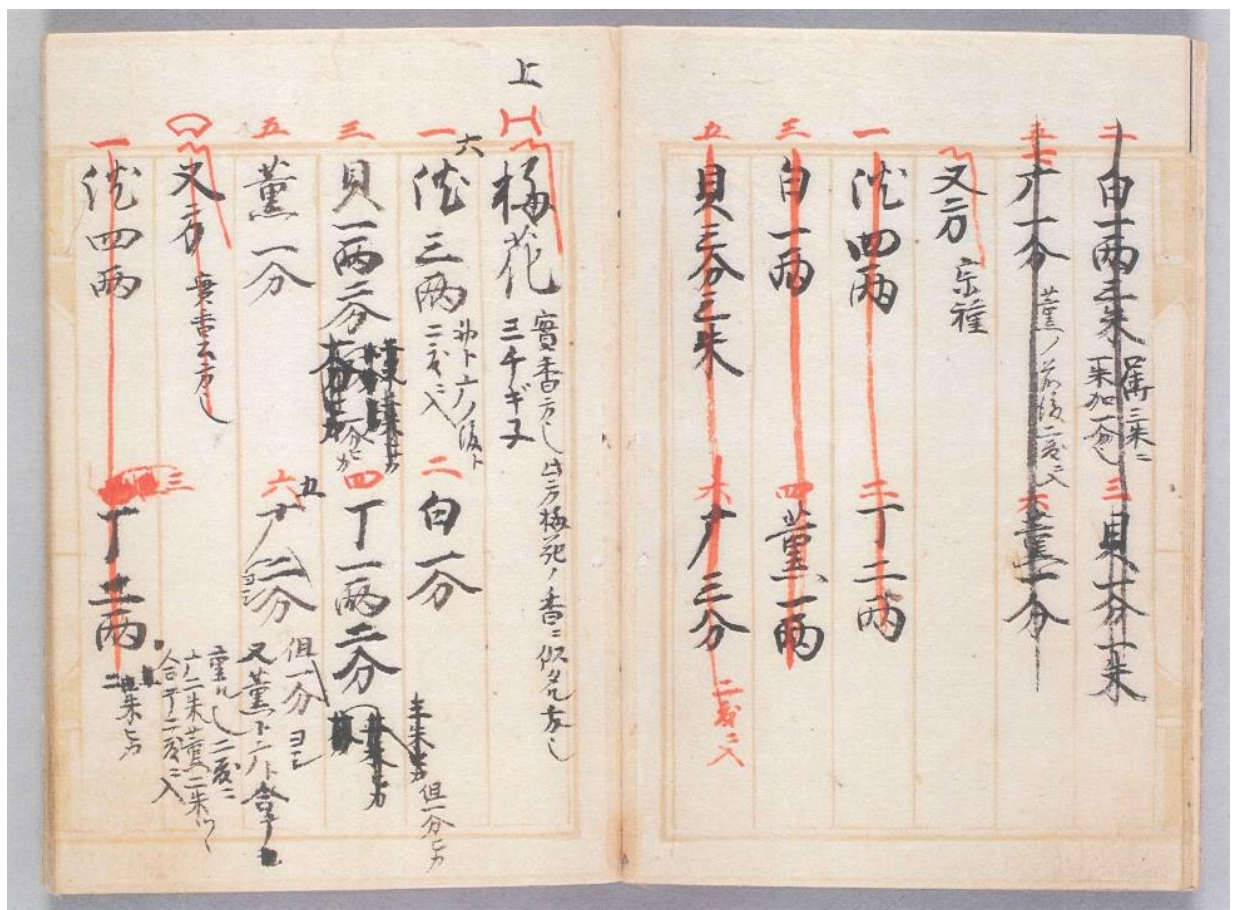
七 麝二分半 二度二入 或二分

(繪寫) 又方 正親町院勅方

方 12

一 沈三兩二分 口傳加 一朱半

四 丁一兩一朱



方 15

説 11
(他一分云々)

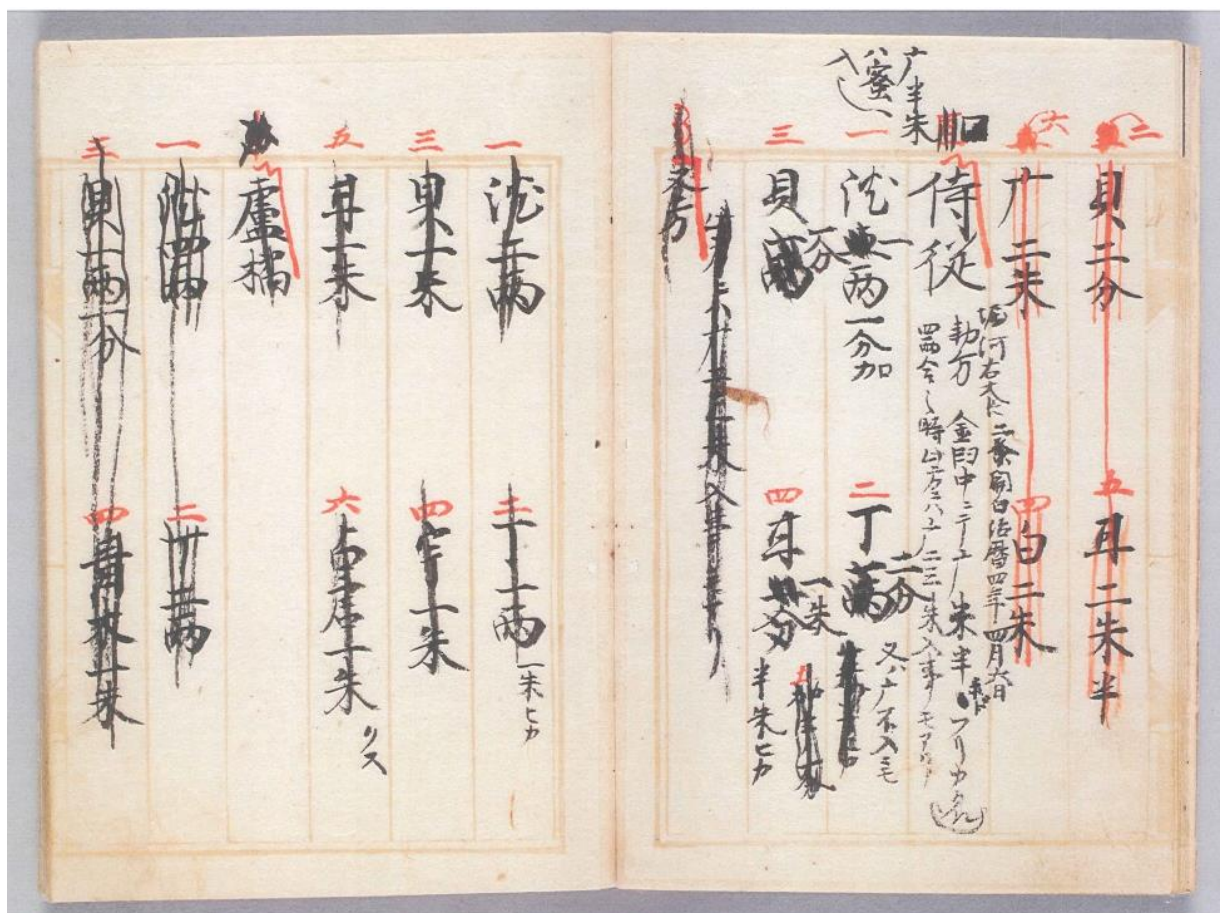
方 14

説 10

方 13

「(五丁才)

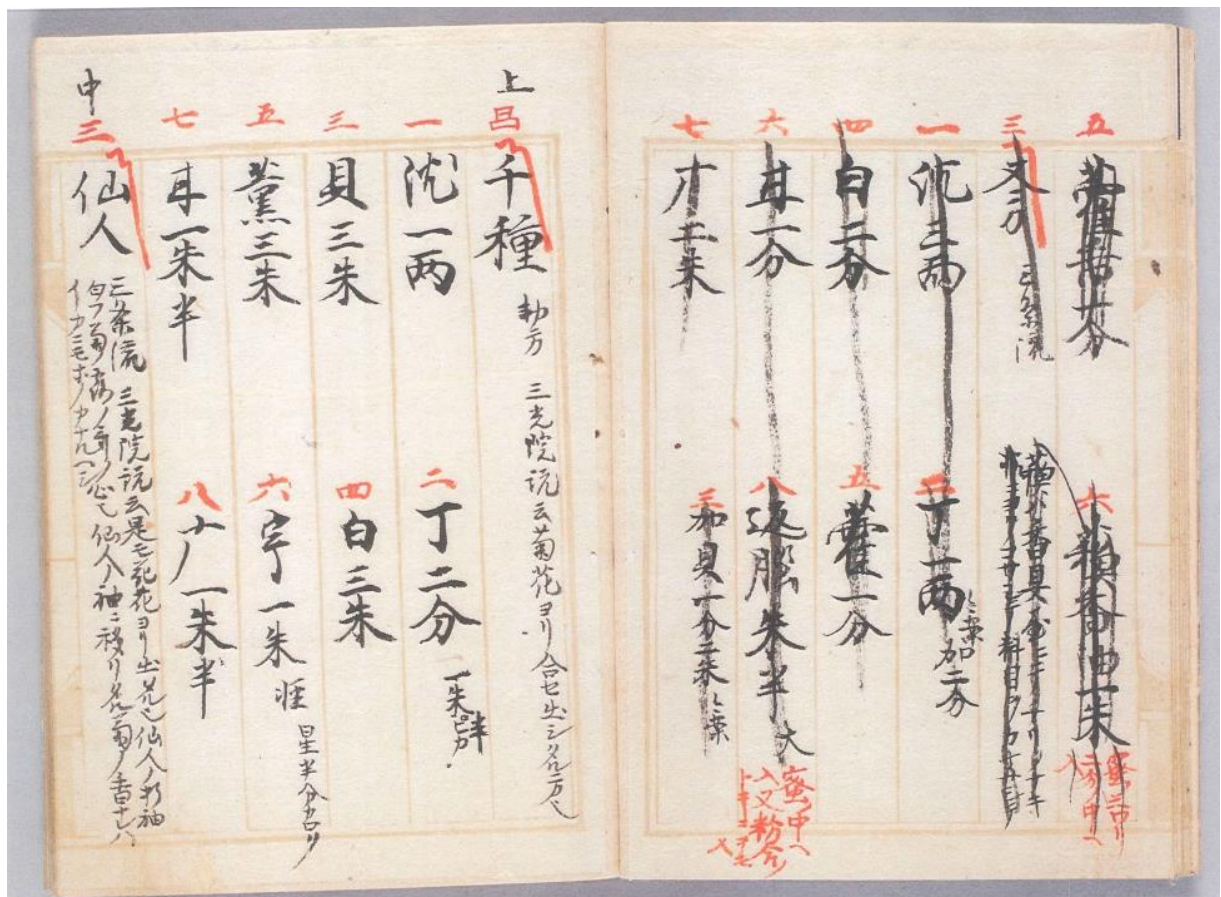
「(四丁ウ)



方 18	三 貝一両一分	四 青木一朱
	一 沈四両	二 丁二両
	(繪記号) 盧橘 (朱ノ点)	
五 廿一朱	六 占唐一朱 クヌ	
三 貝一朱	四 字一朱	
方 17	一 沈二両	二 丁一両 一朱ヒカ
方 16	(書入2) 一 沈五両一分加 二 丁一両 二一分 又ハ磨不入ニモ 一ニ●●ヒカ 五加磨一分 半朱ヒカ	
説 12	(繪記号) 侍従 (朱ノ点) 堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日 勅方 金白中ニテ磨朱半ホドフリカク (繪記号) 四両合之時此方ニハ磨三朱入事モアリ (繪記号) 又方 此方ニハ磨三朱入事モアリ	三 貝二分 五 廿二朱半 四 白二朱 六 磨二朱

「(六丁才)

「(五丁ウ)



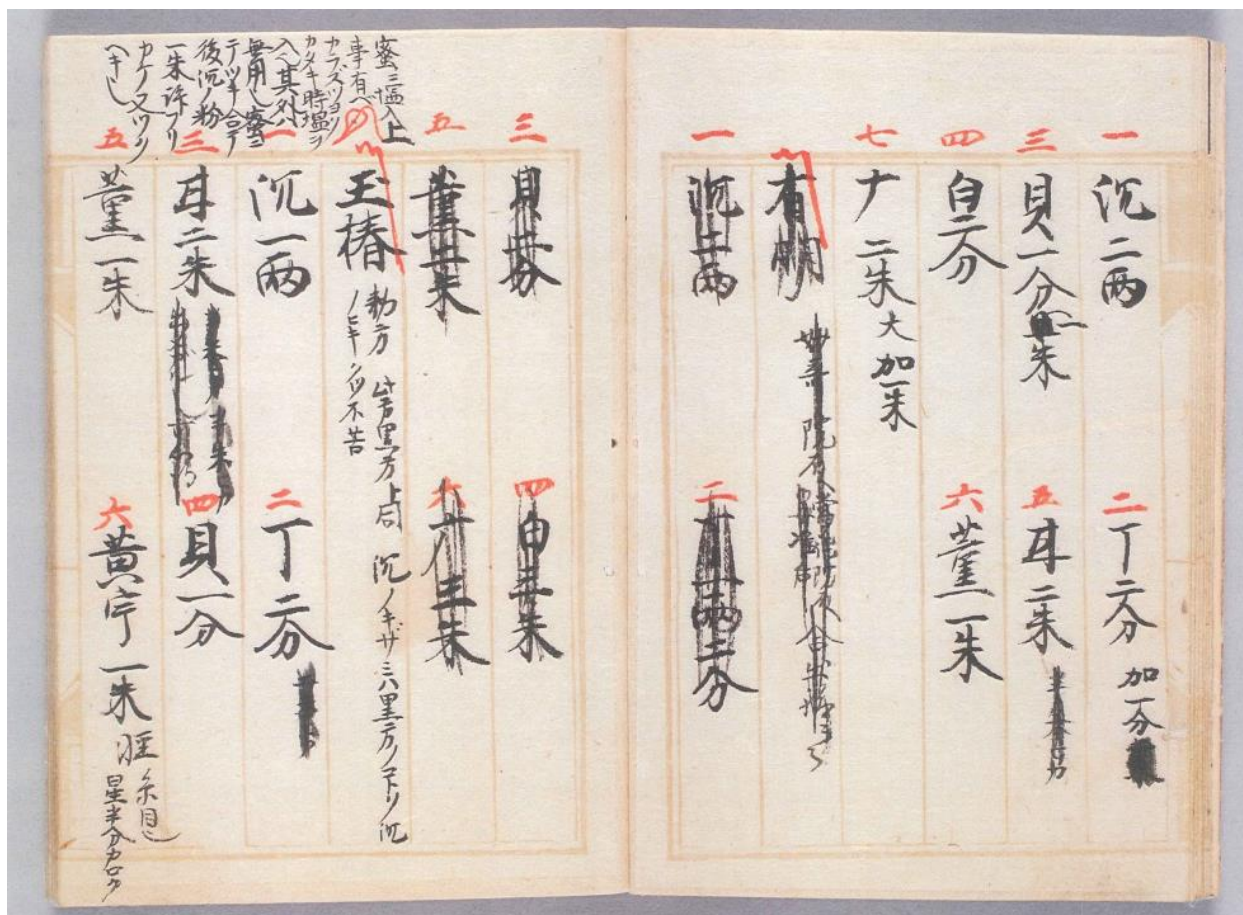
方 19
説 13

方 20

五 藿香一分
六 藿香油一朱 蜜三ツリ 二分ノ中へ入
三 又方 三条流
一 沈三両
二 丁一両 今案 加二分
四 白二分
五 藿一分
六 返腦朱半 大 蜜ノ中へ 入又粉合ノ トキニテモ 入
三 加貝一分二朱 今案
七 麝二朱
六 廿一分
四 白二分
一 沈三両
二 丁二分 一朱。ヒカ
三 貝三朱
四 白三朱
五 薰三朱
六 宇一朱 輕 星半分カロク
七 廿一朱半
八 麝一朱半
中 (繪記) 仙人 三条流 三光院説云是モ花ヲヨリ出タル也仙人ノ折袖 匂フ菊ノ露ノ心也仙人ノ袖ニ移リタル菊ノ香ナレハ イカニモホノカナルヘシ
上 (繪記) 千種 勅方 三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也

「(六丁ウ)

「(七丁才)



方 21

一 沈二両

二 丁二分 加一分一朱

三 貝一分二朱

三 廿二朱 半朱ヒカ

四 白二分

六 薰一朱

七 麝二朱大加一朱

(朱ノ点)
有明 妙善院殿 常徳院殿 合出給云々 御母准后

方 22

一 沈二両

二 丁一両二分

説 14

上

(繪寫)

玉椿

勅方 此方黒方ト同 沈ノキザミハ黒方ノコトク 沈ノヒキツ不苦

三 貝二分

四 白三朱

五 薰二朱

六 麝三朱

方 23

(書入 3)

一 沈一両

二 丁二分 一朱ヒカ

三 廿二朱

半朱ヒカ半朱ヒカ 出タガル也可心得

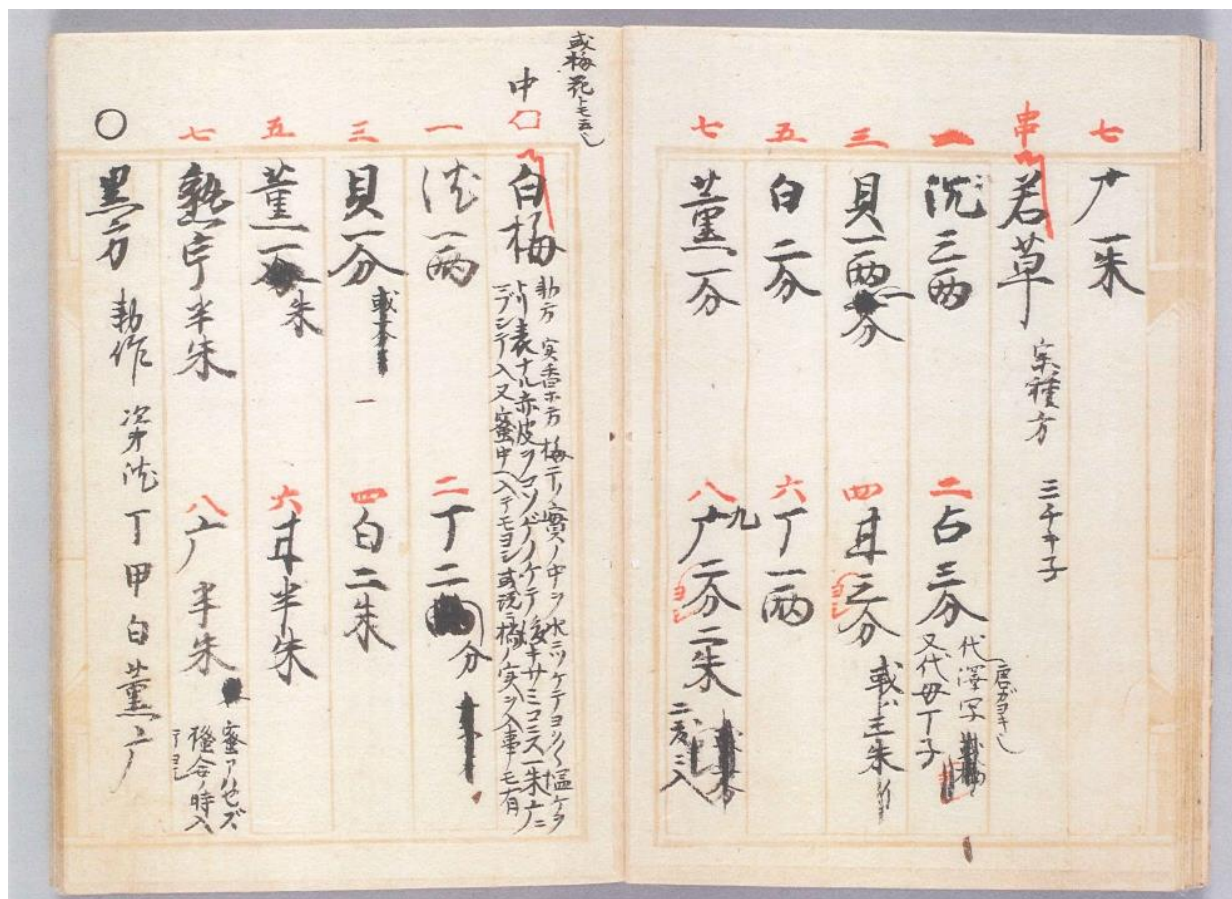
四 貝一分

五 薰一朱

六 黄字一朱 輕 糸目也 星半分カロク

「(七丁ウ)

「(八丁才)



説
17

(墨丸) 黒方 勅作 次第沈丁甲白麝

七 熟字半朱

八 麝半朱
蜜アハセズ
極合ノ時入
テヨシ

五 薫一分 朱

六 甘半朱

三 貝一分 或一分ヒカ

四 白二朱

一 沈一両

二 丁二両分
一朱ヒカ

方
25

説
16

(書入 4)

中
(繪記号) 白梅

勅方 實香等方 梅干ノ實ノ中ヲ水ニツケテヨクく塩ケラ
トリ表ナル赤皮ヲコソゲノケテ後キサミコニス一朱麝ニ
マフシテ入又蜜中へ入テモヨシ或説二橘ノ実ヲ入事モ有

七 薫一分

八 麝二分二朱
或二分
ヨシ
二度ニ入

五 白二分

六 丁一両

三 貝一両二分

四 甘三分
或ハ三朱イ
ヨシ

一 沈三両

二 占三分
代澤写或楠ヨシ
又代母丁子

方
24

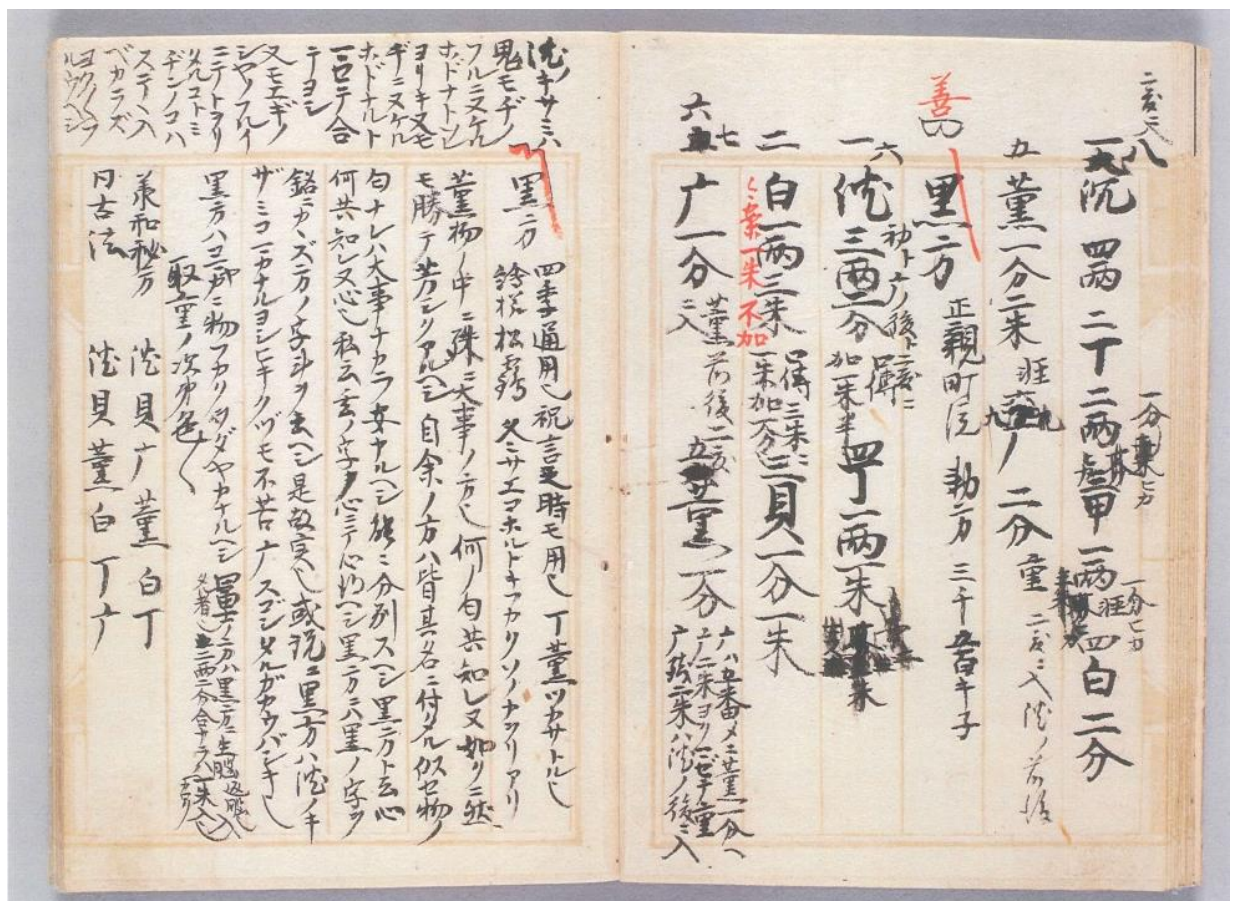
説
15

(繪記号) 若草 宗種方 三千キネ

七 麝一朱

「(九丁才)

「(八丁ウ)



説 21
説 22
説 23

説 19
説 20

方 27
説 18

方 26

(書入 6)

(書入 5)

承和秘方
同古法
沈 貝
麝 白
麝 丁

銘ニカズ方ノ字斗ヲ書ヘシ是故実也或説ニ黒方ハ沈ノキ
ザミコマカナルヨシヒキクヅモ不苦麝スゴシタルガカウバシキ也
黒方ハコマヤカニ物フカクヲダヤカナルヘシ
富士ノ方ハ黒方ニ生脳返脳也入
タル者也●二両二分合ナラハ一朱入也
取重ノ次第色く

黒方 四季通用也祝言之時モ用也丁薫ツカサトル也
繪様松露冬サエコホルトキフカクソノカラリアリ
薫物ノ中ニ殊ニ大事ノ方也何ノ句共知レヌ如クニ然
モ勝テ芳シクアルヘシ自余ノ方ハ皆其名ニ付タル似セ物ノ
句ナレハ大事ナカラ安カルヘシ能々分別スヘシ黒方ト云心
何共知レヌ心也私云玄ノ字ノ心ニテ心得ヘシ黒方ニハ黒ノ字ヲ
銘ニカズ方ノ字斗ヲ書ヘシ是故実也或説ニ黒方ハ沈ノキ
ザミコマカナルヨシヒキクヅモ不苦麝スゴシタルガカウバシキ也

六五 麝一分
二入
五六 薫一分
麝ハ五番メニ薫一分ヘ
麝ニ朱ヨクマゼテ重
麝ニ朱ハ沈ノ後ニ入

二白一兩三朱
口傳ニ朱ニ
一朱加一分也

一 沈三兩二分
初ト麝ノ後ト二度ニ
口傳
加一朱半
四丁一兩一朱一分二朱

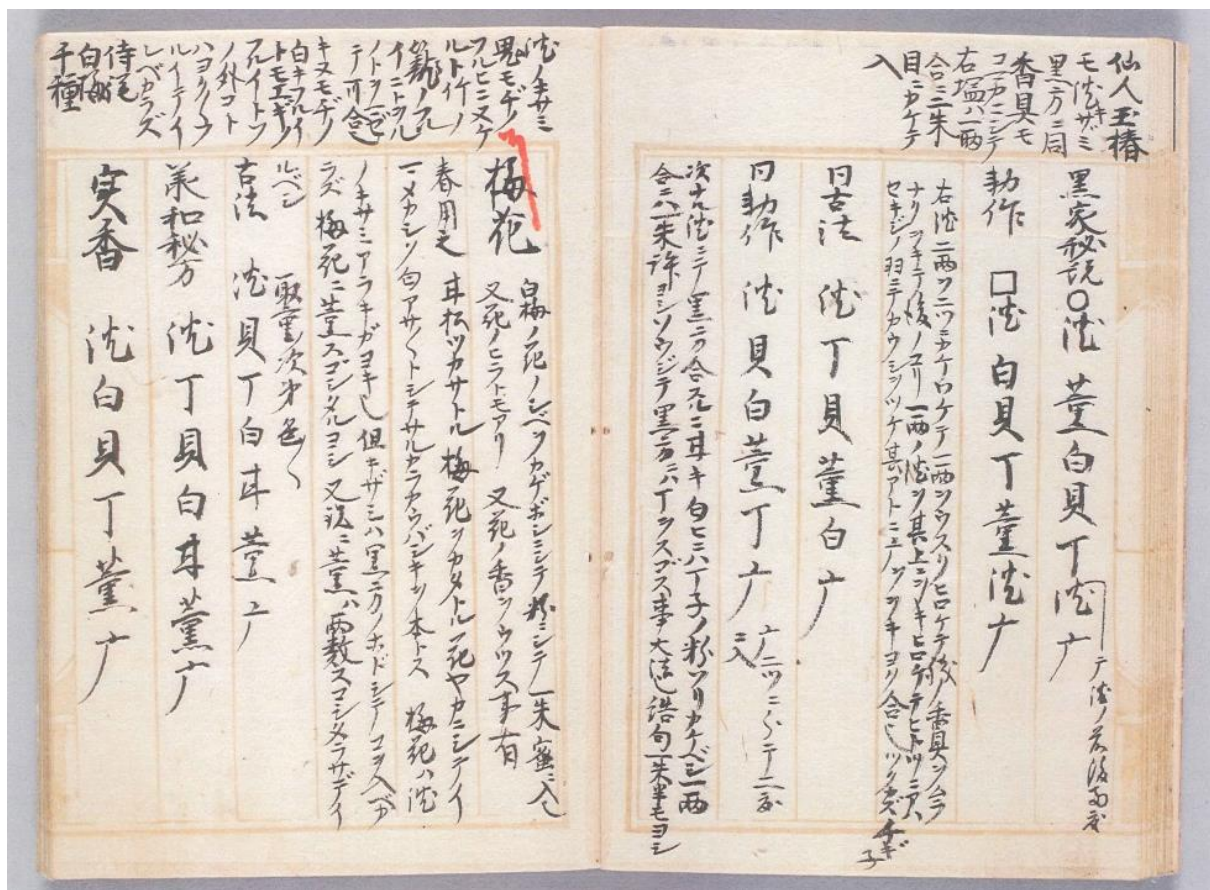
善 繪寫 黒方
正親町院 勅方 三千九百キネ

五 薫一分二朱 輕
六二 麝二分 重 二度ニ入沈ノ前後

一九 沈四兩 二丁二兩 一分
三 甲一兩 輕 一分ヒカ
四 白二分 一分ヒカ

「(一〇丁才)

「(九丁ウ)



説 33
説 32
説 31

古法 沈 貝 丁 白 甘 薫 麝
承和秘方 沈 丁 貝 白 甘 薫 麝
実香 沈 白 貝 丁 薫 麝

「(一一丁才)

説 30

(書入 8)

梅花 (朱ノ点) 白梅ノ花ノシベヲカゲボシニシテ粉ニシテ一朱蜜ニ入也
又花ノヒラトモアリ 又花ノ香ヲウツス事有

春用之 甘松ツカサトル梅花ヲカタトル花ヤカニシテイ
マメカシク匂アサクトシテサルカラカウバシキヲ本トス 梅花ハ沈

ノキサミアラキガヨキ也但キザミハ黒方ノホドシテコヲ入ベカ
ラズ 梅花ニ薫スゴシタルヨシ 又説ニ薫ハ両数スコシタラサデイ
ルベシ 取重ノ次第色く

説 29

説 28

説 27

説 26

説 25

説 24

(書入 7)

黒家秘説(繪) 沈 薫 白 貝 丁 沈 麝 麝沈ノ前後両度

勅作 (繪) 沈 白 貝 丁 薫 沈 麝

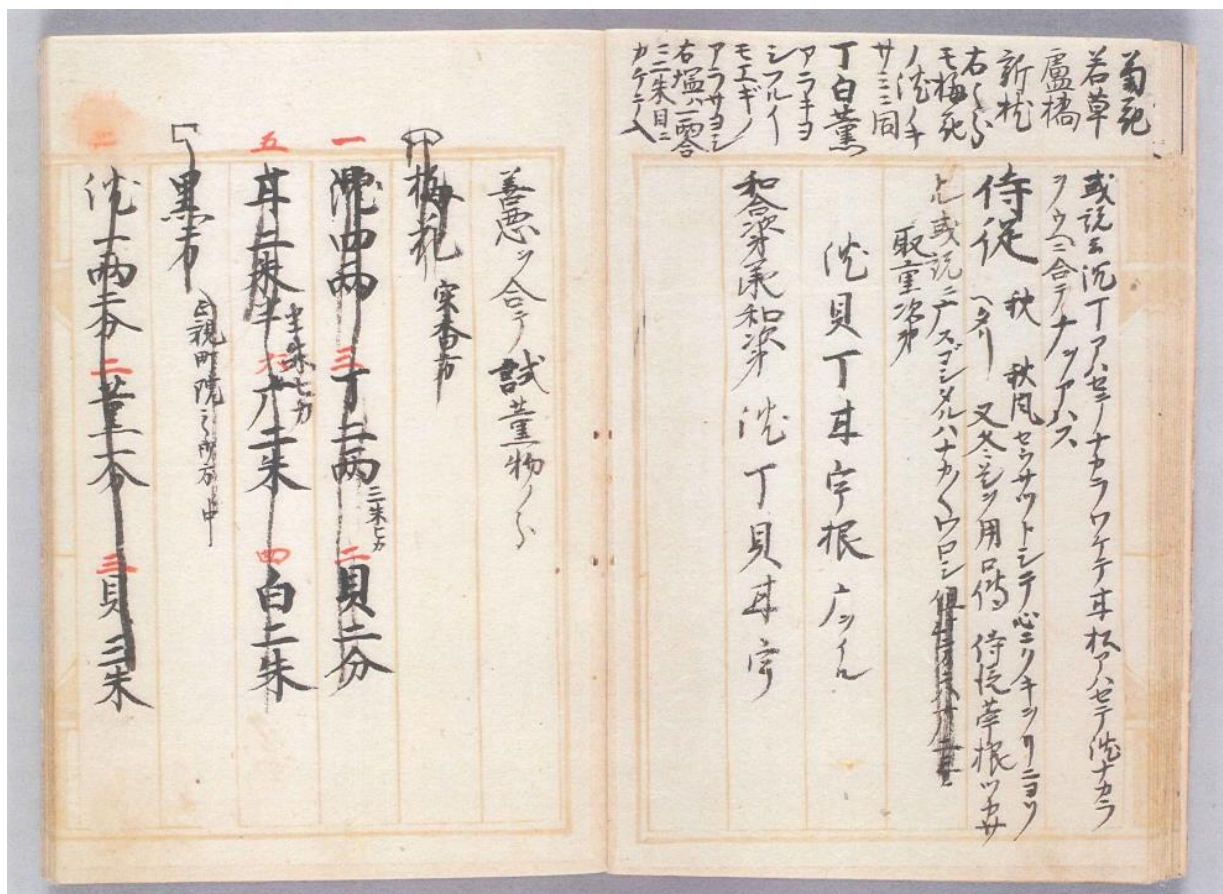
右沈ニ両ヲ二ツニカケワケテ一両ヲウスクヒロケテ残ノ香具ヲムラ
ナクヲキテ後ノコリ一両ノ沈ヲ其上ニヲキヒロケテヒトツニアハ
セキジノ羽ニテカウシヨツケ其アトニ麝ヲヨキヨク合也ツクカズ千ギネ

同古法 沈 丁 貝 薫 白 麝

同勅作 沈 貝 白 薫 丁 麝 麝ニツ二分テ二度
ニ入

次ナル沈ニテ黒方合スルニ甘キ匂ヒニハ丁子ノ粉フリカケベシ一両
合ニハ一朱許ヨシソウジテ黒方ニハ丁ヲスゴス事大法也結句一朱半モヨシ

「(一〇丁ウ)



説
34

(書入 8 続文)

或説云沈丁アハセテナカラワケテ甘松アハセテ沈ナカラ
ヲウヘニ合テナヲアハス
侍従 秋 秋風セウサツトシテ心ニクキヲリニヨソ
ヘタリ 又冬是ヲ用口傳 侍従芋根ツカサ
トル或説ニ麝スゴシタルハナカクワロシ但此方ニハ麝二三●

取重次第

沈 貝 丁 甘 字 根 麝ヲイル

和合次第承和次第 沈 丁 貝 甘 字

説
36

説
35

善惡ヲ合テ試薰物ノ分

(繪記) 梅花 實香方

方
28

一 沈四両 三 丁二両^{三朱ヒカ} 二 貝二分

五 廿二朱半^{半朱ヒカ} 六 麝二朱 四 白二朱

(繪記) 黒方 正親町院之御方中

方
29

一 沈一両二分 二 薰一分 三 貝三朱

「(一二丁ウ)

「(一二丁オ)



方
30

白一分二朱 五丁二分二朱 六麿二朱 二度二入
千種 (絵記号) 中

一 沈五両 二 丁二両 三 貝一両
カワラケニ入デチヤ
ハンラフタニシテ
イキイデヌヤウ
ニシテヤク也

四 薰三分 五 白三分 七 生腦一朱

六 麿一分
(絵記号) 新枕 三条

「(一二丁ウ)

方
31

一 沈四両 二 丁二両 二朱ヒカ 三 甲一両
四 薰一両 五 白一両 六 麿二分

同方

上
(絵記号) 新枕 中

方
32

一 沈一両 二 貝一分 三 廿一朱
四 白二分 五 丁一分二朱半 七 生腦 蜜二入 イトメ

「(一二三丁才)



方 33

六 麝一朱イトメ
一朱ト星半分ホド出ルホドニカクル也
麝ハ半朱ホドハ搔ニ入レテノコリハ生腦ニマセテ
蜜ニ入也

(朱ノ点)
玉椿 中

一 沈四両

二 丁二両

三 甘一分二朱

四 貝一両

五 薰一分

六 ウ一分

七 麝三朱

(朱ノ点)
玉簾

「(一三丁ウ)

方 34

一 沈四両

三 丁一両二分二朱

四^五 貝二分二朱

五^六 白三分一朱

四 甘三朱

二 薰二分

七 麝二分

八 生腦一朱

(朱ノ点)
時雨

方 35

一 沈四両一分

二 丁二両

五 貝三分

三 白三分

四 甘三朱一分

六 ウ三朱一分

「(一四丁才)

一六 沈一両 沈ハ前後ニ入 四丁二分 半朱ヒカ 二貝 一分二朱 輕 半朱カロクシテ
 三薰一朱半 五廿一朱半 カロク 六塩口傳 一朱ヲカケテ 二二分テ其半ヲ入
 搔合後 六香二朱 二度ニ 菊ハ麝半分ト一ツニシテ ヨクマセテ合也其後ノコリ ナヲ又入也但白旦半朱入
 右 禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義被仰之分
 一香殊勝至極也搔中へ塩一朱ヨリモ輕入也丁子又
 一朱入之二度加入也初度ハウ二度メハ金白ノ中ニテ薰
 物ノ上へ振懸モシ沈ニホヒノコリテワロカラニハウ中へ
 丁子ヲ可入也此方ハ甘松ト麝香ト匂ヒカンヤウト心得也沈ヲ
 サノミ匂ノコラテワロカラニ匂ヒニテアラハミツノ中へ丁子ヲク
 ワヘベシ

黒方 実香方 次第沈薰白丁沈 次合
 沈四両 丁二両 白二分

上ト 仙人 三条流 次第書付ノコトシ
 沈一両 丁二分 一朱ヒカ 貝一分
 白一朱 薰一朱 廿二朱 一 半朱 ヒカ

方 39 一六 沈一両 沈ハ前後ニ入 四丁二分 半朱ヒカ 二貝 一分二朱 輕 半朱カロクシテ

三薰一朱半 五廿一朱半 カロク 六塩口傳 一朱ヲカケテ 二二分テ其半ヲ入

搔合後 七八 麝香二朱 二度ニ 菊ハ麝半分ト一ツニシテ ヨクマセテ合也其後ノコリ ナヲ又入也但白旦半朱入

說 40 右 禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義被仰之分
 一香殊勝至極也搔中へ塩一朱ヨリモ輕入也丁子又
 一朱入之二度加入也初度ハウ二度メハ金白ノ中ニテ薰
 物ノ上へ振懸モシ沈ニホヒノコリテワロカラニハウ中へ

丁子ヲ可入也此方ハ甘松ト麝香ト匂ヒカンヤウト心得也沈ヲ
 サノミ匂ノコラテワロカラニ匂ヒニテアラハミツノ中へ丁子ヲク
 ワヘベシ

「(一五丁ウ)

說 41 (繪記) 黒方 実香方 次第沈薰白丁沈 次合

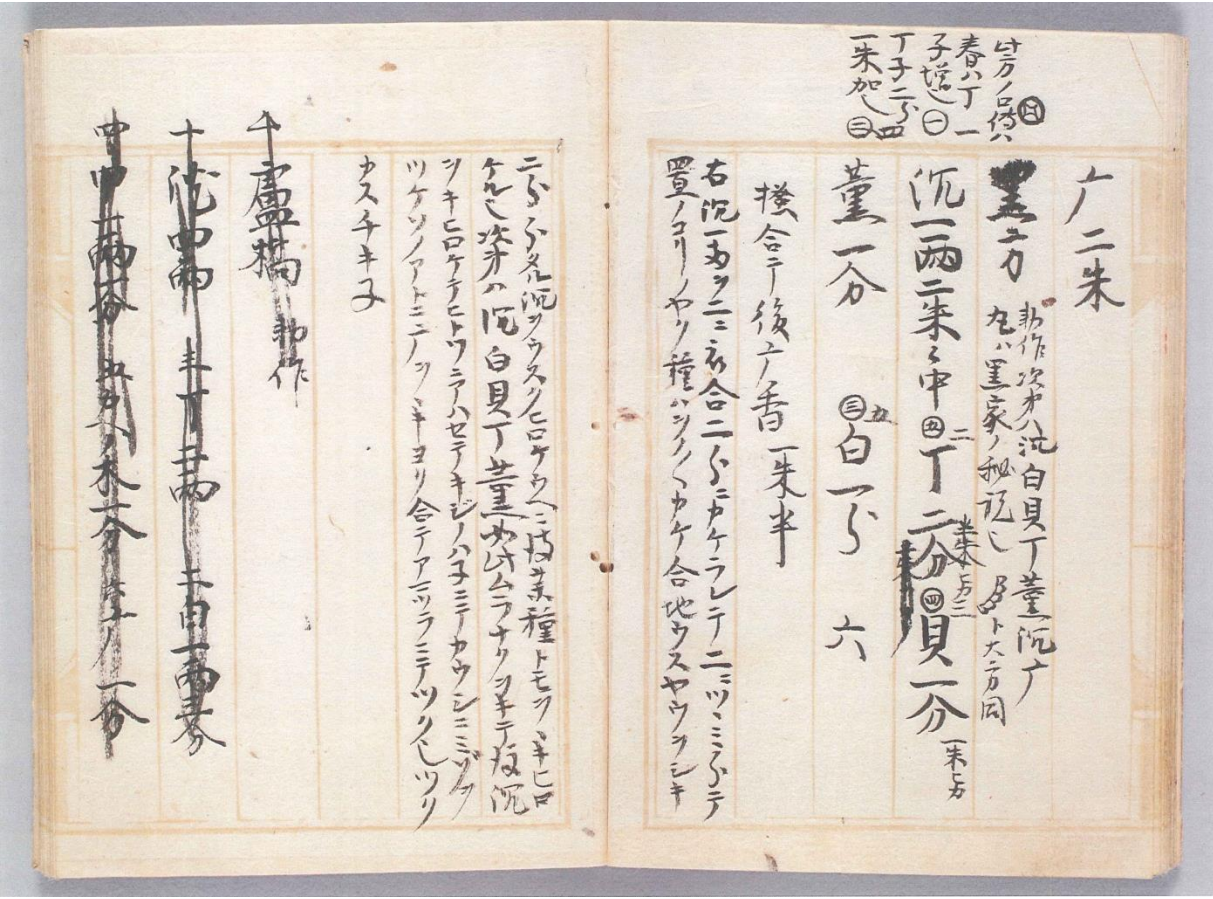
方 40 沈四両 丁二両 白二分

薰一分 貝一両 麝一分

說 42 上ト 仙人 三条流 次第書付ノコトシ

方 41 沈一両 丁二分 一朱ヒカ 貝一分
 白一朱 薰一朱 廿二朱 一 半朱 ヒカ

「(一六丁才)



麝二朱

廣二朱

黑方

勅作次第ハ沈白貝丁薰沈麝
丸ハ黒家ノ秘説也 (繪記号) ト大方同

沈二兩二朱々中丁二粉貝一分

薰一分

白一分

六

搔合テ後麝香一朱半

右沈一兩ヲ二被合二分ニカケラレテニツミ分テ
置ノコリノヤク種ハヲノカケ合地ウスヤウヲシキ

二分分タル沈ヲウスクヒロケウヘニ殘葉種トモヲキヒロ
ケル也次第ハ沈白貝丁薰如此ムラナクヲキテ後沈
ヲキヒロケテヒトツニアハセテキジノハネニテカウシニミゾヲ
ツケソノアトニ麝ヲキヨク合テアマツラニテツク也ツク
カス千キネ

盧橘

十沈四兩 三丁二兩 二白一兩三分

中甲一兩一分 五カヘノ木一分 六麝一分

說 43

方 42

(書入 10)

(繪記号) 黒方 勅作次第ハ沈白貝丁薰沈麝
丸ハ黒家ノ秘説也 (繪記号) ト大方同

① 一 沈一兩二朱々中 ② 丁二分
半朱ヒカ 二朱ガロク

④ 三 貝一分 一朱ヒカ

③ 四 薰一分

⑤ 五 白一分

六

搔合テ後麝香一朱半

說 44

「(二六丁ウ)

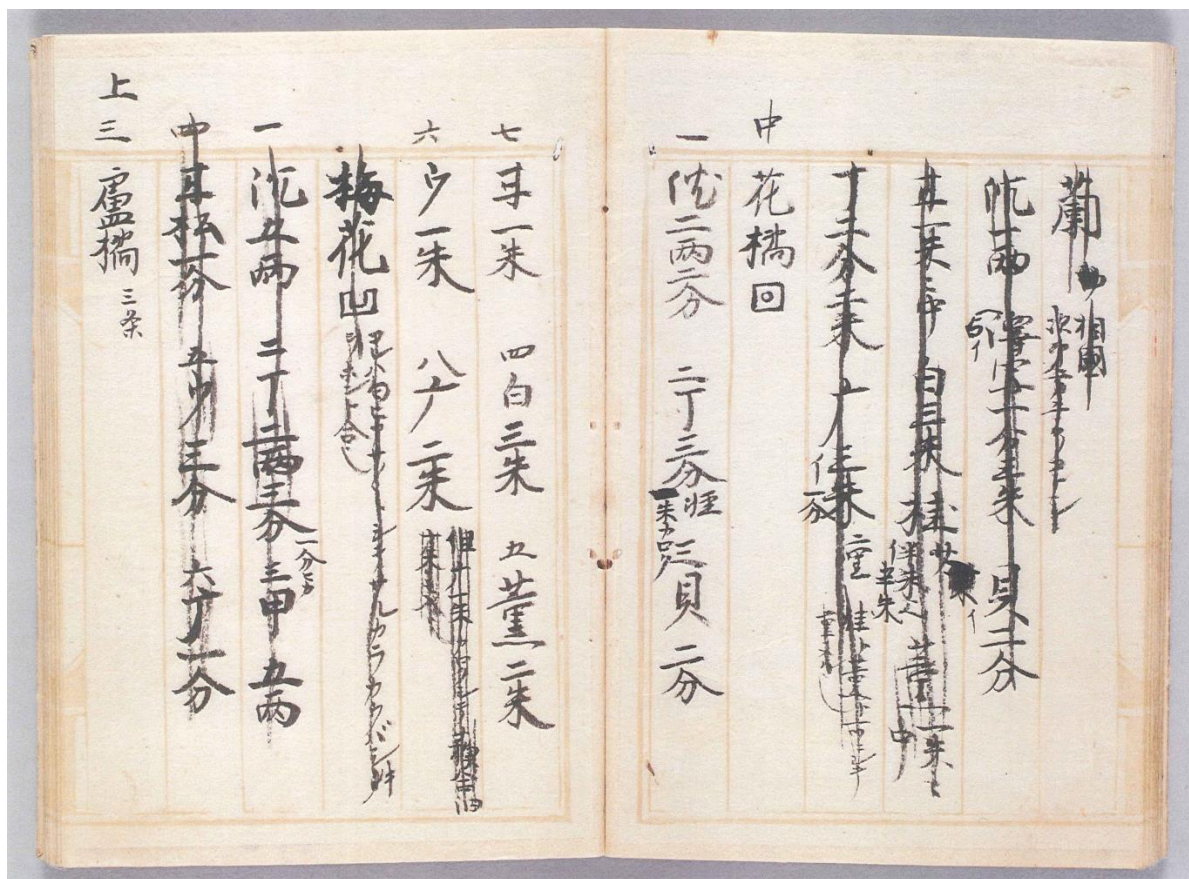
二分分タル沈ヲウスクヒロケウヘニ殘葉種トモヲキヒロ
ケル也次第ハ沈白貝丁薰如此ムラナクヲキテ後沈
ヲキヒロケテヒトツニアハセテキジノハネニテカウシニミゾヲ
ツケソノアトニ麝ヲキヨク合テアマツラニテツク也ツク
カス千キネ

(繪記号) 盧橘 勅作

一 沈四兩 三丁二兩 二白一兩三分

四 甲一兩一分 五カヘノ木一分 六麝一分

「(二七丁オ)



說 45

方 44

蘭 勅 相国
次第方ニカクコトシ

沈一両 澤写一分三朱 貝二分

占イ

甘一朱々中 白三朱 桂 少一朱イ 半朱 一朱々 中

丁二分二朱 麝三朱重 桂ト薰ト一ツニシテ 重ヌル也

イ一分

中 花橘(繪記)

方 45

一 沈二両二分 二 丁三分 輕 一朱カロク 三 貝二分

說 46

方 46

七 廿一朱 四 白三朱 五 薰二朱

六 ウ一朱 八 麝二朱 但麝一朱カロクシテ麝合油 十朱モ入也

梅花(繪記) コレハ匂ヒアサクトシテサルカラカウバシキ フホント合也

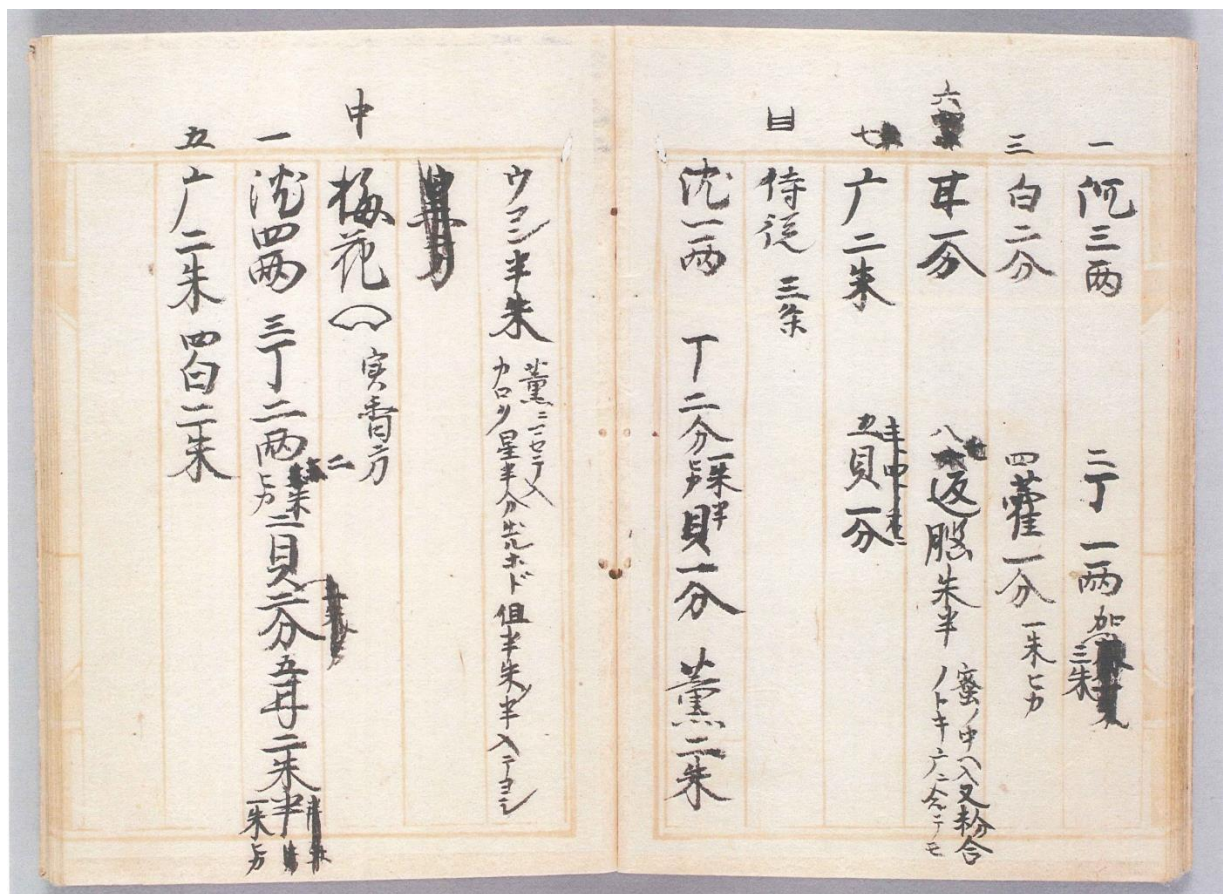
一 沈五両 二 丁二両三分 一分ヒカ 三 甲五両

四 甘松一分 五 ウ三分 六 丁一分

上三 盧橘 三条

「(一七丁ウ)

「(一八丁才)



方 47

一 沈三兩 二 丁一兩 加一分一朱

三 白二分 四 藿一分 一朱ヒカ

六 四二甘一分 八 一返腦朱半 蜜ノ中へ入又粉合

七 麝二朱 三ト四トノナカニ 五 貝一分

(繪寫) 侍從 三条

沈一兩 丁二分 一朱半 貝一分 薰二朱

「(二八丁ウ)

說 47

ウコン半朱 薰ニマセテ入 カロク星半分出ルホド但半朱ノ半入テヨシ

黒方

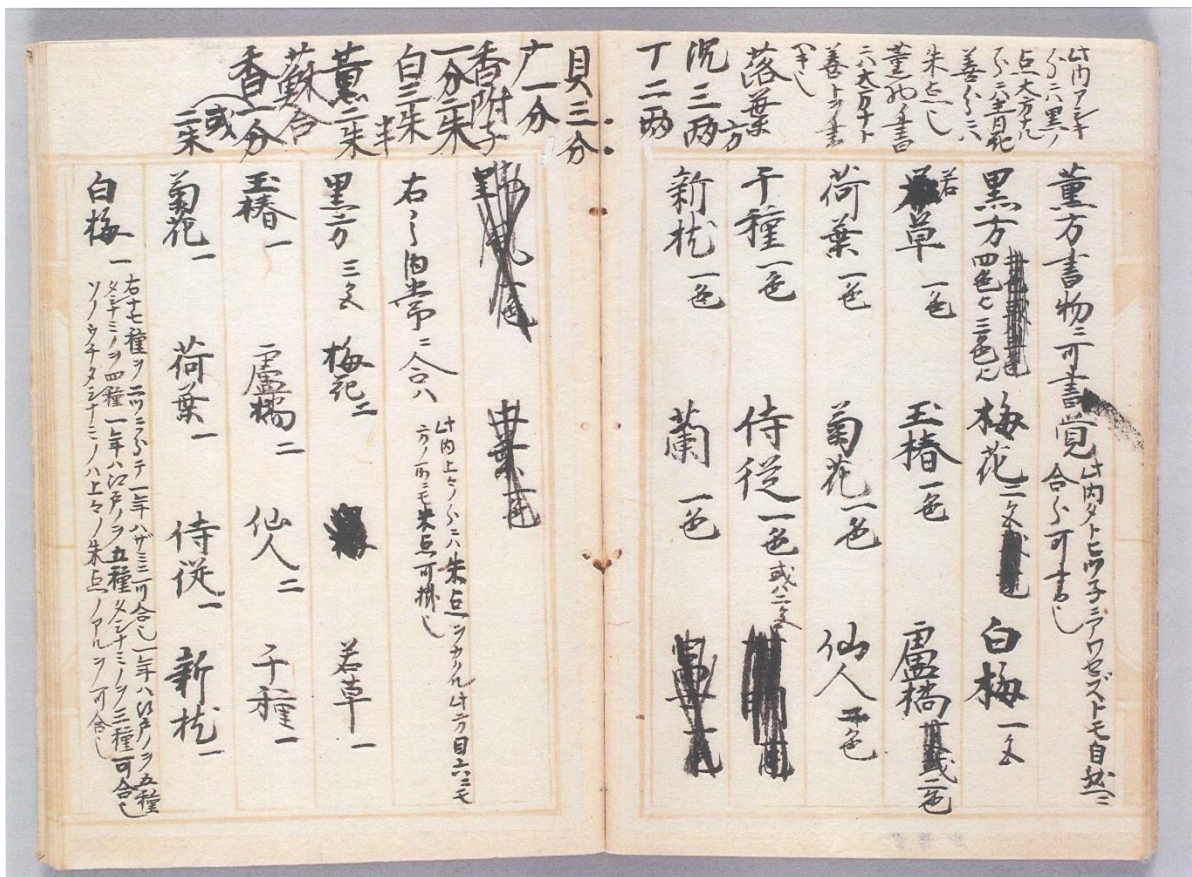
中 梅花 (繪寫) 実香方

方 49

一 沈四兩 三 丁二兩 三二 二 貝二分 二朱ヒカ 五 甘二朱半 一朱ヒカ

五 麝二朱 四 白二朱

「(一九丁才)



(書入 11)

董方書物ニ可書覚

此内タトヒツネニアワセズトモ自然ニ合分可書也

黒方 二色或ハ三色
四色歟三色歟
梅花 二色或三色
白梅 一色

若草 一色
玉椿 一色
盧橘 一色或二色

荷葉 一色
菊花 一色
仙人 二色

千種 一色
侍従 一色或ハ二色
有明 一色

新枕 一色
蘭 一色
富士 一色

(書入 12)

野風 一色
二葉 一色

右之内常ニ合ハ 此内上タノ分ニハ朱点ヲカクル此方目六ニモ方ノ所ニモ朱点可掛也

黒方 三色
梅花 二
白梅
若草 一

玉椿 一
盧橘 二
仙人 二
千種 一

菊花 一
荷葉 一
侍従 一
新枕 一

白梅 一 右十七種ヲ二ツニ分テ一年ハザミニ可合也一年ハ江戸ノヲ五種
タシナミノヲ四種一年ハ江戸ノヲ五種タシナミノヲ三種可合也
ソノウチタシナミノハ上タノ朱点ノアルヲ可合也

「(一九丁ウ)

「(二〇丁オ)

梅花

松四文目 木二文目 青木七分半 且二文目

丁四文目 阿二文目 安二文目 陸二文目 藿二文目

龍十五文目 反十五文目 腦一文目 茴四文目 伽十文目

爵一文目 良七分半

加減梅花

松二分 木一朱 青木一朱 且二分 朱

丁二分 阿二朱 安二朱 陸二朱 竜二分

廣一分 反半朱 腦ノ半 茴一朱 伽一分二朱或ハ上ノ沈香ニシテモ

爵一朱 良一朱 藿香一朱半

みよし野又号唐方

排草五十目 三奈二十目 辛荑五十目

方 53

梅花

松四文目 木二文目 青木七分半 且二文目

丁四文目 阿二文目 安二文目 陸二文目 藿二文目

龍十五文目 麝十五文目 反一文目 腦一文目 茴四文目 伽十文目

爵一文目 良七分半

加減梅花

方 54

松二分 木一朱 青木一朱 且二分 朱

丁二分 阿二朱 安二朱 陸二朱 竜二分

麝二分 反半朱 腦ノ半 茴一朱 伽一分二朱或ハ上ノ沈香ニシテモ

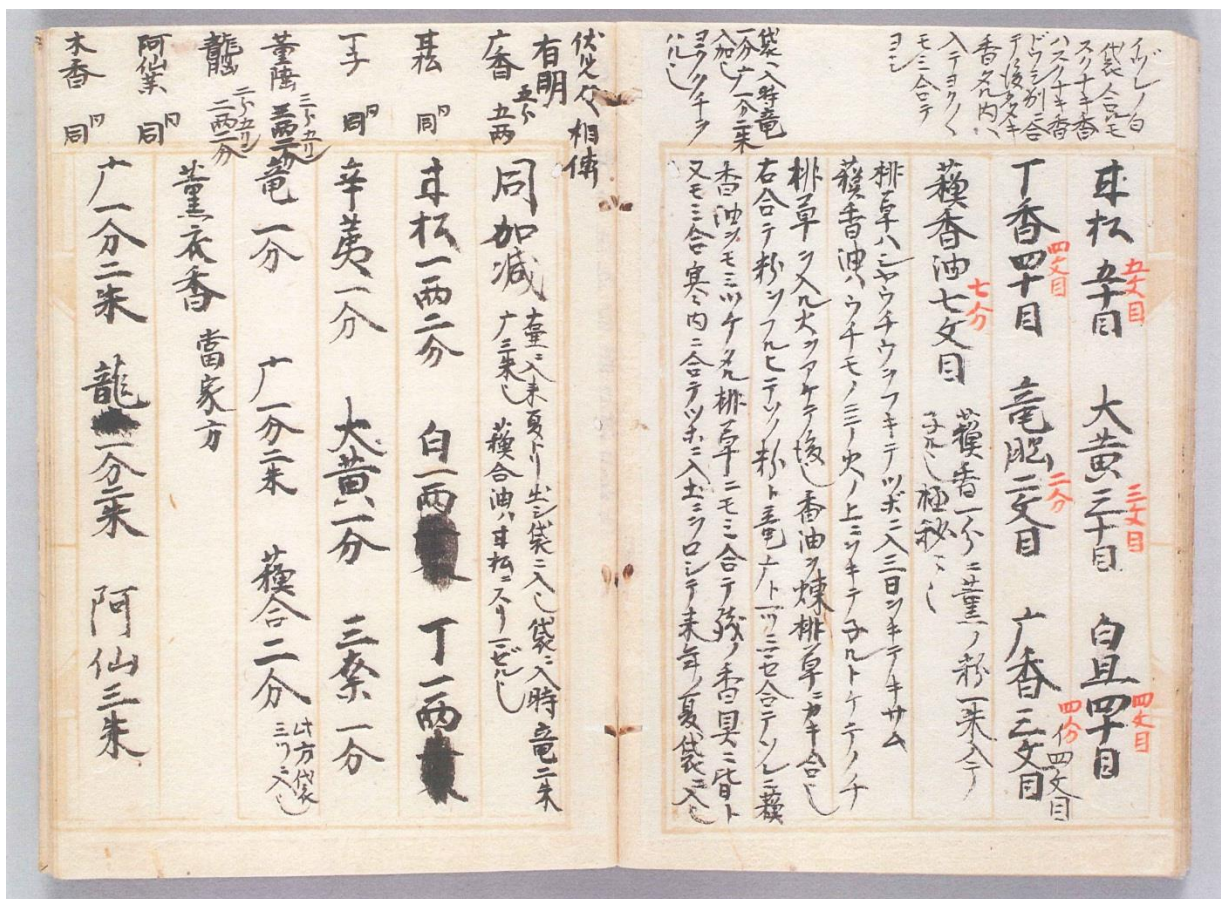
爵一朱 良一朱 藿香一朱半

みよし野又号唐方

排草五十目 三奈二十目 辛荑五十目

「(二二丁才)

「(二二丁ウ)



説
50

(書入 14)

甘松五十目 五文目 大黃三十目 三文目 白旦四十目 四文目
丁香四十目 四文目 竜腦二文目 二分 麝香三文目 四分イ四文目
藿香油七文目 七分 藿香一分二葉ノ粉一朱入テ
ネル也極秘云々

(書入 15)

排草ハシヤウチウヲフキテツボニ入三日ヲキテキサム
藿香油ハウチモノニテ火ノ上ニヲキテネルトケテノチ
排草ヲ入ル火ヲアケテ後也香油ヲ煉排草ニカキ合也
右合テ粉ヲフルヒテソノ粉ト竜腦ト一ツニマセ合テソレニ藿
香油ヲモミツケタル排草ニモミ合テ残ノ香具ニ皆ト
又モミ合寒内ニ合テツボニ入出ニヲロシテ来年ノ夏袋ニ入也

説
51

(書入 16)

同加減 壺ニ入来夏トリ出シ袋ニ入也袋ニ入時竜二朱
麝三朱也藿香油ハ甘松ニスリマゼル也
甘松一兩二分 白一兩二朱 丁一兩二朱

辛荑一分 大黃一分 三奈一分

竜一分 麝一分二朱 藿合二分 此方袋
三ツニ入也

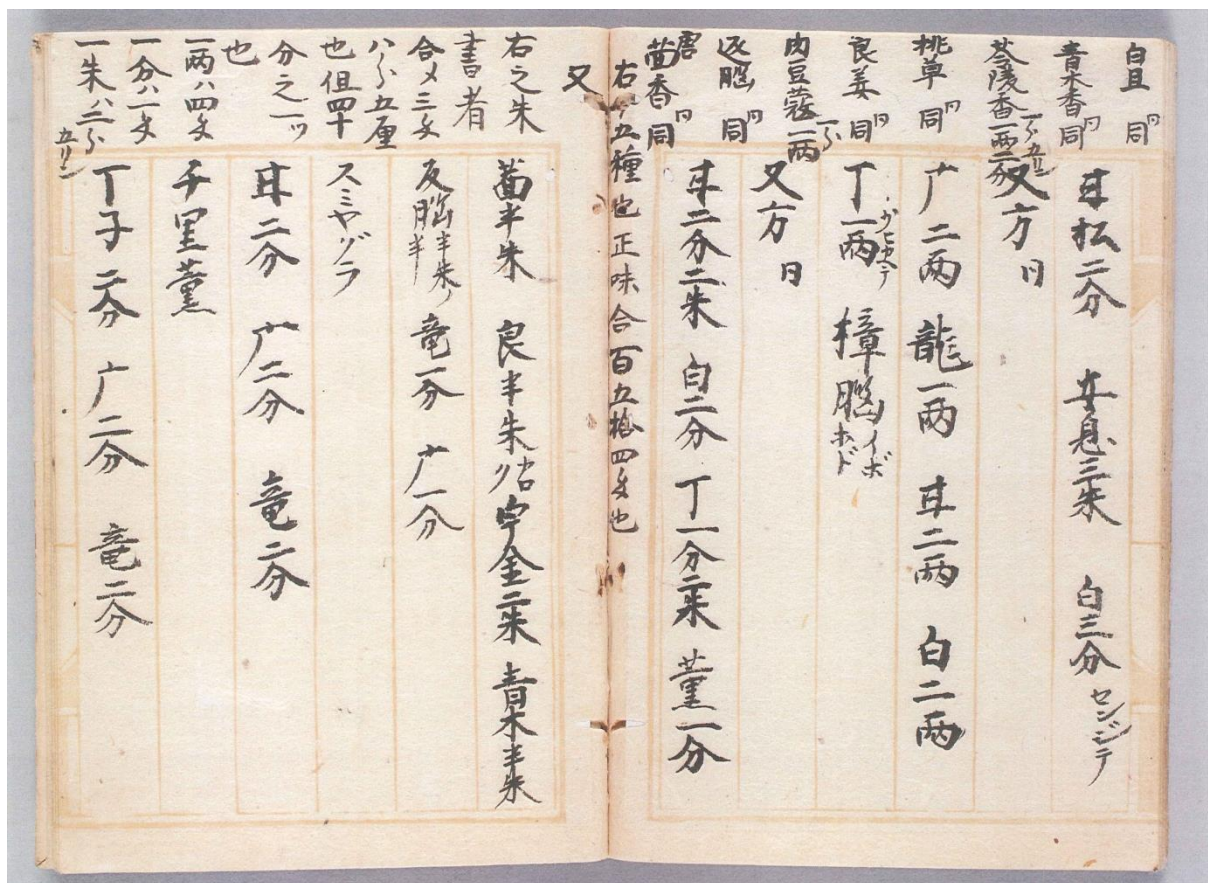
薰衣香 當家方

麝一分二朱 龍二分二朱 阿仙三朱

方
57

「(二三丁才)

「(二三丁ウ)



方
61

丁子二分 麝二分 竜二分

方
60

千里薰

甘二分 麝二分 竜二分

(書入 17)

スミヤグラ

反腦半朱ノ 竜一分 麝一分

茴半朱 良半朱カ 字金二朱 青木半朱

方
59

甘二分二朱 白二分 丁二分二朱 薰一分

又方 同

丁少ヒカヘテ一両 樟腦イボ

方
58

麝二両 龍一両 甘二両 白二両

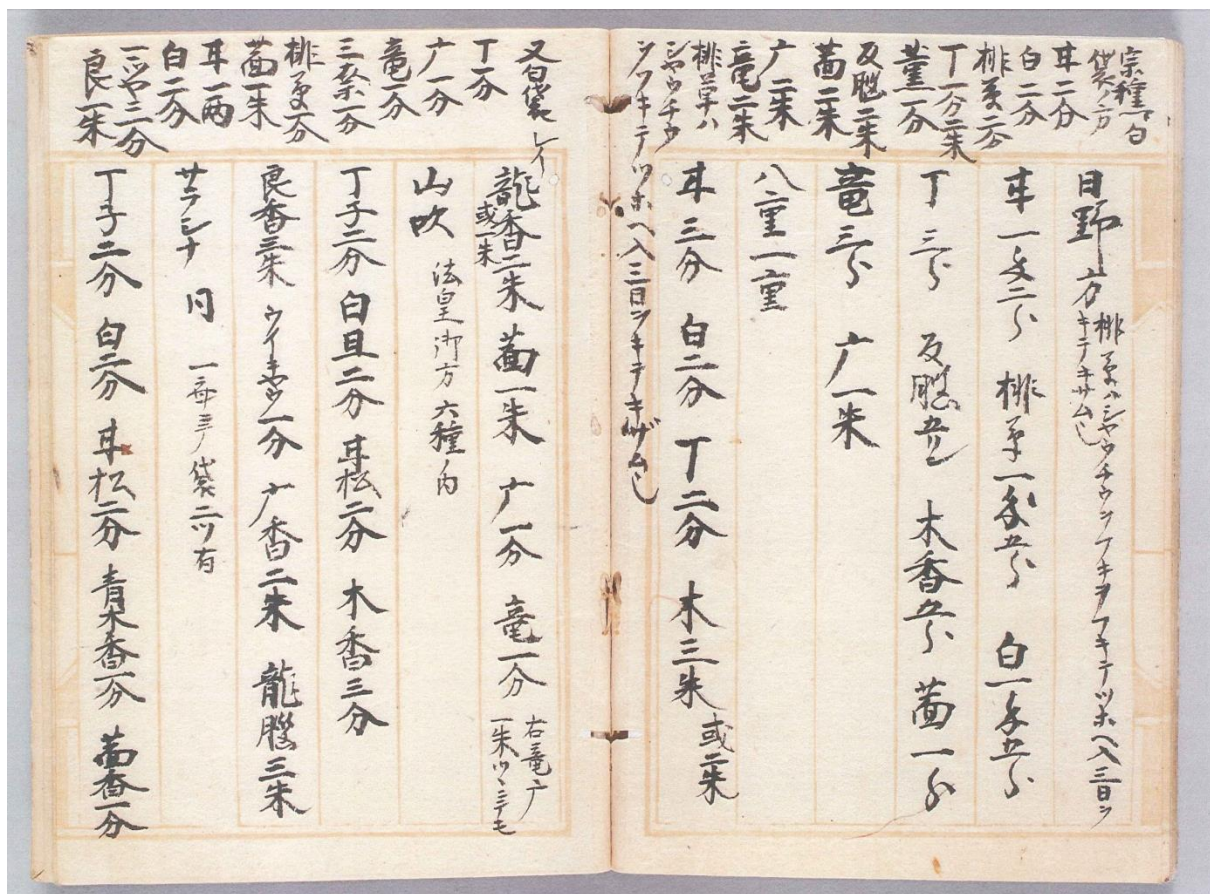
又方 同

甘松二分 安息三朱 白三分 センジテ

(書入 16 続文)

「(二四丁才)

「(二三丁ウ)



說 52
(書入 18)

日野方 排草ハシヤウチウヲフキヲフキテツホヘ入三日ヲ
キテキサム也

甘一匁二分 排草一匁五分 白一匁五分

丁三分 反腦五リン 木香五分 茴一分

竜三分 麝一朱

八重一重

方 63
甘三分 白二分 丁二分 木三朱 或二朱

(書入 19)

龍香^{レイ}二朱 茴一朱 麝一分 竜一分 右竜麝
一朱ツニテモ

山吹 法皇御方六種ノ内

方 64
丁子二分 白旦二分 甘松二分 木香三分

良香三朱 ウイキヤウ一分 麝香二朱 龍腦三朱

サラシナ 同 一斉ニテ袋ニツ有

方 65
丁子二分 白二分 甘松二分 青木香一分 茴香一分

「(二四丁ウ)

「(二五丁才)

木香一分 宇金一分 龍腦二朱半 广香二朱半

ウテナ 同

耳松二分 白旦二分 丁子一分 排草一分 茴香一朱

良香一朱 ウコン一朱 龍腦二朱 麝香二朱

九重 同

耳松二分 白旦二分 丁子二朱 木香二朱

良香一朱 ウコン一朱 广香二朱 龍腦二朱

潤香 同

耳松二分 白旦一分 木香一分 青木香三朱

丁子一分 阿仙藥一分 薰陸一分 良香三朱

反腦二朱 茴香二朱 龍腦二朱 广香二朱

神路のおく 同 又うへもなき峯の松風

木香一分 宇金一分 龍腦二朱半 麝香二朱半

ウテナ 同

方 66

甘松二分 白旦二分 丁子一分 排草一分 茴香一朱

良香一朱 ウコン一朱 龍腦二朱 麝香二朱

九重 同

方 67

甘松二分 白旦二分 丁子二朱 木香二朱

良香一朱 ウコン一朱 麝二朱 龍腦二朱

潤香 同

方 68

甘松二分 白旦一分 木香一分 青木香三朱

丁子一分 阿仙藥一分 薰陸一分 良香三朱

反腦二朱 茴香二朱 龍腦二朱 麝香二朱

神路のおく 同 又うへもなき峯の松風

「(二五丁ウ)

「(二六丁オ)

甘松二分 白檀一分半 一説二分 丁子一分半 一説二分
 麝香二分半 一説一分 龍腦一分
 梅か枝
 甘二分 白二分 丁一分 良一朱半
 青木一朱半 檳榔子二朱 薰一分
 龍二朱半 麝二朱半

伽羅之油

唐蠟二兩 五匁也

會津蠟五兩

カミノ油一合半 クサケノナキヲ但加減次第

丁子一兩二分

茴香一兩 二分二朱ヨシ但三分

竜麝 各一朱但三朱

右香具ナルホドミチンノコトクニサハラヌホドシテ松脂二朱テ右二色ノ蠟トトキ合ヒトツニトケタルトキ火ヲアケテサマシテイマダカタマラヌトキニ油ヲアワセテネリ麝ノ後右ノ香具ヲ入テヨクノネリ合也油ニ火ノケ入レハアブラクサクナル火ノケアルトキ香具ヲ入レハ香ナキ也

又方

方 69

方 70

方 71

説 53

甘松二分 白檀一分半 一説二分 丁子一分半 一説二分
 麝香二分半 一説一分 龍腦一分
 梅か枝
 甘二分 白二分 丁一分 良一朱半
 青木一朱半 檳榔子二朱 薰一分
 龍二朱半 麝二朱半

伽羅之油

唐蠟一兩 五匁也

會津蠟五兩

カミノ油一合半 クサケノナキヲ但加減次第

丁子一兩二分

茴香一兩 二分二朱ヨシ但三分

竜麝 各一朱但三朱

右香具ナルホドミチンノコトクニサハラヌホドシテ松脂二朱テ右二色ノ蠟トトキ合ヒトツニトケタルトキ火ヲアケテサマシテイマダカタマラヌトキニ油ヲアワセテネリ麝ノ後右ノ香具ヲ入テヨクノネリ合也油ニ火ノケ入レハアブラクサクナル火ノケアルトキ香具ヲ入レハ香ナキ也

又方

「(二六丁ウ)

「(二七丁オ)

丁子一兩二分 沉香一兩二分 丁香皮一分

六香一分 唐蠟二兩 會津蠟五兩

麻油二モ 木杏實ノ油ニテモシサクナキヲ一合半

竜一兩 右唐蠟 會津蠟ヨリトキテ合テ火

右香具指ノウラニサワラヌホドニナルホドコマカニシテ
又煎ハ右ニ色ノ蠟ヲトキテ右ノ香具ヲサラシノ
袋ニ入火ヲツヨクシテ油センニスル也一日一夜センジテ
ノチ少サマシテ竜麝ヲサワラヌホドニヨクスリテ
入也又ハサラシニツミテ油モアワセテ後二一年ホド
右ノ蠟ニウツミテヨキトキ竜ハカリヲ入也

一奇香油

唐蠟四十目 丁子三匁 白旦三匁

沉香三匁 當歸五匁 生地黃五匁

六匁 竜三匁 麻油二合ホト

右唐蠟ヲトキ火ヲノケテ麻油ヲ入香具ヲサラ
シニツミカタマラヌサキ入ル也竜ハカリハ百日過テ入也

方 72

上タノニガ
丁子一兩二分 沈香一兩 ミノアルア 丁香皮一分 クナキヲ

麝香一分 上タコレハ 唐蠟二兩 會津蠟五兩 五匁一兩也

麻油ニテモ杏實ノ油ニテモクサクナキヲ一合半

說 54

竜一兩 右唐蠟 會津蠟ヨリトキテ合テ火
ノケヲノケテカタマラヌサキニ油ヲ入ネリ
合テ又カタマラヌサキニ香具皆一度ニ入也

右香具指ノウラニサワラヌホドニナルホドコマカニシテ
又煎ハ右ニ色ノ蠟ヲトキテ右ノ香具ヲサラシノ
袋ニ入火ヲツヨクシテ油センニスル也一日一夜センジテ
ノチ少サマシテ竜麝ヲサワラヌホドニヨクスリテ
入也又ハサラシニツミテ油モアワセテ後二一年ホド
右ノ蠟ニウツミテヨキトキ竜ハカリヲ入也

方 73

一奇香油

唐蠟四十目 丁子三匁 白旦三匁

沉香三匁 當歸五匁 生地黃五匁

麝五匁 竜三匁 麻油二合ホト

右唐蠟ヲトキ火ヲノケテ麻油ヲ入香具ヲサラ
シニツミカタマラヌサキ入ル也竜ハカリハ百日過テ入也

「(二七丁ウ)」

「(二八丁オ)」

△一千 醍醐 香具アラキ

沈一兩 薰一朱 白朱 丁一分 茸少

才朱

〇一又方 香具アラキ

沈 三兩 二兩 丁二分 白朱

一又方 実香公

沈ウスヒラクノヨキリニテ引ワリテシヤセンシヲ
センジテソノ汁ヲヌリテ丁ニデシテカケホシニスル也

一白檀之ヲ 照高院之方

香具アラキ

白檀廿目 沈三文目五分 甘松三文目五分

丁子三文目五分 龍腦五分 麝香九分

炭 塩 蜜ニテ調合如常

説 59

〔繪記〕 一千 醍醐 香具アラキ

方 76

沈一兩 薰一朱 白一朱 丁一分 茸少
半朱ノ半

説 60

〔墨丸〕 一又方 香具アラキ

方 77

沈 三兩 ●二兩
イカホトニテモ 麝二分 丁一分 白三朱
ミハカライ次第

方 78

〔記載ナシ〕

一又方 実香公

「(二九丁ウ)

説 61

沈ウスヒラクノヨキリニテ引ワリテシヤセンシヲ
センジテソノ汁ヲヌリテ麝ニマブシテカケホシニスル也

説 62

一白檀之ヲ 照高院宮之方
香具アラキ

方 79

白檀廿目 沈三文目五分 甘松三文目五分

丁子三文目五分 龍腦五分 麝香九分
三分モ 五リン

説 63

炭 塩 蜜ニテ調合如常

「(三〇丁オ)

一龍涎香 香具コマカニ

真一兩 松一分 丁三粒 且麝腦各一朱

麝金一朱 春日野 甘二分 丁二朱 麝二朱 上ナクハ可除也

右細末ベフノリヲ以テ練リテ推形ヘ入テラス

一線香 同

沈二分 伽羅 白旦二分 丁子二分 甘松三朱 或一分

薰二分 黄宇金一分 藿二朱 龍二朱

麝一朱 佛ニ供養スルニハ麝ヲノゾキテ入レズ 右香具ハ常ノヨリモスコシアラキガヨキ也

乳香一朱 右 白芨ヲ粉ニシテヨクネリテフノリト等 分ニ合フレニテネル也カタムル也

右粉ニシテヨクく合入鉢ニテヨクくスリソウフルイニ度

一供養香 コマカニツキフルイニ蜜ニテアハセテツクコト 五百如来ニ供養スル也

沈二兩 二分 丁二分 茅香二分 薰一分 白一分

說 64

方 80

方 81

說 65

方 82

說 66

說 67

說 68

說 69

方 83

一龍涎香 香具コマカニ

真一兩 松一分 丁三粒 且麝腦各一朱

麝金一朱 同 春日野 甘二分 丁二朱 麝二朱 上ナクハ可除也

右細末ベフノリヲ以テ練リテ推形ヘ入テラス

一線香 同

沈二分 伽羅 白旦二分 丁子二分 甘松三朱 或一分

薰二分 黄宇金一分 藿二朱 龍二朱

麝一朱 佛ニ供養スルニハ麝ヲノゾキテ入レズ 右香具ハ常ノヨリモスコシアラキガヨキ也

乳香一朱 右 白芨ヲ粉ニシテヨクネリテフノリト等 分ニ合フレニテネル也カタムル也

右粉ニシテヨクく合入鉢ニテヨクくスリソウフルイニ度

一供養香 コマカニツキフルイニ蜜ニテアハセテツクコト 五百如来ニ供養スル也

沈二兩 二分 丁二分 茅香二分 薰一分 白一分

「(三〇丁ウ)

「(三二丁オ)

甘^一一分 黄宇^一二朱 霍香^一二朱

一句玉

法皇 勅方御秘密之御方也尤可秘く
寒中ニ可合也

广香一両 沉香一両 藁香油一両

茶一両 白檀一両 アンヘラ二分

松脂^{少二朱程} 丁子^{少二朱程} 乳香^{少二朱程}

一同方同

上ノ香^八伽羅^八十文目 白檀^一十文目

乳香^一文目 广香^五文目 ^{松脂}ベゼウエ十文目

アンヘラ^{クジラノフン}文目 藁香油^{ハ時ノ加減}以上七種

右アカ、ネノナベニ南蛮ノ蠟ヲ少入火ヲヌル
シテ上ニツイテ後●藁香油トベゼウエヲ
ネリ合テ後サテ一度ニ右ノ薬ヲ入テツキ
合テネリカタムル也麝香ヲ合テ後ハ火ニテハ
悪シアツカミニ入テニキリカタメテ手ニトリナリヲ

説 70

方 84

甘^一一分 黄宇^一二朱 霍香^一二朱

一句玉 法皇 勅方御秘密之御方也尤可秘く
寒中ニ可合也

麝香一両 沉香一両 藁香油一両

茶一両 白檀一両 アンヘラ二分

松脂^{少二朱程} 丁子^{少二朱程} 乳香^{少二朱程}

一同方同

方 85

上ノ香^八伽羅^八十文目 白檀^一十文目

乳香^一文目 麝香^五文目 ^{松脂}ベゼウエ十文目

クジラノフン

アンヘラ^{●●●●}文目 藁香油^{ハ時ノ加減}以上七種

安息香

一 右アカ、ネノナベニ南蛮ノ蠟ヲ少入火ヲヌル
シテ上ニツイテ後●藁香油トベゼウエヲ
ネリ合テ後サテ一度ニ右ノ薬ヲ入テツキ
合テネリカタムル也麝香ヲ合テ後ハ火ニテハ
悪シアツカミニ入テニキリカタメテ手ニトリナリヲ

「(三二丁ウ)

「(三二丁オ)

ナフスベシサテ火箸ヲヤキテモミトフスベシ口傳云々

以上

右ノ方ノ唐蠟サナ目 藪香油二文目五分
蠟ノ解様唐蠟一ベゼウエニ藪香油三

一又方

丁子二分 龍腦二分 麝香三分

沈香二分 白檀二分 乳香一両

ヘセウエ一両 藪香油一両 南蛮蠟少

右ノ子リ物三色ヲアカネノ鍋ニ入能加減ニ火ヲ
ヌルクシテネリ合能トケ候時右六色ノ藥ヲ入ネ
リ合扱ツボキ茶碗ニ入能々ツキカタバ有次第
丸シ陰干ニスル也

右ノ方ノ乳香二分二朱ベゼウエ一分二朱
藪香油二分二朱 南蛮蠟一分此加減吉シ
口傳云々

説 72

ナフスベシサテ火箸ヲヤキテモミトフスベシ口傳云々
以上

右ノ方ノ唐蠟サナ目 藪香油二文目五分

蠟ノ解様唐蠟一ベゼウエニ藪香油三

一又方

丁子二分 龍腦二分 麝香三分

沈香二分 白檀二分 乳香一両

ヘセウエ一両 藪香油一両 南蛮蠟少

右ノネリ物三色ヲアカネノ鍋ニ入能加減ニ火ヲ
ヌルクシテネリ合能トケ候時右六色ノ藥ヲ入ネ
リ合扱ツボキ茶碗ニ入能々ツキカタバ有次第
丸シ陰干ニスル也

右ノ方ノ乳香二分二朱ベゼウエ一分二朱
藪香油二分二朱 南蛮蠟一分此加減吉シ
口傳云々

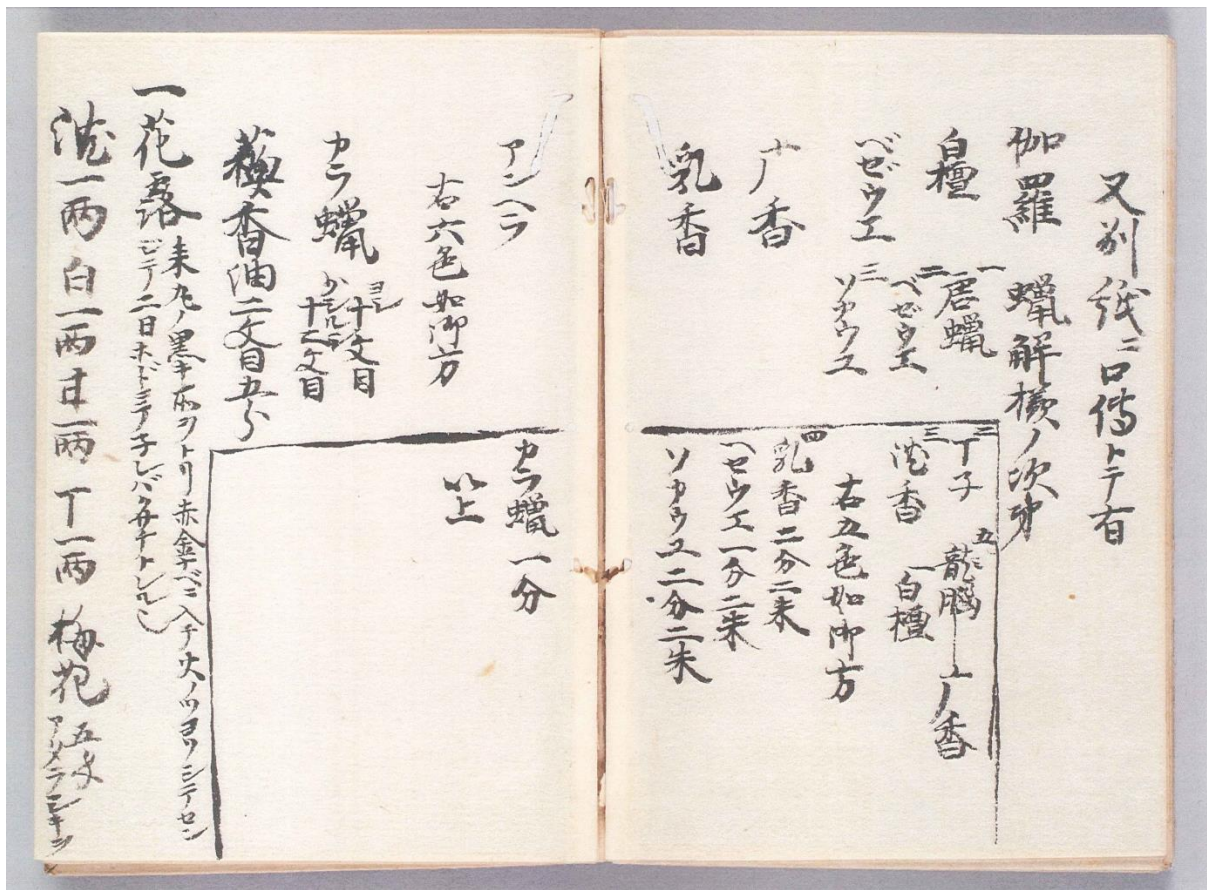
説 74

説 73

方 86

「(三三丁ウ)

「(三三丁オ)



方 89
説 76

方 88
説 75 87
(燭解様云々)

又別紙ニ口傳トテ有

加羅 蠟解様ノ次第

白檀 一 唐蠟

ベゼウエ 二 三 白檀

麝香 三 白檀

乳香

二 五 丁子 龍腦 麝香

三 一 沈香 白檀

四 右五色如御方

乳香二分二朱

ヘセウエ一分二朱
ソカウユ二分二朱

アンヘラ

右六色如御方

カラ蠟 十文目
少シルシ
十二文目

蘇香油二文目五分

カラ蠟一分

以上

一花露 来丸ノ黒キ所ヲトリ赤金ナベニ入テ火ノツヨクシテセン
ジテ二日ホドニテネレバクサケトシル也

沈 一兩 白 一兩 甘 一兩 丁 一兩 梅花 五匁
アタラシキヲ

「(三三丁ウ)

「(三四丁オ)

茨花一分 竜一朱^{上々} 麝三朱^{上々} 来丸一斤
以上六味ヲ来丸油ニ三日ツケ其後ヨクシボリアケテ
其後竜ヲ能スリテ入也但来丸ハ二斤ヨシ
今案ニ云合ル時分ハ四五月ノ比ヨシ又寒内モヨシトリ出シシホリ
ル時ハ正二月ヨシ又六月モヨキ也竜麝入時分ハ寒内ヨキ也
六味ノ香具アラクキサミケツリテ来丸油ニ入ヒタシテ三日ト
アレドモ五六十日ガヨ也其後ヨクシニテシボリ其後竜麝ヨ
クスリテ入五十日ホトヲキテ下ニシツミタルヲドリノケテ絹
ニテコス也竜麝ハタシ右ノ来丸ヲ少トリテソレニテヨク
スリカタクナルヲ次第第二来丸ヲ入テ水ノヤウニシヨイ来丸ニ
入マゼル也

又方

广三分 竜三分 白一两 丁一两 半兩 沈一两

梅花廿目^{唐シロイ} ハクフシ一兩 雷丸三斤

雷丸ノカワウヘノカワヲモトリ中ノウスキカワトモニ入也皆香具
トモニ袋ニ入ムシテアブラシボリニテシボル也又別ノ袋ニ来丸ヲ
入テソノメシニナリタルトキヲヨシトス
今案云雷丸ハ中ノウスキカワヲモトリ●別ノ袋ニ入テ
又右ノ香具半齋ホド又別ノチイサキフクロニ入ライ丸ノ
袋ノ中へ入テ右ノコトクムシテヨキトキ香具ノ袋ヲトリ
出シ雷丸バカリヲシボル也但ハクフシバカリハライ丸ノ内入テ
又今案云ムシテシボラスニ右ノ香具半齋ニシテ来丸^丸三斤ヲ
二三日ヨクくネリテクサケヲトル香具ヲ来丸ニツケ百日
シテトリ出シツカウ也

説 77

説 78

方 90

説 79

説 80

説 81

茨花一分 竜一朱^{上々} 麝三朱^{上々} 来丸一斤

以上六味ヲ来丸油ニ三日ツケ其後ヨクシボリアケテ
其後竜麝ヲ能スリテ入也但来丸ハ二斤ヨシ

今案ニ云合ル時分ハ四五月ノ比ヨシ又寒内モヨシトリ出シシホリ
ル時ハ正二月ヨシ又六月モヨキ也竜麝入時分ハ寒内ヨキ也
六味ノ香具アラクキサミケツリテ来丸油ニ入ヒタシテ三日ト
アレドモ五六十日ガヨ也其後ヨクシニテシボリ其後竜麝ヨ
クスリテ入五十日ホトヲキテ下ニシツミタルヲドリノケテ絹
ニテコス也竜麝ハタシ右ノ来丸ヲ少トリテソレニテヨク
スリカタクナルヲ次第第二来丸ヲ入テ水ノヤウニシヨイ来丸ニ
入マゼル也

又方

麝三分 竜三分 白一两 丁一两 廿一兩 沈一两

梅花廿目^{唐シロイ} ハクフシ一兩 雷丸三斤

雷丸ノカワウヘノカワヲモトリ中ノウスキカワトモニ入也皆香具
トモニ袋ニ入ムシテアブラシボリニテシボル也又別ノ袋ニ来丸ヲ
入テソノメシニナリタルトキヲヨシトス

今案云雷丸ハ中ノウスキカワヲモトリ●別ノ袋ニ入テ
又右ノ香具半齋ホド又別ノチイサキフクロニ入ライ丸ノ
袋ノ中へ入テ右ノコトクムシテヨキトキ香具ノ袋ヲトリ

出シ雷丸バカリヲシボル也但ハクフシバカリハライ丸ノ内入テ
又今案云ムシテシボラスニ右ノ香具半齋ニシテ来丸^丸三斤ヲ
二三日ヨクくネリテクサケヲトル香具ヲ来丸ニツケ百日

シテトリ出シツカウ也

「(三四丁ウ)

「(三五丁オ)

一兵部

雷丸油ニテモ唐蠟ト等分ニテモ竜ナルホドコマカニシテ
麝香ハ合ル前三十目ホトキヌニツミ油蠟ノ中へ入置テチ
キニハ不入合テカラモスリタルガヨキ也

竜一分

廣二朱 薑二分 朱 伊勢三両 雷丸入次第

一塗身香

香具ナルホドコマカニシテ 雷丸ニテ入テネル
右ノコト雷丸クサケヲトル也

伽羅

五分 薑五分 藿五分 白一錢

廣一錢

竜一錢 檳榔子三分 丁二分

耳二分

一瞿麦

耳二分 朱 白二分 朱 丁一分

字金一朱

沈一分

松脂三朱

大黃三朱

竜三朱

廣一分

或三朱

霍香一朱

一花橘

耳二分

白二分

丁二分

ウコン一朱

木香一朱

說 82

一兵部卿

雷丸油ニテモ唐蠟ト等分ニテモ竜ナルホドコマカニシテ
麝香ハ合ル前三十目ホトキヌニツミ油蠟ノ中へ入置テチ
キニハ不入合テカラモスリタルガヨキ也

方 91

竜一分

上々
梅花

麝二朱

上々

薑一分一朱

伊勢三両

雷丸入次第

說 83

一塗身香

香具ナルホドコマカニシテ 雷丸ニテ入テネル
右ノコト雷丸クサケヲトル也

方 92

伽羅五分

薑五分

藿五分

白一錢

麝一錢

竜一錢

浜榔子三分

丁二分

甘二分

「(三五丁ウ)

方 93

一瞿麦

甘二分 朱

白二分 朱

丁一分

三

字金一朱半

沈一分

クダキテ

松脂三朱

大黃三朱

一分

竜三朱

麝一分

或三朱半

霍香一朱

一花橘

方 94

甘二分

白二分

丁二分

ウコン一朱

木香一朱

「(三六丁オ)

良香一朱 茴一朱 广朱 龍三朱
右或广三朱 龍一分 或广一分 龍一分

一をそ桜

甘二分 白二分 丁一分 沈一分

三奈一朱 霍香半朱 辛夷一朱

宇金一朱 青木一朱 竜二朱 广二朱半

反腦 梅花ノヒラ
一ツホトヲ三ツ四ツニクダキテ

一衣服装束ナドへ入カロキ 薰衣香

甘三分 白二分 丁二分 青木一朱

竜一朱半 返腦マメツブツ

右懷中ニ入ナラハ返腦ヲキテ麝臍ノ皮二朱
竜二朱半可入也 但麝ヲ入ヌモヨシ
衣服装束ナドへ入ハ右ノ分已上七斎入也
七斎ノ内袋ハツニナル也

方 95

良香一朱 茴一朱 麝二朱 龍三朱

右或麝三朱 龍一分 或八麝一分 龍一分二朱

一をそ桜

甘二分 白二分二朱 丁一分 沈一分

三奈一朱 霍香半朱 辛夷一朱

宇金一朱 青木一朱 竜二朱 麝二朱半

反腦 梅花ノヒラ
一ツホトヲ三ツ四ツニクダキテ

一衣服装束ナドへ入カロキ 薰衣香

甘三分 白二分 丁二分 青木一朱

竜一朱半 返腦マメツブツ

右懷中ニ入ナラハ返腦ヲキテ麝臍ノ皮二朱
竜二朱半可入也 但麝ヲ入ヌモヨシ
衣服装束ナドへ入ハ右ノ分已上七斎入也
七斎ノ内袋ハツニナル也

右七臍ニシテ已上 甘五兩一分 白三兩二分
丁三兩二分 青木一分三朱 竜二分二朱半^{ハツニ}

一板香

龍腦一兩 麝香半兩 丁子三兩

耳松二兩 茴香一兩 梅花二兩

白旦三兩

右何モ粉ニス葛ノリニテヨクネリ合セ紙ニ
ヒキ其上ヲウスキカミニテ張ル板ハ厚紙

二三反ノリニテ合セヨクホシテ以後右ノ香
具ヲヒク也シメリアルウチハアシ

一毎年冬之衣服裳束ニ八袋ヲ四五六月
之比入置夏之衣服裳束ニ八袋ヲ九月

之比入置

耳松二分 白旦一分^{二朱} 丁子三朱

竜腦二朱

右一袋合ハ八袋分ハ臍可合也

方 97

方 98

說 86

說 87

方 99

說 88

右七臍ニシテ已上 甘五兩一分 白三兩二分
丁三兩二分 青木一分三朱 竜二分二朱半^{ハツニ}

一板香

龍腦一兩 麝香半兩 丁子三兩

甘松二兩 茴香一兩 梅花二兩

白旦三兩

右何モ粉ニス葛ノリニテヨクネリ合セ紙ニ
ヒキ其上ヲウスキカミニテ張ル板ハ厚紙

二三反ノリニテ合セヨクホシテ以後右ノ香
具ヲヒク也シメリアルウチハアシ

一毎年冬之衣服裳束ニ八袋ヲ四五六月
之比入置夏之衣服裳束ニ八袋ヲ九月
之比入置

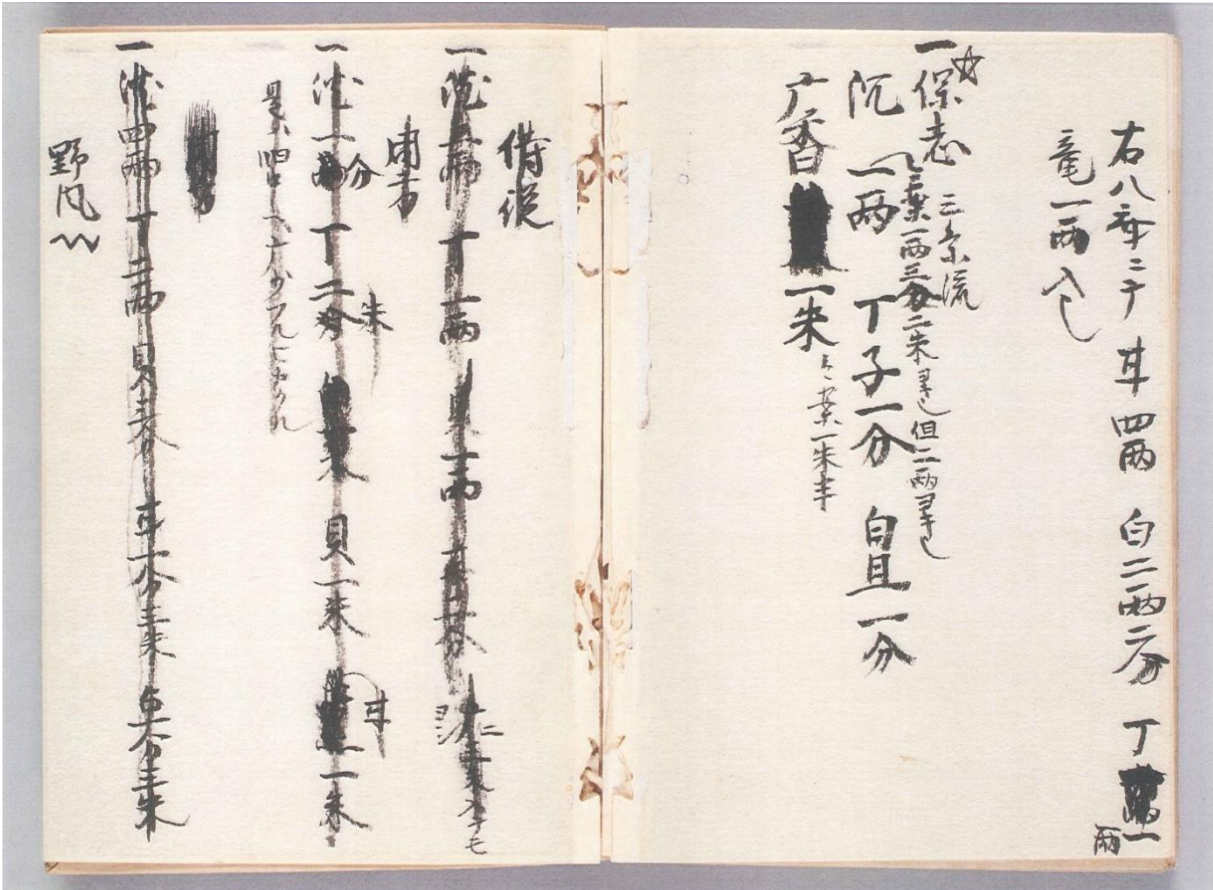
甘松二分 白旦一分^{二朱} 丁子三朱

龍腦二朱

右一袋合ハ八袋分ハ臍可合也

「(三七丁ウ)

「(三八丁オ)



方
100

右八 臍ニテ 廿四兩 白二兩二分 丁二兩一分
竜一兩入也

方
101

(絵記号)
一保志 三条流
今案一兩三分二朱ヨキ也但二兩ヨキ也
沈一兩 丁子一分 白旦一分
麝香●朱一朱 今案一朱半

方
102

侍従

一沈二兩 丁一兩 貝一兩 廿二分
二 磨三朱入テモ
ヨシ

同方

一沈一兩 丁二分 白一朱 貝一朱 薰一朱
分 朱 甘

是ハ舊中ヘ麝少フルヒカクル

同方

一沈四兩 丁二兩 貝三分 廿一分三朱 占一分三朱

野風 (絵記号)

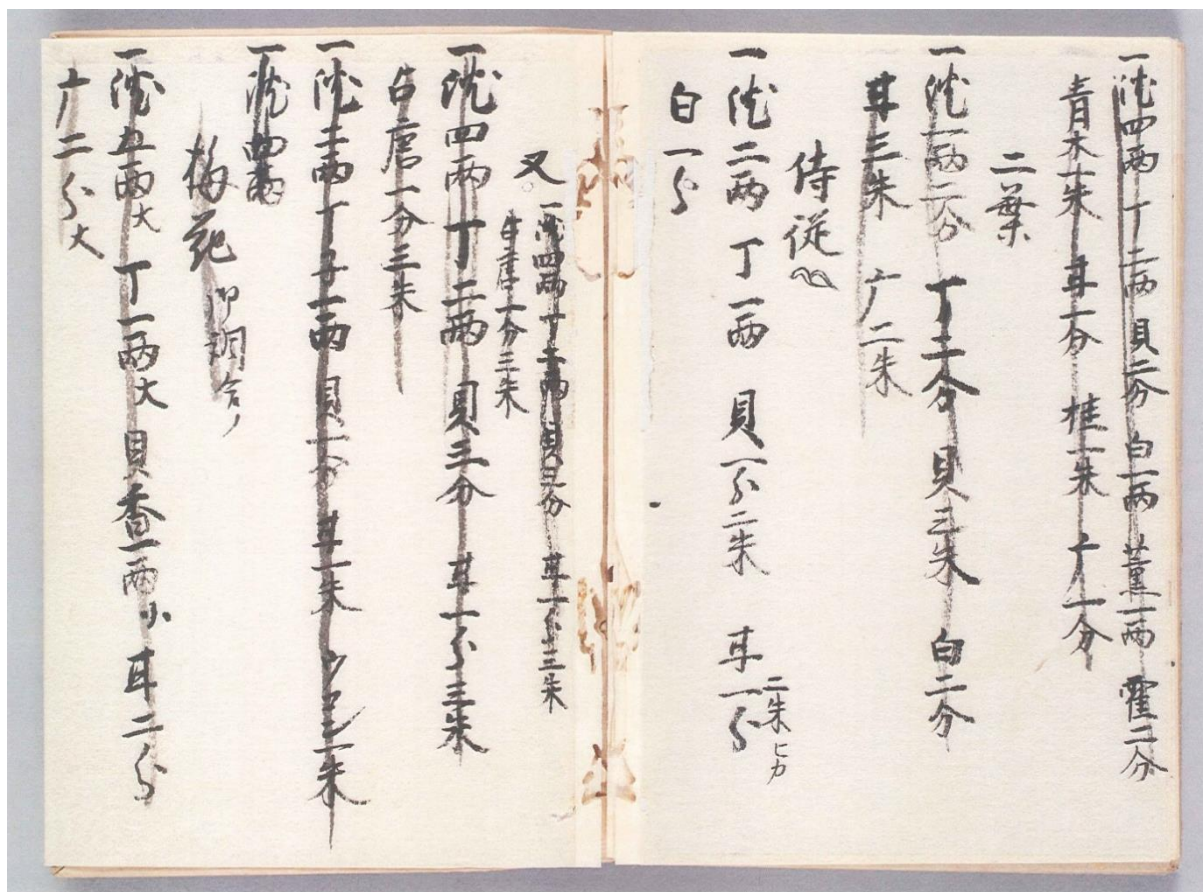
方
104

説
89

方
103

「(三九丁才)

「(三八丁ウ)



方 105

一沈四兩 丁二兩 貝二分 白一兩 薰一兩 霍二分
青木一朱 甘一分 桂一朱 麝一分

二葉

方 106

一沈一兩二分 丁二分 貝三朱 白二分
甘三朱 麝二朱

侍從 (繪記号)

方 107

一沈二兩 丁一兩 貝一分二朱 甘一分
白一分

又 一沈四兩 丁二兩 貝三分
甘一分三朱 占唐一分三朱

方 109

一沈四兩 丁二兩 貝三分 甘一分三朱
占唐一分三朱

方 110

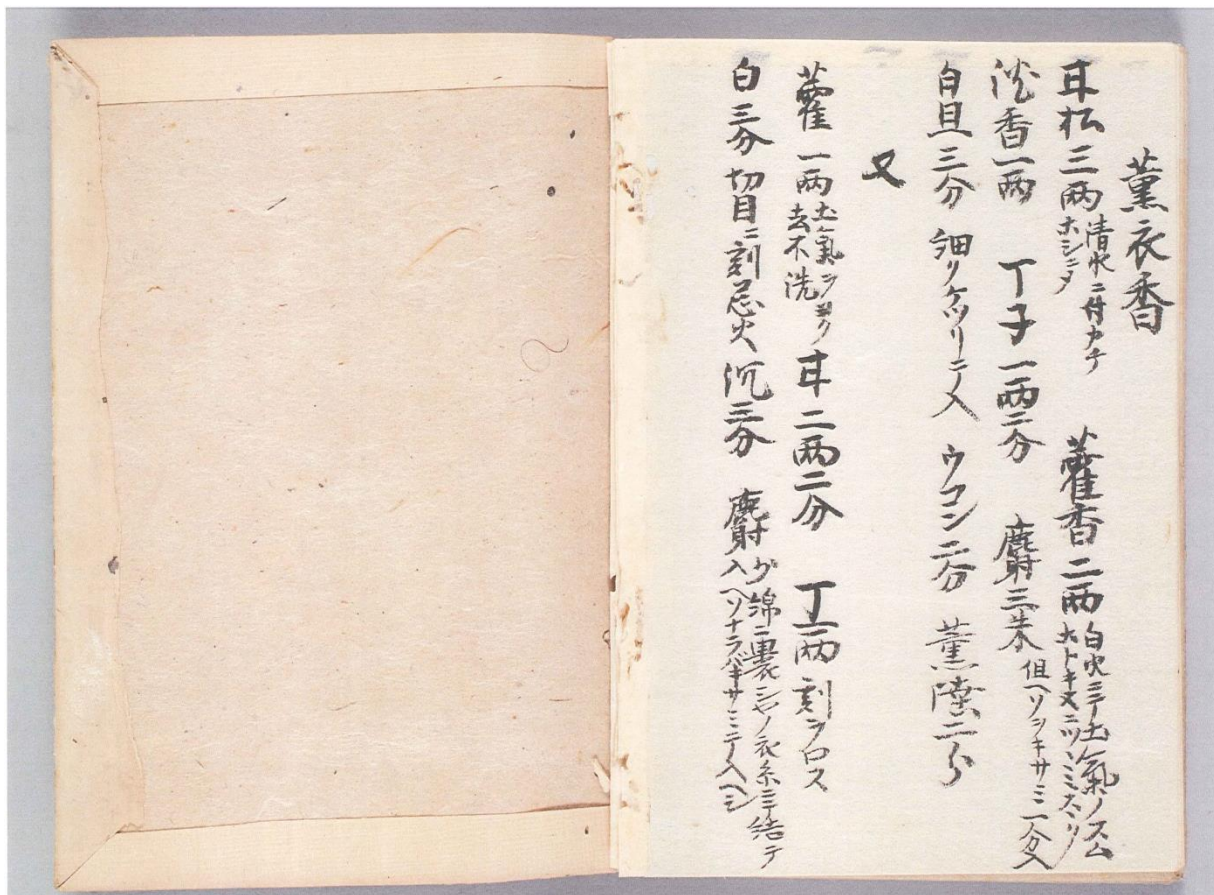
一沈二兩 丁子一兩 貝一分 甘一朱 ウコン一朱

方 111

一沈四兩
梅花 御調合ノ

方 112

一沈五兩 大 丁一兩 大 貝香一兩 小 甘二分
麝二分 大



薰衣香

甘松三兩

清水ニ付カケ
ホシニヤ

藿香二兩

白水ニテ土氣ノス
ホトキヌニツミヌク

沈香二兩

丁子二兩

麝三朱

但ソヲキサミ一分入

白旦三分

細クツリテ入

ウコン二分 薰陸二分

又

藿一兩

土氣ヲヨク
去不洗

甘二兩二分

丁一兩刻ヲロス

白三分

切目ニ刻忌火

沈三分

麝少綿ニ裹シヤノ衣糸ニテ結テ
入ヘソナラバキサミテ入ヘシ

方
113

方
114

薰衣香

甘松三兩

清水ニ付カケ
ホシニヤ

藿香二兩

白水ニテ土氣ノス
ホトキヌニツミヌク

沈香一兩

丁子一兩二分

麝三朱

但ヘソヲキサミ一分入

白旦三分

細クケツリテ入

ウコン二分

薰陸二分

又

藿一兩

土氣ヲヨク
去不洗

甘二兩二分

丁一兩刻ヲロス

白三分

切目ニ刻忌火

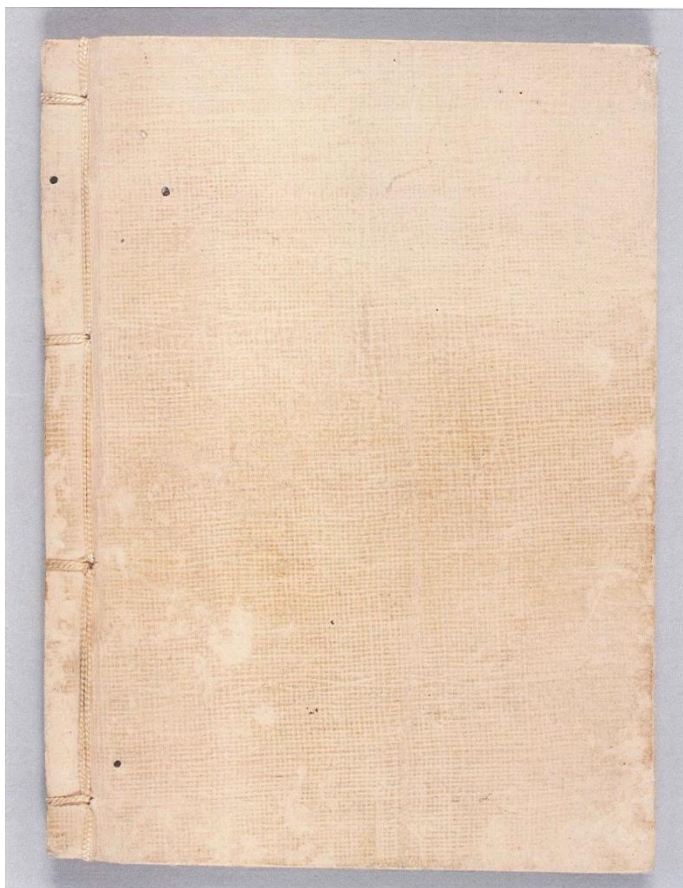
沈三分

麝

少綿ニ裹シヤノ衣糸ニテ結テ
入ヘソナラバキサミテ入ヘシ

「(四〇丁ウ)

「(裏表紙見返し)



「裏表紙」

書入1 (3丁表頭欄) 何方モ黒方ハ麝相一合後ニ掛分テ兩度ニ入之沈モ二度ニ麝ノ前ニ前後ニ入也

書入2 (5丁裏頭欄) 麝半朱ハ蜜入也

書入3 (8丁表頭欄) 蜜ニ塩入事有ベカラズツヨクカタキ時塩ヲ入也其外ハ無用也蜜ニテツキ合テ後沈ノ粉一朱許フリカケ又ツクヘキ也

書入4 (9丁表頭欄) 或梅花トモ云也

書入5 (9丁裏頭欄) 二度ニ入

書入6 (10丁表頭欄) 沈ノキサミハ鬼モデノフルニヌケルホドナトソレヨリキ又モデニヌケルホドナルトマセテ合テヨシ又モエギノシヤノフルイニテトヲリタルコトミヂンノコハステ入ベカラズヨクフルウヘシ

書入7 (10丁裏頭欄) 仙人玉椿モ沈キサミ黒方ニ同香具モコマカニシテ右塩ハ一両合ニ二朱目ニカケテ入

書入8 (11丁表頭欄) 沈ノキサミ鬼モデノフルヒニヌケルト竹ノ籠ノフルイニトナルノトラマゼテ可合也キサモデノ白キフルイトモエギノフルイトソノ外コトハヨクフルイテイレベカラズ侍従白梅千種菊花若草盧橘新枕右之分モ梅花ノ沈ノキサミニ同丁白薫アラキヨシフルイモエギノアラサヨシ右塩ハ一両合ニ二朱目ニカケテ入

書入9 (15丁表頭欄) 取重古法ノ次第ハ沈貝丁白甘藷ウ麝ワイル安息ハ蜜ノ中ヘ入又麝ト合テ蜜中ヘモ入也

書入10 (16丁裏頭欄) 此方ノ口傳ハ春ハ丁子増也丁子二分一朱加也

書入11 (19丁裏頭欄) 此内アシキ分ニハ黒ノ点大方ナル分ニハ青花善分ニハ朱点也薫物ノ書ニハ大方ナト善トヲ書ヘキ也

書入12 (19丁裏頭欄) 落葉方 沈三両 丁二両 貝三分 麝一分 香附子一分二朱 白三朱半 薫二朱 蘇合香一分 或二朱

書入13 (20丁裏頭欄) 次第ノコトクニ合テ後甲甘ノ中ヘ合又残ノ麝二朱ヲ合テヨク搔合テ後沈残ノ半合ヲ重テ又合也沈ハ初終二度ニ重也

書入14 (22丁裏頭欄) イヅレノ匂袋合ルモスクナキ香ハスクナキ香ドウシ別ニ合テ後多キ香タル内ハ入テヨクモミ合テヨシ

書入15 (22丁裏頭欄) 袋ヘ入時竜一分麝一分二朱入加也ヨククチヲハル也

書入16 (23丁表頭欄) 伏見殿相傳 有明 麝香 五分 五両 甘松 同 丁子 同 薫陸

三分五リン 三両二分 龍腦 二分五リン 二両二分 阿仙藥 同 木香 同 白旦 同 青木香 同
同 荅陵香 一分五リン 一両二分 排草 同 良姜 同 肉豆蔻 一分一両 返腦 同 唐茴香 同
同 右十五種也正味合百五拾四匁

書入17 (24丁表頭欄) 又 右之朱書者合メ三匁八分五厘也但四十分之一ツ也 一両ハ四匁一分ハ一匁 一朱ハ二分五リン

書入18 (24丁裏頭欄) 宗種卿匂袋ノ方 甘二分 白二分 排草二分 丁一分二朱 薫一分 反腦二朱 茴二朱 麝二朱 竜二朱 排草ハシヤウチウヲフキテツホヘ入三日ヲキテギザム也

書入19 (25丁表頭欄) 又匂袋 丁一分 麝一分 竜一分 三奈一分 排草一分 茴一朱 甘二両 白二分 マツヤニ一分 良一朱

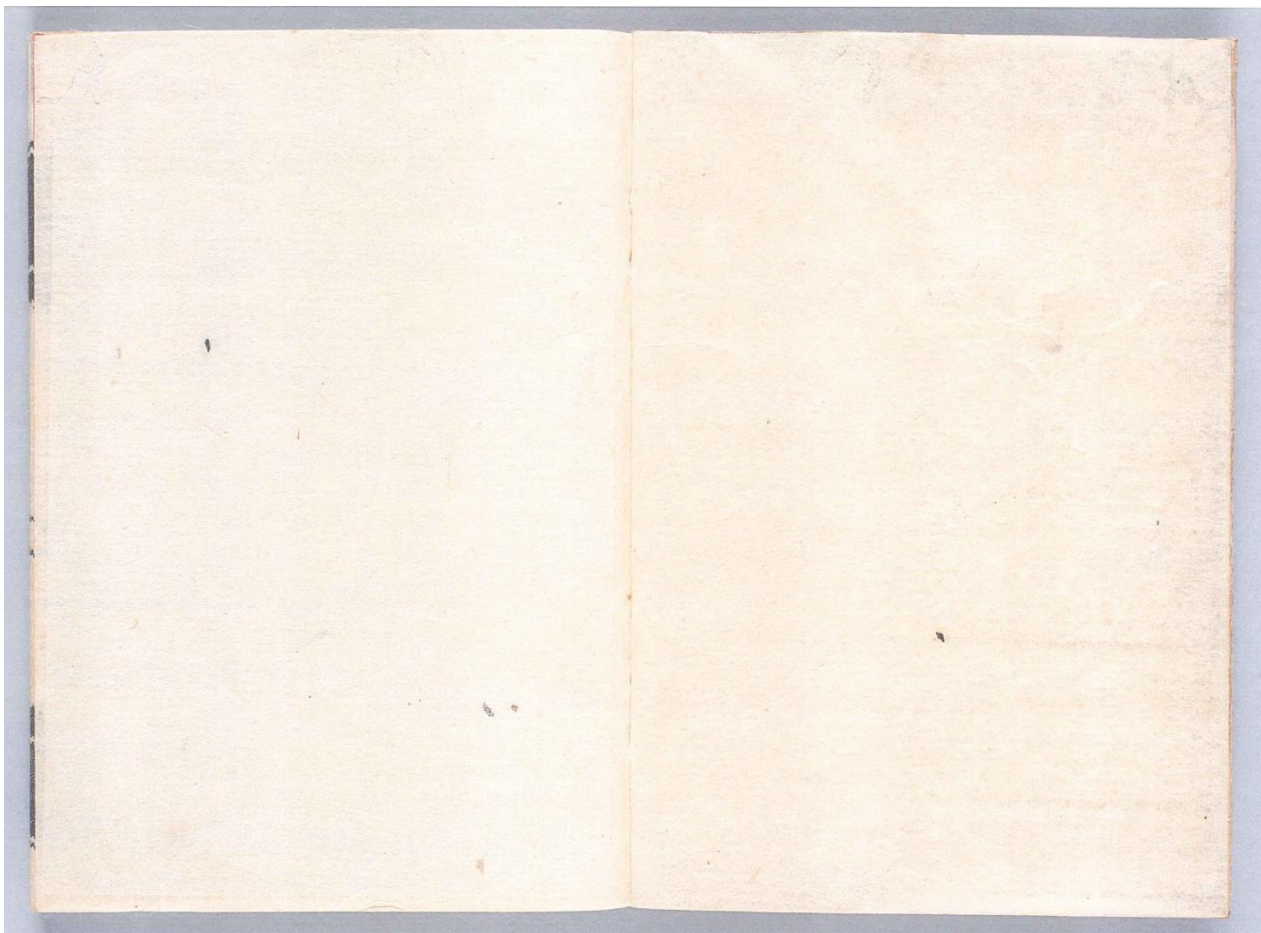
書入20 (29丁表頭欄) 干ハ寒水ニテシヤセンジ一両ヲ茶碗ニ入水一盃半入テドロリトナルホトニセンジツメテヨクコシテソノ中ヘワリタル沈ヲツケテ一時ホドシテヌリ物ノフタニ沈ヲシヤセンジヨクツケテナラベテ一日カケボシニシテ大方ヒタルトキニ合也



(菊亭文庫蔵書票一枚)

(題簽跡)

「
(表紙)



「(表紙見返し)」

「(二丁才)」

死ノ点
清中
朱ノ点
朱ノ丸
南家所持
朱ニテカキタルハ三条ノ説

香具撰様 調様

一蜜者 古ハ黒蜜ナレトモ今ハシヤウジンナキユヘニ

白蜜ハ蜜也用テヨキノハウス物ヘ入テセンナル時
火ニウス物ヲカケテ一時ホドカケル時分ニアハノタヌハ
悪敷蜜トシルヘシアハノ立ノカヨキ也
煎様ハ火ヲヨクヲコシテ灰カキウツメテ手ヲア
テミルニ少アツキホドニシテ蜜ヲウス物ノナベニ入カケ
テ一時ホトシテナヘソウヨウアタママリテナベニ●手ノ
少サヘカナルホドノアツサヨシカクノコトク三日ホドスル也
夜ハ火ノキヘ次第二スル也ベチ二箸ヲ入テネルコトハナキ也

説1

青ノ点
香具撰様 調様

花ノ点 朱ノ丸 花ノ丸
清 中 三西 当家所持 朱ニテカキタルハ三条ノ説
朱ノ点

一蜜者 古ハ黒蜜ナレトモ今ハシヤウジンナキユヘニ
白蜜ハ蜜也用テヨシヨキノハウス物ヘ入テセンナル時
火ニウス物ヲカケテ一時ホドカケル時分ニアハノタヌハ
悪敷蜜トシルヘシアハノ立ノカヨキ也
煎様ハ火ヲヨクヲコシテ灰カキウツメテ手ヲア
テミルニ少アツキホドニシテ蜜ヲウス物ノナベニ入カケ
テ一時ホトシテナヘソウヨウアタママリテナベニ●手ノ
少サヘカナルホドノアツサヨシカクノコトク三日ホドスル也
夜ハ火ノキヘ次第二スル也ベチ二箸ヲ入テネルコトハナキ也

アマリ火ツヨク手ノサ●ヘラレヌモイリツキテアシ
 ウス物ノナヘノフタハ木ノフタモヨシ又カ●ニテヲヒ
 シタルモヨシサテ三日左様ニシテ木フタナラハフタノ
 イケノ露ノ蜜ノ中ヘヲチヌヤウニアケテ蜜ヲ
 ハシニカケテミルニホソ金ノヤウヲ大指ノツメニヲ
 キミルニ少ヒラメニ露ノナリテコボレガヨキ也アマリ
 カタキヲキラフ也サテアケテナベヲ水ニツケテサマス也
 アハハ鳥ノ羽ニテカキヨセテル也香眞屋ノニテモ白蜜ヨ
キ也
 又ハチ蜜ノ上タニテモ木蜜ハ白クカタマリ
 テドロくトシテアル物ナリ蠟ケアル故ナリソレヲ
 蜜ハ蜜 蠟ハ蠟トワケテ●蠟ケヲトリヤウ

アリ●右ノコトクセンジテウヘニウキタルアハ羽
 ニテトリく三日ネリテノチニ水ニナベヲツケテ
 ヲキテサマセハヲノヅカラロウケノブンハ下ニシ
 ズム也ヨキ所ヲシタミテ下ニシヅミタル蠟氣ヲ
 トリステル也

説
2

アマリ火ツヨク手ノサ●ヘラレヌモイリツキテアシ
 ウス物ノナヘノフタハ木ノフタモヨシ又カ●ニテヲヒ
 シタルモヨシサテ三日左様ニシテ木フタナラハフタノ
 イケノ露ノ蜜ノ中ヘヲチヌヤウニアケテ蜜ヲ
 ハシニカケテミルニホソ金ノヤウヲ大指ノツメニヲ
 キミルニ少ヒラメニ露ノナリテコボレガヨキ也アマリ
 カタキヲキラフ也サテアケテナベヲ水ニツケテサマス也
 アハハ鳥ノ羽ニテカキヨセテル也香眞屋ノニテモ白蜜ヨ
キ也
 又ハチ蜜ノ上タニテモ木蜜ハ白クカタマリ
 テドロくトシテアル物ナリ蠟ケアル故ナリソレヲ
 蜜ハ蜜 蠟ハ蠟トワケテ●蠟ケヲトリヤウ

アリ●右ノコトクセンジテウヘニウキタルアハ羽
 ニテトリく三日ネリテノチニ水ニナベヲツケテ
 ヲキテサマセハヲノヅカラロウケノブンハ下ニシ
 ズム也ヨキ所ヲシタミテ下ニシヅミタル蠟氣ヲ
 トリステル也

「(四丁才)

沈ハヒキシマリタル句ノ牛ノフシクサクナキツハ
 キクサクナキヲ用ユコキ^{又アマリコキモアシ}沈ヨキ也シキギンニテ
 キイテミテナニカワリタル句モナキヲヨシトス
 三^{朱ノ丸}条家ニハ沈四両合ナラハ一両二分^{三ツハリ}ホトコ

説7

^{青ノ点}沈

沈ハヒキシマリタル句ノ牛ノフシクサクナキツハ

キクサクナキヲ用ユコキ^{又アマリコキモアシ}沈ヨキ也シキギンニテ

キイテミテナニカワリタル句モナキヲヨシトス

三^{朱ノ丸}条家ニハ沈四両合ナラハ一両二分^{三ツハリ}ホトコ

説8

キ^{但日本ノ}沈^{コキニテモ}粉ニシテトソノ外ハアサキ沈^{但日本ノ}
 トソナカクハリテセントウノハノカタノムネノ方
 ヨリナガク紙ヲホウアテノコトクニシテツケテキ
 ザメバハキヘチラヌ也但少ヒラメニウスキヲ口傳トス
 沈ハタニニヲムク右ノ句ノヤウナルガアル也

キ^{但日本ノ}沈^{コキニテモ}粉ニシテトソノ外ハアサキ沈^{但日本ノ}

トソナカクハリテセントウノハノカタノムネノ方

ヨリナガク紙ヲホウアテノコトクニシテツケテキ

ザメバハキヘチラヌ也但少ヒラメニウスキヲ口傳トス

沈ハタニニヲムク右ノ句ノヤウナルガアル也

「(四丁ウ)

「(五丁オ)

薰ハスノカヨキ也カナウスニテツク斗也

甘松水ニテアラヒセウチウヲフキテカケ

ホシニシテ粉ニスセウチウフキヤウハ

丁子ハ花トマハリノ花ノザトヲトリ粉ニス

麝ハキイテミテシハラクサクナキノヲカミテ

アテニ聞テ後沈ノコトクギンヲシキテキク也

説9

(青ノ点)

薰ハスノカヨキ也カナウスニテツク斗也

説10

(青ノ点)

甘松水ニテアラヒセウチウヲフキテカケ

説11

(青ノ点)

丁子ハ花トマハリノ花ノザトヲトリ粉ニス

説12

(青ノ点)

麝ハキイテミテシハラクサクナキノヲカミテ

アテニ聞テ後沈ノコトクギンヲシキテキク也

「(五丁ウ)

フルヒハ香具ニヨリテカワル也ウコン丁子ハアラ

キ也

書ノ内故實書抜 古法

一沈ハ紫色ニテ水ニシヅムヲ為善又カタクヲクシテ

火ニタクニ灰ノ白キハ能也ヒトツ沈ニモカタクカウハシクカタクハ

ワロキモアリトリマハシテヨキカタヲワリトルヘシカウバシクシテツハ

キクサクナキガヨキ也

一丁子ハ大キニテハブサアリテツメニサスニシルノアルハヨシ

一香附子ハクサノネナリナツメノサネナドノヤウ也竹ノカタナ

説13

書ノ内故實書抜 古法

フルヒハ香具ニヨリテカワル也ウコン丁子ハアラ
キ也

一沈ハ紫色ニテ水ニシヅムヲ為善又カタクヲクシテ

火ニタクニ灰ノ白キハ能也ヒトツ沈ニモカタクカウハシクカタクハ
ワロキモアリトリマハシテヨキカタヲワリトルヘシカウバシクシテツハ

キクサクナキガヨキ也

一丁子ハ大キニテハブサアリテツメニサスニシルノアルハヨシ

一香附子ハクサノネナリナツメノサネナドノヤウ也竹ノカタナ
シテウヘノケヲコソケステ用ル也

「(六丁オ)

一麝香ハイツハレル物多クテマコトナル物スクナシカラク
ニガクシテ火ニヤクニヒサシクワキカヘルハヨシ
一白檀ハ黄色ニテアカマヌハヨシ檜木ノヤウニテヤハラ
カナルハワロシタキテミルベシカウバシキガヨシトヲク句ヲ
トバス物也 アマリコキ句ハアシアカミノアルハアシカルニ
句ノ檜木クサクナキガヨキ也
一薰陸ハ大形コハクニテイロスキトヨリテヒカリアルヲ
ヨシトスシロバミクロキ所アリテ松ヤニニ似タルハワロシ黄
色ニシテ光アルヲヨシトス 香ヲヨク物ニトムル物也
一甘松ハチノ根ニ似タリ無別儀 センジテアブレハ人ノ身ヲ
カウハシカラシム
一熟鬱金ハ紫ノクチタルヤウニテカウハシ
一黄鬱金ハマロタチテスロノミノ色也イカニモ黄色ナ
ルヲ撰用トス

説 16

説 17

説 18

説 19

説 20

説 21

一麝香ハイツハレル物多クテマコトナル物スクナシカラク
ニガクシテ火ニヤクニヒサシクワキカヘルハヨシ
一白檀ハ黄色ニテアカマヌハヨシ檜木ノヤウニテヤハラ
カナルハワロシタキテミルベシカウバシキガヨシトヲク句ヲ
トバス物也 アマリコキ句ハアシアカミノアルハアシカルニ
句ノ檜木クサクナキガヨキ也
一薰陸ハ大形コハクニテイロスキトヨリテヒカリアルヲ
ヨシトスシロバミクロキ所アリテ松ヤニニ似タルハワロシ黄
色ニシテ光アルヲヨシトス 香ヲヨク物ニトムル物也
一甘松ハチノ根ニ似タリ無別儀 センジテアブレハ人ノ身ヲ
カウハシカラシム
一熟鬱金ハ紫ノクチタルヤウニテカウハシ
一黄鬱金ハマロタチテスロノミノ色也イカニモ黄色ナ
ルヲ撰用トス

「(六丁ウ)

或説ニ唐
ハ楠木
枯花木ヲ
ワリナキ
サミ用

調板

一青鬱金ハハジカミノホシタルサマナリワリテミレハ
クチナシノフカキイロナリ
一占唐ハ今ハナシ 代澤写ヲ用也 又母丁ヲ用
是善也
一青木香ハスコシ白色ニテ大キナルヨシ
一藿香ハ葉クキヲ用フルクテ大キナルクキハ悪也
一藷合油ハアリカタキ物ナリ紫ニシテアカ色也
諸香ヲセンシテアハセタル物也
一桂ハウハカワヲヨクコソケテ中ヲ粉ニスル也
一車前子ハフホバコノ実ナリ黒ゴマノヤウニテソレ
ヨリハコマカニ光アル物也
一貝ハツノノ香ヲヨクトノヘル者也
一沈ハコマカニキサミテモデノフルヒニテフルウ也粉ヲスツル也

説 22

説 23 (書入)

説 24

説 25

説 26

説 27

説 28

説 29 (書入)

説 30 (書入)

一青鬱金ハハジカミノホシタルサマナリワリテミレハ
クチナシノフカキイロナリ
一占唐ハ今ハナシ 代澤写ヲ用也 又母丁ヲ用
是善也
一青木香ハスコシ白色ニテ大キナルヨシ
一藿香ハ葉クキヲ用フルクテ大キナルクキハ悪也
一藷合油ハアリカタキ物ナリ紫ニシテアカ色也
諸香ヲセンシテアハセタル物也
一桂ハウハカワヲヨクコソケテ中ヲ粉ニスル也
一車前子ハフホバコノ実ナリ黒ゴマノヤウニテソレ
ヨリハコマカニ光アル物也
一貝ハツノノ香ヲヨクトノヘル者也
一沈ハコマカニキサミテモデノフルヒニテフルウ也粉ヲスツル也

「(七丁オ)

キサミノ大キサハ一分四方ホト黒方ハコマカニ梅花ハアラシ
 一丁子ハキサミテコニシテセイガウノフルイニテフルウ
 ヘシ花ヲサリ目ヲサル也少シアラシ
 一白旦ハキサミテコニスヘシフルヒセイカウナルヘシコマカナルヨシ
 一薰陸ハ粉ニシテセイガウノフルイニテフルウヘシ金白ニテ
 ツキクタク也物ニ付テフルイニモモラヌハ白旦ノ粉ヲチト
 トリ分テグシテツクヘシコノコト秘スヘシ
 一麝香ハ毛ト皮トヲヨクノケテ麝香スリニテスルヘ(ママ)
 ヘシヨクノ粉ニシテセイカウニテフルウヘシ事外料目
 カロクナル物也順逆ニスルベカラス順ナラバ逆ナラバ逆ニスルヘシ
 一甘松ハ一夜酒ニヒタシテソノチ又ノ日ニ布ニツミテ
 水ニテフリスキシボリ日ニホスヘイソグトテ火ニテ

ヨリアラヒテ後一度洗し

アブル事努アルベカラズ或説ニ白水ニテアラヒカゲ
 ボシ又一説アマノクコンナドノヤウナルサケニヒタシテ
 一夜ヲキテシボリアケテヨルノネムシロ下ニヨクツミ
 テソノウヘニネテシキホス
 一藿香ハ甘松ニ同一夜酒ニツケテ布ニツミテ水
 ニテフリスキシボリ日ニホス又説アツキキヌニ
 ツミテ白水ニテ六七トモフリスキシボリアケテカゲホシ
 一黄鬱金ハウハ皮ヲコソゲテキサミテ粉ニスベシ
 一桂心ハウハ皮ヲヨリケツリステ中ヲ粉ニスヘシ
 一青木香ハコレモウヘヲコソゲステ其後粉ニスヘシ
 一安息香ハヨクスリアマツラニマセテ能スリ合
 アマツラヲ以テスコシツキ合半程ニ安息香入テ

説 31

説 32

説 33

説 34

説 35

説 36

説 37

説 38

説 39

説 40

キサミノ大キサハ一分四方ホト黒方ハコマカニ梅花ハアラシ

一丁子ハキサミテコニシテセイガウノフルイニテフルウ

ヘシ花ヲサリ目ヲサル也少シアラシ

一白旦ハキサミテコニスヘシフルヒセイカウナルヘシコマカナルヨシ

一薰陸ハ粉ニシテセイガウノフルイニテフルウヘシ金白ニテ

ツキクタク也物ニ付テフルイニモモラヌハ白旦ノ粉ヲチト

トリ分テグシテツクヘシコノコト秘スヘシ

一麝香ハ毛ト皮トヲヨクノケテ麝香スリニテスルヘ(ママ)

ヘシヨクノ粉ニシテセイカウニテフルウヘシ事外料目

カロクナル物也順逆ニスルベカラス順ナラバ逆ナラバ逆ニスルヘシ

一甘松ハ一夜酒ニヒタシテソノチ又ノ日ニ布ニツミテ

水ニテフリスキシボリ日ニホスベシイソグトテ火ニテ

ヨクアラヒテ後一度洗也

アブル事努アルベカラズ或説ニ白水ニテアラヒカゲ

ボシ又一説アマノクコンナドノヤウナルサケニヒタシテ

一夜ヲキテシボリアケテヨルノネムシロ下ニヨクツミ

テソノウヘニネテシキホス

一藿香ハ甘松ニ同一夜酒ニツケテ布ニツミテ水

ニテフリスキシボリ日ニホス又説アツキキヌニ

ツミテ白水ニテ六七トモフリスキシボリアケテカゲホシ

一黄鬱金ハウハ皮ヲコソゲテキサミテ粉ニスベシ

一桂心ハウハ皮ヲヨリケツリステ中ヲ粉ニスヘシ

一青木香ハコレモウヘヲコソゲステ其後粉ニスヘシ

一安息香ハヨクスリアマツラニマセテ能スリ合

アマツラヲ以テスコシツキ合半程ニ安息香入テ

「(七丁ウ)

「(八丁オ)

アミツラフ入也（口傳）
 一蘊合油ハ花橘ニ入一臍合スルホト耳葛ヲハカラ
 ヒテソレヲ三分テ二分ノ内へ蘊合油ヲヨクノス
 リマゼテ小藥種ヲツキ合テサテ残ノ一分之甘葛
 ヲ入也口傳也クサケヲトルハ湯煎ヨクノシテネレバ
 トレル也可秘
 一澤写ハウヘヲコソゲテ中ヲキザミコニス
 右モロノノ香フルウトキカマヘテカセニアテズシテツカニフ
 ルウヘシアラクスレハ香アラシ又コマカニナレハミメハヨケレトモタク
 キフクレアカリテトクカヘシノカニナル也是ヲヨクカンカヘテヨキ
 ホドニスヘシ
 一フルヒハムラナクウスキ絹ヲハルヘシ又セイカウ
トモイフ 白甲ハメコマカ

説 41

アマツラフ入也此分口傳也

説 42

一蘊合油ハ花橘ニ入一臍合スルホト甘葛ヲハカラ
 ヒテソレヲ三分テ二分ノ内へ蘊合油ヲヨクノス
 リマゼテ小藥種ヲツキ合テサテ残ノ一分之甘葛
 ヲ入也口傳也クサケヲトルハ湯煎ヨクノシテネレバ
 トレル也可秘

説 43

一澤写ハウヘヲコソゲテ中ヲキザミコニス
 右モロノノ香フルウトキカマヘテカセニアテズシテツカニフ
 ルウヘシアラクスレハ香アラシ又コマカニナレハミメハヨケレトモタク
 キフクレアカリテトクカヘシノカニナル也是ヲヨクカンカヘテヨキ
 ホドニスヘシ

「（八丁ウ）

説 44

（書入 4）

ナルヘシ沈丁ハメアラカルベシ
 一沈ナドツクコトアルトキ沈バカリツキテ久クヲキタルハ匂
 アハテハワロキ也

説 45

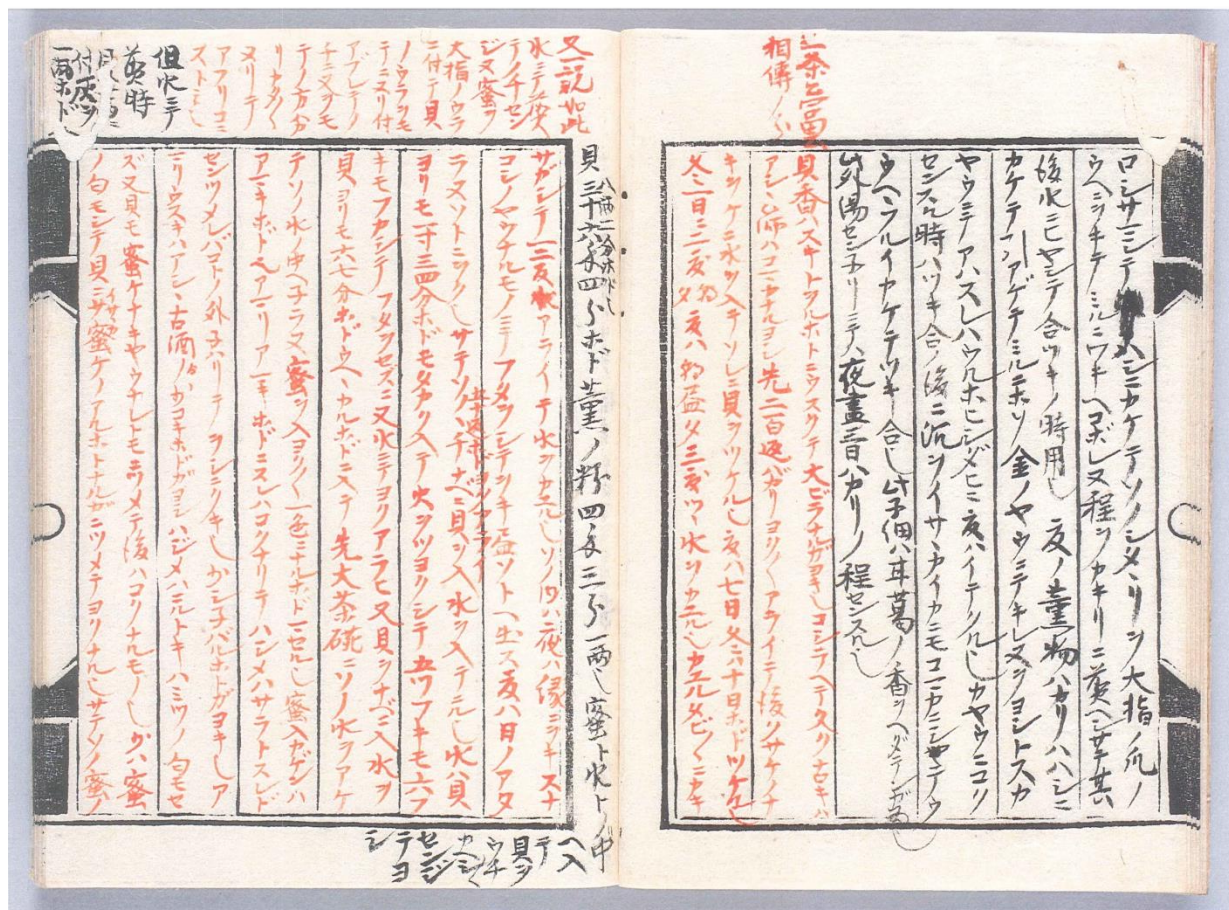
一イマダアハセヌサキニハ香ドモヨクノベチノニスベシチリホドモカ
 ヨヒヌレバ香ヲウシナフ沈丁子ハコトニナカアシキ物也

説 46

一蜜ハ黒蜜ヨシ先ギヌニテモヒサゲニシタミ入テセンスル也
 灰ハヨクフルヒテカタキスミノ火ヲコシテ灰ヲウスノトカケ
 テメテタクウツミテヒサケノソコ火ノアハヒ三寸ハカリアルヘ
 シ火ノアツサ同シヤウニシテ火ヲヌルノトシテ二日三日ホトヨシ
 又ハ一日ガホド煎ヘシサテヒサケノソコニヨリナトタマリテ
 煎ニコガレツキナドスルコトシカルヘカラスサイノニカキタテ
 アハヲトリテアハノエウナキトキハセセンジテ火ノ上ヨリヲ

「（九丁オ）

作耳葛
 一沈ナドツクコトアルトキ沈バカリツキテ久クヲキタルハ匂
 アハテハワロキ也
 一イマダアハセヌサキニハ香ドモヨクノベチノニスベシチリホドモカ
 ヨヒヌレバ香ヲウシナフ沈丁子ハコトニナカアシキ物也
 一蜜ハ黒蜜ヨシ先ギヌニテモヒサゲニシタミ入テセンスル也
 灰ハヨクフルヒテカタキスミノ火ヲコシテ灰ヲウスノトカケ
 テメテタクウツミテヒサケノソコ火ノアハヒ三寸ハカリアルヘ
 シ火ノアツサ同シヤウニシテ火ヲヌルノトシテ二日三日ホトヨシ
 又ハ一日ガホド煎ヘシサテヒサケノソコニヨリナトタマリテ
 煎ニコガレツキナドスルコトシカルヘカラスサイノニカキタテ
 アハヲトリテアハノエウナキトキハセセンジテ火ノ上ヨリヲ



説
47

(書入5)

ロシサマシテ●ハシニカケテソノシタヽリヲ大指ノ爪ノ
ウヘニフキテミルニワキヘコボレヌ程ヲカキリニ煎ヘシサテ其
後水ニヒヤシテ合ツキノ時用也夏ノ薫物ハカリハハシニ
カケテ引アゲテミルニホソ金ノヤウニテキレヌヲヨシトスカ
ヤウニテアハスレハウルホヒシダヒニ夏ハイテクル也カヤウニコク
センスル時ハツキ合ノ後ニ沈ワイサヽカイカニモコマカニシ●テウ
ウヘヽフルイカケテツキ合也此子細ハ甘葛ノ香ヲヘダテンガ為也
此外湯センネリニテハ夜晝三日ハカリノ程センスル也

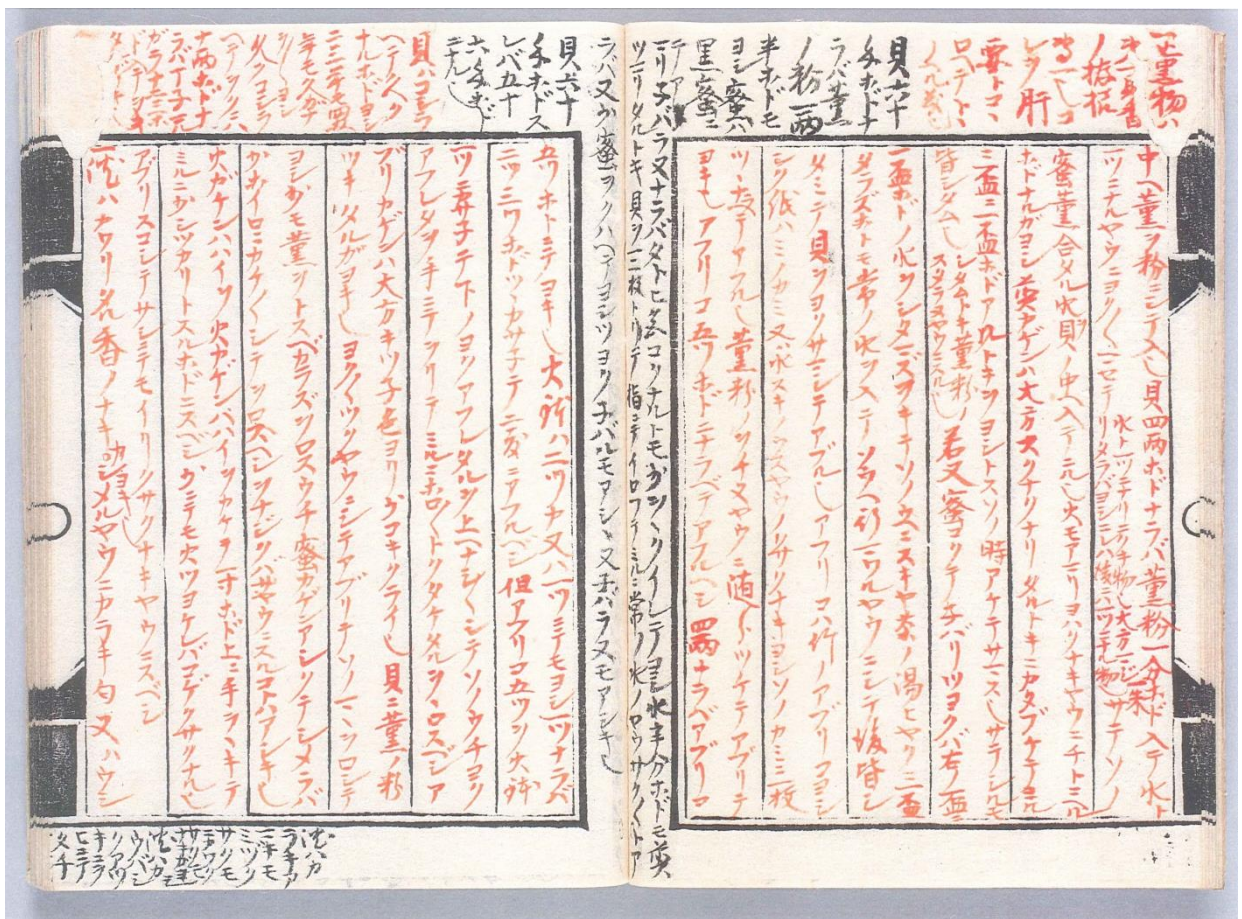
貝香ハスキトアルホトニウスクテ大ビラナルガヨキ也コシラヘテ久ク古キハ
アシヽ篩コマカナルヨシ先二百返バカリヨクヽアライテ後クサケノナ
キヲケニ水ヲ入テソレニ貝ヲツケル也夏ハ七日冬ハ十日ホドツケル也
冬一日ニ二度^朝夏ハ朝昼夕三度ツヽ水ヲカユル也カユルタビヽニカキ

(書入7 続文)

(書入6)

(書入7)

サガシテ二反アライテ水ヲカユル也ソノ内ハ夜ハ縁ニヨキスナ
コシノヤウナルモノニテフタヲシテヨキ昼ソトヘ出ス夏ハ日ノアタ
ラヌソトニヲク也サテソノ^{五十返ホドヨクアライ}チナベニ貝ヲ入水ヲ入テニル也水ハ貝
ヨリモ一寸三四分ホドモタカク入テ火ヲツヨクシテ五ツフキモ六フ
キモフカシテフタヲセズニ又水ニテヨクアラヒ又貝ヲナベニ入水ヲ
貝ヨリモ六七分ホドウヘヽカルホドニ入テ先大茶碗ニソノ水ヲアケ
テソノ水ノ中ヘネラヌ蜜ヲ入ヨクヽ一色ニナルホドマセル也蜜入カゲンハ
アマキホド也アマリアマキホドニスレハコクナリテハシメハサラトスレド
センツメレバコトノ外ネハリテヲシニクキ也少シネバルホトガヨキ也ア
マリウスキハアシヽ古酒^{より}ノ少コキホドガヨシハジメハニルトキハミツノ匂モセ
ズ又貝モ蜜ケナキヤウナレトモニツメテ後ハコクナルモノ也少ハ蜜
ノ匂モシテ貝ニ少蜜ケノアルホトナルガニツメテヨクナル也サテソノ蜜ノ



説
48

(書入 10)

(書入 9)

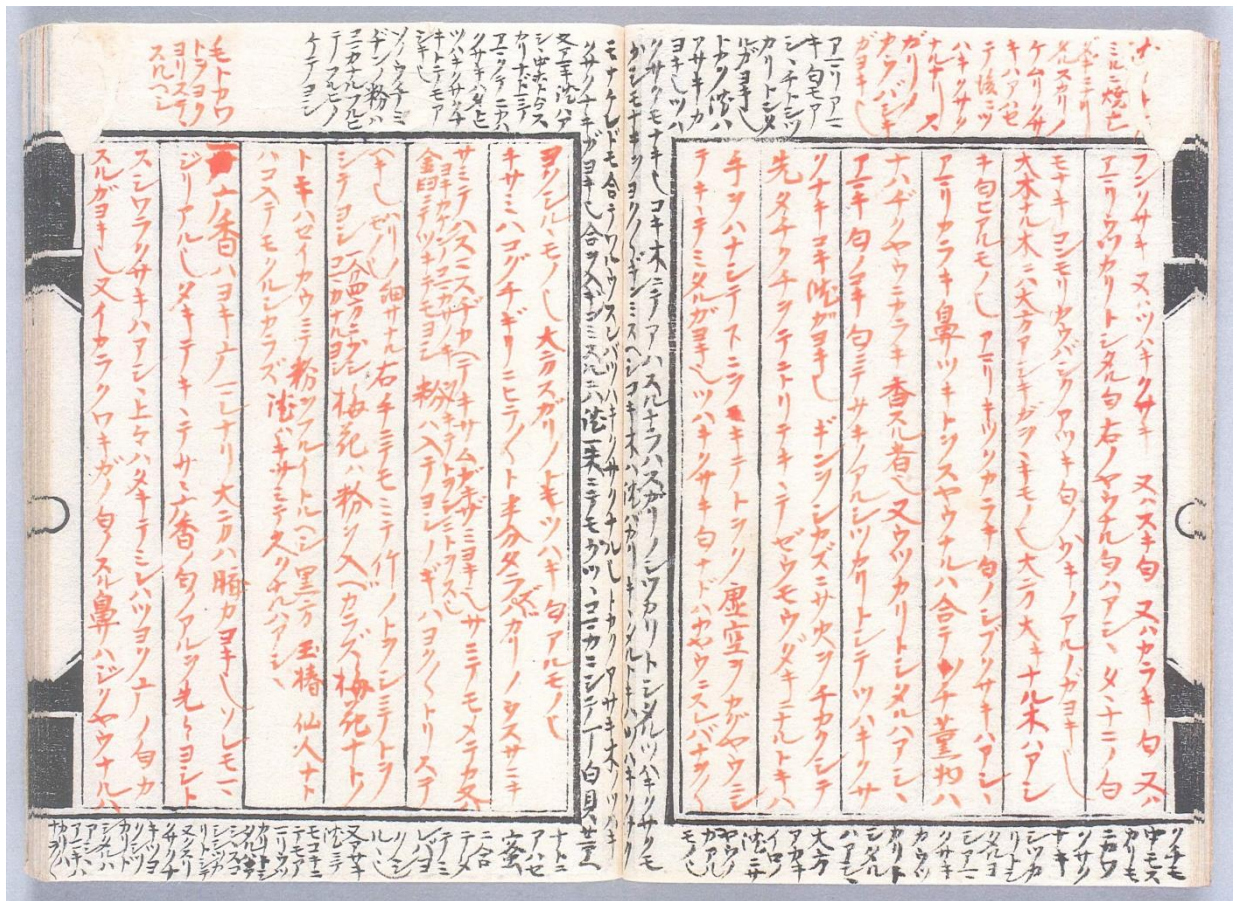
(書入 8)

中へ薫ヲ粉ニシテ入也貝四両ホドナラバ薫粉一分^{ホド}入テ水ト
 一ツニナルヤウニヨクくマセテサテソノ^{水ト一ツニナリニクキ物也大方マジ}
 蜜薰合タル水貝^ヲノ中へ入テニル也火モアマリヨハクナキヤウニチト二ヘル
 ホドナルガヨシ煎カゲンハ大方スクナクナリタルトキニカタブケテミル
 二盃ニ一盃ホドアルトキヲヨシトスソノ時アケテサマス也サテシルモ
 皆シタム也^{シタムトキ薫粉ノ}スタラヌヤウニスル也 若又蜜コクテネバリツヨクバ右ノ盃ニ
 一盃ホドノ火ヲシタマズヲキテソノウヘニスキヤ茶ノ湯ヒヤク三盃
 タラズホトモ常ノ水ヲ入テソウヘ行マワルヤウニシテ後皆シ
 タミテ貝ヲヨクサマシテアブル也アフリコハ竹ノアブリコヨシ
 シク紙ハミノカミ又ハ水スキノウスヤウノクサクナキヨシソノカミニ一枚
 ツナナラヘテアフル也薫粉ノヲチヌヤウニ随分ツケテアブリテ
 ヨキ也アフリコ五ツホドニナラベテアフルヘシ四両ナラバアブリコ
 五ツホトニテヨキ也火鉢ハニツカ又一ツニテモヨシ一ツナラバ
 ニツ三ツホドツカサネテ二度ニアフルベシ但アフリコ五ツヲ火鉢
 一ツニカサネテ下ノヨクアフレタルヲ上ヘナシくシテソノウチヨク
 アフレタヲ手ニテフリテミルニホロくトクタケタルヲロスベシア
 ブリカゲンハ大方キツネ色ヨリ少コキクライ也貝ニ薫ノ粉
 ツキタルガヨキ也ヨクくツクヤウニシテアブリテソノマヲロシテ
 ヨシ少モ薫ヲトスベカラズブロスウチ蜜カゲンアシクテシメラバ
 少ホイロニカケくシテヲロスヘシヲナジクバサヤウニスルコトハアシキ也
 火ガケンハハイヲ火カゲンハハイヲカケテ一寸ホド上ニ手ヲキテ
 ミルニ少シツカリトスルホドニスベシ少ニテモ火ツヨケレバコゲクサクナル也
 アブリスコシテ少シニテモイリクサクナキヤウニスベシ
 一沈ハカワリタル香ノナキ^{カヨキ也}シメルヤウニカラキ匂又ハウシ

(書入 11)

「(一一)丁オ

「(一〇)丁ウ



説
49

(書入 15)

フンクサキ 又ハツハキクサキ 又ハスキ句 又ハカラキ句 又ハ
アマリウツカリトシタル句 右ノヤウナル句ハアシタナニノ句
モナキ コンモリカウバシクアツキ句ノ少キノアルノガヨキ也
大木ナル木ニハ大方アシキガヲキモノ也大方大キナル木ハアシ
キ句ヒアルモノ也アマリキツクカラキ句ノシブクサキハアシ
アマリカラキ鼻ツキトフスヤウナルハ合テノチ薫物ハ
ナハデクヤウニカラキ香スル者也又ウツカリトシタルハアシ
アマキ句ノコキ句ニテ少キノアルシツカリトシテツハキクサ
クナキコキ沈ガヨキ也ギンヲシカズニ少火ヲチカクシテ
先タチクチヲテニトリテキテゼウモウダキニナルトキハ
手ヲハナシテ下ニヲ●キテトヲク虚空ヲカグヤウニシ
テキトミタルガヨキ也ツハキクサキ句ナドハカヤウニスレバナヲ

(書入 14)

ヨクシルモノ也大方スガリノトキツハキ句アルモノ也
キサミハコグチギリニヒラノト半分タラズバカリノウスサニキ
サミテハスニズカヘテキサムガキサミヨキ也サニテモメテカ又ハ
ヨキカケンノコマカサノキヲキテトヲシニトラス也
金田ニテツキテモヨシ粉ハ入テヨシノギハヨクノトリステ
ヘキ也 分ノ細ナル 右手ニテモミテ竹ノトヲシニテトヲ
シテヨシ 一分四十分 梅花ハ粉ヲ入ベカラズ梅花ナトノ
トキハセイカウニテ粉ヲフルイトルヘシ 黒方 玉椿 仙人ナト
ハコ入テモクルシカラズ 沈ハキサミテ久ナナルハシ

(書入 13 続文)

ヨクシルモノ也大方スガリノトキツハキ句アルモノ也
キサミハコグチギリニヒラノト半分タラズバカリノウスサニキ
サミテハスニズカヘテキサムガキサミヨキ也サニテモメテカ又ハ
ヨキカケンノコマカサノキヲキテトヲシニトラス也
金田ニテツキテモヨシ粉ハ入テヨシノギハヨクノトリステ
ヘキ也 分ノ細ナル 右手ニテモミテ竹ノトヲシニテトヲ
シテヨシ 一分四十分 梅花ハ粉ヲ入ベカラズ梅花ナトノ
トキハセイカウニテ粉ヲフルイトルヘシ 黒方 玉椿 仙人ナト
ハコ入テモクルシカラズ 沈ハキサミテ久ナナルハシ

(書入 13)

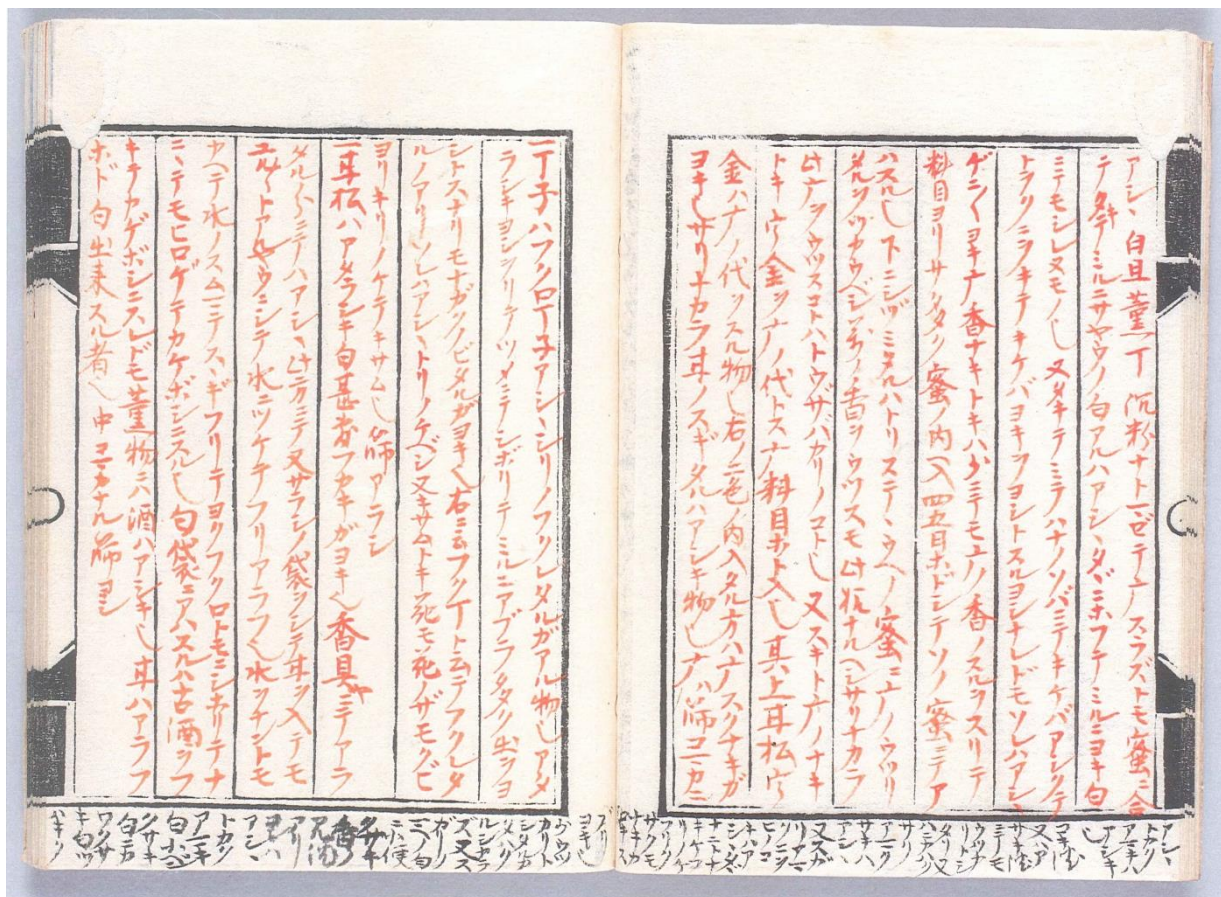
ヨクシルモノ也大方スガリノトキツハキ句アルモノ也
キサミハコグチギリニヒラノト半分タラズバカリノウスサニキ
サミテハスニズカヘテキサムガキサミヨキ也サニテモメテカ又ハ
ヨキカケンノコマカサノキヲキテトヲシニトラス也
金田ニテツキテモヨシ粉ハ入テヨシノギハヨクノトリステ
ヘキ也 分ノ細ナル 右手ニテモミテ竹ノトヲシニテトヲ
シテヨシ 一分四十分 梅花ハ粉ヲ入ベカラズ梅花ナトノ
トキハセイカウニテ粉ヲフルイトルヘシ 黒方 玉椿 仙人ナト
ハコ入テモクルシカラズ 沈ハキサミテ久ナナルハシ

(書入 12)

フンクサキ 又ハツハキクサキ 又ハスキ句 又ハカラキ句 又ハ
アマリウツカリトシタル句 右ノヤウナル句ハアシタナニノ句
モナキ コンモリカウバシクアツキ句ノ少キノアルノガヨキ也
大木ナル木ニハ大方アシキガヲキモノ也大方大キナル木ハアシ
キ句ヒアルモノ也アマリキツクカラキ句ノシブクサキハアシ
アマリカラキ鼻ツキトフスヤウナルハ合テノチ薫物ハ
ナハデクヤウニカラキ香スル者也又ウツカリトシタルハアシ
アマキ句ノコキ句ニテ少キノアルシツカリトシテツハキクサ
クナキコキ沈ガヨキ也ギンヲシカズニ少火ヲチカクシテ
先タチクチヲテニトリテキテゼウモウダキニナルトキハ
手ヲハナシテ下ニヲ●キテトヲク虚空ヲカグヤウニシ
テキトミタルガヨキ也ツハキクサキ句ナドハカヤウニスレバナヲ

(書入 11 続文)

(書入 13 続文)



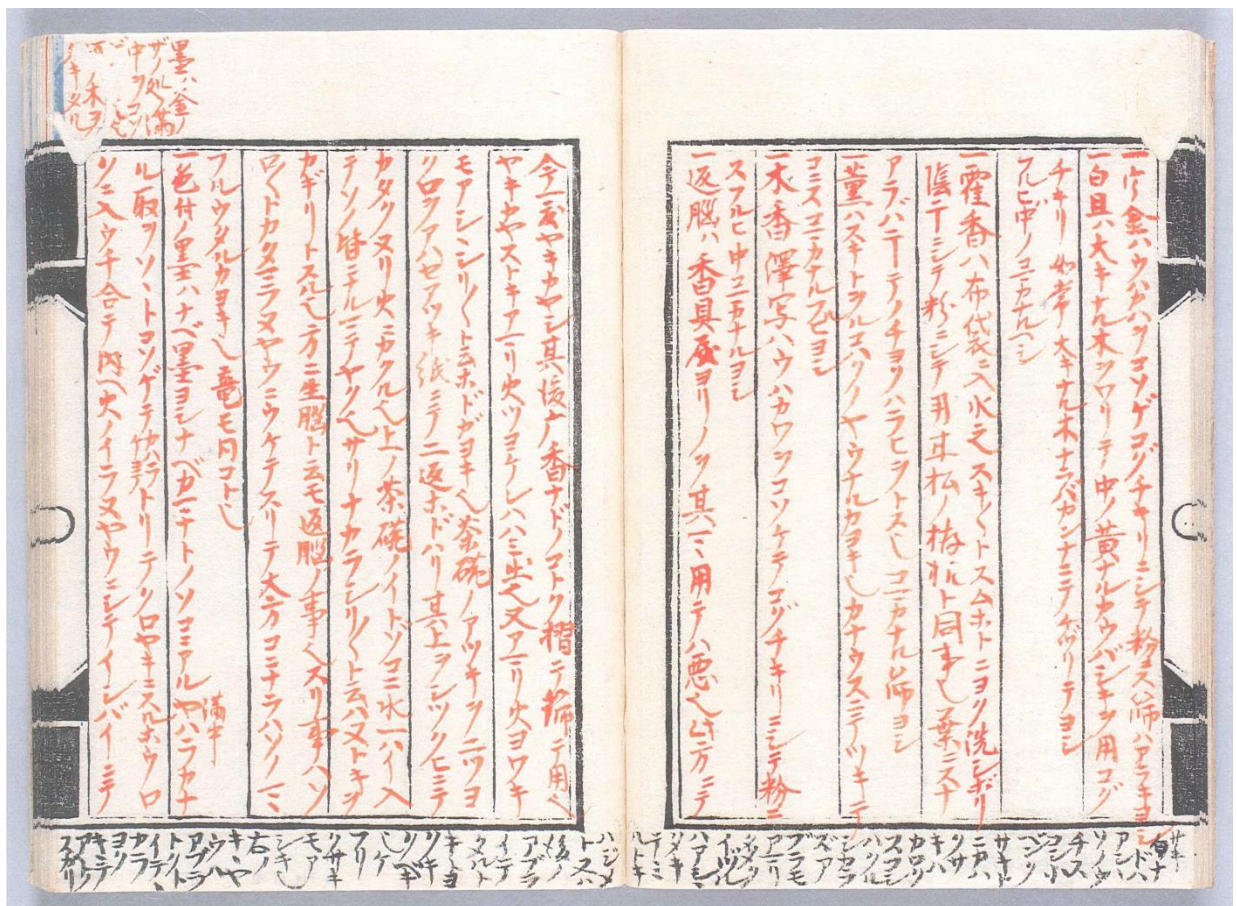
説
51

アシ、白且、薰丁、沈粉ナトマゼテ麝スラズトモ蜜ニ合
テタデミルニサヤウノ匂アルハアシ、タゞニホフテミルニヨキ匂
ニテモシレヌモノ也又タキテミテハナノソバニテキケバアシクテ
トヲクニヲキテキケバヨキヲヨシトスルヨシナレドモソレハアシ、
ゲニ、ヨキ麝香ナキトキハ少ニテモ麝ノ香ノスルヲスリテ
料目ヨリ少多ク蜜ノ内へ入四五日ホドシテソノ蜜ニテア
ハスル也下ニシジミタルハトリステ、ウヘノ蜜ニ麝ノウツリ
タルヲツカウベシ菊ノ香ヲウツスモ此様ナルヘシサリナカラ
此麝ヲウツスコトハトウザバカリノコト也又スキト麝ノナキ
トキ宇金ヲ麝ノ代トス麝料目ホト入也其上甘松宇
金ハ麝ノ代ヲスル物也右ノ二色ノ内入タル方ハ麝スクナキガ
ヨキ也サリナカラ甘ノスギタルハアシキ物也麝ハ篩コマカニ
一丁子ハフクロ丁子アシ、シリノフクレタルガアル物也アタ
ラシキヨシヲリテツメニテシボリテミルニアブラ多ク出ヲヨ
シトスナリモナガクノビタルガヨキ也右ニ云フク丁ト云テフクレタ
ルノアリソレハアシ、トリノゾケベシ又キサムトキ花モ花ノザモクビ
ヨリキリノケテキサム也篩アラシ
一甘松ハアタラシキ匂甚敷フカキガヨキ也香具ニテアラ
タル分ニテハアシ、此方ニテ又サラシノ袋ヲシテ甘ヲ入テモ
ユル、トアルヤウニシテ水ニツケテフリアラフ也水ヲナントモ
カヘテ水ノスムマテス、ギフリテヨクフクロトモニシホリテナ
ニ、テモヒロゲテカケボシニスル也匂袋ニアハスルハ古酒ヲフ
キテカゲボシニスレドモ薰物ニハ酒ハアシキ也甘ハアラフ
ホド匂出来スル者也中コマカナル篩ヨシ

説
50

アシ、白且、薰丁、沈粉ナトマゼテ麝スラズトモ蜜ニ合
テタデミルニサヤウノ匂アルハアシ、タゞニホフテミルニヨキ匂
ニテモシレヌモノ也又タキテミテハナノソバニテキケバアシクテ
トヲクニヲキテキケバヨキヲヨシトスルヨシナレドモソレハアシ、
ゲニ、ヨキ麝香ナキトキハ少ニテモ麝ノ香ノスルヲスリテ
料目ヨリ少多ク蜜ノ内へ入四五日ホドシテソノ蜜ニテア
ハスル也下ニシジミタルハトリステ、ウヘノ蜜ニ麝ノウツリ
タルヲツカウベシ菊ノ香ヲウツスモ此様ナルヘシサリナカラ
此麝ヲウツスコトハトウザバカリノコト也又スキト麝ノナキ
トキ宇金ヲ麝ノ代トス麝料目ホト入也其上甘松宇
金ハ麝ノ代ヲスル物也右ノ二色ノ内入タル方ハ麝スクナキガ
ヨキ也サリナカラ甘ノスギタルハアシキ物也麝ハ篩コマカニ
一丁子ハフクロ丁子アシ、シリノフクレタルガアル物也アタ
ラシキヨシヲリテツメニテシボリテミルニアブラ多ク出ヲヨ
シトスナリモナガクノビタルガヨキ也右ニ云フク丁ト云テフクレタ
ルノアリソレハアシ、トリノゾケベシ又キサムトキ花モ花ノザモクビ
ヨリキリノケテキサム也篩アラシ
一甘松ハアタラシキ匂甚敷フカキガヨキ也香具ニテアラ
タル分ニテハアシ、此方ニテ又サラシノ袋ヲシテ甘ヲ入テモ
ユル、トアルヤウニシテ水ニツケテフリアラフ也水ヲナントモ
カヘテ水ノスムマテス、ギフリテヨクフクロトモニシホリテナ
ニ、テモヒロゲテカケボシニスル也匂袋ニアハスルハ古酒ヲフ
キテカゲボシニスレドモ薰物ニハ酒ハアシキ也甘ハアラフ
ホド匂出来スル者也中コマカナル篩ヨシ

(書入 13 続文)



説 52
説 53

説 54

説 55

説 56

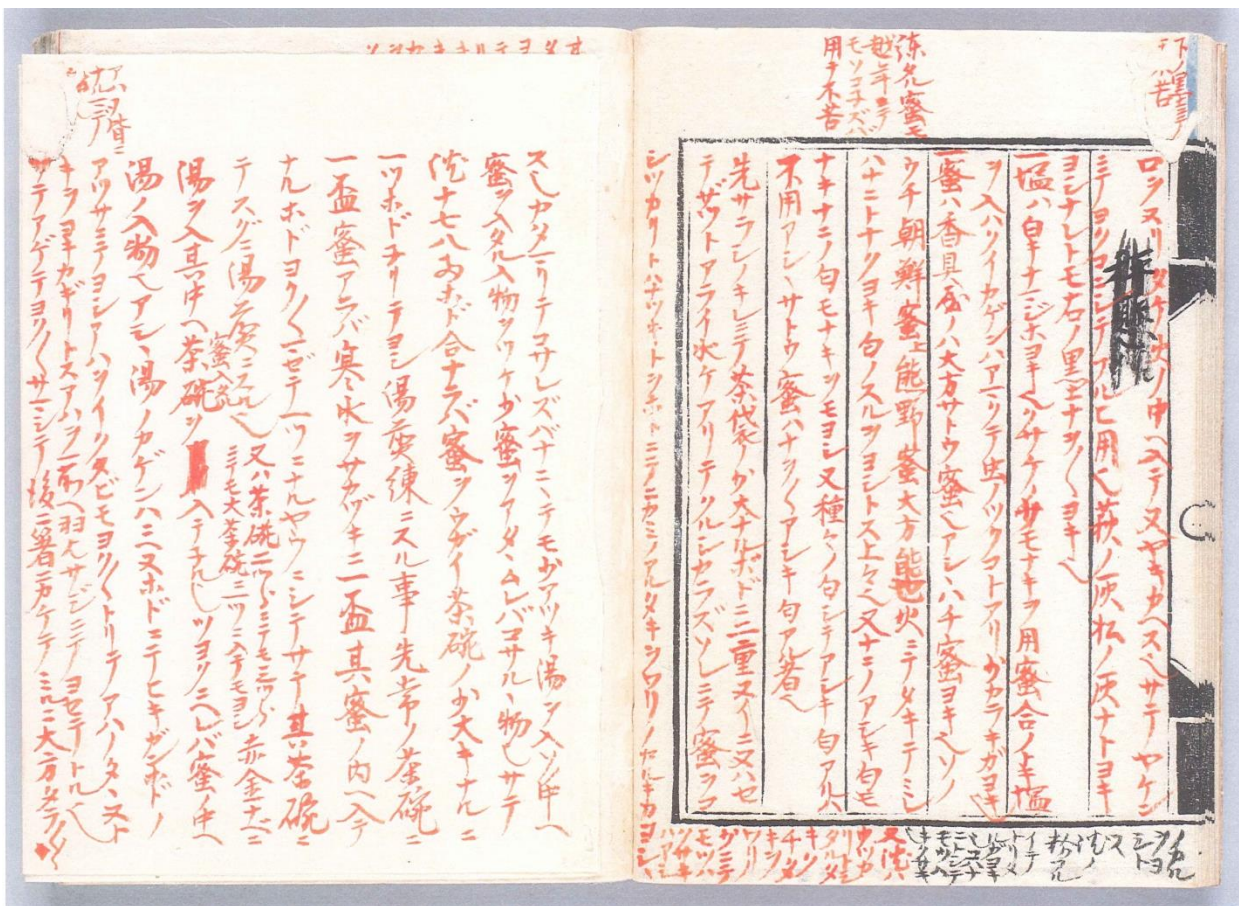
説 57

説 58

(書入 16)

一宇金ハウハカハヲコソゲコグチキリニシテ粉ニス篩ハアラキヨシ
一白且ハ大キナル木ヲワリテ中ノ黄ナルカウバシキヲ用コグ
チキリ如常大キナル木ナラバカンナニテケヅリテヨシ
フルヒ中ノコマカナルヘシ
一霍香ハ布袋ニ入水之スキノトスムホトニヨク洗シボリ
陰ニシテ粉ニシテ用甘松ノ拵様ト同事也葉ニスナ
アラバ干テノチヨクハラヒヲトス也コマカナル篩ヨシ
一薫ハスキトフルコハクノヤウナルカヨキ也カナウスニテツキテ
コニスコマカナルフルビヨシ
一木香澤写ハウハカワヲコソケテコグチキリニシテ粉ニ
スフルヒ中コマカナルヨシ
一返腦ハ香具屋ヨリノヲ其マノ用テハ悪也此方ニテ
今一度ヤキカヤシ其後麝香ナドノコトク摺テ篩テ用也
ヤキカヤストキアマリ火ツヨケレハハミ出也又アマリ火ヨワキ
モアシシリノト云ホドガヨキ也茶碗ノアツキヲ二ツヨ
クロヲアハセアツキ紙ニテ二返ホドハリ其上ヲシツクヒニテ
カタクヌリ火ニカクル也上ノ茶碗ノイトゾコニ水一ハイ入
テソノ皆ニナルマテヤク也サリナカラシリノト云ハ又トキヲ
カギリトスル也方ニ生腦ト云モ返腦ノ事也スリ事ハソ
ロノトカタマラヌヤウニウケテスリテ大方コニナラハソノマ
フルウタルカヨキ也竜モ同コト也
一色付ノ墨ハナベ墨ヨシナベカマナトノソコニアルヤハラカナ
ル所ヲソノトコソゲテ^{カハラ}トリテクロヤキニスルホウロ
クニ入ウチ合テ内^{ケテ}火ノイラヌヤウニシテイシバイニテ

(書入 13 続文)



(書入 19)

説 60 (書入 17) 説 59 (書入 16 続文)

秤懸様

ロヲヌリタケ火ノ中へ入テ又ヤキカヘス也サテヤケン

ニテヨクコニシテフルヒ用也萩ノ灰松ノ灰ナトヨキ

ヨシナレトモ右ノ墨ナヲノヨキ也

一塩ハ白キナマジホヨキ也クサケノ少モナキヲ用蜜合ノトキ塩

ヲ入ハクイカゲンハアマクテ虫ノツクコトアリ少カラキガヨキ也

一蜜ハ香具屋ノ大方サトウ蜜也アシハチ蜜ヨキ也ソノ

ウチ朝鮮蜜熊野蜜大方能也火ニテタキテミレ

ハナニトナクヨキヨノスルヲヨシトス上々也又ナニノアシキヨモ

ナキナニノヨモナキヲモヨシ又種々ノヨシテアシキヨアルハ

不用アシハチサトウ蜜ハナヲノアシキヨアル者也

先サラシノキレニテ茶袋ノ少大ナルホドニ二重又イニヌハセ

テザツトアライ水ケアリテクルシカラズソレニテ蜜ヲコ

ス也カタマリテコサレズバナニテモ少アツキ湯ヲ入ソノ中へ

蜜ヲ入タル入物ヲツケ少蜜ヲアタムレバコサル物也サテ

沈十七八両ホド合ナラバ蜜ヲウガイ茶碗ノ少大キナルニ

一ツホドネリテヨシ湯煎練ニスル事先常ノ茶碗ニ

一不蜜アラバ寒水ヲサカヅキニ一不蜜其蜜ノ内へ入テ

ナルホドヨクノマゼテ一ツニナルヤウニシテサテ其茶碗ニ

テスグニ湯煎ニスル也

湯ヲ入其中へ茶碗ヲ●入テネル也ツヨクニレバ蜜ノ中へ

湯ノ入物也アシハチ湯ノカゲンハニヌホドニテヒキガンホドノ

アツサニテヨシアハライクタビモヨクノトリテアハノタヌト

キヲヨキカギリトスアハヲ一所へ羽敷サジニテヨセテトル也

サテアゲテヨクノサマシテ後ニ箸ニカケテミルニ大方タラク

(書入 18)

(書入 13 続文)

「(挿入一第二面)

チンチンントヲツルヲモトスアマリチバラヌガヨキ
又アマリサクイハ又アシムマリネバラバソノチモ又寒
ノ水ヲ入テヨキ也イカホドネルトモ右ノゴトクガヨキ也
アマリカタクモナクバ寒ノ水ヲ入^ズニナリトモヨシネリテ
ノチニ寒水ヲ入テモヨキ也但カタクトモ寒ノ水少敷又入ズニ
ヨクネリテノチニヨキカゲンニ寒水ヲ入テヨシアマリカタク
ネバキハタクトキワキアガリテアシキ也

説
61

(書入 20)

薫物雜々口傳

一先焼物ハ香具ヲソロヘタルガヨキ也アシキ香具ナラハドノ
香具モ同様ニアシキガヨキ也一色ニテモソロハヌノガアシキ也
トカクヨキ香具ノソロウタルガヨキ也

一薫物ハ沈麝^ハノ香ヲセントス 方ハ沈ノヲ^ハキガ匂ヨキ也

沈ノ両目ヨリソウヨウノ香具ニシテヲ^ハキハアシキ方

薫トハスコシテモ不荒ハ少スコシテナクヨシナラキハアシ

一薫物ハホシガコンボン也ホシヨリシタテタル者也

一香具調トキアシキカノ少モセヌヤウニキサム物モヨノカウグノカ

ソノアシキカノセヌ物ニテ調テヨシヨノ香ニアヤカリタガル物也

一香具コシラヘテ後香具トモ香ノカヨウヌヤウナルホドトヲク

ベチノ^ハニシテヨシアハスルマテハ左様ニシテヨシ香ノ内ニニクミキ

ライアル也香具コシラヘテノチハフルイノ箱ナドニデキニヲキタ

ルハアシメ合マデハ美濃紙カウスヤウノクサクナキニツミテ余ノ

香具ノカヨハヌヤウニツミテフルイノ箱力ナニ箱ニナリトモ別^ハニ

「挿入一第三面」

三奈
香具

薫物雜々口傳

一先焼物ハ香具ヲソロヘタルガヨキ也アシキ香具ナラハドノ
香具モ同様ニアシキガヨキ也一色ニテモソロハヌノガアシキ也
トカクヨキ香具ノソロウタルガヨキ也

一薫物ハ沈麝^ハノ香ヲセントス 方ハ沈ノヲ^ハキガ匂ヨキ也

沈ノ両目ヨリソウヨウノ香具ニシテヲ^ハキハアシキ方

薫トハスコシテモ不荒ハ少スコシテナクヨシナラキハアシ

一薫物ハホシガコンボン也ホシヨリシタテタル者也

一香具調トキアシキカノ少モセヌヤウニキサム物モヨノカウグノカ

ソノアシキカノセヌ物ニテ調テヨシヨノ香ニアヤカリタガル物也

一香具コシラヘテ後香具トモ香ノカヨウヌヤウナルホドトヲク

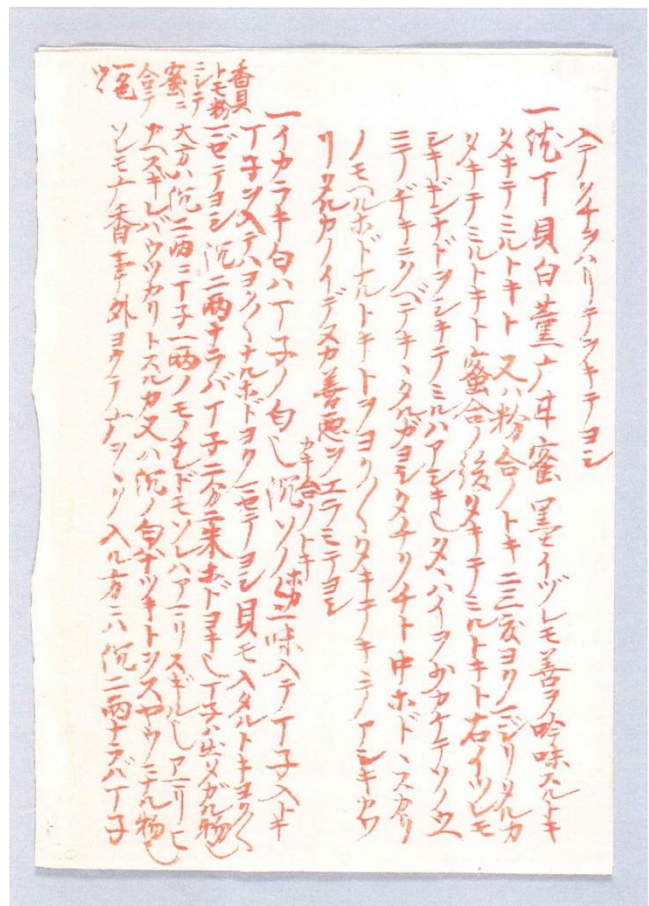
ベチノ^ハニシテヨシアハスルマテハ左様ニシテヨシ香ノ内ニニクミキ

ライアル也香具コシラヘテノチハフルイノ箱ナドニデキニヲキタ

ルハアシメ合マデハ美濃紙カウスヤウノクサクナキニツミテ余ノ

香具ノカヨハヌヤウニツミテフルイノ箱力ナニ箱ニナリトモ別^ハニ

「挿入一第三面」



説
66

説
67

(書入 21)

入テクチヲハリテヲキテヨシ

一沈丁貝白蜜麝甘蜜墨イヅレモ善ヲ吟味スルトキ

タキテミルトキト又ハ粉合ノトキニ三度ヨクマジリタルカ

タキテミルトキト蜜合ノ後タキテミルトキト右イツレモ

シキギンナドヲシキテミルハアシキ也タハハイヲ少カケテソノウヘ

ニテデキニクベテキタルガヨシタチクチト中ホドハスカリ

ノモヘルホドナルトキトヨクノタキテキテアシキカワ

リタルカノイデヌカ善悪ヲエラミテヨシ

一イカラキ匂ハ丁子ノ匂也沈ソノ今一味入テ丁子入トキ

丁子ヲ入テハヨクノナルホドヨクマセテヨシ貝モ入タルトキヨクノ

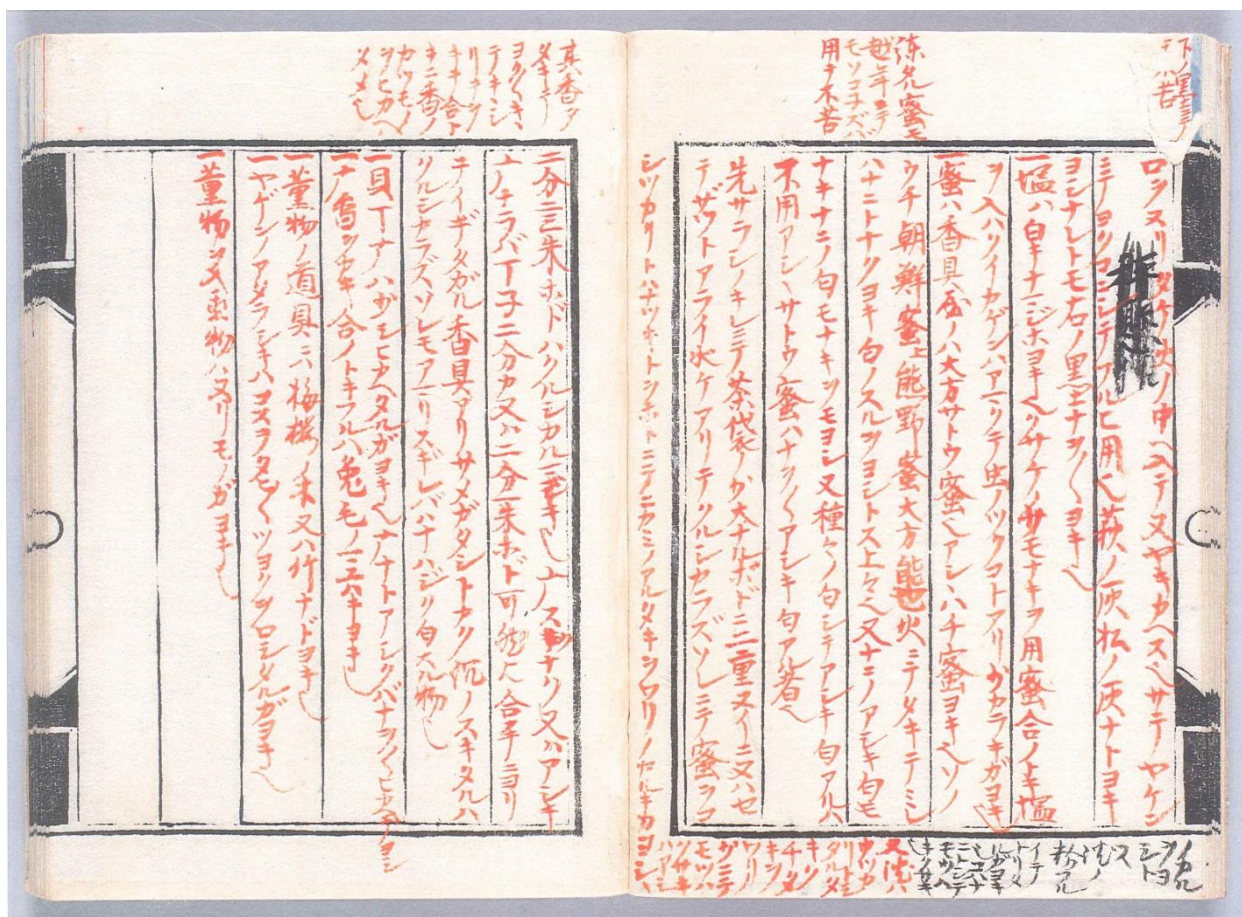
マゼテヨシ沈二両ナラバ丁子二分ニ朱ホドヨキ也丁子ハ出タガル物也

大方ハ沈二両ニ丁子一両ノモノナレドモソレハアマリスギル也アマリヒ

カヘスギレバウツカリトスルカ又ハ沈ノ匂ハナツキトラスヤウニナル物也

ソレモ麝香事外ヨクテ麝ヲノク入ル方ニハ沈二両ナラバ丁子

「(挿入一第四面)

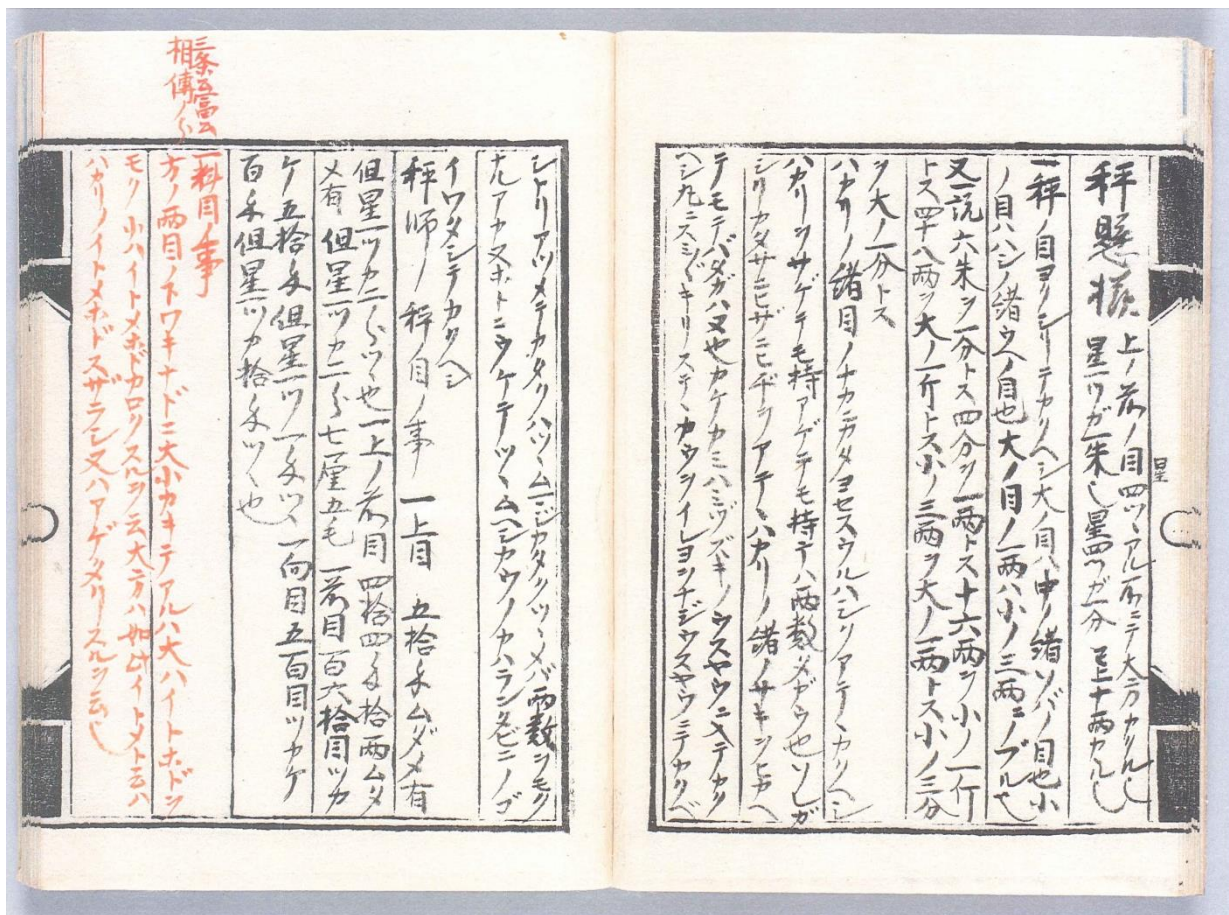


説 72 説 71 説 70 説 69 説 68

(書入 22)

(前掲)

二分三朱ホドハクルシカルマジキ也麝スクナク又ハアシキ
麝ナラバ丁子二分カ又ハ二分一朱ホド可然麝合手ニヨリ
テイデタガル香具アリサメガタシトカク沈ノスキタルハ
クルシカラズソレモアマリスギレバハナハジク匂スル物也
一貝丁麝ハ少シヒカヘタルガヨキ也麝ナトアシクバナヲくヒカヘテヨシ
一麝香ヲカキ合ノトキフルハ兔毛ノマユハキヨキ也
一薫物ノ道具ニハ梅桜ノ木又ハ竹ナドヨキ也
一ヤゲンノアタラシキハコスヲタヒくツヨククロシタルガヨキ也
一薫物ヲ入置物ハヌリモノガヨキ也



説
73

説
74

説
75

説
76

説
77

説
78

(書入 23)

秤懸様

上ノ前ノ目四ツアル所ニテ大方カクル也
星一ツガ一朱也星四ツガ一分 已上十兩カゝル也

一秤ノ目ヨクシリテカクヘシ大ノ目ハ中ノ緒ソバノ目也小

ノ目ハハシノ緒ウヘノ目也大ノ目ノ一兩ハ小ノ三兩ニノブル也

又一説六朱ヲ一分トス四分ヲ一兩トス十六兩ヲ小ノ一斤

トス四十八兩ヲ大ノ一斤トス小ノ三兩ヲ大ノ一兩トス小ノ三分

ヲ大ノ一分トス

ハカリノ緒目ノナカニカタヨセスウルハシクアテカクヘシ

ハカリヲサゲテモ持アゲテモ持テハ兩數タガウ也ソレガ

シリカタサニヒザニヒザアテハカリノ緒ノサキヲヒカヘ

テモテバタガハヌ也カケカミハミヅズキノウスヤウニ入テカク

ヘシ丸ニスミハキリステカウヲイレヨヲナジウスヤウニテカクベ

シトリアツメテカタクハツムマジカタクツメバ兩數ヲモク
ナルアカヌホトニウケテツムヘシカウノカハランタビニノゴ
イワタシテカクヘシ

秤師ノ秤ノ目ノ事 一上目 五拾ヌダメ有

但星一ツカ二分ツ也一上ノ前目四拾四ヌ拾両ムタ

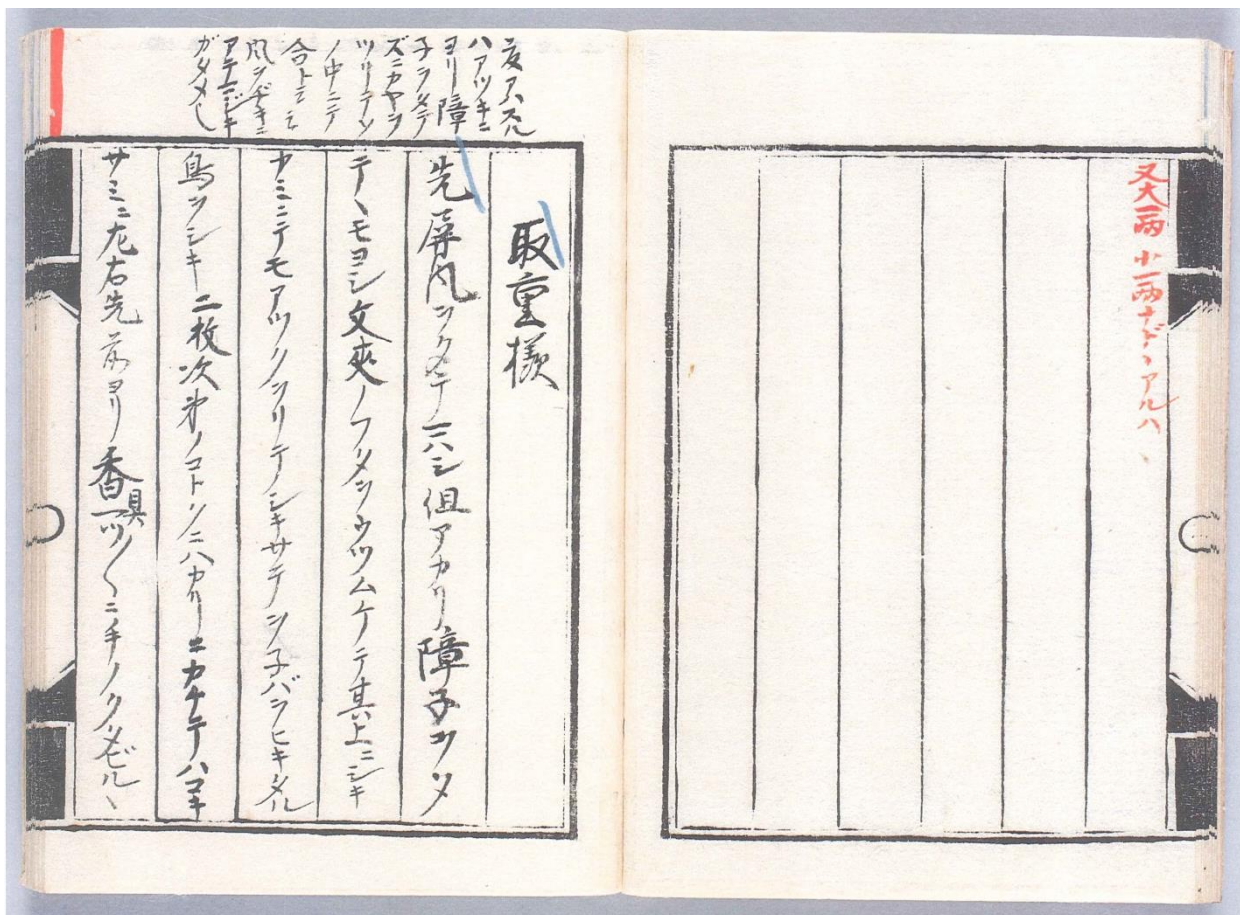
メ有但星一ツカ二分七厘五毛一前目百六拾目ツカ

ケ五拾ヌ但星一ツ一ヌツ一向目五百目ツカケ

百ヌ但星一ツカ拾ヌツ也

一料目ノ事

方ノ兩目ノ下ワキナドニ大小カキテアルハ大ハイトホドヲ
モク小ハイトメホドカロクスルヲ云大方ハ如此イトメト云ハ
ハカリノイトメホドスザラシ又アゲタリスルヲ云也



説
79

又大二両 小二両ナドアルハ

説
80

(書入 24)

(青ノ点)
取重様

先屏風ヲタテマハシ但アカリ障子ヲタ

テモヨシ文夾ノフタヲウツムケテ其上ニシキ

カミニテモアツクヲリテシキサテヲネバラヒキタル

鳥ヲシキ 二枚 次第ノコトクニハカリニカケテハコキ

サミニ左右先前ヨリ香一ツくニ手ノクダビル

「(二六丁ウ)

「(二七丁オ)

三説者
 上モミミ
 アハセミ
 テメルガ
 ナクミ
 勅作
 歌大方
 ナリチ
 ナレミガ
 ヨリクシ
 カシ
 カシ

ホドマセテハ左右ヨリ下ヲ上ヘト●小笏ニカケテ
 下ヨリククトルヤウニモテユキクバルヤウニスル也
 又勅作之説ハ四方先右左カキ合クシテコ
 キサミニ左右トコマカニハヤクマセクスル也餘ノ
 香具ヲカケテハマセク右ノコトクニスル也香具ヲ
 カケテ入時ハマセタル香ヲヒラメニシテ其マンナカヘ

勅作
 三説者
 上モミミ
 アハセミ
 テメルガ
 ナクミ
 勅作
 歌大方
 ナリチ
 ナレミガ
 ヨリクシ
 カシ
 カシ

勅作
 三説者
 上モミミ
 アハセミ
 テメルガ
 ナクミ
 勅作
 歌大方
 ナリチ
 ナレミガ
 ヨリクシ
 カシ
 カシ

アケテヒラメタル香具ニテ今入タル香具ヲ四方ヨリ
 ツムヤウニカキアケテサテコキザミニ合クスル也
 香具ノハカリニコラヌヤウニ羽ニテヨクハラヒテ
 ヨシ又餘ノ香具ヲカクルトキニモヨクハハラヒテ
 カミニテヌグヒカクル也ハカリノカケヤウハ先右方ニ
 香具共ヲ置左ノ手ニテハカリヲモチ
 樟左方ニナシテ

(書入 25)

ホドマセテハ左右ヨリ下ヲ上ヘト●小笏ニカケテ
 下ヘヨクククトルヤウニモテユキクバルヤウニスル也
 又勅作之説ハ四方先右左カキ合クシテコ
 キサミニ左右トコマカニハヤクマセクスル也餘ノ
 香具ヲカケテハマセク右ノコトクニスル也香具ヲ
 カケテ入時ハマセタル香ヲヒラメニシテ其マンナカヘ

(書入 26)

アケテヒラメタル香具ニテ今入タル香具ヲ四方ヨリ
 ツムヤウニカキアケテサテコキザミニ合クスル也
 香具ノハカリニコラヌヤウニ羽ニテヨクハラヒテ
 ヨシ又餘ノ香具ヲカクルトキニモヨクハハラヒテ
 カミニテヌグヒカクル也ハカリノカケヤウハ先右方ニ
 香具共ヲ置左ノ手ニテハカリヲモチ
 樟左方ニナシテ

其ノ上ニ
ナゲナ
白泥
塩草
くぼ
と茶
右白泥
二両合ナ
ハ半朱
カチツ
ニ合ナ
シ合ナ
又ハ沈ノ粉モ白モ堀入ト一茶ニ茶中一可入

右ノ手ニテ香ヲ銀ニサジニテモ桜ノサジニテモ入テ左
ノ手ニテモチタルハカリノ緒ツカリノ金ヲ左
ノ薬指ニテ四ツ五ツホドハチキテミテハカリノ方ノ
分ノハグチノクイアヒテイゴカヌヲヨシトスカクル
目ハ上ノ前ノ方ノ四ツヅアル所ニテカクル也星一ツ
ガ朱ツ也星四ツガ一分也一分四ツガ一両也十兩

ニテカケル也カキ合ハ尤小笏ニテカキ合マセル也
●貝ヲ合タルトキト麝ヲ合タルトキハ別而ヨク
マセタルガヨキ也香具皆テ後ナラ合セ又先ニ香
呂ニテタキテミテイマダマジラネバ又ヨクマセル也
右ノゴトクニテハアレトモイカヤウニナリトモシテハヤクヨク
マジルヤウニシテヨシアマリツヨク久クマゼレバ匂ヒアタ

(書入 26 続文)

右ノ手ニテ香ヲ銀ニサジニテモ桜ノサジニテモ入テ左
ノ手ニテモチタルハカリノ緒ツカリノ金ヲ左
ノ薬指ニテ四ツ五ツホドハチキテミテハカリノ方ノ
ハリノハグチノクイアヒテイゴカヌヲヨシトスカクル
目ハ上ノ前ノ方ノ四ツヅアル所ニテカクル也星一ツ
ガ一朱ツ也星四ツガ一分也一分四ツガ一両也十兩

「(二八丁ウ)

マテカケラル也カキ合ハ尤小笏ニテカキ合マセル也
●貝ヲ合タルトキト麝ヲ合タルトキハ別而ヨク
マセタルガヨキ也香具皆テ後麝ヲ合セ又先ニ香
呂ニテタキテミテイマダマジラネバ又ヨクマセル也
右ノゴトクニテハアレトモイカヤウニナリトモシテハヤクヨク
マジルヤウニシテヨシアマリツヨク久クマゼレバ匂ヒアタ

「(一九丁オ)

三茶家ノ
 流六番
 一茶家合
 テニセテ
 ノ半分
 ナア合テ
 モルニセ
 三番ヲ
 サス
 カニナリテアシキ物也サテ香具皆カキ合テ後
 大番ヲ三エキニテ入也又ウツノフルヒニ入テカウモツス
 三箱ノフルヒニ入テカウモツス
 シラフルヒニハチトアラキモノ也大方ハカウシヲツケテソ
 カシノ中ヘモウヘエモムラナクカクル也三両合ヨリ五両
 三八堅ハ五筋横ハ四筋カウシヲ下マデフカク
 小笏ニテツケル也二両合ヨリ下ハ堅ハ四筋横ハ

五兩四兩
 三兩合也
 三筋也
 三筋也
 モリテウツノフルヒニ入テカウモツス
 ノ半分
 ナア合テ
 モルニセ
 三番ヲ
 サス
 カニナリテアシキ物也サテ香具皆カキ合テ後
 大番ヲ三エキニテ入也又ウツノフルヒニ入テカウモツス
 三箱ノフルヒニ入テカウモツス
 シラフルヒニハチトアラキモノ也大方ハカウシヲツケテソ
 カシノ中ヘモウヘエモムラナクカクル也三両合ヨリ五両
 三八堅ハ五筋横ハ四筋カウシヲ下マデフカク
 小笏ニテツケル也二両合ヨリ下ハ堅ハ四筋横ハ

(書入 27)

カニナリテアシキ物也サテ香具皆カキ合テ後
 麝香ヲマユハキニテ入也又ウツノフルヒニ入テカウモツス三箱ノフルヒニ入テカウモツス
 テウツノフルヒニ入テカウモツス三箱ノフルヒニ入テカウモツス
 大方ハカウシヲツケテソ
 カシノ中ヘモウヘエモムラナクカクル也三両合ヨリ五両
 マテハ堅ハ五筋横ハ四筋カウシヲ下マデフカク
 小笏ニテツケル也二両合ヨリ下ハ堅ハ四筋横ハ

「二九丁ウ」

説 81

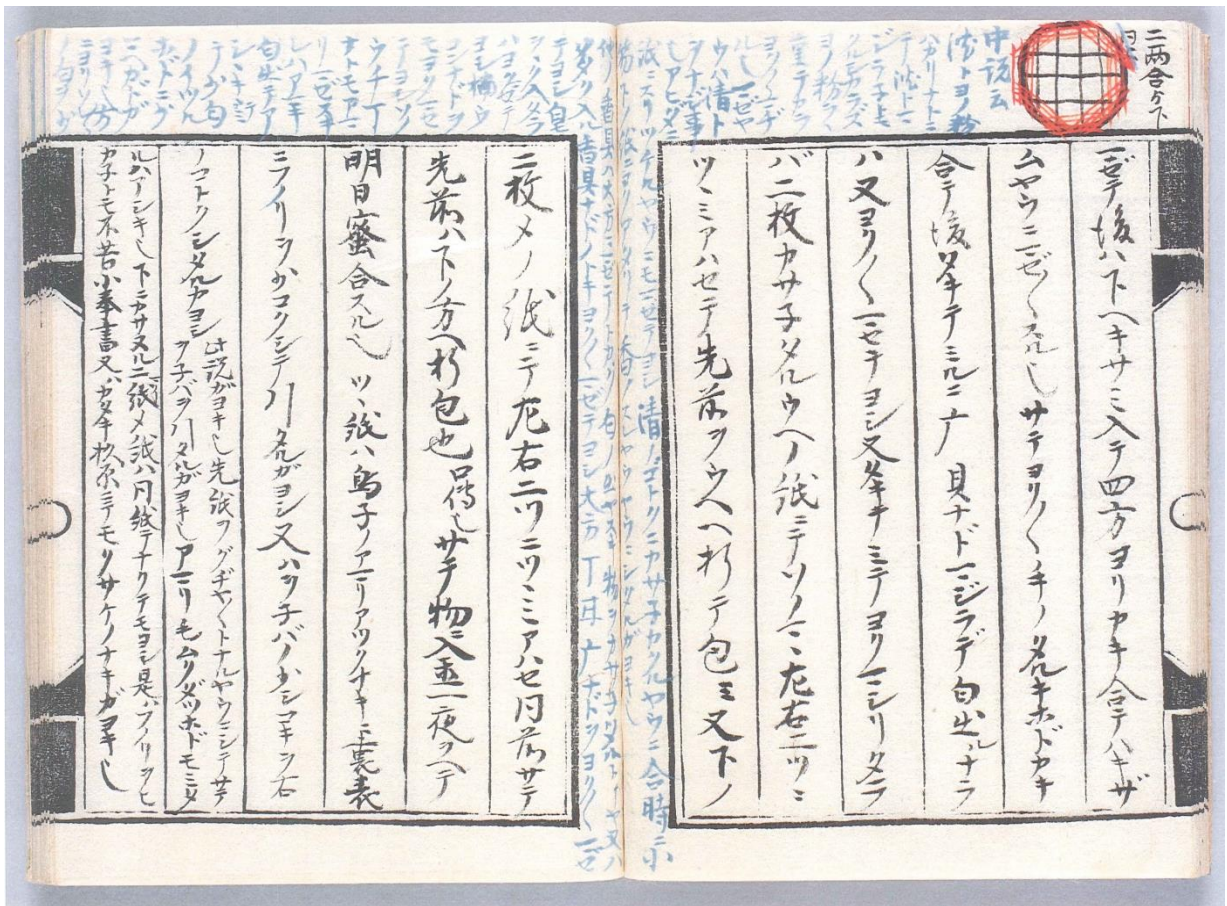
(書入 28)

(書入 28 続文)

三筋也ナルホトカウシゼウマノナキヤウニヨクツ
 モリテウツノフルヒニ入テカウモツス
 ノ半分
 ナア合テ
 モルニセ
 三番ヲ
 サス
 カニナリテアシキ物也サテ香具皆カキ合テ後
 大番ヲ三エキニテ入也又ウツノフルヒニ入テカウモツス
 三箱ノフルヒニ入テカウモツス
 シラフルヒニハチトアラキモノ也大方ハカウシヲツケテソ
 カシノ中ヘモウヘエモムラナクカクル也三両合ヨリ五両
 三八堅ハ五筋横ハ四筋カウシヲ下マデフカク
 小笏ニテツケル也二両合ヨリ下ハ堅ハ四筋横ハ

如圖

「二〇丁オ」



青ノ忠

(書入 30) (書入 29)

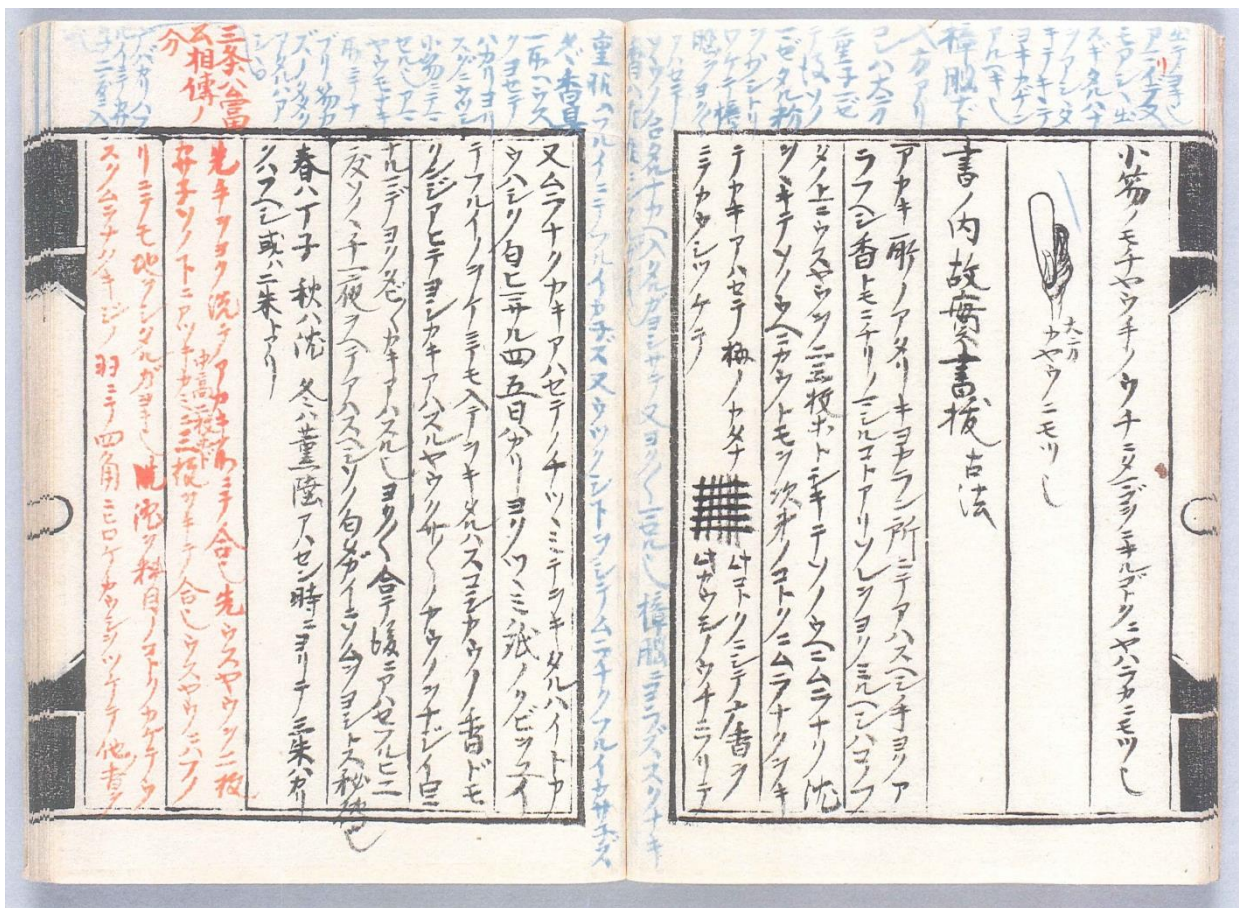
マゼテ後ハ下ヘキサミ入テ四方ヨリカキ合テハキザ
ムヤウニマゼくスル也サテヨクく手ノタルキホドカキ
合テ後タキテミルニ麿貝ナドマジラデ句出ナラ
ハ又ヨクくマセテヨシ又タキテミテヨクマシリタラ
バ二枚カサネタルウヘノ紙ニテソノマゝ左右二ツニ
ツゝミアハセテ先前ヲウヘヘ折テ包ミ又下ノ

「二〇丁ウ

説 82

二枚メノ紙ニテ左右二ツゝミアハセ同前サテ
先前ハ下ノ方ヘ折包也 日體サテ物ニ入置一夜ヲヘテ
明日蜜合スル也ツ紙ハ鳥子ノアマリアツクナキニ裏表
ニフノリヲ少コクシテ引タルガヨシ又ハヲネバノ少シコキヲ右
ノコトクシタルカヨシ 此説ガヨキ也此紙フグヂヤクトナルヤウニシテサテ
ヲネバヲ引タルガヨキ也アマリ毛ハリダツホドモミタ
ルハアシキ也下ニカサヌルニマイ紙ハ同紙ナクテモヨシ是ハフノリヲヒ
カネトモ不苦小奉書又ハカタキ萩原ニテモクサケノナキガヨキ也

「二二丁オ



説
83

(書入 30 続文)

小笏ノモチヤウ手ノウチニタマゴヲニキルゴトクニヤハラカニモツ也
青ノ志
(図) 大方カヤウニモツ也
書ノ内故實書拔 古法
一アカキ所ノアタリキヨカラシテアハスヘシ手ヨクア
ラフヘシ香トモニチリノマシルコトアリソレヲヨクミルヘシハコノフ
タノ上ニウスヤウヲ二三枚ホトシキテソノウヘニムラナク沈
ヲニキテソノウヘニカウトモヲ次第ノコトクニムラナクヲキ
テカキアハセテ梅ノカタナ
(図) 此コトクニシテ麝香ヲ
此カウシノウチニフリテ
ニテカウシツケテ

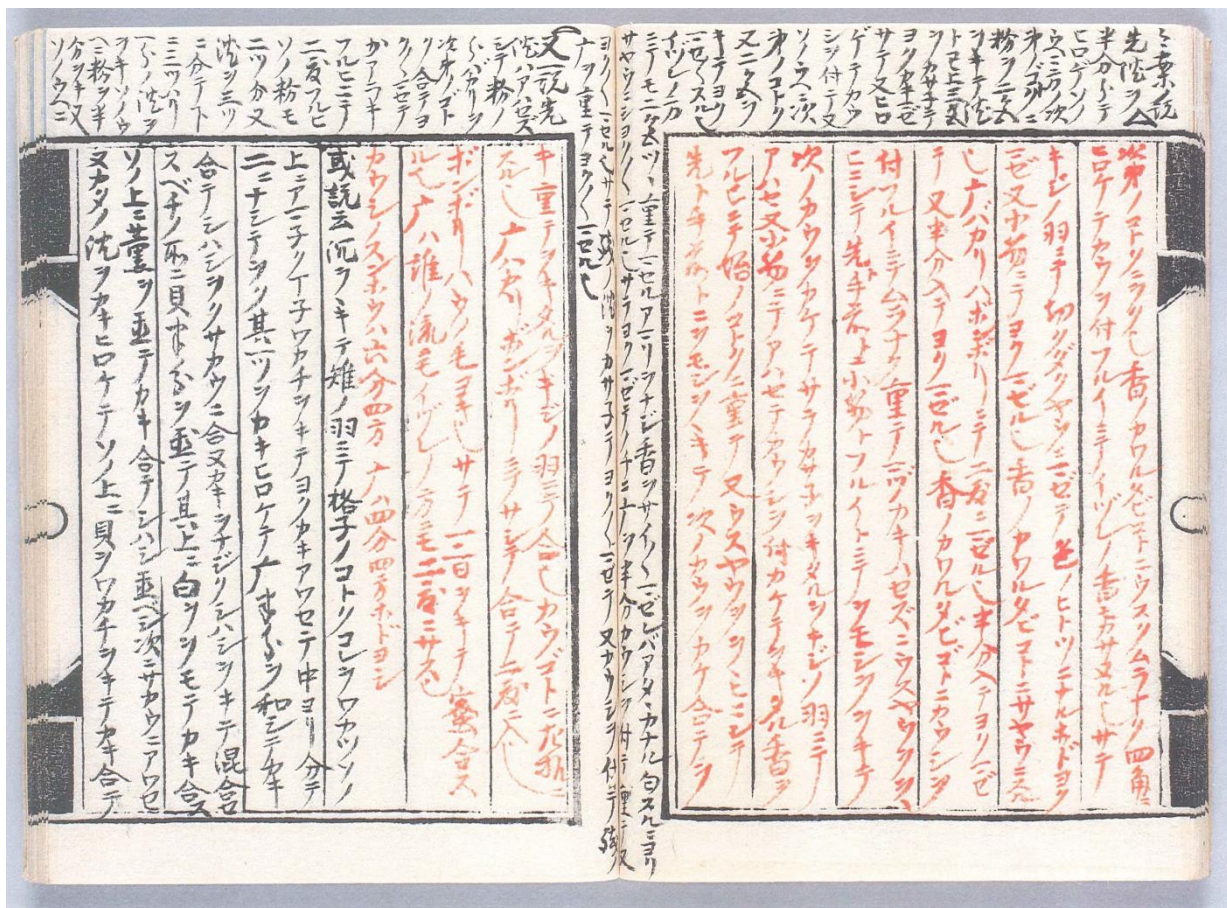
「(二二丁ウ)

説
84

(書入 31)

又ムラナクカキアハセテノチツミテヲキタルハイトカ
ウハシク匂ヒマサル四五日ハカリヨクツミ紙ノクビヲユイ
テフルイノヲケニテモ入テヲキタルハスコシカウノ香ドモ
クンジアヒテヨシカキアハスルヤウクサノノカウノヲナジイロニ
ナルマデヨクタバノノカキアハスル也ヨクノ合テ後ニアハセフルヒニ
度ソノチ一夜ヲヘテアハスヘシソノ匂タガイニソムヲヨシトス秘傳也
春ハ丁子 秋ハ沈 冬ハ薑陸アハセン時ニヨリテ三朱ハカリ
クハフヘシ或ハ二朱トアリ
先手ヲヨク洗テアカキ所ニテ合也先ウスヤウヲ二枚
カサネソノ下ニアツキカミニ三枚ヲキテ合也ウスヤウニハフノ
リニテモ地ヲシタルガヨキ也●沈ヲ料目ノコトクカケテウ
スクムラナクキジノ羽ニテ四角ニヒロケカウシツケテ他香ヲ

「(二二丁オ)



(書入 32)

(絵記号)

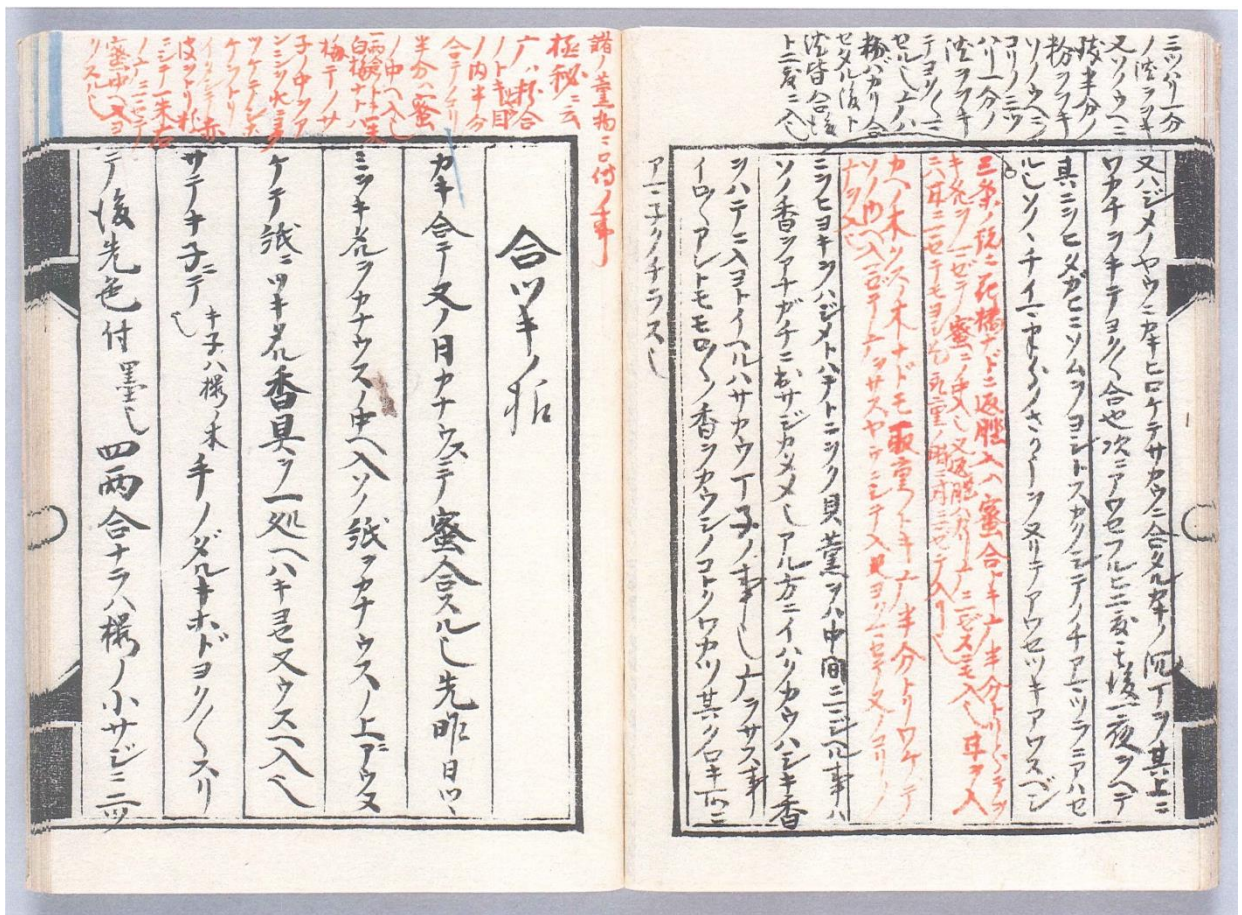
次第ノコトクニヤク也香ノカワルタビコトニウスクムラナク四角ニ
ヒロケテカウヲ付フルイニテイヅレノ香モカサナル也サテ
キジノ羽ニテ切クダクヤウニマゼテ色ノヒトツニナルホドヨク
マゼ又小笏ニテヨクマゼル也香ノカワルタビコトニサヤウニスル
也麝バカリハボンボリニテ二度ニマゼル也半分入テヨクマゼ
テ又半分入テヨクマゼル也香ノカワルタビゴトニカウシヲ
付フルイニテムラナク重テマヅカキハセズニウスヤウヲヲ、
ヒニシテ先手前トニ小笏トフルイトニテヲモシヲフキテ
次ノカウヲカケテサテカサネヲキタルヲキジノ羽ニテ
アハセ又小笏ニテアハセテカウシヲ付カケテヲキタル香ヲ
フルヒニテ始ノコトクニ重テ又ウスヤウヲヲ、ヒニシテ
先ト手前トニヲモシヲ、キテ次ノカウヲカケ合テヲ

(絵記号)

(書入 33)

説
35

キ重テヲキタルヲキジノ羽ニテ合也カウゴトニ左様ニ
スル也麝ハカリボンボリニテサシテ合テ二度ニ入也
ボンボリハウノ毛ヨキ也サテ一二日ヲキテ蜜合ス
ル也麝ハ誰ノ流ニモイヅレノ方ニモ二度ニサス也
カウシノスンホウハ六分四方 麝ハ四分四方ホドヨシ
或説云沈ヲ、キテ雉ノ羽ニテ格子ノコトクコレヲワカツソノ
上ニアマネク丁子ワカチヲキテヨクカキアワセテ中ヨリ分テ
二ニナシテヲク其一ツヲカキヒロケテ麝半分ヲ和シテカキ
合テシハシヲクサカウニ合又カキヲナジクシハシヲキテ混合セ
スベチノ所ニ二貝半分ヲ置テ其上ニ白ヲヲモテカキ合ス
ソノ上ニ薰ヲ置テカキ合テシハシ置ベシ次ニサカウニアワセ
ヌカタノ沈ヲカキヒロケテソノ上ニ二貝ヲワカチヲキテカキ合テ



説
86 (書入 33 続文)

又ハジメノヤウニカキヒロケテサカウニ合タルカキノ沈丁ヲ其上ニ
ワカチヲキテヨクノ合也次ニアワセフルヒ二度其後一夜ヲヘテ
其ニヨヒタガヒニソムヲヨシトスカクシテノチアマツラニアハセ
ル也ソノノチイマ半分ノさかうヲヌリテアワセツキアワスベシ
三条ノ説ニ花橘ナドニ返腦入ハ蜜合トキ麝半分トリ分テヲ
キタルヲマゼテ蜜ヲ中入也又返腦ハカリ麝ニマゼスニモ入也甘ヲ入
ニハ甘ニマゼテモヨシ是取重ノ時ニ甘マゼテ入事也
カヘノ木クスノ木ナドモ取重ノトキ麝半分トリワケテ
ソノ内ヘ入マゼテ麝ヲサスヤウニシテ入也ヨクマセテ又ノコリノ
麝ヲ入也

ニヲヒヨキヲハジメトハテトニヲク具薫ヲハ中間ニマジヘル事ハ
ソノ香ヲアナガチニ出サジガタメ也アル方ニイハクカウハシキ香
ヲハテニ入ヨトイヘルハサカウ丁子ノ事也麝ヲサス事
イロノアレトモモロノノ香ヲカウシノコトクワカツ其クロキ所ニ
アマネクチラス也

説
87 (書入 34)

合ツキノ様

カキ合テ又ノ日カナウスニテ蜜合スル也先昨日ツノ

ミヲキタルカナウスノ中ヘ入ソノ紙ヲカナウスノ上ニアウス

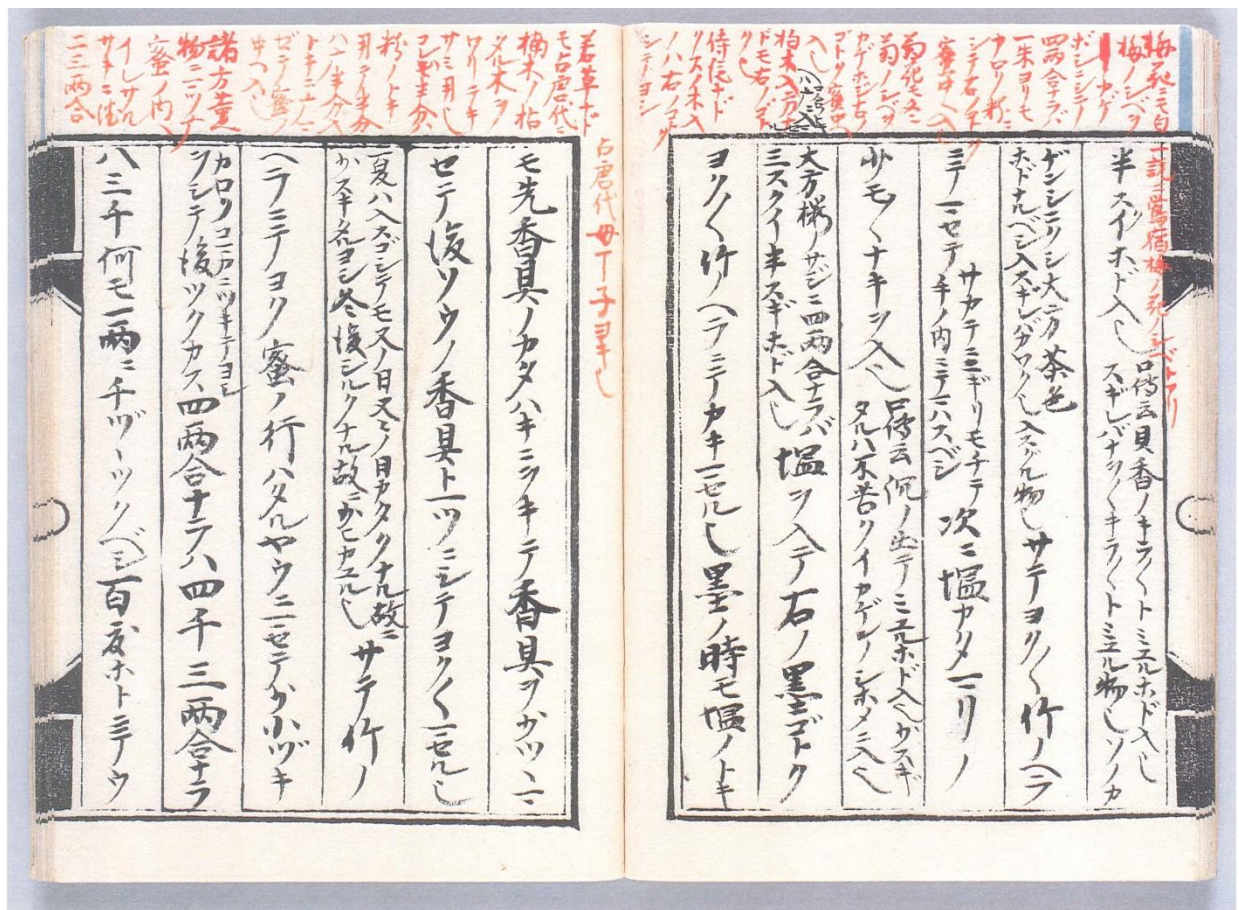
ケテ紙ニツキタル香具ヲ一処ヘハキヨセ又ウスヘ入也

サテキネテ^ニキネハ桜ノ木^也手ノダルキホドヨクノスリ

テ後先色付^{墨也}四両合ナラハ桜ノ小サジニツ

「(三三丁ウ)

「(二四丁オ)



(書入 34 続文)

半スクイホド入也 口傳云貝香ノキラクトミユルホド入也
スギレバナヲキラクトミユル物也ツノカ

ゲンシニクシ大方茶色
ホドナルベシ入スギレバカワク入スグル物也 サテヨクノ竹ノヘラ

ニテマセテ サカテニギリモチテ
手ノ内ニテマハスベシ 次ニ塩カタマリノ

少モノナキヲ入也 口傳云沈ノ出デミユルホド入也少スキ
タルハ不苦クイカゲンノシホメニ入也

大方楸ノサジニ四両合ナラ
バニスクイ半スキホド入也 塩ヲ入テ右ノ墨ゴトク

ヨクノ竹ノヘラニテカキマセル也墨ノ時モ塩ノトキ

モ先香具ノカタハキニヲキテ香具ヲ少ツマ

セテ後ソウノ香具ト一ツニシテヨクノマセル也

夏ハ入スゴシテモ又ノ日又タノ日カタクナル故ニ
少スキタルヨシ冬後シルクナル故ニ少ヒカユル也 サテ竹ノ

ヘラニテヨク蜜ノ行ハタルヤウニマセテ少小ヅキ

カロココマカニツキテヨシ
ヲシテ後ツクカス 四両合ナラハ四千三両合ナラ

ハ三千何モ一両二千ヅツクベシ百度ホトニテウ

ナラシメテ入蜜ヲムルハ若シテヨクニゼテ

見又かつキテモヨレ

石蜜合ノ時ノ道具墨櫃ノ櫛ノサジ

キ子竹テ竹ノ箸はふツカナウ

スノタラウブケテソアチエサミカ

春ノハシメサムキタケハ元キホトキニ合ハレナドトモ
ケテモツセカケテツキテツカワ

于ハカノウミヲサテ、次乃ハ方ヲ

説
89

(青ノ点)

于ハカナウスニテカサネル也次第八方ノコトク

ケテモタセカケテヲキテツカウ也

スノフタヲウツブケテソノアナニ入サシカ

キネ竹ノヘラ竹ノ箸此分ヲカナウ

説
88

(青ノ点)

右蜜合ノ時ノ道眞墨塩ノ桜ノ小サジ

ヨシ又少ツキテモヨシ

(書入 35)

ナウスノ中へ入蜜ヲクハへ箸ニテヨクマゼテ

ロヲハル也後日ナラくトナリタラバ薰物ヲカ

クベシ其後竹ノヘラニテクダキ香箱ニ入テ

クベシ又蜜マヘカドナラハ其数ヨリモ多クツ

去蜜入スゴシタル時ハ其数ヨリモ少スクナクツ

(書入 34 続文)

チカヘシクツクベシアマリツヨクツクベカラス乍



香ゴトニカナウスノ中カタヲヘラニテカタノ中へ
 入ヤウニサヌル也香ゴトニマセテハカヤウシくスル也
 麝香ノトキハコトニカヤウニシテボンボリニテ
 マンベンニヲク也

書ノ内故實又キ書 古語

一アマツラノカタマリタルハシタミニクシカタマリタラハ火ニスヘ
 テスコシシルクナシテシタムヘシアマツラ入程ハスコシカタキ

(書入 36)

㊦

香ゴトニカナウスノ中カタヲヘラニテカタノ中へ

入ヤウニサヌル也香ゴトニマセテハカヤウシくスル也

麝香ノトキハコトニカヤウニシテボンボリニテ

マンベンニヲク也

書ノ内故實又キ書 古語

一アマツラノカタマリタルハシタミニクシカタマリタラハ火ニスヘ

テスコシシルクナシテシタムヘシアマツラ入程ハスコシカタキ

説
90

(書入 37)

カタニヨリテイレタルガツケハヨキナリ

アマツラ合テヨキカゲンハスコシトリテ大指ニツケテミ

ルニツカヌホドニテ大指ノスデノツクホトナルヲヨシトス

アマツラ入スコシテシルクナリタラハ火ヲケノ灰ニウスヤウヲ

アマタシキテシハシヨキタレバカタクナルナリ冬ハ合スルニウ

ルヲヒタレトモ程フレハカタマルユヘニコマカニツキテ心ヨク和セ

夏ノタキ物ハタゞイマカタケレトモノチニウルヲヒイテクル

ユヘニスコシ香ヲアラクツク也ツキテノチ風ニアテズ

蜜ノ香ヲトランニハ金臼ニ香具ヲ入レン時蜜ノ中へ

沈二両合ナラハ塩ヲ一朱ノ半分ヨリモナヲスクナク入テカキ

タテ塩ニチリナトナキヤウニイカニモシロクヨカラシヲ入又沈

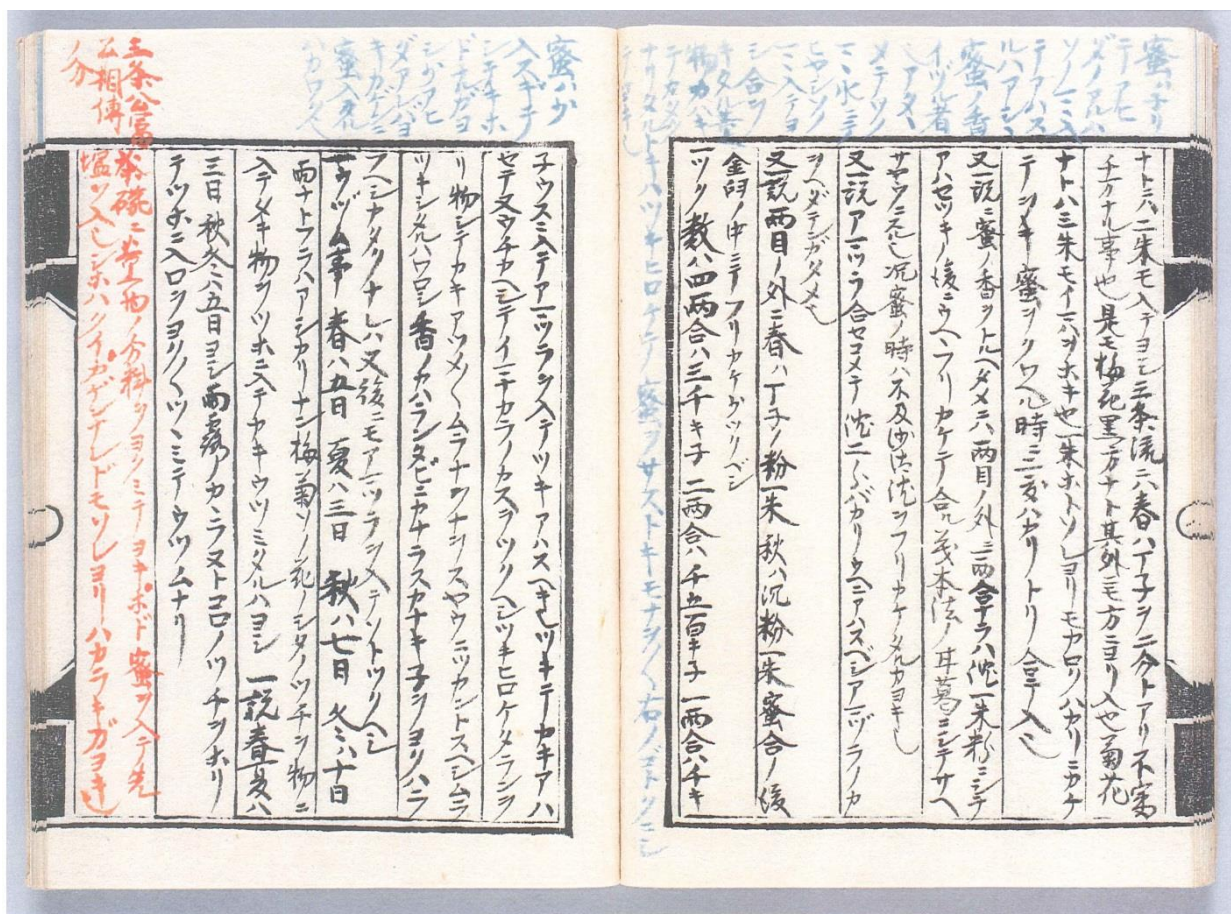
一両合ナラハ丁子一朱ヨリモイカニモカロク入也春ハ黒方梅花

春夏ハ
 色付サジ
 ミスイキ
 秋冬ハ
 ミスイ
 塩クイ
 カデシ
 右四兩
 三兩合
 三兩

カタニヨリテイレタルガツケハヨキナリ
 アマツラ合テヨキカゲンハスコシトリテ大指ニツケテミ
 ルニツカヌホドニテ大指ノスデノツクホトナルヲヨシトス
 アマツラ入スコシテシルクナリタラハ火ヲケノ灰ニウスヤウヲ
 アマタシキテシハシヨキタレバカタクナルナリ冬ハ合スルニウ
 ルヲヒタレトモ程フレハカタマルユヘニコマカニツキテ心ヨク和セ
 夏ノタキ物ハタゞイマカタケレトモノチニウルヲヒイテクル
 ユヘニスコシ香ヲアラクツク也ツキテノチ風ニアテズ
 蜜ノ香ヲトランニハ金臼ニ香具ヲ入レン時蜜ノ中へ
 沈二両合ナラハ塩ヲ一朱ノ半分ヨリモナヲスクナク入テカキ
 タテ塩ニチリナトナキヤウニイカニモシロクヨカラシヲ入又沈
 二両合ナラハ丁子一朱ヨリモイカニモカロク入也春ハ黒方梅花

「(二六丁ウ)

「(二七丁オ)



説
96

説
95

説
94

説
93

説
92

説
91

(書入 40)

(書入 39)

(書入 38)

ネウスニ入テアマツラヲ入テツキアハスヘキ也ツキテカキアハ
セテ又ウチカヘシテイマナカラノカスヲツクヘシツキヒロケタランヲ
リ物シテカキアツメムラナクナラスヤウニツカントスヘシムラ
ツキシタルハワロシ香ノカハランタビニカナラスカナキネヲヨクハラ
フヘシカタクナレハ又後ニモアマツラヲ入テソトツクヘシ
一ウヅム事 春ハ五日 夏ハ三日 秋ハ七日 冬ハ十日
雨ナトフラハアシカリナン梅菊ソノ花ノシタノツチヲ物ニ
入テタキ物ヲツホニ入テカキウツミタルハヨシ 一説春夏ハ
三日秋冬ハ五日ヨシ雨露ノカムラヌトコロノツチヲホリ
テツホニ入口ヲヨクくツミテウツムナリ
茶碗ニ薫物ノ分料ヲヨクミテヨキホド蜜ヲ入テ先
塩ヲ入也シホハカイカゲンナレドモソレヨリハカラキガヨキ也

ナトニハニ朱モ入テヨシ三条流ニハ春ハ丁子ヲ二分トアリ不審
千万ナル事也是モ梅花黒方ナト其外ニモ方ニヨリ入也菊花
ナトハ三朱モイマハヲホキ也一朱ホトソレヨリモカロクハカリニカケ
テヲキ蜜ヲクワヘル時ニ二度ハカリトリ合テ入也
又一説ニ蜜ノ香ヲトルヘタメニハ両目ノ外ニ二両合ナラハ沈一朱粉ニシテ
アハセツキノ後ニウヘムフリカケテ合ル義本法ノ甘葛ニシテサヘ
サヤウニスル也沈蜜ノ時ハ不及沙汰沈ヲフリカケタルカヨキ也
又一説アマツラ合セユメテ沈二分バカリウヘニアハスベシアマツラノカ
ヲヘダテンガタメ也
又一説両目ノ外ニ春ハ丁子ノ粉一朱秋ハ沈粉一朱蜜合ノ後
金臼ノ中ニテフリカケ少ツクベシ
一ツク数ハ四両合ハ三千キネ二両合ハ千五百キネ一両合ハ千キ

系ヲ入テキチテヨクスリテ後ニ墨ヲ入テ又
ヨクくスル也墨スグレバ薫物カハク也ソウジテ蜜ハ
カニキホドニ入テヨシ白蜜ハナヲくカワキガル也サテ
ソノ中へ粉合ノ薫物ヲ入大方キワタルホドニソトツ
キ合テ石ウスニ入三両二両アハセナラハ二三ホドツ
クヘシ二百キネツホドニテヘラニテウチカヘシくッ
クヘキ也勅作 中院等ノ流ニハカナウスニテシホ墨
ヲ粉合入テノチ入テソノミチ蜜ヲ入ソノカナウスニ
テソノマツケドモ三条ノ流ニハ右トヨリ也ツキヤウハ
スリツキニシテヨシコレモ 勅 中ノ流タカロクコマカニツ
ク也

勅云薫物アシキ句ナラバ薫陸ノ粉ヲ蜜ニ入マゼテ
ヨシタラ又香ナドスギタル句ナドアルニハ他ノ香ヲ蜜
ノ中へ入テ其蜜ヲ入也

或説云冬ノ薫物ハ合トキシルケレトモホトフレバカタマルユヘニコ
マカニツキテ心ヨク和ヲシムル也夏ノタキ物ハタビイマカタケ
レトモ後ニウルワイ出クルユヘニ少香ヲアラクツク又小造
紙ニコマカナルハヨケレトモ火ノケイトシクアカリテカヘシノカニ
ナルト有ハ常ヨリ火ノ氣ツヨキユヘニ香ヲアラクツク也
アワセテ次ノ日ナトカワクハアマツラカラ也コレニハ塩ヲ少入ヘシ
此事可秘云

説 97

シホヲ入テキネニテヨクくスリテ後ニ墨ヲ入テ又
ヨクくスル也墨スグレバ薫物カハク也ソウジテ蜜ハ
少シルキホドニ入テヨシ白蜜ハナヲくカワキガル也サテ
ソノ中へ粉合ノ薫物ヲ入大方キワタルホドニソトツ
キ合テ石ウスニ入三両二両アハセナラハ二三ホドツ
クヘシ二百キネツホドニテヘラニテウチカヘシくッ
クヘキ也勅作 中院等ノ流ニハカナウスニテシホ墨
ヲ粉合入テノチ入テソノミチ蜜ヲ入ソノカナウスニ
テソノマツケドモ三条ノ流ニハ右トヨリ也ツキヤウハ
スリツキニシテヨシコレモ 勅 中ノ流タカロクコマカニツ
ク也

説 98

勅云薫物アシキ句ナラバ薫陸ノ粉ヲ蜜ニ入マゼテ
ヨシタラ又香ナドスギタル句ナドアルニハ他ノ香ヲ蜜
ノ中へ入テ其蜜ヲ入也
或説云冬ノ薫物ハ合トキシルケレトモホトフレバカタマルユヘニコ
マカニツキテ心ヨク和ヲシムル也夏ノタキ物ハタビイマカタケ
レトモ後ニウルワイ出クルユヘニ少香ヲアラクツク又小造
紙ニコマカナルハヨケレトモ火ノケイトシクアカリテカヘシノカニ
ナルト有ハ常ヨリ火ノ氣ツヨキユヘニ香ヲアラクツク也
アワセテ次ノ日ナトカワクハアマツラカラ也コレニハ塩ヲ少入ヘシ
此事可秘云

有明 伏見方より相傳 薰衣香也

(書入 41)

麝香五兩 五分 甘松同 同 丁子同 同

薰陸三兩二分 五分 龍腦二兩二分 五分 阿仙藥同 同

木香同 同 白檀同 同 青木香同 同

荜陵香一兩二分 五分 排草同 同 良姜同 同

肉豆蔻一兩 一分 返腦同 同 唐茴香同 同

右十五種也正味合百五拾四匁也

又

右之朱書者合々三匁八分五厘也但四十分之

一ツ也

一四匁二兩ノ時ハ半朱ハ一分二リン五毛 一朱ハ二分五リン

二朱ハ五分 三朱ハ七分五リン 一分ハ一匁 二分ハ二匁 三分ハ三匁也

一四匁三分一兩ノ時ハ半朱ハ一分三リン五毛

一朱ハ二分六リン九毛 二朱五分三リン七毛

三朱ハ八分七毛 一分ハ一匁七リン五毛 二分ハ二匁一分五リン

三分ハ三匁二分二リン五毛也

一四匁二兩ノ時ハ半朱ハ一分二リン五毛 一朱ハ二分五リン
二朱ハ五分 三朱ハ七分五リン 一分ハ一匁 二分ハ二匁 三分ハ三匁
一四匁三分一兩ノ時ハ半朱ハ一分三リン五毛
一朱ハ二分六リン九毛 二朱五分三リン七毛
三朱ハ八分七毛 一分ハ一匁七リン五毛 二分ハ二匁一分五リン
三分ハ三匁二分二リン五毛也

右十五種也正味合百五拾四匁也

又
右之朱書者合々三匁八分五厘也但四十分之
一ツ也

有明 伏見方より相傳 薰衣香也
麝香五兩 五分 甘松同 同 丁子同 同
薰陸三兩二分 五分 龍腦二兩二分 五分 阿仙藥同 同
木香同 同 白檀同 同 青木香同 同
荜陵香一兩二分 五分 排草同 同 良姜同 同
肉豆蔻一兩 一分 返腦同 同 唐茴香同 同

料目之事

一四々四分一両之時ハ一分ハ一分二分二分二分
三分ハ三分三分 半朱ハ一分三リン^七毛 一朱ハ二分七リン五毛
二朱ハ五分五リン 三朱ハ八分二リン五毛
右薫物ナド此通也 香具ハカリ此通也

一五々二両之時ハ一分ハ一分二分五分五分
三分ハ三分七分五リン 一朱ハ三分一リン三毛
二朱ハ六分二リン五毛 三朱ハ九分^四リン^{●●●}毛
右薬種ニ用也 半朱ハ一分六リン

或説云焼薫物古實云常ノ焼物ノタイニテハナクテシヤウジ
ラヤウト云物ヲ作テソレニ薫物ヲ入テタケハニヨイ余所ヘチラ
スモ香ヨク物ニト元シタトハアカリシヤウシノホネノヤウニタナヲ
作テテラ^ノ紙ノアツキニテヨリ煙ノイテサルニハル也申ノタナノ重
ニ又アカリシヤウシノホネノ如シテ紙ニテハハラスシテ^{●●●}ケブリ
ノ上ヘトヲラスル也重ニニシヤウソクヲソノタナニ入テヲキテ下ノ重ニ
火ヲトリテ入テ常ノヤウニタクヘシ煙ノアラシホトタナノ戸ヲ立テヒラ
クヘカラス一夜ホトモ其マヽ可置又コワキ物ウチ物スヽシノ物ナトノニヲイト
マリニクキニハ第一ノ下ニカヘリ湯ノアツキヲケハソラニ上テ重々ノシヤウ
ソクニシメリノケイサヽカ出テ其後湯ヲ取テノケテ焼物ヲタクニヲイトマルヘシ
タキ物ノ黒ニハ萩ヲ焼テ其スミヲノリニテカタメテ大サ一寸斗ノマルサニカ
タメテ火ニヲコシテ火取ニトリテ焼也又タヽ之炭ノイカニモカタキヲ粉ニベノリ
ニテカタメタルモ吉又タキ物ヲタカサル前ニウツシ焼物ニ入クシテ香ヲソ
メテ後ニタケハタキ物ニホイコトニハナハタシ

説 101

絵記
料目之事

一四々四分一両之時ハ一分ハ一分二分二分二分
三分ハ三分三分 半朱ハ一分三リン^七毛 一朱ハ二分七リン五毛
二朱ハ五分五リン 三朱ハ八分二リン五毛
右薫物ナド此通也 香具ハカリ此通也

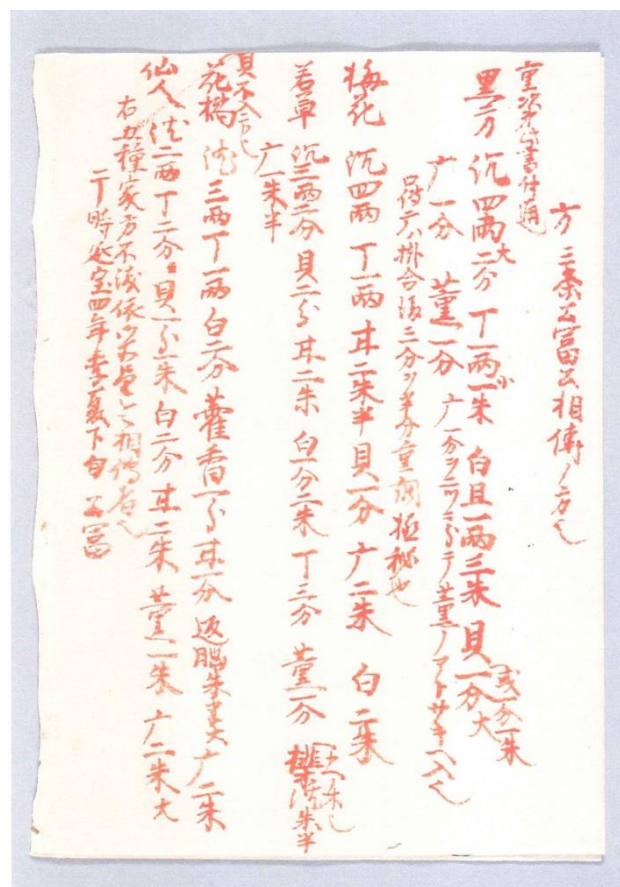
説 102

一五々二両之時ハ一分ハ一分二分五分五分
三分ハ三分七分五リン 一朱ハ三分一リン三毛^{●●}
二朱ハ六分^分二リン五毛 三朱ハ九分^四リン^{●●●}毛
右薬種ニ用也 半朱ハ一分六リン

説 103

或説云焼薫物古實云常ノ焼物ノタイニテハナクテシヤウジ

ラヤウト云物ヲ作テソレニ薫物ヲ入テタケハニヨイ余所ヘチラ
スベ香ヨク物ニトマル也タトヘハアカリシヤウシノホネノヤウニタナヲ
作テ戸ヲ紙ノアツキニテヨク煙ノイテサルニハル也中ノタナノ重々
ニ[●]又アカリシヤウシノホネノ如シテ紙ニテハハラスシテ^{●●●}ケブリ
ノ上ヘトヲラスル也重々ニベシヤウソクヲソノタナニ入テヲキテ下ノ重ニ
火ヲトリテ入テ常ノヤウニタクヘシ煙ノアラシホトタナノ戸ヲ立テヒラ
クヘカラス一夜ホトモ其マヽ可置又コワキ物ウチ物スヽシノ物ナトノニヲイト
マリニクキニハ第一ノ下ニカヘリ湯ノアツキヲケハソラニ上テ重々ノシヤウ
ソクニシメリノケイサヽカ出テ其後湯ヲ取テノケテ焼物ヲタクニヲイトマルヘシ
タキ物ノ黒ニハ萩ヲ焼テ其スミヲノリニテカタメテ大サ一寸斗ノマルサニカ
タメテ火ニヲコシテ火取ニトリテ焼也又タヽ之炭ノイカニモカタキヲ粉ニベノリ
ニテカタメタルモ吉又タキ物ヲタカサル前ニウツシ焼物ニ入クシテ香ヲソ
メテ後ニタケハタキ物ニホイコトニハナハタシ



方 三条公富公相傳ノ方也

重次第此書付通

方 2

黒方 沈四両大二分 丁一両小一朱 白且二両三朱 貝一分大 或一分一朱

麝一分 薫一分 麝一分 二二分 薫一分 二サキハ八也

口傳麝ハ掛合後三分ヲ半分重調極秘也

方 3

梅花 沈四両 丁一両 甘二朱半 貝一分 麝一朱 白一朱

カヘノ木也

方 4

若草 沈三両二分 貝二分 甘一朱 白一分二朱 丁三分 薫一分 榧木沈朱半

方 5

貝不入方也

麝一朱半

方 6

花橘 沈三両 丁一両 白二分 藿香一分 甘一分 返腦朱大 麝一朱

仙人 沈二両 丁二分 ● 貝一分一朱 白一分 甘一朱 薫一朱 麝一朱大

右五種家方不殘依御所望令相傳者也
于時延宝四年季夏下旬 公富

二兩
一分
一朱
カリ

有明伏見あり相傳 薰衣香

丁香五兩 耳松同 丁子同

薰陸三兩 龍腦二兩 阿仙葉同

木香同 白檀同 青木香同

荖陵香二兩 排草同 良姜同

肉豆蔻二兩 返腦同 茴香同

雜々口傳

一ニライハ沈丁也貝ハ能香具ヲヒトツニス

薰ハホヒヲトムル也 白ハ遠聞スル也

一薰ノ方ヲミテ善惡ヲシル事 丁子ハ沈ノ

料目ニ半分ニテソウノ香具ハ丁ヲノケテ沈

ノ料目ホトナルヲ善トスソレニチガウタルハアシ

(前出)

雜々口傳

說 104

一ニライハ沈麝丁也貝ハ能香具ヲヒトツニス

薰ハニホヒヲトムル也 白ハ遠聞スル也

說 105

一薰ノ方ヲミテ善惡ヲシル事 丁子ハ沈ノ

料目ニ半分ニテソウノ香具ハ丁ヲノケテ沈

ノ料目ホトナルヲ善トスソレニチガウタルハアシ

又三朱ノチカヒノ分ハ不苦也

中院説ハヲナジ方ヲサイくアハセテイロく

ニシヒカヘテヨクナル也

○三西薰物合様物語 口傳

一沈シラヘヤウノ事 タトヘバ一兩ノウチ三分一

ホトハナリシダイニ粉マジリニ仕立三分二ホドハイカニ

又二朱ノチカヒノ分ハ不苦也

説 106 (朱ノ点) 一中院説ハヲナジ方ヲサイくアハセテイロく

ニマシヒカ●●ヘテヨクナル也

(朱ノ丸) 三西薰物合様物語 口傳

説 107 (朱ノ丸) 一沈コシラヘヤウノ事 タトヘバ一兩ノウチ三分一

ホトハナリシダイニ粉マジリニ仕立三分二ホドハイカニ

モアラクトタトヘハ一分ホドノ大キサニ仕立候ガヨ

ク候カヤウニコシラヘ候ヘハタキ物合候てカラハラく

トイタシ候てヨロシク候

一カイ香コシラヘ様ノ事 イクタビモアライ 不反テ
ライノ事

ソノ、チホ●ロニカケアフリ候時蜜ト水ト合

タトヘハ水天目ニ一ハイホドノ中へ蜜サカツキニツホド

説 108

(朱ノ丸) 一カイ香コシラヘ様ノ事 イクタビモアライ 不反テ
ライノ事

ソノ、チホ●ロニカケアフリ候時蜜ト水ト合

タトヘハ水天目ニ一ハイホドノ中へ蜜サカツキニツホド

入サテ薫陸ノ粉ヲ少入カキマセソノシルニヒタ
シテ一枚ツゝトリアケアフル也アブリカゲン火ツヨク
コゲクサク成候ユヘ火イカモヌルグヂネン
ニカワキ候やうニイタシ候てサテコニイタシ候サウ
ジテカイカウハコシラヘぬトキモナニテモ香具
ノ中へ入ヲキ候ガヨク候サヤウニ候ヘハカイカウノ

ニヲヒヲノツカラウスク成候てクサケスクナク

※

一サウシテタキ物ハイツレノ方●ニテモ沈丁麝

ノニツカン用ニテイツレノ方ニテモ沈ノ過タルハ

ヨロシク候

一タキ物調合ノトキソレノ方ノリヤウメホドマツ

入サテ薫陸ノ粉ヲ少入カキマセソノシルニヒタ

シテ一枚ツゝトリアケアフル也アブリカゲン火ツヨク

候へはコゲクサク成候ユヘ火イカニモヌルグヂネン

ニカワキ候やうニイタシ候てサテコニイタシ候サウ

ジテカイカウハコシラヘぬトキモナニテモ香具

ノ中へ入ヲキ候ガヨク候サヤウニ候ヘハカイカウノ

ニヲヒヲノツカラウスク成候てクサケスクナク

成候

説 109

(朱ノ丸)

一サウシテタキ物ハイツレノ方●ニテモ沈丁麝

ノニツカン用ニテ候イツレノ方ニテモ沈ノ過タルハ

ヨロシク候

説 110

(朱ノ丸)

一タキ物調合ノトキソレノ方ノリヤウメホドマツ

貝香ヲカケ分サテソノ中ヘリヤウメノウチ少
ヒカヘメニサカウヲアハセヲキサテソノ外ノ香
具ヲアハセしソノ後右ノ貝香ヲクハヘ
ガヨク候
カヤウニイタシ候ヘハカイカウノニホ
ヒザカウニトリ合候てワルキニホヒイデ申サス候
サテ右ニ少ヒカヘヲキ候さかうヲミツノ中ヘ入候て

調合ノトキツキ合候ハヨクマシリ申候
一サカウハヨクケヲエリステスリ候トキニ薰
陸ヲクワヘスリ申候ガヨク候
一サカウハ少ヒカヘヲキ候てヨク候モシサカウノ
香スクナキヤウニ候ハ蜜ノ中ヘサカウヲ入マセ候て
タキ物ノ中ヘ入ツキマセ候ヘハサカウノ香惣

貝香ヲカケ分サテソノ中ヘリヤウメノウチ少

ヒカヘメニサカウヲアハセヲキサテソノ外ノ香

具ヲアハセ候てソノ後右ノ貝香ヲクハヘ

ガヨク候

カヤウニイタシ候ヘハカイカウノニホ

ヒザカウニトリ合候てワルキニホヒイデ申サス候

サテ右ニ少ヒカヘヲキ候さかうヲミツノ中ヘ入候て

調合ノトキツキ合候ヘハヨクマシリ申候

説 111
(朱ノ丸)
一サカウハヨクケヲエリステスリ候トキニ薰

陸ヲクワヘスリ申候ガヨク候

説 112
(朱ノ丸)
一サカウハ少ヒカヘヲキ候てヨク候モシサカウノ

香スクナキヤウニ候ハ蜜ノ中ヘサカウヲ入マセ候て

タキ物ノ中ヘ入ツキマセ候ヘハサカウノ香惣

香具ノスヘヨクユキワタリテヨシ

サカウスリ候時クシロクニテモ貝香ニテモ入マセ

スリ合ヒヨク候但リヤウメノウチヲ用候也

一サテタキ物合ヒ候モシナニテモニホヒハ

ヤク出アシク候時タトヘハビヤクタンヲホリ候時

沈ヲ入候やうノ事ソレノニホヒハツキリト

ナニテモトニホヒハ
サカウスリ
沈ヲ出ア
ヤク出ア
沈ヲ入
物ヲ入
ハツキリト

出候時ヨノカウグヲミツノ中ヘ入クワヘツキ合

候ヘハ大方ノナナフリト

一調合ノ時後ニクワヘ候香具ホドニホヒハヤク

出申モノニテ候ソレニヨリ方ノソレノニテチガ

ヒ申候

一蜜ハコクミツヨロシク候

説 113

香具ノスヘヨクユキワタリテヨシ

(朱ノ丸) 一サカウスリ候時クシロクニテモ貝香ニテモ入マセ

スリ合候てヨク候 但リヤウメノウチヲ用候也

(朱ノ丸)

説 114

(書入 42)

一サテタキ物合候て以後モシナニテモニホヒハ

ヤク出アシク候時タトヘハビヤクタンヲホリ候時

沈ヲ入候やうノ事ソレノニホヒハツキリト

「(三三丁ウ)

説 115

出候時ヨノカウグヲミツノ中ヘ入クワヘツキ合

候ヘハ大方ノハナフリ申候

(朱ノ丸) 一調合ノ時後ニクワヘ候香具ホドニホヒハヤク

出申モノニテ候ソレニヨリ方ノソレノニテチガ

ヒ申候

説 116

(朱ノ丸) 一蜜ハコクミツヨロシク候

「(三四丁オ)

○

サウジテタキ物ハ沈ノスキタルハヨロシクハ
サテ久シクヲキ候ノハ蜜ヲナルホドシルク入ヲ
キ候ガヨク候

○

一タキ物ハソレノニホヒモテ出候物ニテ候ユヘアルヒハ
此方ハカンセウガ第一ノニテソレヲ以テ名ツケ候
ナトノ申事候ユヘサヤウナルハソノトヲドリノカウ

説
117

説
118

(朱ノ丸)

一サウジテタキ物ハ沈ノスキタルハヨロシク候
サテ久シクヲキ候ノハ蜜ヲナルホドシルク入ヲ
キ候ガヨク候

(朱ノ丸)

一タキ物ハソレノニホヒモテ出候物ニテ候ユヘアルヒハ
此方ハカンセウガ第一ノニテソレヲ以テ名ツケ候
ナトノ申事候ユヘサヤウナルハソノトヲドリノカウ

「(三四丁ウ)

○

グソノミイデ候ガヨク候

一調査ノ事ハ方ノ事ハ大躰ノ事ニ候
トカクソレノカウグマツ一色ツヨク
タキ候ニホヒヲコノロミクスリナトハイザイ
スルヤウニアルヒハ少ヒカヘアルヒハリヤウメヨリ
少ヲホク入ナトイタシ候事カン用ニテ候

説
119

(朱ノ丸)

グソノミイデ候ガヨク候

一調査ノ事ハ方ノ事ハ大躰ノ事ニ候
トカクソレノカウグマツ一色ツヨク
タキ候ニホヒヲコノロミクスリナトハイザイ
スルヤウニアルヒハ少ヒカヘアルヒハリヤウメヨリ
少ヲホク入ナトイタシ候事カン用ニテ候

「(三五丁オ)

サレトモカヤウニシトテモ本方ノセンニイタ
シノホヒヲウシナヒ候ハぬやうニイタシ候事
コレ又カン用ニテ候

一タキ物合候て入ヲキ候物ハヌリ物第一ヨロシク候

一スミモヤキカヘシ候て入候てヨク候

一惣而タキ物トイフ事ハ天然ノ物ノホヒノ外ニ

人作ニテ建立申候事ニテ候ユヘ 禁中ナド

ニテ最上ノ●大事ニ秘事仕来候事ニテ

君臣合躰ノ心モチ相コモリ候事ニテ候

大方ノ心入ニテハ相違可申候事候

建久之説 雑々

一沈丁ヒロケテ四方ニワカツ其上ニムラナク丁ヲワ

サレトモカヤウニ候トテモ本方ノセンニイタ

シ候ニホヒヲウシナヒ候ハぬやうニイタシ候事

コレ又カン用ニテ候

一タキ物合候て入ヲキ候物ハヌリ物第一ヨロシク候

一スミモヤキカヘシ候て入候てヨク候

一惣而タキ物トイフ事ハ天然ノ物ノホヒノ外ニ

人作ニテ建立申候事ニテ候ユヘ 禁中ナド

ニテ最上ノ●大事ニ秘事仕来候事ニテ

君臣合躰ノ心モチ相コモリ候事ニテ候

大方ノ心入ニテハ相違可申候事候

建久之説 雑々

一沈丁ヒロケテ四方ニワカツ其上ニムラナク丁ヲワ

カチヲクヨクカキ合ナカ●^ヨリ分テフタツニナシ
テコレヲノクソノナカラヲカキヒロケテ麿半分^皆
ヲクシテヲキ合テシハラクヲク麿^ニアハセサル方同
シハラクヲク又別ノトコロニ貝ヲヲキテソノ上ニ白ヲノキ
テカキアハセテ又其上ニ薰ヲノキテカキアハセテシハラクヲク
又麿^ニアハセサル方ノ沈ヲカキヒロケテソノ上ニ件ノ貝ヲワ
カチヲクカキ合テ又ハシメノコトクカキヒロケテ麿^ニ
合カタル沈丁ヲソノウヘニワカチヲキテヨクノ合也次^ニ
一番ニ合香具ハ最末ニ出也最末ニヲクカウハタク時ソノ

アハセサルヒニ度ソノノチ一夜ヲヘテソノニホヒタカヒニソムヲヨシトスカク
シテノチアマツラニアハスコレ秘傳也ソノノチイマ半分ノ麿香ヲ
ヌリテアワセツキアハスベシ

カチヲクヨクカキ合ナカ●^ヨリ分テフタツニナシ

テコレヲノクソノナカラヲカキヒロケテ麿半分^皆

ヲクシテヲキ合テシハラクヲク麿^ニアハセサル方同

シハラクヲク又別ノトコロニ貝ヲヲキテソノ上ニ白ヲノキ

テカキアハセテ又其上ニ薰ヲノキテカキアハセテシハラクヲク

又麿^ニアハセサル方ノ沈ヲカキヒロケテソノ上ニ件ノ貝ヲワ

カチヲクカキ合テ又ハシメノコトクカキヒロケテ麿^ニ

合カタル沈丁ヲソノウヘニワカチヲキテヨクノ合也次^ニ

一番ニ合香具ハ最末ニ出也最末ニヲクカウハタク時ソノ

アハセサルヒニ度ソノノチ一夜ヲヘテソノニホヒタカヒニソムヲヨシトスカク

シテノチアマツラニアハスコレ秘傳也ソノノチイマ半分ノ麿香ヲ

ヌリテアワセツキアハスベシ

カチヲリヨリカキ合ナカリ分テフメツニナシ
 テコレヲリソノナカヲカキヒロケテナ半分皆
 ヲリシテヲキ合テハラクヲクナニアセサル方同
 シハラクヲリ又別ノトヨミヲキテソノ上ニ白シキ
 テカキアハセテ又果ニ薫シキチカキアハセテシハクヲ
 又テアハセサル方ノ沉ヲカキヒロケテソノ上ニ件ノ貝ヲロ
 カチヲリカキ合テ又ハシメノコトクカキヒロケテナニ
 合カタル沉ヲソノ上ニワカキヲキテヨク合シ
 一番ニ合香具ハ寂末ニ出ニ寂末ニワカキハダク時ソノ

香寂末ニ出キタルニヨテ早香ヲモテノチニコレヲシ
 貝薫陸ノタグヒ中ゲンニコレヲシシソノ香アナガチニイダサ
 サランカタメ也可秘コレハハナハタフカキ秘説也
 一梅花ハアハスル次第黒方ニヨナシ麝ニアハスル方ニ甘松ヲアハスル也
 梅花ハ薫陸両数スコシタラサテイルヘシ
 一六朱ヲ一分トス四分ヲ一両トス四十八両ヲ大ノ一斤トス小ノ
 三分ヲ大ノ一分トス
 一ウツム事 春 五月加日 夏 六月 秋 七月 冬 十月
 一貝ハ蜜ユビノウラニテ面ニ二度ウラニ一度アルアブリカワラ
 ゲテ又ヌル也火ハアツクモヌルクモナキガヨシ是ヲ文武ノ火ト云
 一アマツラセンシル時ヒサゲトナヘトノアヒタニカミヲシカヒテ
 ユノイキイダサヌガヨキ也

（前出）

説 129
 説 128
 説 127
 説 126
 説 125

香寂前ニ出キタルニヨテヨキ香ヲモテノチニコレヲシク
 貝薫陸ノタグヒ中ゲンニコレヲマジウソノ香アナガチニイダサ
 サランカタメ也可秘コレハハナハタフカキ秘説也
 一梅花ハアハスル次第黒方ニヨナシ麝ニアハスル方ニ甘松ヲアハスル也
 梅花ハ薫陸両数スコシタラサテイルヘシ
 一六朱ヲ一分トス四分ヲ一両トス四十八両ヲ大ノ一斤トス小ノ
 三分ヲ大ノ一分トス
 一ウツム事 春 五月加日 夏 六月 秋 七月 冬 十月
 一貝ハ蜜ユビノウラニテ面ニ二度ウラニ一度アルアブリカワラ
 ゲテ又ヌル也火ハアツクモヌルクモナキガヨシ是ヲ文武ノ火ト云也
 一アマツラセンシル時ヒサゲトナヘトノアヒタニカミヲシカヒテ
 ユノイキイダサヌガヨキ也

薫物ノ歌 春秋ノニヲヒラトムル花ノ
 香ツタフル袖ヲ物ワスレスナ

塩 ハクサケノナキシルケノナキヲ白キノヲチリノナキヲ
タハラノ中ヨリスグニトリ出テチリヨクノケカタマ
リタルヲヨクノホドキテ

墨 ハイロツケノ事也ナベ墨ヤキカヘシテ用

薰之道具 同仕様 寸法

一サジ 木ハ桜也 寸法ハ
香具スクウ也

一桜ノサジ 木ハ是ハアトサキニサジアリ
墨 塩ノスクウ也 寸法ハ

一銀ノサジ 香具スクウ也

一小笏 木ハチヤント云木也 スンボウハ

説 130

塩

ハクサケノナキシルケノナキヲ白キノヲチリノナキヲ
タハラノ中ヨリスグニトリ出テチリヨクノケカタマ
リタルヲヨクノホドキテ

説 131

墨

ハイロツケノ事也ナベ墨ヤキカヘシテ用

説 132

一サジ

木ハ桜也 寸法ハ
香具スクウ也

薰之道具 同仕様 寸法

説 133

一桜ノサジ

木ハ是ハアトサキニサジアリ
墨 塩ノスクウ也 寸法ハ

説 134

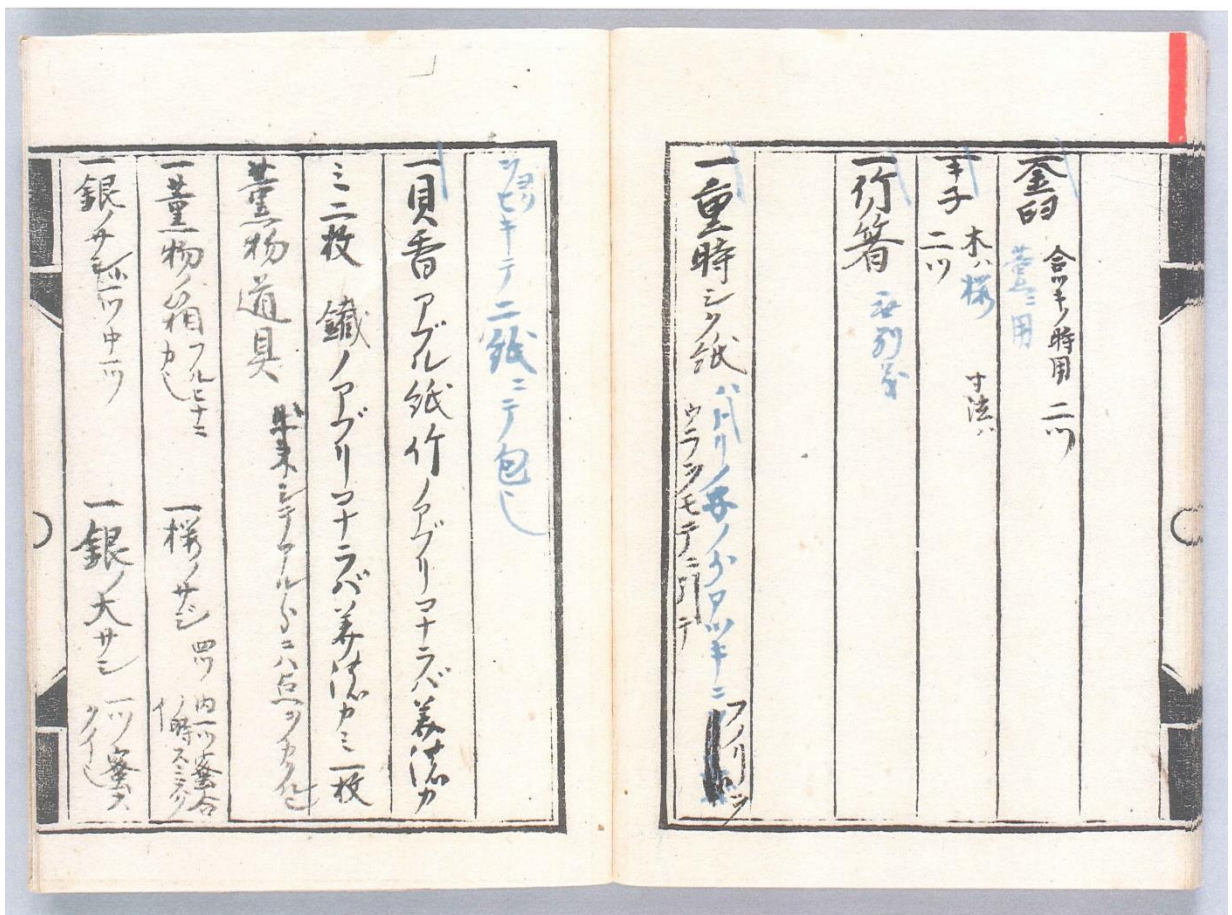
一銀ノサジ

香具スクウ也

説 135

一小笏

木ハチヤント云木也 スンボウハ



説 136

一 金 曰 (青ノ忠)
合ツキノ時用 ニツ
薫二用

説 137

一 キネ (青ノ忠)
木ハ桜 寸法ハ
ニツ

説 138

一 竹ノ箸 (青ノ忠)
無別義

説 139

一 重時シク紙 (青ノ忠)
ハトリノ子ノ少アツキニ
ウラヲモテニ引テ
フノリヲ

説 140

ヨク
ヲヒキテニ紙ニテ包也

(青ノ忠)

一 貝香アブル紙竹ノアブリコナラバ美濃カ

ミニ枚 鉄ノアブリコナラバ美濃カミ一枚

薫物道具 出来シテアル分ニハ点ヲカクル也

説 141・142

一 薫物ノ箱 フルヒナニ
カ也 一 桜ノサジ 四ツ
内一ツ蜜合
ノ時スミスク
イ

説 143・144

一 銀ノサシ 小一ツ中一ツ 一 銀ノ大サシ
一ツ蜜ス
クイ也

「三八丁ウ」

「三九丁オ」

け通具
上と下
今ア
ノシ
ハハ
ハハ

一 小笏 ニツ 木ハヤシノ
木也カキ合ノ時用

一 竹ノヘラ ニツ

一 桜ノ箸 ニツ

一 カナギ子 ニツ

一 香具バカリ ニツ

一 中高 十六枚
裏表ニフノリヒキテ

一 雉羽 ニツ

一 竹ノ箸 十ツイ

一 桜ノキ子 ニツ

一 カナウス ニツ

一 鳥子 三十枚
裏表ニヒキテ

一 大高 六枚
裏表ニフノリヒキテ

一 美作カミ 表ツミ具香
ノ時イロク

一 葉盤薬刀 六ツツ

一 大薬研 ニツ

一 麝香スリ茶碗 五ツ
内ツ雑々
竜腦スリ

一 フルヒハ沈 アラ
シ
麝
カ
丁
少アラ
シ

一 貝蜜ノウス物ナヘ カラ金
大小ツ

説 145・146

説 147・148

説 149・150

説 151・152

説 153・154

説 155・156

(書入 43)

一 小笏 ニツ 木ハヤシノ
木也カキ合ノ時用

一 竹ノヘラ ニツ

一 桜ノ箸 三ツイ

一 カナギネ ニツ

一 香具バカリ ニツ

一 中高 十六枚
裏表ニフノリヒキテ

一 雉羽 ニツ

一 竹ノ箸 十ツイ

一 桜ノキネ ニツ

一 カナウス ニツ

一 鳥子 三十枚
裏表ニヒキテ

一 大高 六枚
裏表ニフノリヒキテ

説 157・158

説 159・160

説 161・162

説 163・164

説 165

説 166

一 美作カミ 表ツミ具香
ノ時イロク

一 葉盤薬刀 六ツツ

一 大薬研 ニツ

一 麝香スリ茶碗 五ツ
内ツ雑々
竜腦スリ

一 フルヒハ沈 アラ
シ
麝
カ
丁
少アラ
シ

一 沈ノ粉フルヒ 少テ
ラシ

一 剪刀 三ツ

一 中薬研 ニツ

一 麝香 五ツ
石
スイセウヌハ

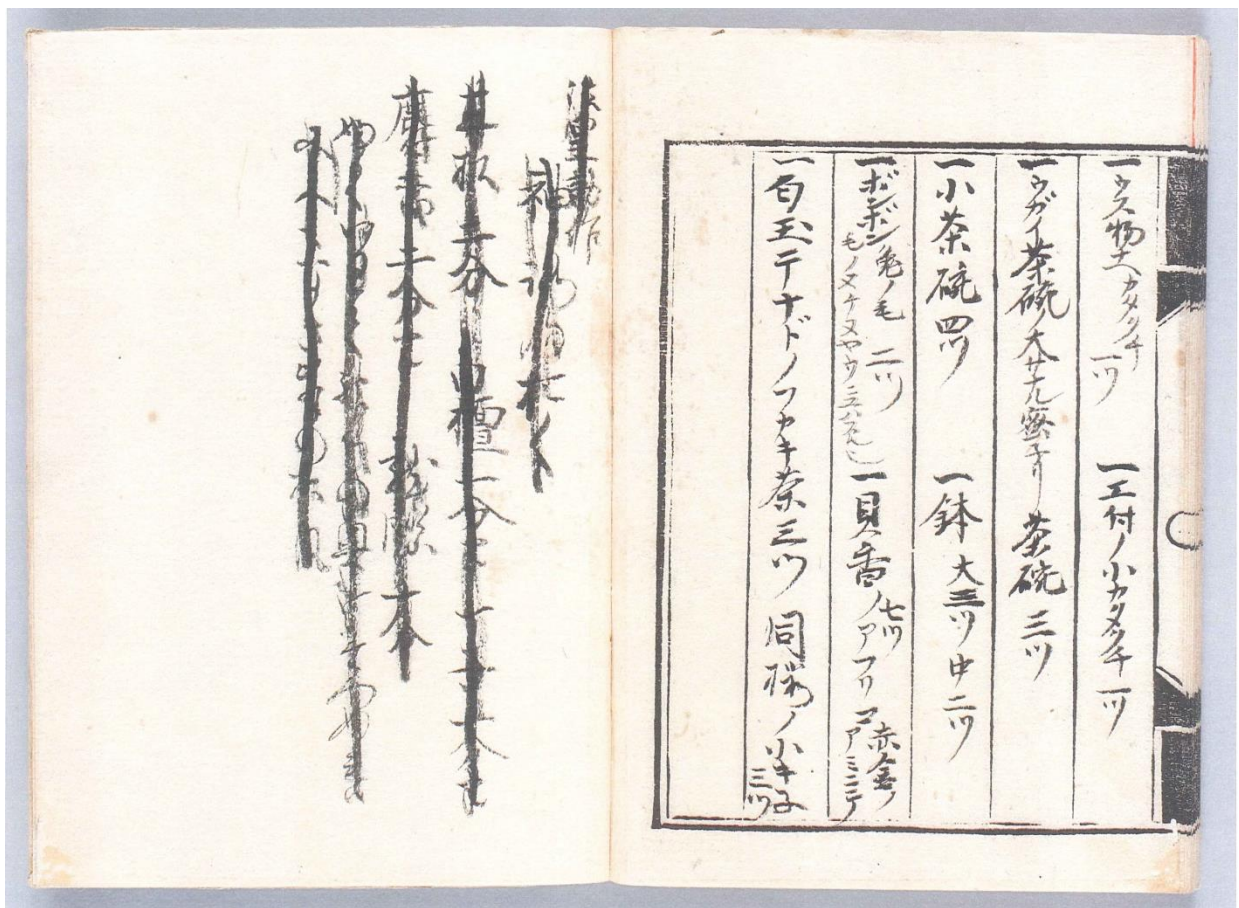
一 カサヌルトキノフルヒ 二ツ
アラキトコマカト

一 フルヒハ沈 アラ
シ
麝
カ
丁
少アラ
シ

一 貝蜜ノウス物ナヘ カラ金
大小ツ

「三九丁ウ」

「四〇丁オ」



説 167・168 一ウス物ナヘ カタクチ 一エ付ノ小カタクチ 一ツ

説 169 一ウガイ茶碗ノ大サナル蜜ネリ茶碗 三ツ

説 170・171 一小茶碗 四ツ 一鉢 大ニツ中ニツ

説 172・173 一ボンボン 兔ノ毛ニツ 一貝香ノアフリコ 赤金ノアミミテ

説 174 一句玉干ナドノフカキ茶 三ツ 同桜ノ小キネ 三ツ

法皇勅作

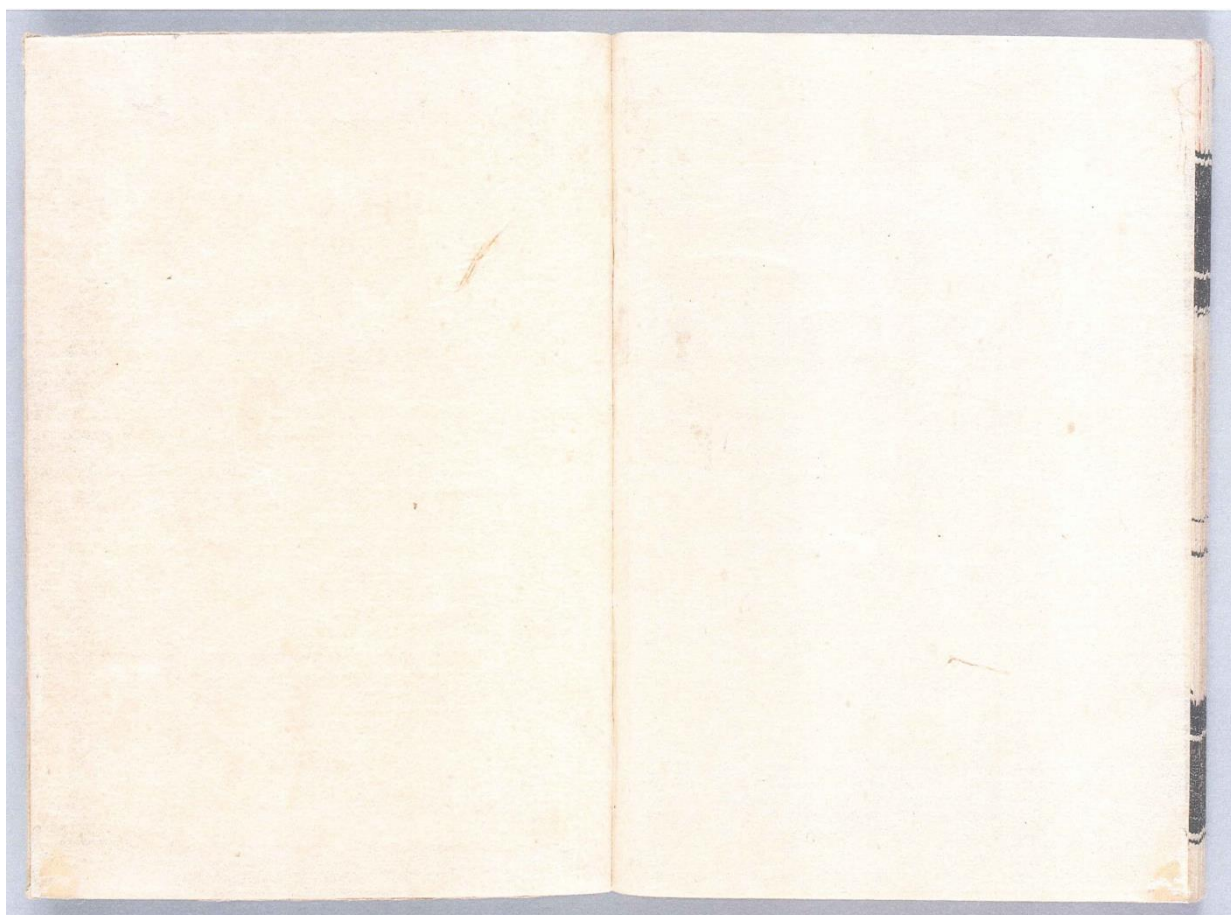
神路のおく

方 7 甘松二分 白檀一分半 丁子一分半

麝香二分半 龍腦一分

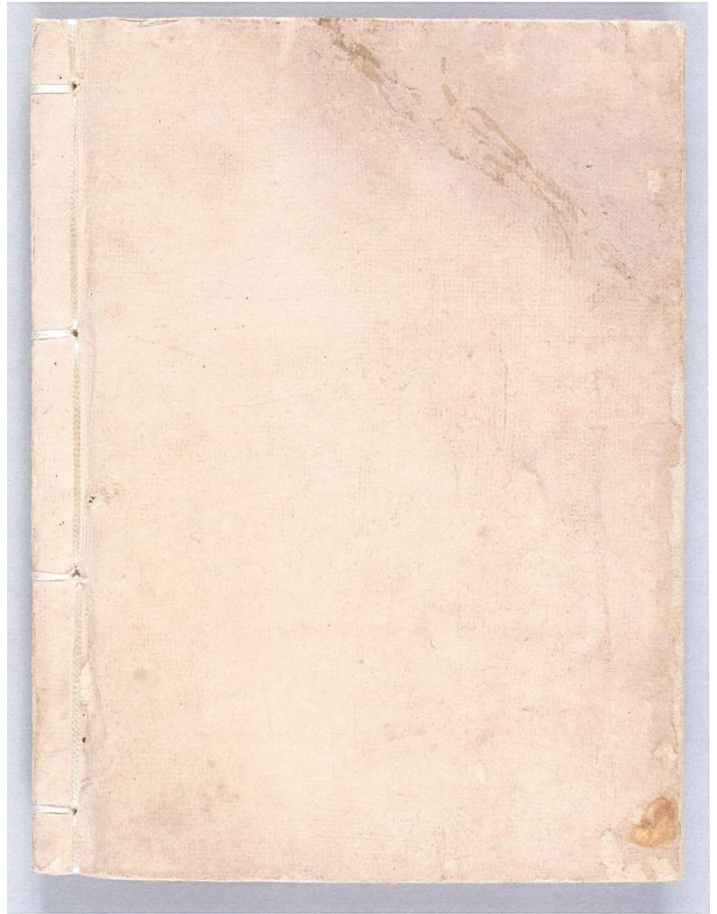
ふかくいりて神ちの奥をたつぬれは

又うへもなき峯の松風



「(四丁ウ)」

「(裏表紙見返)」



書人1(3)丁裏頭欄 三●先三千反アラヒテノチニ水ニ灰ト薫●ノ粉トヲ入テヨクニテアラヒ又右ノコトク蜜ト水ト入テニル也其後ノゴトシ

書人2(7)丁表頭欄 或説ニ占唐代ハ楠木ノ枯タル木ヲワリテキサミ用也

書人3(7)丁表頭欄 調様

書人4(9)丁表頭欄 作甘葛ノ事四説一説ハツタノ葉ヲセンジテネル一説ハサネカヅラヲセンジテネル一説ハサトウノツルヲセンジテネル一説ハシヤゼンシヲセンジテネル

書人5(9)丁裏頭欄 三条公富公相傳ノ分

書人6(10)丁表頭欄 又一説如此水ニテ煎テノチセンジ又蜜ヲ大指ノウラニ付テ貝ノウラヲモテニヌリ付アブレテノチニ又ヲモテノ方ハカリカタノヌリテアフリコニスト云々

書人7(10)丁表頭欄 但水ニテ煎時貝ニ兩ニ付灰ヲ一兩ホド貝^{八兩一分ホド也}三十六匁四分ホド薫ノ粉四匁三分一兩也蜜ト水トノ中ヘ入テ貝ヲウチカヘシノセンジテヨシ

書人8(10)丁裏頭欄 一薰物ハ第一射香ノ様第一也コレヲ肝要トコノロヘテノヘル義也

書人9(10)丁裏頭欄 貝六十匁ホドナラバ薫ノ粉一兩半ホドモヨシ蜜ハ黒蜜ニテア●マリネバラヌナラバタトヒ色コクナルトモ少ヲノクイレテヨシ水半分ホドモ煎ツマリタルトキ貝ヲ二枚トリテ指ニテイロフテミルニ常ノ水ノヤウサクノトアラバ又少蜜ヲクハヘテヨシツヨクネバルモアシノ又ネバラヌモアシキ也貝六十匁ホドスレバ五十六匁ホドニナル也

書人10(11)丁表頭欄 貝ハコシラヘテ久クナルホドヨシ三年モ四五年モ久ガナラノヨシ久クコシラヘテラクニハ十兩ホドナラバ丁子マルガラ士三ホド入テラキタルガヨキ也

書人11(11)丁表脚欄 沈ハカラキアマキモミヅクサクモニカワクサクモナキガヨシ沈ハカウバシクアツキニヲヒニテタチ(次十一丁表・脚欄へ続く)クチモ中モスカリモニカワクサクナキシツカリトシタルヨシアマクサキカウツカリトシタルハアシノ大方アカキイロノ沈ニサヤウノガアルモノ也

書人12(11)丁表頭欄 沈●●●ミルニ焼亡ダギニナリタルスカリノケムリクサキハアハセテ後ニツハキクサクナルナリスガリノカウバシキガヨキ也

書人13(11)丁表頭欄 アマリアマキ匂モアシノチトシツカリトシタルガヨキ也トカク沈ハアサキカヨキ也ツハクサクモナキ也コキ木ニテアハスルナラハスガリノシツカリトシタルツハキクサクモ少シモナキヲヨクノギンミスヘシコキ木ハ沈バカリキタルトキハツハキクサクモナケレドモ合テワルウスレバツハキクサクナル也トカクアサキ木ノツハキクサクナキガヨキ也合ヲ入ギンミスルニハ沈一朱ニテモ少ツノコマ

カニシテ丁白貝薫ナトニアハセ蜜ニ合テタテミレバヨクシル也又アサキ沈ニテモコキニテモアマリウツカリトシタルハアカシノスコシシツカリトシテ又クスリクサクナキツヨクシツカリトシタルハアシノアマキハカリハナラノ以下、12丁裏脚欄 アシノトカクアマキハアシキ也コキ沈又ハアサキ沈ニテモウツカリトシタリ又ハニカハクサクアマクサキハアシノ又スガリアマクニヲヒノコキハアシノタダニトナキケフリノケフリクサクモナキカロキス以下、13丁表脚欄 ガリヨキ也少ウツカリトシタルカタハクルシカラズ又スガリノマヘノ匂ニ小便クサキ香ノアル沈アリコレハアシノトカクアマキ匂 小ペンクサキ匂ニカワクサキ匂ツハキク以下、13丁裏脚欄 サキ匂ナドハアシノソノウチスコシ小ペンクサキトニカハクサキハカロクスコシハクルシカラズアブラモアマリ多クイヅルハアシノタキテミルトキ以下、14丁表脚欄 ハジメト又ハ後ノアブライテタルトキトヨクキクベキ也ケフリクサキモアシキ也右ノキヤウハアブラトクトイテノカラヨクキノテアトノスガリ以下、14丁裏脚欄 ノカルヲヨシトス沈ノ粉フルイテトリタルガヨキ也コハナニトシテモツハキクサキ也

書人14(12)丁表頭欄 又アマキ沈ハアシノ中ホトヨリスカリナドマテアマクテニカハクサキハタトヒツハキクサクナキトテモアシキ也ソノウチミヂンノ粉ハコマカナルフルヒテフルヒノケテヨシ

書人15(12)丁表頭欄 毛トカワトヲヨクヨリステノスルヘシ

書人16(14)丁表頭欄 墨ハ釜ノザノ処ノ満中ヲコソガ●●●也●ノ木ヲタキタル以下、14丁裏頭欄 下ノ墨ニテモ不苦

書人17(14)丁裏頭欄 練タル蜜モ越年●テモソコネズバ用テ不苦

書人18(14)丁裏脚欄 又沈ハウツカリトシタルタキクチタキヲワリノ少ニテモツハクサキハアシシツカリトハナツキトヲホトニテニカミノアルタキヲワリノカルキカヨシノ

書人19(14)丁裏挿紙頭欄 アハノ皆ニナルマデ●

書人20(14)丁裏挿紙頭欄 三条公富公相傳

書人21(14)丁裏挿紙頭欄 香具トモ粉ニシテ蜜ニ合テ一色ツノ

書人22(15)丁表頭欄 其香ヲタキテヨクノキニテキノシリテラキテ合トキニ香ノカツモノヲヒカヘタメ也

書人23(16)丁表頭欄 三条公富公相傳ノ分

書人24(17)丁表頭欄 夏アハスルハアツキニヨリ障子ヲタテズニカヤヲツリテソノ中ニテ合ト云々風ヲチキニアテマジキガタメ也

書人25(17丁裏頭欄)此「説者トモニ色ニアハセマゼテヌルガナヲ」ヨシ勅作之説ハ大方マジリテノチシタルガヨク「マジル也」句フカシ

書人26(18丁表頭欄)(絵記号)菊花取重ノ事 勅作 沈三分 薑皆 貝皆 次搔合 次ニノヘテ 丁皆

● 次甘皆 又搔合 次残沈ヲ三筋ニ並テ以下、18丁裏頭欄)其上ニ麝皆麝輕口傳白沈塩甘葛之口傳今案云右ノ白沈ハ一両合ナラハ半朱ツ、カケテ一ツニ合テ麝ヲ合タル方ヘヨク合テ甘葛合トキ塩一朱ヨリモカロク蜜中ヘ入可合也又ハ沈ノ粉モ白モ塩入ト一度ニ蜜中ヘ可入歟麝ニ合タル沈ヲ麝ニアワセサル沈ノウヘニ又重也

書人27(19丁裏頭欄)三条家ノ流ニハ麝香一度半分合テマセテ又ノコリノ半分ノ麝ヲ合テマゼル也二度ニ麝香ヲサス也

書人28(20丁表頭欄)五両四両三両合如此(図)墨ハカウシ朱ハキザミマゼヤウ也

書人29(20丁裏頭欄)三両合ヨリ下同上(図)

書人30(20丁裏頭欄)中説云沈トヨノ粉ハカリナトニテ沈トマジラネトモクルシカラズヨノ粉ヲ、重ネテカラヨク「マデル也」マゼヤウハ清トヲナジ事也アヒタニ紙ニスリツケルヤウニモマゼテヨシ清ノゴトクニカサネカクルヤウニ合時ニ小笏下ノ紙ニヨクアタリテ香ノスレヤウニシタルガヨキ也以下、21丁表頭欄)他ノ香眞ハ大方ニマゼテトカク句ノ出ヤスキ物ヲカサネタル申也又ハ多ク入ル香具ナドノトキヨク「マゼテヨシ」大方丁甘麝ナドヲヨク「マゼテヨシ」白モ「マゼテヨシ」楠ウコンナドヲモヨクマセテヨシソノウチナトモアマリマゼスキレハアマキ句出テアシ「キ」ミテ少句ノイツルホドニ少マヘカドガヨキ也方ニヨリソレ「ノ」句ヲ少(以下、21丁裏頭欄)出テヨキ也アマリイデヌモアシ「出スギタルハナヲアシ」タキテ「キ」テヨキカゲンアルヘキ也樟脳ナド入方アリコレハ大方重ネマゼテ後ソノマゼタル粉ヲ少シトリワケテ樟脳ヲヨク「アハセテソウノ合タルナカヘ入タルガヨシサテ又ヨク「マセル也」樟脳ニヨラズスナキ香ハ左様ニシタルガヨキ也(以下、21丁表頭欄)重様ハフルイニテフルイカネズ又ウツクシ下ヲシテムラナクフルイカサネズタ「香具」一所ヘウスクヨセテハカリヨリスグニウツクシ小笏ニテマセル也アマヤウモナキ所ニテナブリ笏カズノ多クアタルハアシ「麝」バカリハフルイニテカサネ二度ニ入

書人31(22丁表頭欄)三条公富公相傳ノ分

書人32(22丁裏頭欄)今案ノ説(絵記号)先沈ヲ半分分テヒログソノウヘニ方ノ次第ノゴトクニ粉ヲ二色ヲキテ沈ト已上三色ヲカサネテヨクカキマゼサテ又ヒログテカウシヲ付テ又ソノウヘニ次第ノゴトク又ニ

色ヲキテヨクマゼ「スル也」イツレノ方ニテモ二色ツ、重テマセルアマリヲナジ香ヲサイ「マゼレバアタ」カナル句スルニヨリサヤウニシヨク「マセル也」サテヨクマゼテノチニ麝ヲ半分カウシヲ付テ重テ又(以下、23丁表頭欄)ヨク「マセル也」サテ残ノ沈ヲカサネテヨク「マゼテ又カウシヲ付テ残ノ麝ヲ重テヨク「マセル也」

書人33(23丁表頭欄)(絵記号)又一説先沈ハアハセズシテ粉ノ分バカリヲ次第ノゴトク合テヨク「マセテ」少アラキフルヒニテ二度フルヒソノ粉モ二ツ分又沈ヲ三ツ分テ下ニ三ツハリ一分ノ沈ヲヲキノウヘニ粉ヲ半分ヲキ又ソノウヘニ(以下、23丁裏頭欄)三ツハリ一分ノ沈ヲヲキ又ソノウヘニ残半分ノ粉ヲヲキノウヘニノコリノ三ツハリ一分ノ沈ヲヲキテヨク「マセル也」麝ハ粉バカリ合セタル後ト沈皆合後ト二度ニ入也

書人34(24丁表頭欄)諸ノ薫物ニ口傳ノ事 極秘ニ云麝ハ粉合ノトキリヤウ目ノ内半分合テノコリ半分ハ蜜ノ中ヘ入也一両合ノトキ一朱白梅ナトハ梅干ノサネノ中ヲアンニシヲ水ニヨクツケテシホケヲトリイタシテ赤皮ヲトリ粉ニシテ一朱右ノ麝ニマセテ蜜中ヘ入ヨクスル也(以下、24丁裏頭欄)梅花ニモ白梅ノシベヲ(一説「蜜梅」花シベトアリ)●カゲボシニシテ四両合ナラバ一朱ヨリモカロク粉ニシテ右ノコトク蜜中ヘ入也 菊花モ冬菊ノシベヲカゲボシ右ノゴトク蜜中ヘ入也 柏木(ヨ合トキハ麝入マゼル)入方ナドモ右ノゴトク也 侍従ナドクスノ木入ノハ右ノコトクシテヨシ(以下、25丁表頭欄)若草ナドモ占唐代ニ楠木ノ枯タル木ヲワリテキサミ用也 占唐(唐草トナミ也)コレ●半分ハ粉ノトキ用テ半分ハ麝半分入トキニ麝マゼテ蜜ノ中ヘ入也 諸方薫物ニマツ麝蜜ノ内ヘイレサルサキニ沈三両合以下、25丁裏頭欄)ナラバ沈粉一分ニ朱丁粉半朱ヨク「マセテ」蜜ノ内ヘ入ヨクスリ合テ後麝ヲ入テヨシ春ハ丁粉一朱モヨシ秋冬ハ半朱ヨシ沈粉夏春一分ニ朱秋冬二分モヨキ也

(宋ノ忠)

書人35(25丁裏頭欄)又沈丁ハ二色ヨク(以下、26丁表頭欄)合テノチニ二ツ分テ蜜ノ中ト後ツキ合テ後ニヨクヒロケテフリカケントツキテモヨシ「年去コレハ」コ「ロモトナキ也」ソレ「薫物ノフリヲナジヤウニ可成歟」無心え也イカサマ少ノコシテヲキ後日ニカタタナリタルトキノ香ヲ蜜入テツキタルモヨシ 秋ノ末ヨリ春ノハシメサムキウチハシルキホトキニ合レハ十日ホドシテ●●アケテミルニヨキカケンニナル也春ノ末ヨリ秋ノハジメアツキウチハ少シヒカヘテカタクアハセテヨシ後ニヨキカケンニナルナリ

書人36(26丁裏頭欄)(図)

書人37(27丁表頭欄)春夏ハ色付サジニ三スクイ半秋冬ハ三スクイ塩ハクイカゲン右ハ四両三両合ノ分料也

書人38(27丁裏頭欄) 蜜ハネリテアヒダノアルハソノマゝ入テアハスルハアシゝ蜜ノ香イツル者也アタゝ
メテソノマゝ水ニテヒヤシソノマゝ入テヨシ合ヲキタル薰物カハキテカタクナリタルトキハツキヒロケテ
蜜ヲサストキモナヲく右ノゴトクニシテヨキ也

書人39(28丁表頭欄) 蜜ハ少入スギテシテキホドナルガヨシ少アヒダアレバヨキカゲンニ蜜入タルハカワ
ク也

書人40(28丁表頭欄) 三条公富公相傳ノ分

書人41(29丁裏頭欄) コレハ一両ハ四匁 一分ハ一匁 一朱ハ二分五リン合也

書人42(33丁裏頭欄) ナニゝテモヒトヘニホヒニ出候時大方ハ沈ヲクワヘテヨシ但ソレくノカラおさ
へ候ニホヒノ物ヲミツヘ入候てツキ合候ヘハ大カタハナヲリ申候

書人43(39丁裏頭欄) 此道真トモ箱ニ入テヨサソウナルモノハ箱ヲスル事

附・『万方』『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引

凡例

一、専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』（二冊、写本、第2函118、マイクロ連番164）及び『香具撰様調様』（二冊、写本、第2函119、マイクロ連番165）にあらわれる人物の呼称と家名及びその他団体、施設名、及びそれらを含む複合名詞について解説した。

一、人名や家名の内、次の拙著及び拙稿において解説したものについては、既出の内容に大幅な加筆修正を加えて掲載した。

・『薰集類抄の研究』附・薰物資料集成、三弥井書店、平成二十四年十二月

・『徳川林政史研究所蔵『薰物之方』翻刻』、『薰物書の研究』、創刊号、薰物書研究会、平成二十六年四月

・『京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻』附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説、『薰物書の研究』、第二号、薰物書研究会、平成二十七年四月

・『京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「江戸下向雑々覚」翻刻と脚注』附・「江戸下向雑々覚」人名家名等解説及び索引、『薰物書の研究』、第三号、薰物書研究会、平成二十八年十月

一、解説は、書中の人称や呼称を標目として行い、人物の場合は氏名、生没年、享年（数え年）、家系、略歴、号、その他の動静、薰物との関わり並びに『万方』及び『香具撰様調様』翻刻中の掲出先及び掲出時の呼称について記した。家名等の場合はその沿革と翻刻中の掲出先及び掲出時の呼称について記した。これらの名称が薰物の処方及び調合法の由緒に係る記述等として記載される場合は、それらの処方及び調合法の載録書名及び通番を列挙するとともに、

各処方及び調合法の他書における同類文の情報についても併記した。なお、各標目に関連する事項が本誌掲載の解題及び本解説に記載される場合は、次のように当該箇所の記載頁数を示して参考に供した。

（例）解説中のある人物について『万方』『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引の別の頁に関連する解説が記載される場合

：転法輪三条実香（人名家名等解説及び索引114頁「実香」）は、：

一、解説は、氏名など呼称の旧仮名遣いによる五十音順に行った。

一、仮名遣いの「ん」及び「む」は「ん」に統一した。

一、標目となる呼称には、原則として掲載元の本文における初出のそれを使用した。一般に通用する呼称と異なる場合は、一般の呼称も標目に加え、該当する書中の呼称を示した。

（例）今出川公規 ↓ 公規

一、標目の読みは、既存の辞書類において確定された通例及び類例を採集して示した。標記には、歴史的仮名遣いによる音訓に平仮名を、現代仮名遣いによる音訓に片仮名を用いた。

一、人物の関歴は『公卿補任』、『尊卑分脈』、『本朝皇胤紹運録』、『歴代編年集成』、『皇年代私記』、『諸家伝』、『系図纂要』、『徳川諸家系譜』並びに『寛政重修諸家譜』の記述に依った。関歴及び伝承及び考察結果の出典伝本や典籍により説の分かれる場合等に、必要に応じて併記した。

一、解説中に処方及び調合法の同類文の載録先を記載する場合は、薰物書の書名及び所蔵先を

併記した。テキストを引用した薫物書の写本の所蔵情報及び活字本の有無及び活字本の詳細は次の通りである。

- ・ 薫集類抄、写本、上下二巻、国立国会図書館所蔵、請求記号：TRJ-N4。活字本：有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。
- ・ 薫方之書、写本、一点（袋共十点、内文書六葉）、後西天皇宸翰、宮内庁書陵部所蔵、請求記号：宸一四二〇。活字本：無。
- ・ 香之書（掛香之方）、写本、一巻、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号：162-14。活字本：有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。
- ・ 香秘書、鎌倉時代写本、一巻、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、請求記号：研149。活字本：有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。
- ・ 衆香類集、写本、折本一帖、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵、請求記号：旧蓬左36-5。活字本：無。
- ・ 薫物合様、写本、一巻、寛文六年権大納言公規、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：菊卷109。活字本：無。
- ・ 薫物故書、写本、一冊、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：第2函122（ハイクロ請求記号：4-1110）。活字本：有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。
- ・ 薫物調合秘方、写本、一冊、宮内庁東山御文庫所蔵、請求記号（函号）：113-4-1-11。活字本：有（拙稿「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」、『杏雨』第十四号、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、平成二十三年六月）。
- ・ 焼物調合法、写本、一巻、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号：162-95。活字本：有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。
- ・ 薫物（ノコト）、写本、一冊、高松宮本、請求記号：38。活字本：無。

たきものいはう、写本、一冊、高松宮本、請求記号：22。活字本：無。

・ 薫物之方、写本、折本一帖、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵、請求記号：旧蓬左36-7。活字本：有（拙稿「徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」翻刻」、『薫物書の研究』創刊号、薫物書研究会、平成二十六年四月）。

・ 薫物之方、写本、一冊、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、旧乾々斎文庫旧蔵、請求記号：乾々2172。活字本：無。

・ 薫物秘蔵抄、写本、今出川公規自筆、一巻、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：菊卷110。活字本：有（拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」翻刻』附・「薫物秘蔵抄」人名家名解説」、『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十七年四月）。

・ 「無題・薫物書一」、写本、一冊、公益財団法人上田流和風堂所蔵、請求記号：246。活字本：無。

・ 「無題・薫物書二」、写本、一冊、公益財団法人上田流和風堂所蔵、請求記号：247。活字本：無。

一、標目とした人名家名等の掲出箇所については、書名及び翻刻中の方及び説の番号及び各箇所における表現を収集して標目の文言に傍線を付し、解説の末尾に次のように記した。

（例）標目「正親町院」の場合

方・説 『万方』黒方方12・27（正親町院 勅方）、説18・19（正親町院 勅方）、黒方方29（正親町院之御方）

あ行

足利義尚 ↓ 常徳院殿

家^{イヘ} 特定の薫物方が考案ないし所有された家。他書に伝来する「家」の処方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通り。

・『万方』黒方方42（黒家秘説）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』黒方方29（勅筆巻物）載録）、②黒方方37（墨流）

・『香具撰様調様』黒方方2（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（なし）

・『香具撰様調様』梅花方3（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（なし）

・『香具撰様調様』若草方4（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（なし）

・『香具撰様調様』花橋方5（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…①『万方』侍従方19（三条流）、②『万方』盧橋方47（三条）

・『香具撰様調様』仙人方6（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…『万方』仙人方21（三条流）…三光院説云是モ花花（ママ。菊花か。）ヨリ出タル也、云々）

以下の本項では『万方』の「黒家秘説」及び『香具撰様調様』の「家方」について解説する。

『万方』説24の同類文として、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』説11を確認している。説11には朱書きにより「黒家法」と併記されており、続文には同じく朱書きによる「三家秘方」の文言も見える。「三家」は同書において合香家として著名な三条家の略称として行われ、三条家の薫物秘説を引用する際に記載されている。「黒家法」もまた説11の由緒に係る記述と考えられるが、「黒」を含む呼称を有した合香家については管見に不明である。また、説11は薫物「黒方」の調合法を記したものであり、『万方』の同類文も「黒家秘説」として同一の黒方方に対して記載される。以上のことから、既出の拙稿（注二）においては、『薫物秘蔵抄』説11の「黒家法」は、「黒方調合についての当家の法（調合法）」と解釈するにとどめた。『万方』の「黒家秘説」についても、「黒方調合についての当家の秘説」を意味するものと見なしておきたい。

『香具撰様調様』に載録される薫物方の内、「黒方」方2から「仙人」方6までの五点の処方には、来歴として「三条公富公相伝ノ方、家方、公富」と記される。江戸時代前期の転法輪三条家の当主三条公富（人名家名等解説及び索引142頁「公富」）からいづれかに相伝された処方であり、それらは公富家の「家方」、すなわち転法輪三条家において考案ないし所有された品々であったと解釈できる。管見に、『万方』以外の他書に同類文を確認できず、『万方』は今出川公規の類纂による可能性がある。公規は『万方』と一対の書として『香具撰様調様』を類纂したと考えられることから、公富による相伝の相手は公規自身、または公規に身近な人物であった可能性を検討すべきであろう。

方・説 『万方』説24・黒方方42（黒家秘説）、『香具撰様調様』黒方方2・梅花方3・若草方4・花橋方5・仙人方6（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）

家方^{イヘノホウ}

家に伝来する薫物の処方。『香具撰様調様』には三条公富家（人名家名等解説及び索引142頁「公富」）に伝来した処方の意味で記述される。

他書に伝来する同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引138頁「家」（前項）解説を参照されたい。

方・説 『香具撰様調様』黒方方2・梅花方3・若草方4・花橋方5・仙人方6（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）

今出川家 ↓ 当

正親町院

おほきまろのいん
おぎマサキ
マサキ

第一〇六代正親町天皇。正親町院の薫物については既出の拙稿において小考を加えたことがある（注二）。以下の本項では、『万方』における正親町院関係箇所について、既出の拙稿における考察を再構成して解説する。

正親町院は永正一四（一五一七）年五月二九日誕生。後奈良天皇第一皇子。母参議万里小路賢房女贈皇太后吉徳門院榮子。諱方仁（みちひと）。天文二（一五三三）年十二月九日に十七歳で親王となる。弘治三（一五五七）年九月九日父帝崩御、十月二十七日踐祚。三年後の永禄三（一五六〇）年正月二十七日に即位。天正十四（一五八六）年七月二十四日誠仁親王（号陽光院）薨去により、同年十一月七日皇孫和仁に親王宣下して讓位。文禄二（一五九三）年正月五日に仙洞にて七十七歳で崩御した。

正親町天皇は和漢の学問、教養を幅広く習得して奨励したほか、寵臣を召し出して立花や炷香等も嗜んでいる。右大臣三条西公條から『帝範』や『職源抄』、『源氏物語』等の進講と、古今伝授や『伊勢物語』の伝授を受けた。皇子誠仁親王に対しては、四辻公遠に命じて琴を始め

とした音曲の稽古を授けた。公遠はまた立花の名手であり、御前に召されて度々実作に及んでいる。

薫物については、父帝が轉法輪三条実香（人名家名等解説及び索引144頁「実香」）とその子息公頼から薫物の伝授を受けたことがあり、永禄三（一五六〇）年、同五（一五八二）年ならびに同八（一五八五）年には、父帝の調合した「薫物」の下賜に与っている『後奈良院宸記』等）。即位して後は、公家の寵臣や武家の有力者に対して、自ら調合した「薫物」や「匂袋」の下賜を頻繁に行ったことが、『御湯殿上日記』等の記述から知られる。

先行研究によると、正親町天皇が「薫物」と「匂袋」の調合や贈答に及んだとする記事は、『御湯殿上日記』だけで六十八件を数え、「匂袋」の一種と推定される「掛け袋」の下賜三十三件を合すると百一件にのぼる。この件数は、後奈良朝における「薫物」及び「匂袋」の下賜や調合、贈答に関する記事が、『御湯殿上日記』に十五件、『後奈良院宸記』に三件確認されることに比して各段に多い（註30）。

さて、薫物書の伝承によれば、正親町院は薫物を調合、贈答するのみならず、調合の為の処方を考案ないし所持してそれを相伝したこともあったと云う。『万方』には正親町院の処方と伝わる薫物方が三点載録される。他書に伝来する同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』黒方方12（正親町院 勅方）…①『万方』黒方方27（正親町院 勅方）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方107（用此説尤是、正親町院勅方也、從御室御所拝受之口伝故実逐一御相伝也）

・『万方』黒方方27（正親町院 勅方）…①『万方』黒方方12（正親町院 勅方）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方107（用此説尤是、正親町院勅方也、從御室御所拝受之口伝故実逐一御相伝也）

・『万方』黒方方29（正親町院之御方）…（同類文なし）

右の『万方』の処方三点及び同類文はいずれも薫物「黒方」の処方であり、内二点（方12及び方27）は同一の処方と見なせる。また、同類文は同じ菊亭文庫に伝来した『薫物秘藏抄』に黒方方107として載録されるのであって、『万方』には記載の無い来歴にまつわる伝承も併記される。この伝承によれば、同書の黒方方107は「正親町院勅方」であり、「御室御所」より拝受なさったもので、処方の調合に係る「口伝故実」も逐一この人物より相伝なさったものであると云う。

「御室御所」とは御室仁和寺門跡（人名家名等解説及び索引140頁「御室」）の呼称であり、具体的には、薫物の秘方秘説を蒐集しており、天皇の師範を拝命できる身分や立場にあった人物と考えられる。また、正親町天皇の父帝後奈良天皇は、轉法輪三条実香及びその子息公頼から薫物方を相伝されていた。仁和寺門跡の内、天文八年に入室して宮門跡となった任助入道親王は、後奈良院猶子で正親町院の信望も篤く、後奈良院の薫物の師範を拝命した轉法輪三条実香の息女を生母とした人物である。以上の条件や人脈を鑑みて、正親町天皇に右の処方と「口伝故実」を相伝した「御室御所」の人物は、現時点では厳島御室こと任助入道親王と見なしておきたい。

正親町院については、父帝のように轉法輪三条家の合香家から直接薫物の秘方秘説を授けたとする史実や伝承は伝わらない。一方で、前述のように実香の相伝を受けた父帝からの薫物の下賜に度々与っていた他に、『薫物秘藏抄』の伝承によれば、正親町院には皇族による薫物相伝が実施されたと云う。正親町院の合香の技能は、父帝らと同様に公家の宗匠の流れをくむものではあるが、直接的には同じ皇族の師範の薫陶によるものと考えるべきであろう。

『万方』に記載の処方の来歴は、『薫物秘藏抄』の同類文の由緒に関する記述の一部を記したものであり、処方の来歴における宮門跡の介在についての記述が脱落しているが、それだけに、正親町院の薫物の（勅流）としての位置づけを、端的かつ明確にくみ取ることのできる内容と言えるかもしれない。

方・説 『万方』黒方方12・27（正親町院 勅方）、説18・19（正親町院 勅方）、黒方方29（正親町院之御方）

正親町院

勅方

おほきまろのいんちやくはふし
オオギマロ（一）ンチョクホウ

正親町院（人名家名等解説及び索引138頁「正親町院」）の考案ないし所持した薫物の処方。「正親町院之御方」（人名家名等解説及び索引140頁）に同じ。「法皇 勅方」（人名家名等解説及び索引160頁）の例ともども、「勅方」の前の空字を

直前に追号の記載された上皇に対する敬意を表す闕字と考えた場合、ここでの「勅方」の主体は正親町院と解せる。

他書に伝来する同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引138頁「正親町院」解説を参照されたい。

方・説 『万方』黒方方12・27（正親町院 勅方）、説18・19（正親町院 勅方）

正親町院之御方 おほきみちの(い)んちおほきみちの(う) 正親町院 (人名家名等解説及び索引 138 頁「正親町院」の考案ないし所持した薫物の処方。「正親町院 勅方」(人名家名等解説及び索引 139 頁)に同じ。

他書に伝来する同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引 138 頁「正親町院」解説を参照されたい。

方・説 『万方』黒方方 29 (正親町院之御方中)

※参考 『万方』黒方方 12・27 (正親町院 勅方)、説 18・19 (正親町院 勅方)

同古法 おなしほふ(う) 直前に記述された説に同じく古い調合法の意。『万方』は複数種類の依

拠資料に記載のあった諸方諸説が集成、類纂された書物であり、各項目及び項目ごとの処方及び調合法の名称には、それらの配列により適宜編集が加えられたと考えられる。説 23 「同古法」は直前の説の由緒が「勅作」(人名家名等解説及び索引 155 頁)と記されることから、同じく勅作で古い時代の説を意味するものと解せる。説 27 「同古法」は「承和秘方」(人名家名等解説及び索引 152 頁)の由緒を伴う和合次第の説であることから、表現から承和こと仁明天皇ゆかりの品として伝来した調合法とも解せるが、仁明天皇の和合次第として伝来する諸説に同類文は確認できていない。

方・説 『万方』説 23・27 (同古法)

同勅作 おなしちよくさく 直前に掲載される二説の由緒が「勅作」(人名家名等解説及び索引 155 頁)

及び「同古法」(人名家名等解説及び索引 140 頁)と記されることから、直前の説と同様に古い時代の勅作、との意味に解せる。

方・説 『万方』説 28 (同勅作)

御室 おむろ 「御室御所」こと仁和寺の略称であり、同寺の門跡の呼称及び同寺の所在する地域の地名としても用いられる。『万方』では、粉末状の香具を蜜等の液に解き混ぜ、四角く薄い小片状に刻んだ沈を浸して用いたと云う「干(保志)」の処方(方 74)の由緒として記されており、仁和寺において考案ないし所持された処方として伝来したことが知られる。

処方の同類文は他の秘伝書等に確認できていない。「干」の処方は平安時代以来の伝統的な種類に含まれない、いわゆる新作の品に該当する種類である(注四)。「御室」ゆかりの千方 74 の

処方もまた新作の発祥した室町時代以降に考案されたと考えてしかるべきであろう。

室町時代以降に御室仁和寺に入室した門跡の内、薫物の秘方秘説を蒐集ないし考案して後世に遺したと考えられる人物に、厳島御室こと任助入道親王がある。任助については『万方』載録の千方 74 を含む複数の薫物方との関わりの有無を始めとして、合香家としての任助の人物及び正親町院(人名家名等解説及び索引 138 頁)との結びつきについて考察したことがある(注五)。千方 74 に云う「御室」の人物を任助と特定できるか否かの決定に係る根拠資料となり得る史実や伝承は、調査の現状において見当たらないことから、今後の調査の成果に照らして引き続き慎重に検討したい考えである。

方・説 『万方』説 56・57、千方方 74 (御室)

か行

香具所 かうぐしよ 「香具屋」(人名家名等解説及び索引 140 頁)に同じ。

方・説 『香具撰様調様』説 3 (香具所)

香具ヤ かうぐヤ ↓ 香具屋

香具屋 かうぐヤ 薫物の具材となる沈香、白檀等の香薬を売買する商店及び商人の意(注六)。「香具撰様調様」には「香具屋」及び「香具ヤ」として表記される他、同義語として「香具所」の記載もある。

江戸時代には、いわゆる「野士(ヤシ)」が縁日等で露天商や見世物師として商いを行うにあたり、商品の一部に香具を含む薬種を扱うようになったことから、江戸時代には個人で香具等を商う「香具師」を「ヤシ」と呼ぶことが行われたと云う。『香具撰様調様』に云う「香具屋」は公家等の上層社会の顧客を相手に香具を売買していることから、縁日商人よりは専門性と信用を備えた業者を意味すると考えるべきであろう。ただし、書中の用例を確認する限り、香具屋の卸す香具は、筆者或いは類纂者の期待に添わない場合もままあったようである。例えば、香具屋は筆者の周辺における香薬の簡便又は安易な調達先として認識される一方で、香具屋から調達した香具の品質の良し悪し及びそれに応じた調整の工夫のあり方、及び誤った香具が納品されることへの懸念等について記述される。

江戸時代前期の洛中における合香活動への香具屋による関与の実態については不明な点が

多いことから、引き続き関係資料の収集調査及び解明に取り組みたい考えである。

方・説 『香具撰様調様』説1・57・60（香具屋）、説51（香具ヤ）

※参考 『香具撰様調様』説3（香具所）

唐から ↓ 唐方

唐方 からのほう カラノハウ 「唐」から渡来した薫物方の意味。ここでの「唐」は中国大陆の唐王朝の

名称としてではなく、中国大陆から渡来した品であることを意味する語として考えておきたい。

『万方』には「唐方」の由緒を伴う処方一点（方55）が載録される。処方の名称は「みよし野」であり、この名称に続けて「又号唐方」と記述される。

本方の同類文は、本方の載録先である『万方』と同じ菊亭文庫に伝来した『薫物秘蔵抄』に一点確認することができる。同類文の概要及び本文は次の通りである。

・『万方』みよし野方55（唐方）…京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』薫衣香方（唐方）145

薫衣香方

唐方

一 排草	シヤウチウワフイア●●ヘ入吉ラ ●●キサム 麝香油ニモ●●マセル也	五十目
一 三奈二十目		一 辛黄五十目
一 甘松五十目		一 大黄三十目
一 白旦四十目		一 丁香四十目
一 竜腦二文目		一 麝香三文目
一 麝香油七文目		
ウチモノニテ火ノ上ニヲキスルトケテ		
ノチ排草ヲ入ル火ヲアケテノチ也		
香油ヲ排草ニカキ合也		

（●）は墨減による難読箇所

「みよし野」の銘による薫物方は、『万方』方55の他に、この処方の続文である「同（みよし野）加減」方56を確認している。これら二点の処方によると、「みよし野」は複数種類の香具を細かく砕いた中に「蘇（蘓）合油」を適量加えて混ぜ合わせ、容器に納めて一定期間貯蔵

した後に取り出して袋に入れて完成品としたとされる。また、『薫物秘蔵抄』の同類文は「唐方」の銘により伝来したとされ、「薫衣香」の一種として分類されていた。以上のことから、「みよし野」はいわゆる匂袋に与えられた雅銘であり、袋に入れる為の具材には、薫衣香方として伝来した「唐方」が載録されたと考えられる。また、「唐方」で匂袋を仕立てて「みよし野」の雅銘を与えるという一連の取り組みは、これらの処方が伝来した菊亭家の周辺において、いわば限定的に行われた可能性を検討すべきかと考える。

「唐方」の別号を伴う「みよし野」方55には、「黒方」、「侍従」、「梅花」等を始めたとした平安時代以来の伝統的かつ主要な種類の薫物には処方されない種類の薬種「排草」、「三奈」、「辛黄」が記載されるが、同じ銘の品として載録される方56には処方されない。これらの薬種は、室町時代以降に考案されたと伝わる新作薫物に特徴的な香具である。例えば、「みよし野」に同じく薫物「薫衣香」の一種と伝わる新作薫物「ねみたれかみ（寝乱髪）」方には、上記の三種類の薬種が左記のように処方される。

ねみたれかみ

甘	ホシヨクアライ酒ヲウチカケボシ	十一兩
シンイ	花共ニコクチキサミ	十一兩
チウカウ	コマカニキサム	九兩
白	コクチキサミ	九兩
ハイサウ	ヨクアライサケヲウチカケホシ	十一兩
サンナイ	コクチキサミ	四兩二分
大ワウ内		五兩二分
麝スル		二兩
龍スル		一兩二分
酥油		二兩二分

右大わういつれも七種よくませて後あらきもじにふるいわけこまかなるふんに麝香龍のふを合其後酥油を入也

ましりかね候物也候まゝよくもみあはせ

候也

（傍線は稿者記入。徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』方77）

従来の伝統的な薫物には処方されない薬種が主要な香具として使用されていることは、新作薫物の特徴としてのみならず、本方に「唐方」の号が与えられたことにも関連する可能性がある。本方の源泉及び変遷については、我が国で類纂された薫物秘伝書に加えて、同時代に参照された渡来の香書に載録される香方等とも比較しながら引き続き探究したい考えである。

方・説 『万方』みよし野方55、書入14・15（以上、「唐方」）

禁中 きんちゅう 大内裏又は天皇の意。「禁裏」（人名家名等解説及び索引143頁）に同じ。
キンチュウ

方・説 『香具撰様調様』説122（禁中ナドニテ）

公富 きんとみ 転法輪三条公富。左大臣従一位実秀男。母権大納言正二位日野資勝女。元和六

（一六二〇）年正月二日生。同年閏十二月二十七日従五位下。寛永四（一六二七）年正月五日従五位上。同五（一六二八）年正月六（五とも）日正五位下。同八（一六三一）年正月十一日侍従。同年十一月六日従四位上。同十三（一六三六）年正月五日正四位下。同十四（一六三七）年十二月二十一日左中将。同日元服禁色。同十五（一六三八）年正月五日従三位。左中将元の如し。同十六（一六三九）年十二月二十九日權中納言。同十八（一六四一）年正月五日正三位。慶安元（一六四八）年十二月二十二日權大納言。同二（一六四九）年四月一（三とも）日従二位。承応元（一六五二）年十月十二日正二位。同四（明暦元、一六五五）年正月二十五日右近衛大将。同日為右馬寮御監賜隨身兵杖。同年十二月五日神宮伝奏。明暦二（一六五六）年十二月二十六日内大臣。大將元の如し。同三（一六五七）年三月二十七日右大将を辞す。万治元（一六五八）年九月六日内大臣を辞す。寛文四（一六六四）年四月五日右大臣。同五（一六六五）年正月十一日辞右大臣。同十二（一六七二）年正月六日（五日とも）従一位。延宝五（一六七七）年六月十二日薨去、五十八歳（七）。

薫物秘伝書の伝承に、転法輪三条家は南北朝期より朝廷の薫物の師範をつとめた家柄と伝わる。『香具撰様調様』には、転法輪三条家の江戸時代前期の当主であった公富が相伝したと云う薫物方五種五点が一連の記述として載録される。これらの相伝が確かに公富により行われたとすれば、公富自身も合香家としての資質を備えた人物であり、当時の上層社会において薫物の師範としての役割を果たしていた可能性が考えられる。

他書に伝来するこれらの処方と同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『香具撰様調様』黒方方2（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（同類文なし）
・『香具撰様調様』梅花方3（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（同類文なし）
・『香具撰様調様』若草方4（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…（同類文なし）
・『香具撰様調様』花橘方5（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…①・②『万方』侍従方19（三条流）、「盧橘」方47（三条）

・『香具撰様調様』仙人方6（三条公富公相伝ノ方、家方、公富）…①『万方』仙人方21（三条流）…三光院説云是モ花（マ。菊花か。）ヨリ出タル也、云々）

右の記述を載録する『香具撰様調様』は菊亭家こと今出川家において伝来した薫物秘伝書であり、五種類五点の同類文を載録する秘伝書もまた、調査の現状においては、同じ今出川家に伝来した『万方』に限られる。両書が同家において類纂、秘蔵された可能性は極めて高いと言える。また、両書の類纂は、これらの同類文を多く含む京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物合様』及び『薫物秘蔵抄』の類纂及び書写を行ったと考えられる、今出川公規による可能性が高い。

今出川公規と三条公富の薫物に関する接点については、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「江戸下向雑々覚」に記載される。同書は公規が延宝三年に本院使として江戸に下向するまでの要事について日次の体裁により記しまとめたものと考えられる。延宝三年三月二日条には「同六日去二日二三条前右府ニテ大方相定分烏丸へ書付遣候」（七丁裏）とあり、今出川公規と中御門資熙が公富の三条殿において相談し、江戸下向に係る「大方」の取り決めが完了したこと、病により談合の席に出席できなかった烏丸中納言の為に書付を作成して遣わしたことが記される。また、続く三月六日条には、歴代將軍と当代公方御台所への奉幣料や香奠、徳川御三家及び老中以下幕臣に対して贈られる品々が書き付けられている他、三月二日及び六日条ともに、「三条殿」が紗綾の一部を負担する他、薫物を準備している旨が明記される（八）。三月七日条には、薫物が江戸の貴人に対する朝廷からの贈答品の一部に含まれることが確定した。本院使の公規及び法皇使に新院使を兼任した中御門資熙は、同月十六、十八、二十日の三日間に中御門邸において合香に取り組み、贈答及び「たしなみ」の用に充てる薫物八種類を調合している（九）。それらの内の四種類は、『香具撰様調様』載録の公富相伝の秘方の種類に重複する。

公規は、朝廷の公務の一環として合香に携わる中で、合香の道に長じたであろう転法輪三条公富から合香の手ほどきを受けるとともに、貴重な薫物方の相伝にも与ったのかもしれない。

公富の薫物方の源泉及び来歴については、今後の調査研究において引き続き探究したい考えである。

方・説 『香具撰様調様』黒方方2・梅花方3・若草方4・花橘方5・仙人方6（三条公富）
公富公相伝ノ方、家方、公富、書入5・20・23・31・40（三条公富公）

禁裏 きんり 大内裏又は天皇の意。「禁中」（人名家名等解説及び索引142頁）に同じ。

他書に伝来する「禁裏」の処方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通り。

・『万方』菊花方39 ①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』菊花方42、②『薫物黒方秘方』菊花方6

方・説 『万方』菊花方39、説40（禁裏申入之委細、云々）

黒家秘説 くろいへのひせつ
クロイエノヒセツ ↓ 家

方・説 『万方』黒方方42、説24（黒家秘説）

御調合ノ ごてうかふの
ゴテウカウノ 高貴な血筋又は家柄の人物が調合なさったとの意味に取れる。書中に

人物の特定を可能にするような記述は併記されない。他書に伝来する「御調合ノ」の処方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』梅花方112（梅花 御調合ノ）…①『万方』梅花方51（由緒なし）、②高松宮本『たきものゝはう』梅花方9（由緒なし）、③④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』梅花方4（黒流（墨流）表紙・梅花方116（由緒無し）、⑤⑥宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』梅花方7（今度御調合梅花）・梅花方20（今度御調合梅花…春）

右の同類文の載録先の内、比較的古い時代の類纂と見られる薫物書は、合香家転法輪三条家の室町時代以降の当主が考案、相伝した薫物の秘方秘説を載録したと伝わる『薫物黒方秘方』である。同書においては、『万方』「御調合ノ」の薫物「梅花」方と同じ処方について、「今度御調合梅花」等の記述とともに載録される。その他の同類文については由緒に関する記述が残されていないが、高松宮家及び菊亭家に伝来した薫物書に載録されていることから、高貴な家々において珍重された貴重な品として評価すべきであろう。

「梅花」は平安時代以来の上層社会で珍重された伝統的な薫物の一つである。『薫物黒方秘方』の同類文に記述される「今度御調合梅花」とは、平安時代以来の由緒正しい処方に對して、

後世の人物が新たに工夫して考案した処方、という意味によるものと解釈しておきたい。処方
を考案した貴人については、引き続き同類文及び関連する史実等を探索することにより特定に努
める所存である。

方・説 『万方』梅花方112（梅花 御調合ノ）

古法 こほう
コホウ 古い時代の薫物の調合法。『万方』説23「同古法」の前文である説22は「承

和秘方」、仁明天皇の秘方であると伝わることから、説23については仁明朝に考案ないし伝来
した調合法を意味してそのように記述されたと考えられる。『万方』説27「同古法」、説31「古
法」、書入9「取重古法ノ次第」については、処方の時代性を特定できるような記述が書中に
見当たらないことから、同類文の探索等により引き続き検討したい考えである。

方・説 『万方』説23（同（前文…承和秘方）古法）、説27（同（前文…勅作）古法）、
説31（古法）、書入9（取重古法ノ次第ハ）、

後水尾法皇 こみすのおほふ
ゴミメノオホウ ↓ 法皇

今案 こんあん

当世の案。元々の処方や調合法に對して、後人がその時点で通用する手法や事
情を加味した工夫について言及する際に、その冒頭及び末尾に用いられる。『万方』では法皇、
上皇、及び公家の流派にゆかりの処方及び調合法、及び由緒の明記されない処方及び調合法に
對して異説を併記する際に「今案」云々として起筆するのが一般的である。

他書に伝来する「今案」の併記された処方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ
次の通りである。

・『万方』盧橘方19（三条流の処方）…①『万方』盧橘方47（三条）、②『香具撰様調様』花
橘方5（方 三条公富公相伝ノ方也…右五種家方不残依御所望遣相伝者也 于時延宝四年李
夏下旬 公富）

・『万方』黒方方27（正親町院勅方）…①『万方』黒方方12（正親町院 勅方）、②京都大学
附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方107（用此説尤是、正親町院勅方也、從御室
御所拝受之口伝故実逐一御相伝也）

・『万方』黒方方37（今案）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方42（大
和トジ半切…今案黒方）、②宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』黒方方6（今案黒方…号鳥

方

・『万方』潤香方 68 (後水尾法皇勅方) …①『万方』薰衣香 (十三方) 方 52 (由緒記載なし)、
②・③徳川林政史研究所蔵『衆香類集』琴緒方 4、手枕方 6 (以上、由緒記載なし)、④
宮内庁書陵部『薫方之書』閨紅 (十三方) 方 19 (後西院宸翰 (本の由緒) …匂袋方)、⑤・
⑥徳川林政史研究所『薫物之方』薫衣香方 99、琴の緒方 109 (以上、由緒記載なし)
・『万方』保志 (干) 方 101 (三条流の処方) …①・②『万方』千方 6 (或説)、千方 76 (醍醐)
右の内、『万方』黒方方 37 には他書と同類文も含めて処方の由緒として「今案」とある。当
該方が考案された当初の段階において、古体の伝統的な処方に対する (当世の処方) を意味し
て併記された記述が、伝来の過程においても脱落せずに伝わった為と考えられよう。

方・説 『万方』盧橋方 19 (三条流の処方中に記述。次の二箇所…「丁一両…今案」加二
分、「加貝一分二朱…今案」)、黒方方 27 (正親町院勅方中に記述。白一両三朱…今案
一朱不加)、方 37 (今案)、潤香方 68 (後水尾法皇勅方中に記述。反腦二朱…或ハ三朱
今案)、保志 (干) 方 101 (三条流の処方中に記述。次の二箇所…「沈一両…今案」一両三
分二朱ヨキ但二両ヨキ也)、「麝香一朱…今案一朱半」、説 78 (今案二云)、説 80 (今
案云)、説 81 (又今案云)

さ行

実香 さか 轉法輪三条実香。応仁二 (一四六八) 年誕生。龍翔院右大臣従一位公敦一男。母
は不明。文明一二 (一四八〇) 年叙爵。父公敦は前年の四月に周防へ下向したまま戻らず、翌
一三年五月には祖父の前左大臣入道実量とともに洛中の借家に居住。公敦は同年二月に周防で
出家していたが、実量と実香はそのことを知らなかったと云う。(以上、『宣胤卿記』同一三年
五月一日条)。同一三 (一四八二) 年某月某日從五位下侍從。同年五月一二日正五位下。翌
年七月二八日に少将を経ぬまま左中将に任じ、同一六 (一四八四) 年六月二〇日、一六歳で元
服して從四位上に聴禁色の賞を賜う。同一八 (一四八六) 年一二月正四位下、翌長享元 (一四
八七) 年七月二九日從三位に叙されて公卿に列した。左中将如元。同三 (延徳元、一四八九)
年七月八日權中納言に任じて、同年八月二〇日勅により帶剣を授かる。翌年一〇月二三日權大
納言。同三 (一四九二) 年一二月一八日正三位。文龜元 (一五〇二) 年閏六月一日權中納言兼
右大将。同年八月一八日從二位。同四 (永正元、一五〇四) 年三月一五日正二位。永正三 (一
五〇六) 年一二月二五日右馬寮御監宣下。翌年四月九日任内大臣、同日大将如元。右大臣内大

臣は官次により列せしむべき由宣下。同年五月七日、父の入道右府公敦が前月 (四月) 八日に
薨じた由を注進して服解。同一〇 (一五二三) 年一月九日転左大将。同一二 (一五二五) 年
四月一六日任右大臣、左大将如元。同年一二月二六日從一位。翌年三月二九日辞大将。同一四
(一五二七) 年正月一日拝賀着陣、同日内弁一上事、伊長朝臣より鬼間にてこれを仰せ。元日
内弁。翌年五月二八日転左大臣。同一六 (一五二九) 年一〇月七日輕服、一〇月一〇日拝賀着
陣。御即位日時并擬侍從定奉行。翌大永元 (一五二二) 年三月二二日御即位内弁并即位叙位執
筆。同年七月一日左大臣を辞退。同三 (一五二三) 年閏三月一六日本座。天文四 (一五三五)
年八月二八日任太政大臣。同五 (一五三六) 年二月二日聴輦車陣宣下。同月二三日拝賀、同日
聴輦車。消息宣下。同年六月二五日太政大臣を辞退。同六 (一五三七) 年二月八日出家、六九
歳。法名諦空。定法寺法務戒師。永禄元 (一五五八) 年二月二五日薨去、九一歳。『続史愚抄』
に浄土寺と号した由が伝わる。

実香は天文二 (一五三三) 年十月十九日に子息公頼とともに後奈良天皇に対して薫物の秘方
を伝授する等、禁裏を頂点とした上層社会における薫物の師範の役割を果たしたと見られる人
物である。実香の文人及び合香家としての略歴については、既出の拙稿 (註二〇) において詳述し
ており参照されたい。以下の本項では、『万方』に伝わる実香ゆかりの薫物方について考察す
る。

他書に伝来する「実香」の処方の同類文の有無及び載録先及び通番 (及び来歴) は、管見に
それぞれ次の通りである。

・『万方』梅花方 15 (實香公方也) …①・②『万方』梅花方 28 (実香方) ・49 (実香方)
・『万方』梅花方 28 (実香方) …①・②『万方』梅花方 15 (實香公方也) ・49 (実香方)
・『万方』黒方方 40 (実香方) …①・②高松宮本『たきものゝはう』黒方方 1・5 (以上、来
歴なし)、③・④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方 18 (三条右府家秘
本) ・30 (勅筆巻物)
・『万方』梅花方 49 (実香方) …①・②『万方』梅花方 15 (實香公方也)、梅花方 28 (実香方)
・『万方』千方方 78 (実香公) …(同類文なし)

『万方』には実香ゆかりの品と伝わる薫物方が複数載録されており、それらの内四点の処方
については同じ種類ごとに重複するものであって、いずれも必ず実香又はそれと推定される呼
称を伴い伝来している。以上のことから、今出川家には実香の処方と称する品が、処方の異同
や来歴の脱落、異同の無い確実性の高い状態で伝来していたことが分かる。また、『万方』に

においては四点の実香の処方がそれぞれ三度ずつ載録されることから、『万方』は実香方については少なくとも三種類の写しに依拠しており、それぞれに載録された同類文を、いずれについても写し取り『万方』に載録したと考えられる。同一の処方を繰り返し載録した経緯及び特定の理由の有無については慎重に考察する必要があるが、これらの同類文には、それぞれに処方の加減や調合の工夫に関する諸説が併記されており、それらを珍重して重複如何にとらわれず載録した可能性を検討すべきかと考える。

方・説 『万方』梅花方15（實香公方也）、梅花方28・49、黒方方40（以上、「実香方」、説33（実香）、説41（以上、「実香方」）、千方方78、説61（以上、「実香公」）

実香公

方・説 『万方』梅花方15（又方 實香公方也）、千方78、説61（以上、「実香公」）

實香公方

ないし所持した薫物の処方の意味。『万方』には同義語として他に「実香方」（人名家名等解説及び索引145頁「実香方」）ともある。実香は子息公頼とともに後奈良院に薫物の秘伝を相伝し奉る等、当代随一の合香家として活躍した。

他書に伝来する「實香公方」及び「実香方」の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引144頁「実香」解説を参照されたい。

方・説 『万方』梅花方15（又方 實香公方也）

実香方

方・説 『万方』梅花方28・49、黒方方40、説41（以上、「実香方」）

三家

方・説 『万方』黒方方10（秘 勅作 並 三家）、黒方方11、説9（以上、「三家秘方」）

三家秘方

家において伝来ないし考案された薫物の秘方の意味。『万方』には薫物「黒方」の処方二点及びその調合法一点が載録され、前者は「三家秘方」、後者は「三家」ゆかりの薫物の秘方であ

ると併記される。

他書に伝来する『万方』の「三家」の処方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』黒方方10（三家秘方）…①高松宮本『たきものゝほう』黒方方6（来歴なし）、②東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』黒方方11（轉法輪家方実香公以自筆書写之）、③・④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方24（勅筆巻物）、烏方（黒方の異名）方113（家の方）

・『万方』黒方方11（秘 勅作 並 三家）…①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』黒方方54（由緒なし）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』黒方方4（由緒なし）、③高松宮本『たきものゝほう』黒方方2（由緒なし）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方31（勅筆巻物…三家秘方）、⑤『万方』黒方方11（三家秘方）、⑥杏雨書屋所蔵『薫物之方』黒方方6（細川三斎方）、⑦上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書の一〕黒方方23（由緒なし）、⑧・⑨・⑩上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書の一〕黒方方23（由緒なし）・黒方方30（院御所御調合方）・黒方方38（秀次ノ黒方）

「三家秘方」の由緒を伴う処方及び調合法は、『万方』の他に同じ今出川家の菊亭文庫に伝来した『薫物秘藏抄』にも確認しており、同書には処方四点及び調合法一点が載録されていた。

既出の拙稿においては、これらの内の処方二点が転法輪三条家を直流とする室町時代の三条家において類纂されたと伝わる『薫物故事』にも載録されることから、「三家」は三条家の略称である可能性がある（注二）。

さて、右の同類文一覧によれば、『万方』の二点の「三家」処方の内、「三家秘方」の黒方方10について、『薫物秘藏抄』における同類文・烏方113には「勅筆巻物」及び「家の方」とのみ記される。また、由緒について「秘 勅作 並 三家」と伝わる黒方方11について、『薫物秘藏抄』の同類文・黒方31には「勅筆巻物…三家秘方」と記載される。

既出の拙稿における考察では、黒方方10の同類文の一つである『薫物秘藏抄』烏方113は、元は三条家に発して四辻家に伝来し、以後同家において代々相伝された秘方の一つと考えられたことから、「家の方」は「四辻家の処方」を意味する語であると解釈した（前掲拙稿62頁「家」項解説による）。黒方方11とその同類文の一つである『薫物秘藏抄』黒方31の由緒については、記述の表現は異なるが、（勅作であり三家の秘方でもある）との意味において一致している。前者は「勅筆巻物」に載録されると同時に合香家の三条家を源泉とする「家の方」でもあ

ると伝わり、後者は『万方』と同じ菊亭家において伝来した同時代の薫物書において、勅作として、また、合香家の三条家の略称として行われたことのある「三家」にゆかりの処方としても書き伝えられたのである。『万方』における「三家」もまた、合香家の三条家（人名家名等解説及び索引148頁「三条家」）の略称として行われた可能性が高いと言えよう。

ところで、『薫物秘蔵抄』に伝わる「三家」方の内、例えば梅花方8は、「勅筆巻物」に載録された「四条宮黒（方）」方、及び「三家」方として伝来するものであるが、『万方』の同類分は「実香方」として載録される。「四条宮黒（方）」とは、平安時代の薫物指南書『薫集類抄』等に載録された四条宮藤原遵子ゆかりの品と伝わる黒方を云うのであろう。『薫集類抄』載録方と『薫物秘蔵抄』載録方とは分量の比率が異なるのは、後者の処方が、前者の処方に対して沈香の目方を三両として全体の分量を適宜縮小した「三両合（サンシリョウアワセ）」の処方である為と考えられる。『薫物秘蔵抄』に載録された「勅筆巻物」載録の「四条宮」方であり「三家」方でもあるという処方が、『万方』においては「実香方」こと転法輪三条実香方と伝わるということが、果たしてどのような経緯により生じたのかという問題点については、稿を改めて考察したい考えである。

方・説 『万方』黒方方11、説9（以上、「三家秘方」）

※参考 『万方』黒方方10（秘 勅作 並 三家）、

三光院 さんこういん
サンコウイン 三光院内大臣三条西実枝。入道前右大臣正二位公條男。母は権大納言従一位甘露寺元長女。初名を実世と云い、後に実澄、実枝と改めた。

永正八（一五一二）年八月四日誕生。同九（一五二二）年十二月二日、二歳の年に従五位下に叙され、同十一（一五二四）年十二月二日、侍従に任ぜられた。大永元（一五二二）年十二月十七日従四位下、同月二十四日又は二十日に元服、禁色昇殿。同二（一五二二）年三月二十九日右少将、美作権介。同年十二月二十七日従四位上。同五（一五二五）年三月十三日右中将。同六（一五二六）年三月二十九日正四位下、同八（一五二八）年四月十七日藏人頭。享禄三（一五三〇）年正月二十日正四位上、同月二十八日参議。中将元の如し。同四（一五三一）年十二月二十七日奏慶、同月二十九日聴直衣。同五（天文元、一五三二）年正月六日従三位。天文三（一五三四）年六月五日輕服。姨（おば）（姪）の死去によるとされる。同二十九日除服。十二月四日權中納言。同五（一五三六）年十一月二十二日正三位。同六（一五三七）年十月三日輕服。同年十二月二十六日除服出仕。同九（一五四〇）年正月二十五日従二位。同年四月十五

日又は十六日神宮傳奏。同十（一五四二）年三月二十八日權大納言。同十二（一五四二）年十月二十九日神宮傳奏を辞す。

同十三（一五四三）年六月二日、名を実澄と改める。同年八月二十五日正二位。同二十一（一五五二）年九月十三日服解（母）。同二十二（一五五三）年九月五日復任。駿州に在国しながら除服復任が認められたものであり、当時として異例のことであつたとされる。弘治四（永禄元、一五五八）年八月十一日、又は二十一日上洛。同年九月二十六日諒闇終上卿（諒闇の終了に際して朱雀門大祓を行う上卿）の役を拝命。永禄二（一五五九）年五月二十五日駿州に下向。白馬内弁。同年二月春日祭参行。同四（一五六一）年駿州に在国。同六（一五六三）年十二月二日服解（父）。同七（一五六四）年二月三日除服復任にして在国。同八（一五六五）年から十一（一五六八）年にかけても駿州に在国。同十二（一五六九）年六月十六日、甲州より上洛して同年十一月三十日に着座した。元龜二（一五七二）年八月二十日、伊勢に在国。同年十二月四日上洛。同三（一五七二）年後正月六日權大納言を辞して本座を許されず。同四（天正元、一五七三）年正月十二日本座に復した。

天正二（一五七四）年三月三日權大納言に還任。同年七月二日又は三日奏慶。同年十二月二十四日に名を実枝と改める。同三（一五七五）年十一月三日兼陸奥出羽按察使に任ぜられるも年内にこれを辞す。同年十一月七日大將宣下上卿の役を拝命。同五（一五七七）年十月又は十一月二十日大納言に転ず。同月（十月）又は十二月三十日内膳別当。同七（一五七九）年正月二十日所労危急により内大臣に任ぜられ、同月二十二日に辞す。同日出家、法名豪空。又は玄覺とも。同月二十四日に六十九歳で薨去。号三光院。

『万方』の次の薫物方には、「三光院」ゆかりとされる薫物調合の説が併記される。これらの処方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）、及び説の内容は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』千種方20（勅方 三光院説云、云々）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』千種方84（勅筆巻物）

・『万方』仙人方21（三条流 三光院説云、云々）…①『薫物故事』菊花方75、『香具撰様調様』仙人方6、高松宮本『たきものゝほう』菊花方16（由緒なし）、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』菊花方71、杏雨書屋所蔵『薫物之方』菊花方25（中治傳）

上(繪号) 千種 勅方 三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也

一 沈一両 二 丁二分 一朱。ヒカ

三 貝三朱 四 白三朱

五 薰三朱 六 宇一朱 輕 星半分カロク

七 廿一朱半 八 麝一朱半

中(繪号) 仙人 三条流 三光院説云是モ花(マ) ヨリ出タル也仙人ノ折袖
匂フ菊ノ露ノ心也仙人ノ袖ニ移リタル菊ノ香ナレハ
イカニモホノカナルヘシ

一 沈二両 二 丁二分 加一分二朱

三 貝一分二朱 一 三 廿二朱 半朱ヒカ

四 白二分 六 薰一朱

七 麝二朱大加一朱

『万方』千種方20、仙人方21)

右の千種方20には銘に続けて「勅方 三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也」と、仙人方21には「三条流 三光院説云是モ花(マ) ヨリ出タル也仙人ノ折袖匂フ菊ノ露ノ歌ノ心也仙人ノ袖ニ移リタル菊ノ香ナレハイカニモホノカナルヘシ」と記される。前者の記述は処方の由緒が「勅方」、天皇が考案ないし所持なさった処方であり、薫物「菊花」の処方をもとに調合を工夫して生み出した処方である、と解釈できる。後者では、処方の由緒が「三条流」と明かされるのに続けて、「三光院説云」として、この処方も「花」の処方から生み出されたものであること、また、銘の「仙人」は「仙人の折袖匂ふ菊の露」の歌の心に由来するのであって、仙人の着物の袖に移っている菊の香りというのであるから、いかにもほのかな香りであるに違いない、と説かれている。

前者の説では、千種方20が薫物「菊花」に由来すると説かれていた。後者の説の前半に当たる「是モ花ヨリ出タル也」との記述もまた、仙人方21の由来についての説と解釈できる。後者の説には「是モ」とあることから、「花」とは前者の説に表れていた「菊花」の誤写と

考えられる。また、後者の説には処方の由来に続けて銘である「仙人」の由来についても言及されており、この歌の表現と内容に依拠して「菊花」から新作薫物「仙人」が新たに案出されたと説かれていた。前者の説の末尾には「…方也」、処方であると記されており、一見すると個々の処方の影響関係について説かれているようであるが、後者の説と対を成す記述として読み直してみると、「千種」もまた「菊花」から案出されたと解釈すべきことが分かる。つまり、三光院ゆかりと伝わるこれらの説は、「千種」及び「仙人」の二種類の新作薫物が、伝統的な種類の薫物である「菊花」をもとに案出されたこと、また、「仙人」については、「菊花」を基に新たな銘の薫物を案出するという取り組みそのものが、特定の和歌に依拠して構想、実施されたと考えられていたことを、伝えているのである。

三光院三条西実枝の祖父逍遙院実隆は、親交のある皇族や公家の合香家から薫物を贈られたり、自ら薫物を調査して皇族や知友に贈ったり、薫物を用いた「十炷香」を主催したりしたことがあった(注一三)。三条西家を庶流とする正親町三条家においても合香に長じたと見られる人物があり、例えば、室町時代後期に今川氏を頼って駿河へ度々下向し、同国において剃髪して薨去した正二位内大臣実望、又はその同居する親族は、駿河において新作薫物「遅桜」を考案した可能性がある。同銘の薫物は、管見に禁裏と伏見宮家、及び公家の菊亭家のみに伝来しており、高貴な辺りで珍重、秘蔵されたと考えられる(注一四)。

今出川家の菊亭文庫には「三条西殿物語 たき物合やうの事 口傳」の標題により合香の諸説を記述した紙片二葉が伝来しており、それらの諸説に数点の説を加えた「三西薫物合様物語 口傳」逸文もまた、同じ菊亭文庫に伝来した『香具撰様調様』に載録される。同書の巻頭部分には、「三西」の略称による合香家に由来した薫物諸説が「朱ノ丸」により識別されることが記述されており、本文において「朱ノ丸」を併記される説の大半は、前述の「三西薫物合様物語 口傳」逸文である(人名家名等解説及び索引「三西」)。江戸時代前期に類纂されて尾張徳川家の蓬左文庫に伝来したと見られる徳川林政史研究所蔵『薫物之方』には、「西三条殿方」と伝わる新作薫物「ねみたれかみ(寝乱髪)」方一点が記載される。遅くとも江戸時代前期の公家社会において、三条西家は独自の合香の秘方秘説を伝え持つ合香家として知られていた可能性はある。

「三光院説」の二点が確かに三光院こと三条西実枝の言説であるとすれば、実枝は当時の上層社会を代表する合香家の家系に生まれた公卿の一人であって、当時珍重された新作薫物についての知見も有しており、それらの発祥について考証した言説を伝え残していたと考えられる。

今後の調査研究では、他書に伝わる実枝の言説を探索することにより、実枝の合香家としての知見の全容及び規模、及び源泉について明らかにしたい考えである。

方・説 『万方』千種方20（勅方 三光院説云、云々）、仙人方21（三条流 三光院説云、云々）

三光院説 さんこうゐんのせつ
サンコウキョウインノセツ 三光院（人名家名等解説及び索引146頁）の言説と伝わる薫物調合の説。

方・説 『万方』千種方20（勅方 三光院説云、云々）、仙人方21（三条流 三光院説云、云々）

三条 さんてう
サンジョウ ↓ 三条家、三条説、三条流

方・説 『万方』仙人方21（三条流 三光院説云、云々）、新枕方31、盧橋方47、侍従方48（以上、「三条」）、仙人方41、説42、保志方101（以上、「三条流」）、『香具撰様調様』一丁裏面書入、説86（以上、「三条ノ説」）、黒方方2、梅花方3、若草方4、花橋方5、仙人方6（以上、「三条公富公相傳ノ方也」、云々）、書入5・20・23・31・40（以上、「三条公富公」、説8（三条家）、書入27（三条家ノ流）、説90（三条流）、説96（三条ノ流）

三条公富公 さんてうきんとみこう
サンジョウキョウトミコウ ↓ 公富

方・説 『香具撰様調様』黒方方2、梅花方3、若草方4、花橋方5、仙人方6（以上、「三条公富公相傳ノ方也」、云々）、書入5・20・23・31・40（以上、「三条公富公」）

三条家 さんてういへ
サンジョウウイヘ 公家の三条家。藤原北家閑院流。平安後期の公卿藤原実行を祖とする。薫物書の伝承及び御記等の記録には、南北朝以降の歴代当主が禁裏に対して合香の秘方秘説を相伝した由が伝わる。以下の本項では、既出の拙稿における合香家「三条家」の解説

（注一五）に適宜加筆修正を加え再録して参考に供す。解説中に現れる合香家の閑歴及び薫物との関わりについては、既出の拙稿に附載の「薫物秘蔵抄」人名家名等解説を参照されたい。

『薫物故事』は室町時代の三条家で上下二巻として類纂されたと見られる薫物書であるが、そのうちの上巻は、後三条相国実冬子息後白川右府公冬に伝来し、公冬から禁裏に申し入れた

口伝の内容を写したものと伝わる。また、下巻の書写者識語には、実行後裔で鎌倉時代後期の三条家当主である白川右大臣実親が合香を好み、その「故実」は南北朝期の同家当主後押小路内府公忠を経て子息の後三条相国実冬に伝来したと記述される。

三条家の本流である轉法輪三条家の室町時代中期の当主である龍翔院公敦は、同時代の親族である三条西実隆に薫物を贈答したことがあり、その一部はいわゆる新作薫物と見られる。伝承に、公敦は後土御門天皇や（流れ公方）足利義植、周防守護大内政弘、義興父子に対して薫物方の伝授等を行ったとされる。公敦子息実香（人名家名等解説及び索引144頁「実香」とその子公頼は、後奈良天皇の勅により御前に参上して薫物「黒方」方及び「侍従」方の伝授と調合を行ったことが史実に明らかである。伝承には、両名がその時々有力者や好事家の求めに応じて家伝の秘方秘説を書写、贈与したと記されている。

実香公頼父子の薨去後に、轉法輪三条家による本格的な合香活動についての史実や伝承を見出すことができるのは、管見に安土桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した公広の代以降のことである。一方で、こうしたいわば轉法輪三条家不在の期間に、同じ三条家の別流である正親町三条家の人物が薫物方の調合や禁裏への献上といった活動を実施している（人名家名等解説及び索引146頁「三光院」解説、注三先行研究参照）。また、天正十七年書写と伝わる京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物方」（注一六）等の伝書には、新作薫物「遅桜」の発祥について、「するか三条いゑ」で調合して広まったと記載される。この伝承が事実であれば、「遅桜」を調合したとされる人物は、室町時代後期に今川氏を頼って駿河へ度々下向し、同国に於いて剃髪し薨去した、正二位内大臣正親町三条実望またはその同居する親族であった可能性が高い。正親町三条家の庶流にあたる三条西家においても、前述の通り、実隆が周防在国中の龍翔院公敦から薫物を贈られていたほか、自ら調合して親族、知友に贈ったり、皇族の調合した貴重な品を贈られたり、薫物を用いた「十炷香」を催したりしたこともあった。公頼が横死して轉法輪三条家の直系が絶えると、三条西公国二男で正親町三条公兄女を母に持つ実綱が嗣子となり、この実綱の養嗣子公広もまた三条西家から迎えられている。彦根藩主井伊家に伝来する薫物秘伝書の写しによれば、公広は徳川家康の懇望により「菊花」を始めとした複数種類の薫物方を伝授したと云う。『万方』には「三光院説」と伝わる薫物調合の説が載録されることから、実隆孫の実枝もまた合香をよくした可能性が考えられる（人名家名等解説及び索引146頁「三光院」解説参照）。

三条家は、合香の道の有職として、また宗匠としても、皇室を始めとする上層社会の薫物文

化を長きにわたり支えてきたのであり、室町時代後期以降に主体的かつ代表的な役割を果たしてきたのは、轉法輪三条家の歴代当主と見て間違いなからう。ただし、白河右府実親以来の合香の「故実」が正親町三条家や三条西家にも伝来し、時に両家による補完又は発展を経て継承された可能性も見受けられた。三条家の薫物の「故実」の発祥と伝来、及び三条家の諸流における合香活動に係る互恵的連携関係の実態については、今後も引き続き調査、検討したいと考えている。

方・説 『香具撰様調様』説8（三条家）、書入27（三条家ノ流）

三条家ノ流 さんてういへのりう、さんてうけのりう
サンジョウイェノリウ、サンジョウケノリウ ↓ 三条流

三条西家 ↓ 三西

三条ノ説 さんてうのせつ
サンジョウノセツ 三条家（人名家名等解説及び索引148頁）の薫物調合の説。

方・説 『香具撰様調様』一丁裏面書入（朱ニテ書タルハ三条ノ説）、説86（以上、「三条ノ説」）

三条ノ流 さんてうのりう
サンジョウノリウ ↓ 三条流

三条流 さんてうのりう
サンジョウノリウ 合香家の三条家で所有され、同家から相伝されたとする薫物の処方及び調合法の総称。薫物の（流派）が存在するとの認識に基づき行われた表現と考えられる。管見に、江戸時代前期の今出川家で類纂された可能性のある『万方』及び『香具撰様調様』においてのみ確認することができる。

他書に伝来する「三条流」薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』仙人方21（三条流 三光院説云、云々）…①『薫物故書』菊花方75（秘）、②『香具撰様合様』方6（方 三条公富公相伝ノ方也…右五種家方不殘依御所望遣相伝者也 于時延宝四年李夏下旬 公富）、③高松宮本『たきものゝはう』菊花方16（由緒なし）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』菊花方71（墨流表紙半切）、⑤杏雨書屋所蔵『薫物之方』菊花方25（中治傳）

・『万方』仙人方41（三条流）…①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』方125（由緒なし）、②・③東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』仙人方43（伏方）・52（本云 後奈良院以宸筆令書写者也…慶長十五年十月二十七日 智仁（御自筆））、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』方86（大本…右妙莊嚴院御方）

・『万方』保志方101（三条流）…①・②『万方』千方6（或説）、千方76（醍醐）

右の『万方』載録の「三条流」の諸方の内、仙人方21の同類文の一つを載録する『薫物故書』は、南北朝期から室町時代前期までの三条家歴代当主による秘方秘説の類纂と伝わる秘伝書である。同書においては菊花方として伝来した品が、『万方』の時代には仙人の銘による新作として工夫されて伝来していたということであろう。なお、『万方』仙人方21の「三条流」の語に続く「三光院説」（人名家名等解説及び索引146頁「三光院」）は、新作の仙人が菊花から考案されたという、種類としての発祥を明かす内容となっている。次に、仙人方41の同類文の内、東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』載録の仙人方43は「伏方」すなわち伏見宮家伝来の処方と伝わる他、後奈良院が宸筆を以て書写せしめた品でもあったとされるが、後奈良院は、室町時代後期の転法輪三条家当主で合香家として著名であった三条実香（人名家名等解説及び索引144頁「実香」）とその子息公頼に命じ、彼らの所持する秘方秘説を直々に伝授なさった天皇である。保志（干）方101については同類文の来歴が明らかにされていないが、他の二点の仙人方については、一つは合香家三条家において類纂された秘伝書に載録された品を源泉とし、いま一つは三条家の相伝を受けた人物が書写した品に含まれていたということになる。

以上の品が三条家を源泉とする秘方であったとの伝承が、『万方』の依拠資料に何らかの形で明らかにされていたのであろう。『万方』類纂者はそうした伝承を「三条流」という表現に置き換えて書き伝えたのかもしれないし、或いは、依拠資料の段階で「三条流」の表現が行われていたのかもしれないが、それについては慎重に調査を重ねて究明したい考えである。菊亭家に伝来した薫物書には、『万方』載録の処方三点に対する「三条流」の他にも、薫物の（流派）を意味する表現が、次のように使用される。

（一）宿紙ノ表紙薫方 四辻流也（『薫物秘藏抄』黒方方108から二葉方139、及び説44）
（二）麝ハ誰ノ流ニモイヅレノ方ニモ二度ニサス也（『香具撰様調様』説84）
（三）三条流ニハ春ハ丁子ヲ二分トアリ不審千万ナル事也（『香具撰様調様』説90）
（四）勅作 中院等ノ流ニハカナウスニテシホ墨ヲ粉合入テソノチ蜜ヲ入ソノカナウスニテソノマツケドモ三条ノ流ニハ右トトリ也ツキヤウスリヅキニシテヨシコレモ 勅

中ノ流タヽカロクコマカニツク也(『香具撰様調様』説96)

(五)三条家ノ流ニハ麝香一度半分合テマセテ又ノコリノ半分ノ麝ヲ合テマゼル也二度ニ麝香ヲサス也(『香具撰様調様』書入27)

(以上、傍線は稿者記入。)

右の「流」の用例の内、(一)の「四辻流」は、公家の四辻家に代々伝わる薫物の秘方秘説に対して『薫物秘蔵抄』において行われた総称である(註七)。同書における「流」の語の使用はこの一例に限られていた。『万方』及び『香具撰様調様』においては、「四辻流」の語は使用されていないが、他家の「流」の記述については比較的多く確認することができた。また、(二)の「誰ノ流」(人名家名等解説及び索引154頁)という不特定の人称を用いた表現は、依拠資料の筆者又は類纂者の理解する当時の薫物文化の実相において、複数種類の「流」が存在していたことを伺わせる。

(四)の引用箇所では冒頭において「勅作 中院等ノ流」と書かれているのに対して、続文には「勅中ノ流」と略して記述される。「勅作」は天皇による作を意味し、「中院等」は公家の中院家(人名家名等解説及び索引156頁「中院」)その他の家々を意味すると解釈するのが妥当である。また、ここでの「流」が家名だけでなく「勅作」及び「勅」を受ける語としても行われていると解釈するのが自然であるし、「勅作ノ流」という複合語もまた企図されていたことになる。(四)の「三条家ノ流」は、(三)の「三条流」、及び『万方』仙人方21等に云われた「三条流」の同義語と見なして良からう。以上のことから、(二)の「誰ノ流」は、具体的には(四)の「勅作 中院等ノ流」、すなわち「勅作ノ流」及び「中院ノ流」、及び(五)等に云う「三条流」を始めとした合香諸家の「流」を念頭に置いて記述された語と考えてしかるべきであろう。

特定の家名に「流」を加えて特定の(流派)の呼称とすることは、和歌や音楽、茶花道といった学問芸道の諸分野において広く行われた。調査の現状において、江戸時代前期の今出川家において類纂、書写された可能性のある薫物書に記載された「三条流」等の表現は、こうした異分野における語彙に倣い、この時代の同家において限定的に使用され、記述されたものと見なしておきたい。また、(流派)の概念を導入することにより薫物文化の実相を体系化しようという企図は、『薫物秘蔵抄』類纂の段階よりも、『万方』及び『香具撰様調様』類纂の段階において、一層積極的に行われたと理解すべきかと考える。

方・説 『万方』仙人方21(三条流) 三光院説云、云々、仙人方41、説42、保志方101

(以上、「三条流」)、『香具撰様調様』書入27(三条家ノ流)、説90(三条流)、説96(三

条ノ流)

三西

さんし

専修大学図書館菊亭文庫所蔵『香具撰様調様』に記載のある家名。同書の巻頭部分には、「三西」の略称による合香家に由来した薫物諸説が「朱ノ丸」により他家の説に対して識別される旨が記述される。本文において「朱ノ丸」を併記される説の大半は、「三西薫物合様物語 口傳」と題された説107から説122である。同じ専修大学図書館菊亭文庫には「三西西殿物語 たき物合やうの事 口傳」の標題により合香の諸説を記述した紙片二葉も収蔵されており、それらの諸説の同類文が前述の「三西薫物合様物語 口傳」に含まれる。

以上の調査結果から、「三西」は「三条西殿」、公家の三条西家の略称と考えられる。三条西家と薫物との関わりについては、人名家名等解説及び索引146頁「三光院」項の解説を参照されたい。

方・説 『香具撰様調様』一丁裏面書入(三西・朱ノ丸)、説107―122(三西薫物合様物語 口傳)

准后

しゅうこう

↓

妙善院殿

照高院宮

せうかうののみや

しょうこうぎん

照高院の宮門跡。照高院は親王及び法親王が門跡となる主要な十三の門跡寺院の一つで、織豊時代に天台僧道澄が東山妙法院に開基。元和五(一六一九)年に後陽成天皇の弟皇子興意法親王が現在の北白川外山町付近に再建した後に、聖護院門主の退隠所となった(註一八)。

照高院宮ゆかりの品として伝来する薫物の秘方秘説は、管見に『万方』白檀之千方79及びその調査法に関する説62・63のみであり、処方と同類文は確認できていない。薫物「干(ほし。保志とも)」は沈木等の香木の小片を香油や蜜を混ぜた香具に浸して用いたとされる品であり、室町時代以降の日記や薫物秘伝書に表れる、いわゆる新作薫物の一種である(人名家名等解説及び索引140頁「御室」解説参照)。照高院宮ゆかりの品と伝わる処方は、香具に漬ける香木として白檀を使用したものであり、管見に他の「干」方が沈木片を主体的な香具として処方することに對して特徴的と言える。

今後の調査研究では、照高院官方の同類文及び新たな照高院宮ゆかりの処方を探究すること

により、照高院宮の人物の特定及び合香家としての閱歴及び評価の究明に取り組みたい考えである。

方・説 『万方』白檀之千方79、説62・63（照高院宮之方）

相国 しょうこく ショウコク 「大臣」の異称。『万方』蘭（をみなへし）方44の由緒の一部として記載される。同方には「勅 相国」と併記されており、禁裏と大臣とに由来する品として伝来したことが分かる。

他書に伝来する「相国」薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見に次の通りである。

・『万方』蘭方44（勅 相国）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』蘭方91（白表紙半切）

同類文に併記される「白表紙半切」とは、処方の依拠資料として『薫物秘蔵抄』に記載されたものである。同書には「白表紙半切」なる薫物書から写し出されたという処方十点、及び調合の説四点が類纂されており、その内の一点が同書には『万方』蘭方44に一致する。同類文には由緒に関する記述が残されておらず、『万方』蘭方44に記載された伝承の詳細については不明である。ただし、『薫物秘蔵抄』の「白表紙半切」逸文の中には、天文三年に転法輪左府こと三条実香が調合したと云う梅花方一点も含まれることから、「勅 相国」の人物についても、室町時代後期以降の時代において合香家として知られた天皇及び大臣に考案ないし所持された可能性を検討すべきかと考える（注一）。

方・説 『万方』蘭方44、説45（勅 相国）

上手之家之方 しょうすのいえのはほう ショウズノイェノハウ 合香を得意とした家において考案ないし所持された薫物

方の意味（注二）。他書に伝来する「上手之家之方」の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見に次の通りである。

・『万方』梅花方50（上手之家之方）…名古屋市蓬左文庫所蔵『焼物調合法』梅花方5（上手の家の方）、杏雨書屋所蔵『香秘書』方9（上手の家の方）、『原中最秘抄』梅花6（注二）（八条大將家之方…承和方二同之）、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』方144（建久之説…上手の家の方）

右の同類文を見ると、『源氏物語』古注釈書の『原中最秘抄』梅枝卷勘物に引用される梅花

方6以外の同類文は共通して「上手の家の方」と記載されており、『万方』梅花方50と同じ来歴を伝えている。『原中最秘抄』梅花方6及び『香秘書』方9には異なる来歴が併記されており、前者はこの処方が平安時代の公卿八条大將藤原保忠の家のものであること、そして保忠の曾祖父にあたる承和帝こと仁明天皇（人名家名等解説及び索引152頁「承和」）の処方にも同じであることを記している。後者は「上手の家の方」が「建久之説」とも呼ばれることを記したもので、同書には他に「四条大納言」こと源定ゆかりとされる梅花方143、及びその調合に要する香具についての説45が「建久之説」として類纂される。

前者については、例えば平安後期の類纂と伝わる『薫集類抄』載録の八条大將方や承和方に對して一致しない点が多いことから、薫物の一般的な伝承に對して異説として位置付けるべきかと考える。後者は処方の来歴に係るものであり、引き続き「建久之説」の他の逸文の探索により究明を目指したい考えである。

方・説 『万方』梅花方50、説48（上手之家の方）

常徳院殿 しょうとくゐんどの ショウトクイन्दノ 室町幕府九代將軍足利義尚（寛正六（一四六五）—延徳元（一四八九））。八代將軍義政子息。母は妙善院殿准后日野富子（人名家名等解説及び索引160頁「妙善院殿」参照）。

菊亭文庫に収蔵される薫物書には、義尚母の富子が考案ないし所持したと伝わる薫物方、及びそれらの由緒についての伝承が載録される。専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』には、同一の内容による新作薫物「有明」の処方一点が載録される他、いずれの処方も妙善院殿富子の調合した品であると併記される。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物方」一卷には、「ありあけ（有明）」及び「なか（長）月」の二種類の新作薫物方を、妙善院殿が合せ出したとする伝承が記載される。今後の研究では、他書の同類文を探索する等して以上の伝承を検証したいと考えている。

方・説 『万方』有明方22（妙善院殿…常徳院殿御母后准后…合出給云々）

常徳院殿御母后准后 しょうとくゐんどの ショウトクイन्दノ ↓ 妙善院殿

承和 そうわ ショウワ — 第五四代仁明朝の年号またはこの天皇の呼称。承和の帝は嵯峨天皇皇子、母内舍人贈太政大臣正一位橘清友女皇后嘉智子。諱正良。弘仁元（八一〇）年生。同一四（八

(二三) 年四月一九日立太子。天長一〇(八三三) 年二月二八日即位。嘉祥三(八五〇) 年三月一九日落飾して二一日崩御、四一歳。号深草帝。日本根本天璽豊聰慧とも号した。学問や音楽に長じたほか医方にも精通。天皇の学問には滋野貞主が東宮学士、文章博士として長く奉仕した。皇子に第五代文德天皇や第五八代光孝天皇、八条式部卿宮本康親王らがある。

管見に、平安時代後期から江戸時代までに類纂されたと伝わる薫物書には、「承和秘方」として伝来する薫物「黒方」、「侍従」の方や「承和百歩香」方を載録するものが多くあり、『源氏物語』古注釈書の『河海抄』等の勘物にもそれらの同類文が引用されている。『源氏物語』梅枝巻の古いテキストには、光源氏の調合した薫物方の由緒について「そうわう」や「孫王」と記されていたらしいが、『河海抄』は、この文言を「そうわ(承和)」と校訂して仁明天皇にひき付けるとともに、薫物の処方を用いる等として、光源氏の処方と合香活動が仁明天皇のそれらに準拠するとの趣旨による勘物を記載する。この校訂本文と解釈は、以後の源氏学において定説化し、今日の研究においても尊重されている。薫物諸書に「承和」の処方が時代を超えて載録され続けた理由の一つとして、『源氏物語』研究史におけるかなり早い段階から、光源氏がこの帝の秘方を調合したとの説が唱えられ、源氏学者の間で肯定的に受け入れられ、通説として長く継承されたことの影響を考慮すべきであろう(註二)。

『万方』には「承和秘方」、「承和次第」等と併記された次の四点の説が載録される。

(一) 取重次第説22・薫物「黒方」の香具を和合する順序

承和秘方 沈 貝 麝 薫 白 丁

(二) 取重次第説23 (説22「承和秘方」に対する「同古法」)・薫物「黒方」の香具を和合する順序

同古法 沈 貝 薫 白 丁 麝

(三) 取重次第説32・薫物「梅花」の香具を和合する順序

承和秘方 沈 丁 貝 白 甘 薫 麝

(四) 取重次第説37・薫物「侍従」の香具を和合する順序

和合次第承和次第 沈 丁 貝 甘 宇

右の四説の内、(一)は平安後期の類纂と伝わる『薫集類抄』下巻の和香次第説91及び95に同じであり、前者は賀陽宮の説、後者は八条大将説で「承和秘方」とも同じものとして伝わる。ただし、『万方』本文に伝わるように、薫物「黒方」に限った和合次第の説として伝来するわけではない。(二)の同類文は室町時代の類纂と伝わる三条家秘伝の『薫物故事』にも和合次

第説4としても載録されており、由緒については「黒方 承和秘方 八条大将同」と併記される。「黒方」に特化した説という点では比較的こちらの説に近いことになる。

(二)から(四)の三点の説については『薫集類抄』等の古い時代の秘伝書に同類文を確認することができない。ただし、(三)については『薫集類抄』に載録される仁明天皇皇子八条宮本康親王の梅花方における香具の記載順序に一致している他、(四)についても同書の八条宮の侍従方における香具の記載順序に一致している。

「承和」こと仁明天皇にゆかりの秘説として伝来するこれらの説は、当初は(一)の説のみが和合(香)次第の説として伝来していたが、記載される香具が多様な薫物の種類に応じたものではなかったことから、次第に香具の種類の近い薫物「黒方」の説として限定的に参照され始めたのであろう。一方で、香具の種類の異なる他の薫物の内、主要な「梅花」及び「侍従」についても和合(香)次第を明確にする必要、或いはそうした説の提出に対する期待というものがある、薫物を専門的に学ぶ人々の間に生じたことから、『薫集類抄』等の古い時代の秘伝書に載録される薫物方の内、仁明天皇の後裔が所持ないし考案したと伝わる処方で、この天皇の秘伝を受けたと伝わるものの記述に基づき、これら二種類の薫物の和合(香)次第も説かれるようになったのではないだろうか。同類文の確認できない(二)の説についても、同様の経緯により、いずれかの秘伝書に仁明天皇に関連する品として伝来する処方を参考に説かれた可能性を検討すべきかと考える。

方・説 『万方』説22・32 (承和秘方)、説23 (同古法) ※直前の説22「承和秘方」に対する「同(古法)」、説37 (承和次第)

承和次第 そうわしたい、しょうわしたい
ソウワシダイ、ジョウワシダイ 「承和」(人名家名等解説及び索引152頁) こと仁明天皇の秘説と伝わる、薫物の香具を和合する順序を云う。

方・説 『万方』説37 (承和次第)

承和秘方 そうわのひはふ(三)、しょうわのひはふ(三)
ソウワノヒホウ、ジョウワノヒホウ 「承和」(人名家名等解説及び索引152頁) こと仁明天皇の秘方の意。『万方』では薫物の香具を和合する順序の説に対して用いられる。

方・説 『万方』説22・32 (承和秘方)、説23 (同古法) ※直前の説22「承和秘方」に対する「同(古法)」

清^{せい} 『香具撰様調様』に合香の説が載録された合香家の家名の略称。同書の一丁裏に残

る書き入れによれば、書中に「花ノ丸」という記号とともに類纂されるのが「清」家の説ということになる。同書の現状には、朱筆による「朱ノ丸」及び青筆による「青ノ丸」を伴う諸説が確認できるが、「花ノ丸」に相当する形状の記号は確認できない。

『香具撰様調様』類纂当初には、編集方針の一つとして各種の印により家々の説を識別可能な状態とすることが構想され、一丁裏面に書き入れられたらしい。例えば「中…朱ノ点」の書き入れは、説¹⁰⁶の「中院説云」云々の説の冒頭に朱筆による合点様式の斜線が付されていることに関わるものであろうし、「三西…朱ノ丸」の書き入れは、同書の説¹⁰⁷以降に類纂される「三西薫物合様物語…口傳」の諸説の欄外冒頭部分に朱筆による丸の併記されたことを示唆するものであったと考えられる。また、書き入れの後半部分に「朱ニテ書タルハ三条ノ説」とあるのに対して、書中に朱筆により書写される諸説は、説の冒頭部分の欄外余白等に「三条公富相傳ノ分」等と記載されて、三条家に由来する説であることが併記されており、書き入れの内容に一致している。

以上のように、一丁裏面の書き入れの内容は類纂者による編集方針の一つであった可能性が伺えるが、書き入れの内「花ノ丸」及び「花ノ点」を識別用の印としたと云う「清」及び「當家所持」（人名家名等解説及び索引¹⁵³頁「當家」）の諸説については、これらの印として該当しそうな記号が現状において見当たらないことから、例えば他書との比較により「清」及び「當家」を推定することが困難な状態である。

ただし、「當家」については本書及び対を成す類纂と思しき『万方』が今出川家に伝来した薫物の資料等をもとに同家において類纂された可能性の高いことから、現時点では今出川家を意味する語として解釈しておきたい。また、「清」については、今出川家と合香活動において協力関係にあった清閑寺熙房^{（註三三）}の家を示唆する語であった可能性を検討すべきかと考える。清閑寺熙房が相伝したとされる薫物の諸説は、旧蓬左文庫に伝来して徳川林政史研究所に収蔵される薫物秘伝書に載録される。今後の研究では、同書と『香具撰様調様』本文との比較検討を実施することにより、「清」の説の特定及び「花ノ点」の意味について引き続き考察したいと考えてある。

方・説 『香具撰様調様』一丁裏面書入（清…花ノ点、書入30（清トヲナジ）・「清ノゴトク」）

た行

當家<sup>たういへ、たうけ
トウイミ、トウケ</sup>

『万方』薫衣香方57—59の依拠資料筆者又は同書の類纂者、及び『香具撰様調様』一丁裏面における書入の筆者又はその書写者の家を云う。「當家」の特定について、本書及び対を成す類纂と思しき『万方』が今出川家に伝来した薫物の資料等をもとに同家において類纂された可能性の高いことから、現時点では今出川家を意味する語として解釈しておきたい。

他書に伝来する「當家」の薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見にそれぞれ次の通り。

・『万方』薫衣香方57（當家方）…（同類文なし）
・『万方』薫衣香方58（當家方）…①徳川林政史研究所蔵『薫物之方』薫衣香方100（由緒なし）

・『万方』薫衣香方59（當家方）…（同類文なし）
方・説 『万方』薫衣香方57—59（當家方）、『香具撰様調様』一丁裏面書入（當家所持…花ノ丸）

當家方<sup>たういへのはふろ、たうけのはふろ
トウイエノホウ、トウケノホウ</sup> 『万方』薫衣香方57—59の依拠資料筆者又は同書の類纂者の家に伝来した、又はその家において考案された薫物の処方云う。

「當家」の意味と他書に伝来する「當家方」同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引¹⁵³頁「當家」解説を参照されたい。

方・説 『万方』薫衣香方57—59（當家方）

醍醐<sup>たいご
ダイゴ</sup>

『万方』千方76の由緒として記載される。「千（保志）」は室町時代以降の日記や薫物書に記載のある種類で、いわゆる新作薫物の一種と考えられる（人名家名等解説及び索引¹⁴⁰頁「御室」解説参照）。「醍醐」についても室町時代以降の人物又は団体を意味する語として記載された可能性を検討すべきである。

他書に伝来する「醍醐」の薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見に次の通り。

・『万方』千方76（醍醐）…①東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』ほし（千）方19（九条家方）、
②・③『万方』付千（千方）方6、保志（千）方101（三条流）

方・説 『万方』千方76、説59（醍醐）

誰ノ流 たれのりゅう
ダレノリュウ 「だれの薫物の流」の意。『香具撰様調様』説84に「麝ハ誰ノ流ニモイヅ

レノ方ニモ二度ニサス也」として表れる。不特定の人称「誰」が使用されることから、説の筆者が複数の薫物の「流」を念頭に置いてそのように記したことが伺える。↓人名家名等解説及び索引149頁「三条流」解説

方・説 『香具撰様調様』説84（誰ノ流）

勅 ちよく
チヨク 天皇の命令又はそれを記述した書、又は天皇に関わる物事に添えて用いる語。『万方』

及び『香具撰様調様』には「勅」、「勅作」（人名家名等解説及び索引155頁）、「勅方」（人名家名等解説及び索引156頁）、「勅筆」（人名家名等解説及び索引156頁）の表現により多数の処方の由緒として記される。ただし、それらの内の『万方』黒方方12、27には「正親町院 勅方」（人名家名等解説及び索引139頁）と、匂玉方84・85には「法皇 勅方」（人名家名等解説及び索引160頁）云々と、『香具撰様調様』神路のおく方7には「法皇勅作」（人名家名等解説及び索引160頁）と記載される。神路のおく方7を除く四例には「勅方」の前に闕字があるが、闕字の有無にかかわらず、以上五例の「勅方」及び「勅作」の主体は「正親町院」（人名家名等解説及び索引138頁）及び「法皇」（人名家名等解説及び索引159頁）と考えられる。

『万方』及び『香具撰様調様』、或いはそれらの依拠資料として参照されたであろう薫物書においては、禁裏に伝来した薫物方の由緒は「勅」、「勅作」、「勅方」、「勅筆」等の表現により説明される。両書には「正親町院 勅方」及び「法皇 勅方」等の表現も行われることから、「勅」の主体は譲位以前の天皇だけでなく上皇の場合もあったと考えられる。特定の天皇ないし上皇に由来するものであることが明らかである場合は、天皇ないし上皇の諡号や尊称を「勅方」や「勅作」等の表現に添えて記載したのであろう。なお、正親町院が考案ないし所持した薫物方については「正親町院之御方」（人名家名等解説及び索引140頁）と、「法皇」ゆかりの薫物方については「法皇御方」（人名家名等解説及び索引160頁）とも表現される。

他書に伝来する「勅」の薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見に次の通りである。載録先が異なる場合でも、禁裏の処方としての来歴を共通して伝えている処

方については、禁裏の処方という由緒が珍重されて慎重に可能性を伺わせる。また、来歴の異なる同類文については、それらの影響関係の有無及び先後関係について検討を要する。

・『万方』黒方方8（勅作）…（同類文なし）

・『万方』黒方方9（勅作）…①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』黒方方39（由緒なし）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方109（又勅方）、③上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書01〕黒方方28（由緒なし）、④上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書02〕黒方方57（当勅方）

・『万方』黒方方10（勅作）…①高松宮本「たきものゝほう」黒方方6（由緒なし）、②東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』黒方方11（轉法輪家方実香公以自筆書写之）、③・④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方24（勅筆巻物）、黒方方113（家の方）

・『万方』黒方方12（正親町院 勅方）…①『万方』黒方方27（正親町院 勅方）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方107（用此説尤是、正親町院勅方也、從御室御所拝受之口伝故実逐一御相伝也）

・『万方』黒方方26（勅作）…①『薫集類抄』黒方方62（滋宰相、小一条皇后、公任卿、小一条院、入道一品宮女房陸奥、参議師成）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』方108（四辻流）、③上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書02〕黒方方59（六条殿）

・『万方』黒方方27（正親町院 勅方）…①『万方』黒方方12（正親町院 勅方）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方107（用此説尤是、正親町院勅方也、從御室御所拝受之口伝故実逐一御相伝也）

・『万方』黒方方42（勅作…丸（○）ハ黒家ノ秘説也（絵柄）ト大方同）…①・②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方29（勅筆巻物）、黒方方37（半切墨流…半臍之時）

・『万方』侍従方16（堀河右大臣一条関白治暦四年四月六日 勅方）…（同類文なし。ただし由緒の記述により『薫集類抄』以下に伝来する堀河右大臣ゆかりの侍従方56及び二条関白にゆかりの侍従方55をもとに工夫された四半臍の処方であった可能性がある）

・『万方』千種方20（勅方…三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』千種方84（勅筆巻物）

・『万方』玉椿方23（勅方…此方黒方ト同）…①東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』玉椿方15（由緒なし）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』玉椿方89（白表紙半切）

・『万方』白梅方25（勅方…実香等方…或梅花トモ云）…①高松宮本『たきものゝほう』白梅方10（由緒なし）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物方』白梅方5（由緒なし）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』白梅方11（勅筆巻物）、④上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書01〕白梅方25（由緒なし）、⑤上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書02〕白梅方25（由緒なし）

・『万方』荷葉方38（勅方）…①・②杏雨書屋所蔵『香秘書』荷葉方16（天慶六年二月二十一日甲午公忠朝臣所献云々）、18（同上、半臍）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』荷葉方45（勅筆巻物）

・『万方』菊花方39（禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義、云々）…①・②・③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』菊花方65（勅筆巻物）、菊花方67（白表紙半切…右二方同方…右 禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義被伝之分）、菊花方68（白表紙半切）

・『万方』盧橘方43（勅作）…①・②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』盧橘方78（勅筆巻物）、盧橘方133（由緒なし）

・『万方』蘭方44（勅 相国）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』蘭方91（白表紙半切）

・『万方』句玉方84（法皇 勅方御秘蜜（ママ）の御方也尤可秘々々）…①高松宮本『薰物ノコト』アンヘウラ方18（由緒なし）

・『万方』句玉方85（法皇 勅方御秘蜜（ママ）の御方也尤可秘々々）…①『万方』方87（又別紙ニ口伝トテ有）

・『香具撰様調様』神路のおく方7（法皇勅作）…①【万】方69

方・説 『万方』蘭方44、説45（勅 相国）、黒方方8・10・26・42、盧橘方43、説8・17・25・43（以上、「勅作」、菊花方39、説41（以上、「禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義、云々」、侍従方16、説12（堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日 勅方）、千種方20、玉椿方23、白梅方25、荷葉方38、菊花方39、説14・16・38・39（以上、「勅方」、説28（同勅作 ※説25「勅作」、説27「同古法」に続く記述）、黒方方12・27、説18・19（以上、「正親町院 勅方」、句玉方84・85、説70―72（以上、「法

皇 勅方御秘蜜（ママ）の御方也尤可秘々々）、『香具撰様調様』説96（勅 中ノ流・「勅作 中院等ノ流」、説97（勅云、書入26（勅作）、説80、書入25（以上、「勅作之説」、神路のおく方7（法皇勅作）

之説）、神路のおく方7（法皇勅作）

勅作

ちよくさく

天皇の御製。『万方』及び『香具撰様調様』では薰物の処方及び調合法の由来として記される。「勅方」等の類語に対して、天皇が手づから工夫して考案した合香の秘方秘説であるとの印象を伴う表現と言えらる。『香具撰様調様』神路のおく方7には「法皇勅作」と記されており、譲位した法皇の御製の薰物方を意味すると考えられる。

他書に伝来する「勅作」の処方の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引154頁「勅」解説を参照されたい。

方・説 『万方』黒方方8―10・26・42、盧橘方43、説8・17・25・43（以上、「勅作」、説28（同勅作 ※説25「勅作」、説27「同古法」に続く記述）、『香具撰様調様』説96（勅作 中院等ノ流）、書入26（勅作）、説80、書入25（以上、「勅作之説」、神路のおく方7（法皇勅作）

勅作

ちよくさく

なかのあんりゅう

天皇の御製及び中院家等の流。『香具撰様調様』

説96には「勅作 中院等ノ流」及びその略称と見られる「勅 中ノ流」の表現が記載されており、それらにおける「流」の語は、「勅作」、「勅」及び「中院等」、「中」の両者を主体として置かれた語と考えられる。

『万方』及び『香具撰様調様』には、天皇及び上皇が所有ないし考案したと伝わる薰物の処方及び説、及び公家の中院家と見られる家にゆかりの薰物の処方及び説と伝わる記事が複数載録される（人名家名等解説及び索引154頁「勅」、156頁「中院」参照）。特定の家に伝来する薰物の処方及び調合法、及びそれらを伝える人々の総称として「流」の語が用いられる。「勅作ノ流」又は「勅流」といった表現は両書を始めとする薰物諸書に確認できないことから、「勅作」と「流」の語を複合することは実際には行われなかった可能性があるが、「中院等ノ流」に見られるように、家名に「流」を加えて用いることは、菊亭文庫に収蔵される薰物書において複数回に渡り行われる。↓人名家名等解説及び索引149頁「三条流」

方・説 『香具撰様調様』説96（勅作 中院等ノ流）

勅作之説

ちよくさくのせつ

「勅作」（人名家名等解説及び索引155頁）として伝来する薰物調合の説。

方・説 『香具撰様調様』説80、書入25（勅作之説）

勅 中ノ流 ちよく なかのりゅう ここでの「勅」は「勅作」(人名家名等解説及び索引 155 頁「勅作」)の、「中」(人名家名等解説及び索引 156 頁「中」)は「中院」の略語。↓人名家名等解説及び索引 155 頁「勅作 中院等ノ流」

方・説 『香具撰様調様』説 96 (勅 中ノ流)

勅筆 ちよくひつ 天皇の筆跡。宸筆。『万方』菊花方 39 及びその調合の説 41 には由緒として「禁裏申入之委細以 勅筆口傳之儀、云々」、禁裏申し入れの委細は勅筆を以て口傳したるの儀、云々と記される。これらの方と説とがある人物により禁裏に申し入れられており、申し入れの詳細は「勅筆」を用いて口傳したとの意味に解釈できる。

他書に伝来する「勅筆」の処方の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引 ●頁「勅」解説を参照されたい。

方・説 『万方』菊花方 39、説 41 (以上、「禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義、云々」)

勅方 ちよくほう 天皇の御製である薫物の処方。上皇の呼称に続けて記載する形により、上皇の薫物の処方の意味に用いる場合もある。『万方』には「勅作」(人名家名等解説及び索引 155 頁)と同じ意味に用いられる。

他書に伝来する「勅方」の処方の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引 154 頁「勅」解説を参照されたい。

方・説 『万方』侍従方 17、説 12 (堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日 勅方)、千種方 20、玉椿方 23、白梅方 25、荷葉方 38、菊花方 39、説 14・16・38・39 (以上、「勅方」)、勾玉方 84、説 70 (法皇 勅方)、黒方方 12・27、説 18・19 (以上、「正親町院 勅方」)、勾玉方 84・85、説 70―72 (以上、「法皇 勅方御秘蜜(ママ)の御方也尤可秘々々」)

転法輪三条実香 ↓ 実香

道見法親王 ↓ 照高院宮

な行

中 なか 「中院」(人名家名等解説及び索引 156 頁)の略称。薫物秘伝書に合香家としての功績が伝わる公家の中院家を意味すると考えられる。

方・説 『香具撰様調様』一丁裏面書入(中)朱ノ点、書入 30 (中説云、云々)、説 96 (勅 中ノ流)

中院 なかのゐん 『香具撰様調様』に、同書載録の薫物調合の説を考案ないし所持した家名として記される語。同書一丁裏面には、載録される諸説を来歴ごとに分類する目的から、特定の家名の略称と見られる語句と、各略称に対応する記号とが記載される(人名家名等解説及び索引 149 頁「三条家」、150 頁「三西」等)。それらの中には「中」の略称による家名も記されており、対応する記号と本文中の記述により、「中」は「中院」の略称と考えられる。

東山御文庫所蔵の薫物書「後水尾天皇薫物調合御覚書」(註四)には、「後十輪院聞書」と伝わる薫物の秘説が複数載録される。後十輪院は中院通村(天正十六(一五八八)―承応二(一六五三))の号であることから、これらの説は通村に由来するものとして皇室に伝来したと考えられる。管見に、後十輪院説と『香具撰様調様』の中院説とは内容がそれぞれ異なることから、伝来の過程において関連性を有するか否かは判断できないが、特に後者の秘伝書が類纂されたと見られる江戸時代の上層社会において、合香に専門的に取り組む人々の間には、中院家に由来する薫物の説と伝わるものが、複数伝来していた可能性が考えられる。

『香具撰様調様』を類纂ないし書写した可能性のある今出川公規は、延宝年間に本院使を拝命して江戸に下向するにあたり、前任の武家伝送として度々江戸に下向した経験の有する通村孫の通茂に対して、本院使の職務を遂行する為の教えを請うたことがある。当時に公規にとり、薫物の技能は朝廷に奉仕する上でも必要とされたことから(註五)、中院家に通村等に由来する貴重な薫物の秘方秘説が伝来したとすれば、公規が通茂にそれらの開示を懇望したとして不思議ではなからう。

今後の調査においては、後十輪院聞書の逸文を始めた中院家ゆかりと伝わる秘方秘説の探索及び収集を進めることにより、合香家としての中院家の全容の解明に取り組みたい考えである。

方・説 『香具撰様調様』説 96 (勅作 中院等ノ流)、106 (中院説ハ、云々)

中院説 なかのゐんのせつ 公家の中院家(人名家名等解説及び索引 156 頁「中院」)において行わ

れた薫物調合の説。「中説」(人名家名等解説及び索引157頁)は略語。

方・説 『香具撰様調様』説106 (中説ハ、云々)

中説 なかのせつ 「中院説」(人名家名等解説及び索引156頁)の略語。

方・説 『香具撰様調様』書入30 (中説云、云々)

難波宗種 ↓ 宗種

二条関白 にじょうくわんぱく
にじょうかんぱく 從一位関白太政大臣藤原教通。長徳二(九九六)年—承保二(一〇七

五)年。関白太政大臣道長五男、母一条左大臣源雅信女從一位倫子。長徳二年六月七日誕生。

寛弘三(一〇〇六)年十二月五日元服、即昇殿、十六日侍從。長和四(一〇一五)年二月二十

一日正二位。治安元(一〇二二)年七月二十五日内大臣。永正二(一〇四七)年八月一日右大

臣。康平三(一〇六〇)年七月十七日左大臣。治暦四(一〇六八)年四月十六日関白。延久二

(一〇七〇)年三月二十三日太政大臣。承保二(一〇七五)年九月二十五日薨去、八〇歳。号

大二条殿。

長和元(一〇一二)年、一六歳の時に藤原公任(人名家名等解説67頁「公任卿」)女を北の

方に迎えて子息子女に恵まれたが、万寿元(一〇二四)年に死別。二年後の万寿三(一〇二六)

年に三条天皇女二宮綏子内親王の降嫁を賜る。子息のうち信長は太政大臣に昇ったほか、子女

の真子は後朱雀天皇に入内して女御となり、歎子は後冷泉天皇に入内して皇太后に昇るなど、

一族は繁栄した。堀河右大臣藤原頼宗(人名家名等解説及び索引160頁「堀河右大臣」)は三歳

年長の異母兄である。

『薫集類抄』上巻には道長二男とあり、教通ゆかりの「梅花」、「侍從」、「黒方」の三種の薫

物方が載録されて、いずれも治暦四(一〇六八)年四月六日に調合されたと伝わる。調合した

人物については特に明記されないことから、教通自身と解釈されよう。同年四月一七日に女御

歎子は皇后となり、教通はその前日に関白に任じている。こうした慶事の趣向として教通が自

ら薫物を調合し、完成品を祝いの品として周囲にふるまった可能性は検討に値する(参る)。

『万方』侍従方16は「堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日…勅方」との由緒を伴い載録

される。『薫集類抄』等に伝来する堀河右大臣及び二条関白にゆかりの侍従方とは処方の内容

が異なることから、どのような依拠資料を参照したのか不明である。管見に、処方の同類文は

確認できていない。『万方』侍従方16は、『薫集類抄』等に伝来する古い時代の処方をもとにしながら、目方を分割する等して工夫された後に、禁裏に伝来して「勅方」(人名家名等解説及び索引156頁)と呼ばれるようになった処方の載録された可能性もあることから、由緒の検証及び依拠資料の特定には引き続き慎重に取り組む必要がある。

方・説 『万方』侍従方16、説12 (堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日…勅方)

任助入道親王 ↓ 御室

は行

日野 ひの 『万方』千里薫方62を考案ないし所持した合香家の家名。『万方』には「日野唯

心」(人名家名等解説及び索引158頁)こと輝資が考案ないし所持したと伝わる千方75が載録

される他、「妙善院殿」(人名家名等解説及び索引160頁)日野富子ゆかりの有明方22も載録さ

れる。これらの処方及びそれらに関する諸説は他書にも伝来することから、室町時代の公家の

日野家は合香家として後世に知られた可能性が考えられる。調査の現状において、千里薫方62

の由来として記される「日野方」については、公家の日野家において考案ないし所持された薫

物の処方を意味する語と見なしておきたい。

他書に伝来する「日野」の薫物方の同類文の有無及び載録先及び通番(及び来歴)は、管見

に次の通り。なお、「妙善院殿」日野富子ゆかりの品と伝わる処方の同類文については別に記

しており(人名家名等解説及び索引160頁)、そちらを参照されたい。

・『万方』千里薫方62 (日野方)…京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』薫衣香方146

(日野方)

・『万方』千方75 (日野唯心)…(同類文なし)

方・説 『万方』千里薫方62、説52 (以上、「日野方」、千方75、説58 (以上、「日野

唯心))

日野輝資 ↓ 日野唯心

日野富子 ↓ 妙善院

日野方 ひのほう ぶん 公家の日野家（人名家名等解説及び索引157頁「日野」）において考案ないし所持された薫物の処方及び調合法の意味。

他書に伝来する同家ゆかりの処方の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引157頁「日野」解説を参照されたい。

方・説 『万方』千里薫方62、説52（以上、「日野方」）

日野唯心 ひのゆゑしん リンキョウシ 日野輝資。正二位権大納言晴光男。実は権大納言廣橋國光男。生母は入道正二位権大納言高倉永家女。弘治元（一五五五）年生。同二（一五五六）年正月六日從五位下。永禄二（一五五九）年四月二十三日侍從。この時名を兼保と云う。同月日に日野晴光の子となり名を輝資と改む。同五（一五六二）年十一月二十八日從五位上。同日元服、昇殿。同十二（一五六九）年正月十二日（又は十三日、又は十日）正五位上左少弁に藏人を兼ねる。元亀四（天正元、一五七三）年正月十六日右中弁。天正二（一五七四）年三月二十八日左中弁。同三（一五七五）年十月二十八日從四位下。同年十一月五日從四位上。同四（一五七六）年二月二十七日藏人頭。同年四月二十七日正四位下。同年十一月二十八日正四位上。同五（一五七七）年正月五日参議。左中弁を去る。同日從三位。同年五月十日右大弁。同年十二月二十六日奏慶。同七（一五七九）年十一月十七日權中納言。同八（一五八〇）年十二月七日正三位。同十一（一五八三）年正月五日從二位。同十五（一五八七）年十二月二十一日權大納言。同月二十九日正二位。慶長七（一六〇二）年正月六日又は七日に出仕を停められ、同年四月十日勅免により出仕。同八（一六〇三）年十一月權大納言を辞す。同十二（一六〇七）年五月二十日出家。法名知云又は唯心。元和九（一六二三）年閏八月二日薨去。六十九歳。

文禄二（一五九三）年三月に勅使として肥前名古屋城に遣わされた『時慶卿記』同月十七、十八日条）他、豊臣秀次から度々饗応されて『日本書紀』等の写本を贈られたり『言継卿記』文禄二年四月十三日条）、秀次の要請により謠本百番の浄書に加わる等『言継卿記』文禄四（一六二五）年六月三日条）、豊臣家と公私に渡り親交のある公卿の一人として活躍の場を得るが、慶長七（一六〇二）年正月六日又は七日、子息資勝とともに出仕を停められて親子で逐電（『言継卿記』同月七日条、『義演准后日記』同月十一日条）。同十二（一六〇七）年五月に後陽成天皇に典侍として奉仕した息女の大典侍局輝子が薨去すると、これを悲嘆して出家。同日には輝資室も剃髪している（『鹿苑日録』同年五月二十一日条）。

唯心の薫物にまつわる活動等については、『万方』載録の千方75、説58の由緒として記載

される以外に管見に明らかでない。同家については室町時代の妙善院（人名家名等解説及び索引160頁）日野富子が新作「長月」及び「有明」の薫物方を考案したとする伝承が諸書に伝わること、『万方』に「日野方」の由緒を伴う薫物「千里薫」方62及び調合の説52が載録されることから、室町時代以降の薫物の秘方秘説がまとまった形で代々伝来した可能性が考えられる。今後の調査では、同家の秘方秘説と伝わる伝承、及び同家代々の公卿らによる合香活動の史実を引き続き探索したい考えである。

他書に伝来する日野唯心ゆかりの処方の同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引157頁「日野」解説を参照されたい。

方・説 千方75、説58（以上、「日野唯心」）

伏見殿 ふしみどの 現在の京都市伏見区にあった伏見宮御領の殿舎、又はそこに住まいした皇族の呼称。ここでは後者を云う。

「伏見殿」の考案ないし所持したとされる薫物方として、管見には次の1から3の三種類の処方を確認している。

1 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』 「仙人」方118（伏見殿方）

同類文…上田流和風堂所蔵〔無題薫物書〕 「仙人」方58（伏見殿）

2 専修大学図書館菊亭文庫所蔵『香具撰様調様』

「有明」方1（伏見殿ヨリ相伝）

同類文…専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』

「有明」方116（伏見殿相伝）

3 杏雨書屋乾々斎文庫所蔵「薫物之方」 「千年菊」方4（伏見殿方）

同類文…（なし）

1から3はいずれも新作薫物の処方であり、室町時代以降に考案されたと見られる。1と3は「伏見殿方」と、2は「伏見殿ヨリ相伝」の方と伝わる。

以上の記述や条件から「伏見殿」を特定するのは困難である。ただし、『薫物秘藏抄』には伏見宮第六代貞敦親王と思しき「妙莊嚴院」（註七） ゆかりと伝わる処方が載録されており、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」には伏見宮の略称らしき「伏」を併記した処方が多数伝来するなど、伏見宮家に関係しそうな薫物方や説は比較的多数伝来する。平安後期の類纂と伝わる『薫集類抄』の散逸諸本として、伏見宮家所蔵の伝寂蓮自筆本なるものも存在したと伝わるが、そ

他書に伝来する「伏見殿」の薰物方の同類文の有無及び載録先及び通番（及び来歴）は、管見に次の通りである。

・『香具撰様調様』有明（薰衣香）方1（伏見殿ヨリ相傳）…①『万方』方116（伏見殿相伝）

調査の現状では、『万方』及び『香具撰様調様』の「伏見殿」方の同類文は、菊亭家伝来の両書に限られる。「伏見殿」の人物と処方の来歴の究明には、他家に伝来した薰物書における逸文の探索が不可欠であり、今後引き続き取り組む考えである

方・説 『万方』書入 16 (伏見殿、有明方 116 (伏見殿相伝)、『香具撰様調様』有明(董衣香) 方 1 (伏見殿ヨリ相傳)

藤原教通
↓
二条関白

藤原頼宗
↓
堀川右大臣

法皇　ほうわう
ホウオウ

出家した太上天皇の呼称。『万方』には「法皇御方六種ノ内」として新作の「山

吹」、「サラシナ」、「ウテナ」、「九重」、「潤香」、「神路のおく」の六種類の処方と、「法皇…勅方御秘密之御方也尤可秘可秘」として「勾玉」の二種類の処方が載録される。『香具撰様調様』には新作「神路のおく」方一点が載録されて、「法皇勅作…ふかくいりて神ちの奥をたつぬれは又うへもなき峯の松風」と併記される。他書に伝来する「法皇」処方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』 山吹方 64 (法皇御方六種ノ内) … ①宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薰方之書』 歟
冬方 18 (後西院宸翰 (本の由緒) … 匂袋方)、②・③徳川林政史研究所所蔵『衆香類集』 歟
冬方 60 (由緒なし)、歟冬方 77 (由緒なし)

・『万方』サラシナ（更級方 65（法皇御方六種ノ内））…①宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『董方之書』更級方 21（後西院宸翰（本の由緒）…匂袋方）

・『万方』ウテナ（臺）方66（法皇御方六種ノ内）…①宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薫方之書』臺方22（後西院宸翰（本の由緒）…匂袋方）

・『万方』九重方67（法皇御方六種ノ内）…①・②徳川林政史研究所蔵『衆香類集』八重一

重方1（由緒なし）、八重二重方11（由緒なし）、③徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』八重二重方110（由緒なし）

・『万方』「潤香」方68（法皇御方六種ノ内）…①『万方』薰衣香（十三方）方52（由緒なし）、

②・③徳川林政史研究所蔵『衆香類集』琴緒方4（由緒なし）、手枕方6（由緒なし）、④宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薫方之書』閏紅（十三方）方19（後西院宸翰（本の由緒）…匂袋方）、⑤・⑥徳川林政史研究所蔵『薫物之方』薫衣香方99（由緒なし）、琴の緒方109（由緒なし）

・『方方』「神路のおく」方 69（法皇御方六種ノ内）…①『香具撰様調様』神路のおく方 7（法皇勅作…ふかくいりて神ちの奥をたつぬれは又うへもなき峯の松風）

・『万方』「勾玉」方84（法皇…勅方御秘蜜之御方也尤可秘可秘）…①高松宮本『薰物（薰物ノコト）』アンヘウラ方18（由緒なし）

・『万方』「句玉」方 85（同（法皇…勅方御秘璽之御方也尤可秘可秘）…①『万方』又別紙ニ口伝トテ有（句玉）方 87（由緒なし）

・『香具撰様調様』『神路のおく』方7（法皇勅作…ふかくいりて神ちの奥をたつぬれは又うへもなき峯の松風）…①『万方』神路のおく方69（法皇御方六種ノ内）

『万方』の「法皇御方六種ノ内」は、「九重」及び「神路のおく」の処方二点を除く四点の処方について、宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薰方之書』に同じ処方が伝来する。これら四点の内、「山吹」及び「潤香」は徳川氏に伝来した秘伝書にも載録が確認される。残る二点の処方の内、「九重」方の同類文は徳川氏に伝来した秘伝書に「八重一重」の名称により伝来するが、「法皇」云々の由緒については併記されず、『万方』及び『香具撰様調様』に載録される。「神路のおく」方は同一の処方であり、管見に菊亭家以外への伝来は確認できていない。

『万方』及び『香具撰様調様』は江戸時代前期の公卿今出川公規による類纂の可能性がある。両書に載録された処方を考案ないし所持したと伝わる「法皇」は、公規の時代にそのように呼ばれた太上天皇で、合香家としての実績の伝わる人物と考えられる。公規は、寛文五（一六六五）年に生家である徳大寺に伝来した薫物の貴重書一卷及び一冊を禁裏に献上しており、その返礼として、後水尾法皇及び後西院がそれぞれに宸筆を染めた両書の写本を下賜されたことがあった（註九）。「法皇」方の同類文が後西院宸翰に載録されていることにも鑑みて、これらの公規が江戸時代前期の皇室に伝来した品であり、公規が薫物を介しての禁裏及び法皇御所とのつながりの中でこれらを写し伝えるに至った可能性は、検討に値する。

方・説 『万方』 山吹方 64・65、ウテナ（臺）方 66、九重方 67、潤香方 68、神路のおく方 69（以上、「法皇御方六種ノ内」）、匂玉方 84・85、説 70—72（以上、「法皇勅方御秘密（ママ）の御方也尤可秘々々」）、『香具撰様調様』神路のおく方 7（法皇勅作）

法皇 勅方 ほうわう ちよくほう 本文に「法皇 勅方御秘密（ママ）の御方也尤可秘々々」とある。『香具撰様調様』においては、「法皇勅作」として、上皇ゆかりの処方に対して「勅」の語を使用する例を確認することができる。「正親町院 勅方」（人名家名等解説及び索引 139 頁）

ともども、「勅方」は關字の直前に記載された上皇、ここでは「法皇」が考案ないし所持したと伝わる薫物方を意味するものと考えておきたい。

『万方』及び『香具撰様調様』には「法皇 勅方」の同義表現として「法皇勅作」（人名家名等解説及び索引 160 頁）及び「法皇御方」（人名家名等解説及び索引 160 頁）を確認でき、いずれも一度ずつ使用される。「法皇御方」とするのが妥当な表現と考えられるが、「法皇 勅方」ないし「法皇勅作」とする表現もまた、当時の上層社会において薫物を専門に学び調合する人々の間で一般に通用したのかもしれない。

他書に伝来する同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引 159 頁「法皇」解説を参照されたい。

方・説 『万方』 匂玉方 84・85、説 70—72（以上、「法皇 勅方御秘密（ママ）の御方也尤可秘々々」）

法皇御方 ほうわうごほう ↓ 「法皇」、「法皇 勅方」

方・説 『万方』 山吹方 64・65、ウテナ（臺）方 66、九重方 67、潤香方 68、神路のおく方 69（以上、「法皇御方六種ノ内」）

法皇勅作 ↓ 「法皇」、「法皇 勅方」

方・説 『香具撰様調様』神路のおく方 7（法皇勅作）

堀河右大臣 ほりかはのうだいしん 藤原頼宗。正暦四（九九三年）—康平八（治暦元、一〇六五年）年。

関白太政大臣道長二男。母左大臣源高明女盛明親王養女高松殿明子。幼名「巖（いは）君」また「異葉丸」。寛弘元（一〇〇四）年十二月二六日元服、従五位下。治安元（一〇二二）年十

一月二十二日正二位。同年七月二十五日権大納言。寛徳二（一一〇四五）年十一月二十三日右大將。永承二（一一〇四七）年八月一日内大臣。天喜六（康平元、一〇五八）年正月七日従一位。同三（一一〇六〇）年七月十七日右大臣。治暦元（一一〇六五）年正月五日出家。二月三日薨去、七十七歳。堀河（川）右大臣と号す。

『薰集類抄』に頼宗は道長三男と伝わる。薫物諸書の伝承によれば、頼宗に加えて兄弟の宇治関白頼通や二条関白教通（人名家名等解説及び索引 157 頁「二条関白」）も合香家として記載される。平忠盛家伝来の書と伝わる「香之書」によれば、頼宗後裔の白河承香殿女御藤原道子は複数の薫物方を遺した可能性もある（註三〇）。

『万方』侍従方 16 の他書への載録は、管見に確認できていない。『万方』においては「堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日…勅方」との由緒を伴い載録される。『薰集類抄』等に伝来する堀河右大臣及び二条関白にゆかりの侍従方とは処方の内容が異なることから、どのような依拠資料を参照したのか不明である。管見に、処方の同類文は確認できていない。『万方』侍従方 16 は、『薰集類抄』等に伝来する古い時代の処方をもとにしながら、目方を分割する等して工夫された後に、禁裏に伝来して「勅方」（人名家名等解説及び索引 156 頁）と呼ばれるようになった処方の載録された可能性もあることから、由緒の検証及び依拠資料の特定には引き続き慎重に取り組む必要がある（以上、157 頁「二条関白」解説による）。

方・説 『万方』侍従方 16、説 12（以上、「堀河右大臣二条関白治暦四年四月六日 勅方」）

ま行

妙善院殿 めうぜんゐんどの 從一位日野富子（永享十二（一一四四〇）年—明応五（一一四九六）年）

の号。贈内大臣正二位日野政光女、母從三位日野苗子。室町幕府八代將軍東山殿足利義政室、九代將軍常徳院殿足利義尚（人名家名等解説及び索引 151 頁「常徳院殿」）母。義兄に権大納言日野勝光、同母妹に義政弟義親室で室町幕府十代將軍義植母の贈從一位妙音院殿などがある。

康正元（一四五五）年八月二十七日、足利義政に嫁して正室となる。寛正六（一一四六五）年十月二十三日從一位に叙され、翌月二十三日及び応仁元（一一四六七）年二月十日に男子を生む。

長子は九代將軍義尚、次子は醍醐寺座主義覚である。文明二（一一四七〇）年十二月十八日、富子の請願により亡父重政に内大臣從二位が追贈された。延徳元（一一四八九）年三月二十六日に義尚が早世し、翌二（一一四九〇）年正月七日に義政に先立たれると、同月十三日に義政の初七

日忌法会に引き続き剃髪。以後は同年四月に小川第を香厳院喝食清晃に与えて修養の拠点とし、庭園を整備したり法会や饗宴を開催する等して過ごした。明応五（一四九六）年五月二十日、急病により薨去。享年には諸説あり、五十七歳との説が正しいとされる（注三二）。

富子は義政の生前から猿楽を度々鑑賞している他、連歌会に陪席することもあった。文明九年以降には御製の和歌を下賜されることがままあり、御製に対する返歌を進上したり、勅命により賀茂法楽和歌に詠進したりしている。禁裏との間で『古今和歌集』や『栄華物語』等の写本の貸借を行うこともあった。流行の芸能や新規な創作活動に親しむ傍ら、伝統的な和歌の教養及び創作力も備えた人物であったことが伺える。

『万方』には妙善院殿が合わせ出したと伝わる新作薫物「有明」の処方一点が伝来する。他書に伝来する「妙善院殿」方の同類文の有無及び載録先等は、管見に次の通りである。

・『万方』有明方 22（妙善院殿（常德院殿御母后准后）合出給云々）…①京都大学附属図書館 菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』有明方 94（由緒なし）

同じ処方「有明」とともに菊亭家に伝来した『薫物秘蔵抄』にも載録される。同類文には富子にまつわる由緒が併記されないが、同家や他家に伝来した他の秘伝書には、「有明」及び「長月」の二種類の新作の発祥にまつわる伝承として、妙善院殿が夫足利義政の忌中にあたる年の長月九月に慰めとして薫物二種を調合し、それぞれを「長月」及び「有明」と名付けた由が記載される。管見に、「有明」及び「長月」は薫物「薫衣香」の一種であり、室町時代以降の類纂と伝わる薫物秘伝書に載録される。既出の拙稿において、「有明」及び「長月」が『古今和歌集』巻第十四恋歌四採録の素性法師歌「今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」の一首に寄せて命銘された可能性を検討すべき旨指摘したことがある（注三三）。

新作薫物の考案は、和歌の情趣に取材しながら処方と銘を工夫することにより和歌の世界を香りという形で具現化する取り組みと言えるかもしれない。富子は和歌文学の素養を備えた人物と考えられた。二種類の新作が富子の考案によるとする伝承の検証には、富子とその周辺における合香活動の実相の解明が不可欠であり、今後の調査において引き続き取り組みたい考えである。

方・説 『万方』有明方 22（妙善院殿（常德院殿御母后准后）合出給云々） ※参考 人名家名等解説及び索引 157 頁「日野」

宗種 むねたね 専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』に「宗種」及び「宗種卿」として薫物「黒方」と「匂袋」、新作の「若草」の三種類各一点の処方が伝わる人物。

他書に伝来する「宗種」方の同類文の有無及び載録先等は、管見にそれぞれ次の通りである。

・『万方』黒方方 13（宗種）…①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』方 40（中納言宗種卿秘方也、云々）

・『万方』匂袋方 18（宗種卿）…（同類文なし）

・『万方』若草方 24（宗種方）…①宮内庁書陵部所蔵『薫方之書』若草方 5（後西院宸翰（本の由緒）…薫物方）、②東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』若草方 23（伏方…同日（寛文五年五月十日）調合此夜薫ヲ二分入候合損也但匂ヒ無別儀歟）、③・④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』若草方 92（中納言宗種卿秘方也、云々）、若草方 132（後白川右府新さく）

右の内二点は同じ菊亭文庫に伝来した『薫物秘蔵抄』（京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵）に「中納言宗種卿秘方」として載録される。新作薫物の時代の人物と見られることから、江戸時代初期の難波宗種（慶長一五（一六一〇）—万治二（一六五九））に比定する。

難波宗種は従一位権大納言飛鳥井雅宣（まさつね）男。母不明。難波家は藤原北家師実流の称号。父雅宣は飛鳥井雅庸（まさつね）二男で初め宗勝といい、難波家一四代宗富の死後に中絶していた同家の家督を相続して再興したが、慶長一四（一六〇九）年七月、二三歳の時に勅勘を蒙り十一月九日配流。同一七（一六一二）年勅免を賜いて洛中へ戻り、翌年八月三日に飛鳥井家を相続して名を雅胤と改め、更に又雅宣と改めた。

宗種は父の配流の翌年に当たる慶長一五年二月一〇日に誕生。元和三（一六一七）年正月五日に八歳で従五位下に叙され、同五（一六一九）年六月一〇日に一〇歳で元服、同日に侍従従五位上の官位を賜る。寛永四（一六二七）年四月五日、一八歳の時正五位下。翌年二月一〇日左権少将。同八（一六三二）年十一月六日従四位下。翌年正月一日左権中将に転じ、同一（一六三四）年正月六日従四位上。同一四（一六三七）年正月五日に二八歳で正四位下に叙された。同一七（一六四〇）年正月五日従三位非参議。同一九（一六四二）年正月五日に正三位に叙され、翌正保元（一六四四）年八月に位記を賜っている。翌正保二（一六四四）年一〇月二五日参議、同年二月二五日奏慶。翌年より白馬節会の外弁に任ぜられて、同年には節会の御酒勅使、同四（一六四七）年には同じく宣命使を務め、翌慶安元（一六四八）年には雑事催と禄所に奉仕したが、同年二月二二日に参議を辞した。同四（一六五一）年正月五日従二位。

翌承応元（一六五二）年一〇月一二日に從二位の口宣案を賜わる。同三（一六五四）年四月七日に権中納言に任ぜられ、翌明暦元（一六五五）年四月七日に後西院より聴直衣の賞を賜り、翌年に元日節会の外弁を奉じるなど、慶事、昇進や行事への参加が続いた。同年七月三日に権中納言を辞し、三年後の万治二（一六五九）年二月一四日に五〇歳で薨去した。

飛鳥井家の主催と見られる明暦四（万治元、一六五八）年正月二三日「裏亭会始」及び同年八月一六日「裏亭当座」に和歌を一首ずつ出詠しており、出自に相応しい教養を備えていたことが伺える。これらの和歌御会には、『薫物秘藏抄』や『万方』を類纂した可能性のある今出川公規も出詠している。また、慶安元年七月七日に幕府から武家伝奏と宗種、公規の両名とに合力米の加増が為されたこともあった『宣順卿記』。宗種と公規との間には親子程の歳の差があり、公規が公卿に列した時期は宗種の晩年に重なるが、それ以前から、公務や和歌等の文化的な催しを通じて面識があり、協力し合うこともあったかと考える。

比較的若くして薨去したこともあってか、宗種の閥歴には和歌以外の才芸に関する事跡が見当たらない。飛鳥井家と難波家がともに家業の一つとした蹴鞠の道における技量の程も不明であるが、和歌の場合と同様に、素養として身に着けていたものと想像する。今出川家の薫物書に伝来する、宗種が考案ないし所持したとされる処方や調合法が、実際に「秘方」、「秘説」と称されたとすれば、江戸時代前期の上層社会において、宗種は合香家たる業績と評価を残した可能性がある（注三三）。

方・説 『万方』黒方方¹³（宗種）匂袋方¹⁷（宗種卿）若草方²⁴ 説¹⁵（以上「宗種方」）

宗種卿 むねたねのおきょう
ムネタネノキョウ → 宗種

方・説 『万方』書入¹⁸（宗種卿）

宗種方 むねたねのほう
ムネタネノホウ 江戸時代前期の公卿難波宗種（人名家名等解説及び索引160頁「宗種」）

の考案ないし所持した薫物方の意味。『万方』には「宗種卿」の処方及び「宗種方」として薫物「黒方」及び「匂袋」及び「若草」の三種類の処方が載録される。

他書に伝来する同類文の有無及び載録先については、人名家名等解説及び索引160頁「宗種」解説を参照されたい。

方・説 『万方』若草方²⁴ 説¹⁵（以上「宗種方」）
注

（注一）「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』翻刻…附・「薫物秘藏抄」人名家名等解説」、『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十八年
（注二）注一拙稿六十三―六十五頁、及び拙稿「厳島御室任助入道親王と薫物―薫物秘伝書における「御室」ゆかりの秘方秘説を中心に―」（『厳島研究』第十四号、世界遺産・厳島―内海の歴史と文化プロジェクト研究センター、平成二十九年）十五―十七頁
（注三）件数は本間洋子『中世後期の香文化…香道の黎明』（思文閣出版、平成二十六年）による。

（注四）注三の先行研究における第八章には、「干」が「漬干」と呼ばれる香に該当する可能性が指摘される。江戸時代の薫物秘伝書に伝来する「干」の処方の概要については、注二の拙稿においても紹介しており参照されたい。

（注五）注一の拙稿六十五・六十六頁解説、及び注二の拙稿参照。

（注六）香具屋の語義及び沿革については『江戸看板図譜』（三樹書房、昭和五十二年）、『のせる―香具師の世界（芸双書九）』（白水社、平成四年）、『日本国語大辞典（第二版）』五（小学館、平成十三年）を参照した。

（注七）注一拙稿九十五―九十六頁解説による。

（注八）注一拙稿九十五―九十六頁解説による。

（注九）注一拙稿四十五・四十六頁翻刻及び脚注による。

（注一〇）注一拙稿参照。

（注一一）注一拙稿十八―二〇頁等において考察しており参照されたい。

（注一二）「勝興寺系譜」の佐計（顕榮）の項によれば、実枝の父方の祖父である逍遙院内大臣正二位三条西実隆には五人の息女があり、それぞれに、室町幕府管領細川晴元、勝興寺顕榮、本願寺顕如、越前国守護朝倉義景、甲斐国守護武田信玄という有力者の家々に嫁したとされる。

（注一三）注三の先行研究、及び注一拙稿七十一・七十二頁解説参照。

（注一四）注一拙稿七十一頁解説参照。

（注一五）注一拙稿十一・七十二頁解説参照。

（注一六）薫物方、一冊、天正十七年写、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号 菊725

（注一七）注一拙稿二六―三十一頁解説参照。

（注一八）京都市歴史資料館情報提供システム「フィールド・ミュージアム京都」、照高院宮址解説参照。 <https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishih/fm/ishibumi/html/sa044.html>
平成二十九年八月十三日最終アクセス。

（注一九）注一拙稿解題十七頁、及び翻刻五〇・五十二頁参照。

（注二〇）注一拙稿七十三頁解説参照。

（注二一）処方の通番は、『原中最秘抄』諸本における桐壺巻勘物以降に引用される薫物方の掲出順序を云う。

（注二二）注一拙稿七十四―七十五頁「承和」解説の冒頭部分を再録。

（注二三）清閑寺熙房の合香活動については、注一拙稿九〇・九十一頁「清閑寺中納言」解説を参照されたい。

（注二四）函号 一三、四、二、二〇

(注二五) 延宝年間における今出川公規と中院通茂の関わり的一端については、拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『江戸下向雑々覚』翻刻と脚注」(『薫物書の研究』第三号、薫物書研究会、平成二十八年十月) 四十八頁の翻刻及び脚注、並びに九十七・九十八頁「中院」解説を参照されたい。

(注二六) 注一拙稿七十九頁「二条閑白」解説の前半部分を再録。

(注二七) 伏見宮五代邦高親王御子、母は法雲院左大臣今出川教季女。延徳元(一四八九)年三月某日誕生。文龜二(一五〇二)年二月二十五日元服。同四(永正元、一五〇四)年二月三日親王宣下。上卿に三条西実隆、参陣に藏人右中弁甘露寺伊長が任じた。同日に後柏原院猶子となる。永正四(一五〇七)年二月四日中務卿に任じて二品に叙される。同六(一五〇九)年八月二十八日、内大臣轉法輪三条実香(人名家名等解説及び索引¹⁴⁴頁「実香」)女香子を上臈と為す。天文一四(一五四五)年四月二十七日薨髪、法名澄空。元龜三(一五七二)年七月二十五日薨去、八五歳。号妙莊嚴院。香子との間に伏見宮第七代邦輔親王、勸修寺宮寛欽法親王、妙法院宮堯尊法親王、仁和寺宮任助入道親王(人名家名等解説及び索引¹⁴⁰頁「御室」)、応胤入道親王、位子女王があり、他に安善寺恵彰尼王と中宮寺尊智尼王も儲けた。

貞敦親王は和歌の詠作を始めた創作活動に熱心であり、伏見宮御所において歌会や連歌会を数多く主催した他、三条西実隆、公条父子より『源氏物語』や『十八史略』の進講を度々受けるなど、和漢の学識の習得に努めた。以上の活動に加えて、十種香等の聞香や蹴鞠、音楽、茶の湯の催しも度々催したことから、文化、教養に対して幅広い関心と豊かな知識、優れた技量を兼ね備えており、学問と諸芸の振興を牽引する存在でもあったことが伺える。

宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本「貞敦親王御記」永正一五(一五一八)年正月の日記の内、二日、三日、八日、九日、二〇日、二八日及び二九日の条には薫物について記述される。それらによれば、親王は新年早々に手づから薫物を調合したり、手製の薫物を貝に入れて催し事の参加者に遣わしたりしている他、二八日には「三条黄門」こと轉法輪三条公頼から「手合薫物一貝」を贈られたとも記される(以上、注一拙稿八十七・八十八頁「妙莊嚴院」解説を再録)。

(注二八) 注一拙稿八十六頁「伏見殿」解説を再録。

(注二九) 注一拙稿二〇・二十一頁解説参照。

(注三〇) 注一拙稿八十六頁「堀河右大臣」解説の一部を再録。

(注三一) 大日本資料総合データベース、明応五年五月二十日条稿本中の注記による。

(注三二) 拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』翻刻」(『薫物書の研究』創刊号、平成二十六年) 九頁の考察による。

(注三三) 注一拙稿七十六・七十七頁「中納言宗種」解説に加筆修正を加えて再録。

投稿論文執筆要領

- ◇ 「薫物書の研究」への投稿資格は会則に記載した通りです。
- ◇ 投稿は未発表のものに限ります。
- ◇ 投稿論文は三部提出してください。
- ◇ 投稿論文の文字数や図表、写真の枚数に制限はありませんが、A4用紙に縦組二八字、二五行の二段組にて紙面を作成してください。
- ◇ 図版、写真、翻刻等の掲載申請は投稿者が行ってください。
- ◇ 投稿論文の要旨を四〇〇字程度にまとめて三部提出してください。
- ◇ 本文、要旨とは別に、住所、氏名、所属（職名）ならびに投稿資格に係る研究業績一覧を記入した用紙を三部提出してください。
- ◇ パソコンを使用した場合は、文書ファイルをUSBメモリー等一点に保存して提出してください。
- ◇ 投稿論文一式（USBメモリー等も含む）は事務局宛に必ず簡易書留にて郵送してください。一式の返却はいたしません。
- ◇ 採用された投稿論文の執筆者校正は、三校までとします。
- ◇ 投稿論文の執筆者には、発行時に電子データ公開先のURLを通知します。

編集後記

「薫物書の研究」第四号をお届けします。平成二六年四月に薫物書研究会が発足いたしましたから、間もなく四年目の春を迎えます。多くの方々に小誌をお読みいただき、厳しくも温かいご批判、ご教示の数々を賜りましたことについて、改めて心より御礼申し上げます。執筆は、引き続き田中が実施いたしました。創刊号よりこの方、室町時代以降に新たに考案されたと見られます「新作薫物」の処方や調合法を掲載する薫物書を対象とした資料研究の成果を掲載して参りました。今号では、こうした内容の薫物書の中でも特に読みごたえがあると思われました、文献二冊の研究成果をお届けいたします。

書中には、江戸時代前期の貴顕と思しき類纂者が、聞き書きしたり写したりして集めた秘方秘説を眺めながら、「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤を重ねたことをうかがわせる記述が多数記載されています。名家等にゆかりの品として伝わる故実を珍重する一方で、「効果的でない」「妥当でない」と判断した諸説は容赦なく退けるなど、ハラハラさせる書きぶりではありますが、他に伝本の存在しないことから推して、私的な手控えとして類纂された可能性があります。類纂者は、他家の伝統を公然と批判するタイプではなかったようですが、人一倍勉強家であり、実証主義的な思想の持ち主であったのかもしれない。「江戸時代の薫物ってこんな感じだったのか」等とお感じいただけましたら幸いに存じます。引き続きご支援、ご助言の程賜りますようお願い申し上げます。

（田中）

二〇一八年三月三日発行 無料公開

薫物書の研究 第四号

編集兼発行者 薫物書研究会 代表 田中圭子
発行所 薫物書研究会事務局

〒七三九・〇六一一

広島県大竹市新町一丁目八・一八・二〇四

e-mail: misimal7@hotmail.com